

の租庸調を以て生活したるを土地を賜はる事をなく廢して戸口のみを賜はる事に改められしなり ○大夫、公式令に於て太政官三位以上稱大夫、司及中國以下五位稱大夫とあり此大夫は五位以上なりされし此時には未だ四位五位の名目なし ○官人百姓、通釋に粟田寬云官人百寮と云が如し(其二)初脩京師、京師を始めて定めたるにあらす其位置を改修したるあり ○關塞、抄道路具に關は世世塞は曾古とあれど周禮關の注に界上之門也とあり、は關塞を合せて關と云り ○斥候、原本斥を片に作る北本に據て改むウカミは推古紀九年に關塞をウカミヒトと訓るウカミに同じく窺見なり職員令大國の條に兼知要給討斥候義解に斥逐也言候逐非常也と云 ○防人、守守に邊要の地に置きて外寇を防ぐ兵士なり軍防令に凡防人在防守固之外各量防人多少於當處側近給空間地逐水陸所宜斟酌營種并雜菜以供防人食云々とあり ○驛馬、萬葉に波由馬とあり早馬なり主として官の急使の乗用に充つるものなり ○傳馬、ツタハリウマの訓は他に見えず北本中本にはツタヘウマと訓り厩牧令に凡諸道置傳馬大路二十四中路十四小路五匹使稀之處國司置置不必須足皆取筋骨強壯者充每馬各令中戸養飼者馬有關失者即以驛稻一市替其傳馬每郡各五匹用馬云々とあり傳馬は主として租調運搬の用に充つるものなり ○鈴契、鈴は令を傳ふるの具契は契符なり鈴は驛鈴をいひ其他の鈴をも云公式令に車駕巡幸京師留守官給鈴契とある類は木契にて俗に云割符なり ○定山河、成務紀五年(卷上一六五頁)にも見えたれど此時再び定め給ひしなり ○凡京云々、上文の脩京師の目なり以下野非に至る二十三字は戸令と同文にて按檢を檢校と改めしのみ ○每坊、通證に和名抄坊未知唐武德制鄉保隣里在城邑二坊田野日村とあり ○長一人、一の字は北本應本中本及類史に據て補ふ ○令、ウナカシは上より課するにて下文催驅の訓も同義なり ○凡畿内云々、原本畿を幾に作る北本應本中本に據て改む下同じ以下畿内に關する目なり ○名聖橫河、名聖は伊賀國名張郡なり横河は今の長田川なるべしと云 ○紀伊兄山、紀伊國那賀郡にあり ○赤石檣淵、赤石は播磨國明石郡なれど檣淵は詳ならず ○狹々波、近江國滋賀郡、神功紀攝政元年(卷上一八四頁)に出づ ○合坂山、神功紀(同上)に逢坂に作り今も逢坂山と云 ○爲畿内國、以上の區域内を畿内國と定めたるに後世に所謂畿内國とは異り ○凡郡云々、以下郡司を置くる目なり ○四十里以下、十六里以上爲大郡二十里以上爲中郡八里以上爲小郡四里以上爲下郡二里以上爲小郡と見ゆ ○郡司、類史延曆十七年三月詔に昔難波朝廷始置諸郡仍擇有勞補郡領子孫相襲永任其官云々宜其譜第之選永從停廢取藝業著聞堪堪郡者爲之とあり大化の改新は族制封建制の如き政體を變じて隋唐郡縣の制を取り世職を停めて更迭選管の官吏を任命せられたれど民に親み化を行ふ郡司には祖先以來土著の國造を取て世襲せしめしなり ○中央政府の左右大臣も尙ほ臣姓なる阿倍蘇我氏を任ぜられし如く舊慣を俄に變ずること人心の動搖を恐れて爲さざりしなり ○大領少領、抄職官部に長官郡曰大領加美次官郡曰少領須介とあり ○書字、書は文字を書くをいひ筆は算なり計算するを云 ○主政主帳、抄職官部に判官郡曰主政萬豆利古止比佐官郡曰主帳とありフミビトは書記なり郡司以下此に至るまで選叙令の文に同じ大領以下主帳に至るまでの所掌は職員令に詳なり ○凡給云々、以下驛傳を置くる目なり ○皆依鈴傳符起數、此文公式令に同じ原本皆依轉倒令に據て訂す鈴傳符は驛鈴なり官令にて遠國に急行する時驛馬を徵し之に乘りて振りつ、行くなり鈴には起ありて五起ならば驛馬五匹六起ならば六匹を出さしむるなり鈴傳符は傳馬を出さる符にて此符にも起あること公式令に見ゆ ○凡諸國云々、是は鈴契を給ふ目なり鈴を給ふ數は公式令に凡諸國給鈴者大宰府二十口三關及陸奧國各四口大上國三口中下國二口其三關國各給關契一枚云々とあり

(其三)初造戶籍、戶籍を造る事は允恭紀四年(卷上一四六頁)に見ゆ此に初造あるは形式を改正せられし故にかく云るなるべし造籍の事は戶令に詳なり

其三日、初造戶籍計帳班田收授之法、凡五十戶爲里、每里置長一人、掌按檢戶口、課殖農桑、禁禁非違、催驅賦役、若山谷阻險、地遠人稀之處、隨便量置、凡田長卅步、廣十二步、爲段、十段爲町、段租稻二束、二把、町租

○計帳、調庸の事を記せる帳なりフムタは文札にて籍に同じ計帳の事は主計式に詳なり ○班田收授之法、田令に凡田六年一班神田寺田不在此限若以身死應退田每至班年即從收授と見え其他班田に關する事詳に見ゆ大化の改新は天皇皇子御自の土地と權臣等の始めより賜はりし土地を私有し公民をも私役せしむ悉く國土人民を公地公民とし其收めし田畠を滿六歲に達せし男女に下し賜ひしなり ○凡五十戶爲里、通證に今按是漢制也晁錯五家爲伍伍有長十長一里里有假士唐令曰諸戶以百戶爲里五里爲鄉此紀不言郷蓋古者不別置郷故郷里相通稱之其訓亦同とあり全く隋唐の制を取れりとするは非なれど大に之を參考せしことは明なり ○催驅賦役、賦役令義解に賦者鉞也調庸及義倉諸國貢獻者等爲賦也役者使也歲役雜徭等爲役也また通證に萬葉集楚取五十戶良我許惠波、此言催驅賦役也とあり ○若山谷阻險、以下十五字原本下文の稻二十二束の下にあり戶令に據るに此にあるべし故に改む ○凡田長卅步云々、以下廿二束まで田令の文に同じ歩は字書に六尺曰步拾步抄に田以方六尺爲一步卅六步爲一段頭三百六十步爲一段積と云 ○租稻二束、神祇令田租の義解に新給曰租經貯曰稅也田令の義解に段地獲稻五十束束稻春得米五升也即於町者須得五百束也とあり(其四)罷舊賦役云々、崇神天皇以來今同改新以前までの賦役を廢し其代として田の調即ち租稻の外に其地方に出づる布帛を納めしむるを云 ○凡絹綿云々、以下十一字賦役令の文に同じ但令には綿の字あり是は必ずあるべきなり絹綿は同令の義解に細爲絹也麤爲綿也とあり堅く細かに織りたるを絹といひ糸も太く麤目に織りたるを綿と云 ○四町成匹、原本匹を疋に作る今北本應本に據る字彙に匹曰四丈則八端故从九匹象束帛之形借爲匹偶字別用疋非とあり類聚名義抄に疋は匹の俗字といひ字類抄にも匹は疋之正字也と云 ○半、イツキは五寸なり ○純二丈、賦役令には正一人絹純八尺五寸六丁成匹長五丈一尺廣二尺二寸とあり ○長廣同絹綿、廣の字は類史に據て補ふ ○端、ムラは詳ならず通證に小爾雅倍丈謂之端通典准武德制曰其絹綿爲匹布爲端此紀蓋據此令式等皆亦同今俗布帛通曰端曰疋此古

稻廿二束、其四曰、罷舊賦役而行田之調、凡絹綿絲綿並隨鄉土所出、田一町絹一丈、四町成匹、長四丈、廣二尺半、純二丈、二町成疋、長廣同、絹布四丈、長廣同、絹繩一町成端、端綿綿、別收戶別之調、一戶贖布一丈、二尺、凡調副物鹽贖、亦隨鄉土所出、凡官馬者、中馬每一百戶輸一疋、若細馬每一百戶輸一疋、其買馬直者、一戶布一丈二尺、凡兵者、人身輸刀甲弓矢幡鼓、凡仕丁者、改舊每卅戶一人、充一而每五十戶一人、以充諸司、以五十戶充仕丁一人之糧、一戶庸布一丈二尺、庸米五斗、凡采女者、貢郡少領以上、姉妹及子女、形容端正者、從女二人、以一百戶充采女一人之糧、庸布庸米皆准仕丁、

制也云々あり ○(注)絲綿綯屯云々、集解は私記の撮入として削り按此不載絲綿綯屯之制蓋脫文也云ひ通證に綯目屯天武紀訓阿世倭名鈔俗一屯讀飛度毛知あり賦役令に絲八兩綿一斤布二丈六尺並二丁成綯屯端云々義解に絲十六兩日綿二斤日屯とあり ○戸別之調、續紀三に准令京及畿内人身輪調宜罷入身之布輪戸別之調乃異外國之民以優內國之口云々賦役令に此條なし ○貫布、原本貫を皆に作る通證集解に據て改む抄布帛部に貫布唐式云貫布楊氏漢語抄云佐與美乃沼龍とあり狹讀の義絲を數ふるに幾讀といふ經絲の數の少きを云なり ○調副物、調副の外に貫るものなり賦役令に詳なり義解に謂此唯爲正丁不及次丁中男也とあり ○驥贖、調副物の外に次の郷土所出雜物の中に出づ贖は魚類なり ○官馬、原本馬を長に誤る北本中本に據て改む ○細馬、既牧令の義解に細馬者上馬也とあり ○(注)斷、原本厠に作る中本本所引交本及傍訓に據て改む下同じ賦役令義解に斷猶使也言給使於汲炊即與火頭同也とあり ○庸布、賦役令に凡正丁歲役十日若須收庸者布二丈六尺とありチカラシロノヌノと訓るは庸即チ力役の代りに貫るを云 ○庸米、上の庸布の義に同じ賦役令に主計計庸多少充衛士丁采女丁等食義解に除當年須役人之外皆擔輸庸充衛士丁食並役民雇直及食也とあり ○采女、仁德紀四十年(卷上二二七頁)に出づ ○(注)從丁一人、采女司式に凡采女各充樵丁一人守廬丁一人とあり ○從女二人、賦役令に所謂女子是なり ○一人之糧、之の字は類史に據て補ふ

○子代離宮、下の注に見ゆ
○兵庫、國郡毎に兵庫ありしこと續紀以下の國史に見ゆ
○蝦夷親附、原本夷を蟻に作る諸本に據て改む栗田博士の説に上文に於て閑曠之所起造兵庫と收取國郡刀甲弓矢云々また遣使者治兵此に至てまた遣使者云々とありさて蝦夷親附と云るは武器は民を威して治むる所以のものなり故に最治兵の道を重じ給ひしかば果して其効見えて招かざるに蝦夷の親附せしなりと○(注)狹屋部邑、攝津國西成郡設楊等郷是なり攝津志に方廢而三番村存とあり今の大阪市東淀川區豊里三番町附近なるべし

是月、天皇御子代離宮遣使者詔郡國脩營兵庫蝦夷親附屋部邑子代屯倉而起二月甲午朔戊申、天皇幸宮東門使蘇我右大臣詔曰、明神御宇日本倭根子天皇詔於集侍卿等臣連國造伴造及諸百姓朕聞明哲之御民者懸鍾於門而觀百姓之憂作屋於衢而聽路行之謗雖芻蕘之說親問爲師由是朕前下詔曰古之治天下朝有進善之旌誹謗之本所以通治道而來諫者也皆所以廣詢于下也管子曰黃帝立明堂之議者上觀於賢也堯有衢室之問者下聽於民也舜有告善之旌而主不蔽也禹立建鼓於朝而備訊望也湯有總術之廷以觀民非也武王有靈臺之囿而賢者進也此故聖帝明王所以有而勿失得而勿亡也所以

○(二月)宮東門、子代離宮の東門
○明神御宇日本倭根子天皇、公式令詔書式に明神御宇日本一詔旨義解に謂以大事一宣於蕃國使之辭也とあり蕃國へ宣する詔書の式には倭根子の文字を省けど王臣以下に詔し給ふ時には此文字ありなり明神の訓舊訓にアラミカミとあれど詔詞解に云るが如くアキツカミと訓べし類史に倭の字なし
○集侍、續紀の宣命式の祝詞等に多く見ゆ
○諸百姓、宣命には多く公民と書けり
○懸鍾於門、中本及類史門を闕に作る
○作屋於衢云々、下文に衢室之問とある是なり
○雖芻蕘之說、原本雖を離に誤る北本本應本及類史に據て改む芻は説文に刈草也蕘は草薪也草刈り薪採る賤しき人を云北本應本芻を芻に作る字書に芻の俗字とあり
○古之治天下云々、以下廿五字漢書文帝紀の文に據れり
○進善之旌、通證に應劭

懸鍾設匱、拜收表人、使憂諫人納表于匱、詔收表人每旦奏請、朕得奏請、仍示群卿、便使勸賞庶無留滯、如群卿等或懈怠不勤、或阿黨比周、朕復不肯聽諫、憂訴之人當可撞鍾、詔已如此、既有民明直心懷國士之風、切諫陳疏、納於設匱、故今顯示集在黎民、其表稱緣奉國政、到於京民、官留使於雜役云々、朕猶以之傷惻、民豈復思至此、然遷都未久、還似于賓、由是不得不使、而強役之、每念於斯、未嘗安寢、朕觀此表、嘉歎難休、故隨所諫之言、罷處々之雜役、昔詔曰、諫者題名、而不隨詔命者、自非求利、而將助國、不言題不諫、朕廢忘、又詔集在國民、所訴多在、今將解理、諦聽所宣、其欲決疑、入京朝集者、且莫退散、聚侍於朝、高麗百濟任那新羅、並遣使貢獻調賦、乙卯、天皇還自子代離宮、三月癸亥朔甲子、詔東國々司等曰、集侍羣卿大夫及臣連國造伴造并諸百姓等咸可聽之、夫君於天地之間、而宰萬民者、不可獨制、要須臣翼、由是代々之我皇祖等、共卿祖考俱治、朕復思欲蒙神護力共卿等治

○旌旗也堯設之五達之道今民進善也如淳曰欲有進者立於旌下一言之
○誹謗之木、通證に應劭曰橋梁邊板所以書政治之愆失也古今註曰堯設誹謗之木今之華表也以橫木交柱頭狀如華形如枯樺大路交衢悉施焉
○明堂、管子（卷十八桓公問）明堂に作る鄭玄曰明堂者明政教之堂也
○不蔽、原本蔽を弊に作る管子及集解に據て改む
○建鼓、漢書何並傳に拔刀割其建鼓注に一名植鼓建立也謂植木而旁懸之鼓也
○訊罪、管子に訊を喚に作り注に喚は驚問也
○總術、通證に術音遂萬二千五百家曰遂管子廣地篇里十爲術さあり管子に總術に作る
○民非、管子に人非に作る
○靈臺之園、毛詩大雅に文王經靈臺疏に所觀觀氣之祿祥也さあり管子に園を復に作り白也

故前以良家大夫使治東方八道既而國司之任六人奉法二人違令毀譽各聞朕便美厥奉法疾斯違令凡將治者若君如臣先當正己而後正他如不自正何能正人是以前不自正者不擇君臣乃可受殃豈不愼矣汝率而正孰敢不正今隨前勅而處斷之辛巳詔東國朝集使等曰集侍群卿大夫及國造等造并諸百姓等咸可聽之以去年八月朕親誨曰莫因官勢取公私物可喫部內之食可騎部內之馬若違所誨次官以上降其爵位主典以下決其笞杖入己物者倍而徵之詔既若斯今問朝集使及諸國造等國司至任奉所誨不於是朝集使等具陳其狀穗積臣咋所犯者於百姓中每戶求索仍悔還物而不盡與其介富制臣名巨勢臣紫檀二人之過者不正其上云々凡以下官人咸有過也其巨勢德禰臣所犯者於百姓中每戶求索仍悔還物而不盡與復取田部之馬其介朴井連押坂連名並二人者不正其上所失而翻共求己利復取國造之馬臺直須彌初雖諫上而遂俱濁凡以下官人咸有過也其紀

○此故、管子故を古に作る也勿亡也管子に勿忘者也に作る以上管子の文なり
○仍示群卿、原本仍の下に又の字あり楓本應本及類史に據て削る
○不勸、類史勸を勸に作る
○懷國士之風、原本士を土に作る文選司馬遷報任少卿書に國士之風さあるに據て集解士を土に改む今之に據る楓本には王に作る
○到於京民、公役の爲に京に至れる民なり
○官留、原本官一字行れり北本應本中本及類史に據て削る
○還似于實、新に都を遷せるが故に他國より來たる人の如くなりさなり
○不言題不、題の有無を言はずさなり
○諫朕廢忘、原本忘を忌に作る楓本中本に據て改む廢忘は捨て忘るゝにて忘るこ云に同じ
○朝集者、考課令に凡大貳以下及國司每年分番朝集義解に謂目以上さある

麻利者拖臣所犯者使人於朝倉君井上君二人之所而爲牽來其馬視之復使朝倉君作刀復得朝倉君之弓布復以國造所送兵代之物不
明還主妄傳國造復於所任之國被他偷刀復於倭國被他偷刀是其紀
臣其介三輪君大口河邊臣百依等過也其以下官人河邊臣磯泊丹比
深目百舌鳥長兄葛城福草難波癩柯梅龜犬養五十君伊岐史麻呂丹
比大眼凡是八人等咸有過也其阿曇連名所犯者和德史有所患時言
於國造使送官物復取湯部之馬其介膳部臣百依所犯者草代之物收
置於家復取國造之馬而換他馬來河邊臣磐管湯麻呂兄弟二人亦有
過也大市連名所犯者違於前詔前詔曰國司等莫於任所自斷民之所
訴輒違斯詔自判菟礪人之所訴及中臣德奴事等中臣德亦是同罪也涯
田臣名之過者在於倭國被偷官刀是不謹也小綠臣丹波臣名並是拙
而無犯忌部木菓中臣連正月二人亦有過也羽田臣田口臣二人名並
無過也平羣臣名所犯者三國人所訴有而未問以此觀之紀麻利者拖

是なり
 ○聚侍、中本侍を待に作
 (三月)共卿祖考、卿の下に等の字あるべきか六字の句なるが故に或は省けるにもあるべし
 ○蒙神護力、天神地祇の擁護を蒙りてとなり
 ○以良家大夫、中本以を差に作る
 ○東方八道、八道は八箇國と云に同じ古事記崇神天皇の段に東方十二道とある道に同じ
 ○答杖、原本答を宮に作る北本應本中本に據て改む抄刑罰具に唐令云答杖(音伏和名都惠)皆削去節目一長三尺五寸許とありシモトは茂本の義にて木の細枝を云ズハエは直生の義なるべしと云杖をフトキズハエと訓るは答よりは太きに由る
 ○每戸求索、上文に因官勢取公私物とある是なり
 ○富制臣、錄左京皇別に布勢朝臣阿部朝臣同祖とあり
 ○巨勢臣紫楨、天武紀に

臣、巨勢、德禰、臣、穗積、昨臣、汝等三人、所怠拙也、念斯違詔、豈不勞情、夫爲君臣、以牧民者、自率而正、孰敢不直、若君或臣、不正心者、當受其罪、追悔何及、是以凡諸國司、隨過輕重、考而罰之、又諸國造、違詔送財於己、國司、遂俱求利、恒懷穢惡、不可不治、念雖若是、始處新宮、將幣諸神、屬乎今歲、又於農月、不合使民、緣造新宮、固不獲已、深感二途、大赦天下、自今以後、國司郡司、勉之勗之、勿爲放逸、宜遣使者、諸國流人及獄中囚、一皆放捨、別鹽屋、鰯魚、舉能之虛、神社福草、朝倉、君、梶子連、三河、大伴、直、蘆尾、直、闕名、此六人、奉順天皇、朕深讚美、厥心、宜罷官司、處々、屯田、及吉備、嶋、皇祖母處々、餼、稻、以其屯田、班賜群臣、及伴造等、又於脫籍、寺、入田、與山、壬午、皇太子使、使奏請曰、昔在天皇等世、混齊天下、而治及逮于今、分離失業、業也、屬天皇、我皇可收萬民之運、天人合應、厥政惟新、是故慶之、尊之、頂戴、伏奏、現爲明神、御八嶋、國、天皇問於臣曰、其群臣連及伴、造國、造、所有昔在天皇日所置子代、入部、皇子等、私有御名、入部、皇

巨勢朝臣辛櫛努と見ゆ
 ○不正其上、上は長官を指すなり
 ○德禰臣、集解に按德陀古之親族也
 ○朴井連、大化元年九月紀に出づ
 ○押坂連、皇極紀三年三月紀に押坂直出づ
 ○置直、錄攝津諸蕃に漢釋吉王之後也とあり
 ○朝倉君、井上君、共に詳ならず
 ○難波藤原、錄河内皇別に難波大彥命孫波多武命之後也とあり
 ○大眼、原本大に作る北本應本中本に據て改む
 ○和德史、原本和字なと集解に續紀神龜二年和德史龍麻呂改賜大縣史及錄右京諸蕃に大縣史百濟人和德之後也とあり
 ○湯部、雄略補ふに從ふ
 ○言於國造、言の字は北本應本中本に據て補ふ
 ○使送官物、和德史が病める時に國造に命じ官物を用せしめしと云
 ○湯部、雄略紀(卷上二六四頁)に湯部、五年紀(一九五頁)に湯部坐とある是等の部民なるべし
 ○菟、菟之部、鹿令に凡馬戸分番上下其調草正丁二百圍次丁一百圍中男五十五圍とある調草なるべし
 ○大市連、用明紀二年に見ゆ
 ○菟、菟之部、鹿令に凡馬戸分番上下其調草正丁二百圍次丁一百圍德奴、中本德の下之の字あり
 ○涇田臣、錄右京皇別に岸田朝臣武內宿禰五世孫稻目宿禰之後也男小祚臣孫耳高家居岸田村因負、岸田臣號天武紀三年朝臣の姓を賜ふ
 ○小線臣、丹波臣、共に詳ならず
 ○注、並關名、原本無犯の下にありしを例に據て此に移す
 ○羽田臣、推古紀三十年に見ゆ
 ○山口臣、元年紀に蘇我田口臣見ゆ
 ○三國、越前國坂井郡にあり繼體紀元年(一三三頁)に見ゆ
 ○始處新宮、子代離宮を云
 ○大赦、此遷都に因れる奉幣が屬於今歲とあれば臨時の奉幣なるべし
 ○感、二途、原本感を減に作る集解に據て改む二途は幣諸神と造新宮を云
 ○將警諸神、此城曾都彥命之後也とあり
 ○神社福草、詳ならず通證に社訓古曾出、于此萬葉集名字亦訓、古曾蓋神社則人之所爲、祈願故訓、社爲古曾とあり
 ○梶子連、錄大和神別に仲丸子(三)日臣命九世孫金林大連之後也とあり
 ○梶子、後九子と書けり
 ○三河大伴直、詳ならず
 ○蘆尾直、尾直の二字は北本應本中本及釋紀に據て補ふ系詳ならず
 ○吉備島皇祖母、皇極天皇の御母にて同紀二年に見ゆ
 ○賦、賦は貸の字の古體天武紀に貸税とあり
 ○靈異記に息利を伊良之字末波利と訓りイラシは人に貸すことウマハリは利息を取るを云
 ○脫籍寺、定額に漏れたる寺なり其寺に山と田とを賜へよと云
 ○奏請、原本請を清に作る諸本に據て改む
 ○混齊、通證に混一均齊なりと云
 ○注、謂國業也、集解に私記攬入とす
 ○伴造國造所有、上文に據るに此に處々田庄の四字を補ひ見るべしと平田翁云り
 ○子代入部、御名入部とあるも同じ入部の入はイラ、イリ、イロと活きて親しむ意なり
 ○御名入部、御名は皇子の御名にて所謂御名代部なり
 ○皇祖大兄、舒明天皇の御父は彥人皇子に坐せば孝德天皇よりは皇祖と申されしなり
 ○所封民、前文に所言臣連等所有及子代入部の類なり
 ○從前處分、每五十戸出仕丁一人とある是なり

祖大兄、御名入部、謂彥人及其屯倉、猶如古代而置以不、臣即恭承所詔、奉答而曰、天無雙日、國無二王、是故兼并天下、可使萬民、唯天皇耳、別以入部及所封民、簡宛仕丁、從前處分、自餘以外、恐私驅役、故獻入部五百廿四口、屯倉一百八十一所、

甲申、詔曰、朕聞西土之君、戒其民曰、古之葬者、因高爲墓、不封不樹、棺槨

○因高爲墓、原本因を困に作る北本應本中本に據て改む因高とは丘陵の上

に造るを云
 ○不封不樹、土を聚めて築き樹木を植ふるを云
 ○棺槨云々、以下不得見也に至るまで魏志文帝紀の文に據り故に我國の史實に適合せざるものあり其心して見るべし
 ○一以瓦器、原本以一字行れり北本應本に據り削る
 ○塗車芻靈、禮記檀弓の注に塗車以泥爲車也東草爲人形、以爲死者之從衛謂之芻靈、略似人形而已さあり芻を中本芻に原本書に作る芻言は俗字なり此に中本に據り改む
 ○奠三過、文公家禮に祝盥手洗盞斟酒奠于尸東一過證に淮南子曰天地三月而爲一時故祭祀三飯以爲禮さあり
 ○飯含無以珠玉、抄葬送具に唐韻云玲々玉送終口中玉也、唐書禮樂志に一品至于三品飯用梁吟用璧云々、後漢書禮儀志に飯含珠玉如禮さあり
 ○珠襦玉押、原本押を押に作る北本に據り改む珠襦は短衣にて腰衣なり玉押は色葉字類抄に押をヨ

足^リ以^テ朽^レ骨^ヲ衣^ハ衿^足以^テ朽^レ完^レ而已^ニ故^レ吾^レ營^シ此^ノ丘^墟不^レ食^レ之^地欲^シ使^シ易^シ代^シ之^也
 後^ニ不^レ知^ル其^ノ所^ヲ無^シ藏^ル金^銀銅^鐵一^ニ以^テ瓦^器合^テ古^ノ塗^車芻^靈之^義棺^漆際^際
 會^ハ奠^三過^飯含^無以^テ珠^玉無^シ施^ル珠^襦玉^押諸^愚俗^所爲^レ也又^曰夫^葬
 者^藏也欲^シ人^之不^レ得^見也迺^者我^民貧^絶專^由營^墓爰^陳其^制尊^卑使^レ
 別^夫王^以上^之墓^者其^内長^九尺濶^五尺其^外域^方九^尋高^五尋^一役^一
 千^人七^日使^訖其^葬時^帷帳^等用^白布^有輻^車上^臣之^墓者^其内^長濶^及高^皆准^於上^其
 及^高皆^准於^上其^外域^方七^尋高^三尋^一役^五百^人五^日使^訖其^葬時^帷帳^等
 等^用白^布擔^而行^之蓋^此以^肩擔^下臣^之墓^者其^内長^濶及^高皆^准於^上其^外
 外^域方^五尋^高二^尋半^一役^二百^五十^人三^日使^訖其^葬時^帷帳^等用^白布^一
 亦^准於^上大^仁小^仁之^墓者^其内^長九^尺高^濶各^四尺不^レ封^使平^一役^一
 百^人一^日使^訖大^禮以下^小智^以上^之墓^者宜^用小^石其^帷帳^等宜^用白^布庶^民亡^訖
 訖^凡王^以下^小智^以上^之墓^者宜^用小^石其^帷帳^等宜^用白^布庶^民亡^訖
 時^收埋^於地^其帷^帳等^可用^龜布^一日^莫停^凡王^以下^及至^庶民^不得^訖

ロヒセ注セリ漢書董賢傳の注に珠襦以珠爲襦如鐵狀連綴之以黃金爲纒要以下玉爲押至足亦綴以黃金爲纒さあり
 ○夫葬者云々、禮記檀弓の語、夫の字は北本應本中本に據り補ふ
 ○濶五尺、下文に據るに此下高幾尺の句を脱すこ通證に云り
 ○高五尋、尋は字書に八尺也さあり
 ○帷帳、抄調度部に帷(加大比良)圍也自障圍也又帳(俗音長)張也施張於床上也さありカイシロは垣代の義、葬送の時に棺を障へ蔽ふ幕の如き物なり古き葬送の圖に見ゆ
 ○輻車、喪葬令に方相輻車義解に葬車也さありキクルマは輻車なり
 ○墓者、者の字は中本に據り補ふ
 ○方七尋、原本七の下に等の字あり北本應本中本に據り削る
 ○擔而行之、輻車を用ふるものに對して云肩輿の濫觴なり
 ○(注)蓋此云々、集解に私記の摺入さして削る

營^凡自^畿内^及諸^國等^宜定^一所^而使^收埋^不得^汗穢^散埋^處々^凡
 人^死亡^之時^若經^自殉^或絞^人殉^及強^殉亡^人之^馬或^爲亡^人藏^寶於^墓
 墓^或爲^亡人^斷髮^刺股^而誅^{如此}舊^俗一^皆悉^斷或^本云^無藏^金銀^錦綾^五綵^又
 銀^縱有^違詔^犯所^禁者^必罪^其族^復有^見言^不見^言見^言不^聞不^聞
 聞^言聞^都無^正語^正見^巧詐^者多^復有^奴婢^欺主^貧困^自託^勢家^求活^活
 勢^家仍^強留^買不^送本^主者^多復^有妻^妾爲^夫被^放之^日經^年之^後適^適
 他^恒理^而此^前夫^三四^年後^貪求^後夫^財物^爲己^利者^甚衆^復有^恃勢^勢
 之^男浪^要他^女而^未納^際女^自適^人其^浪要^者嗔^求兩^家財^物爲^己利^利
 者^甚衆^復有^亡夫^之婦^若經^十年^及廿^年適^人爲^婦并^未嫁^之女^始適^人
 時^於是^妬斯^夫婦^使祓^除多^復有^爲妻^被嫌^離者^特由^慙愧^所惱^強爲^爲
 事^瑕之^婢居^騰作^柯復^有屢^嫌己^婦奸^他好^向官^司請^決假^使得^明三^三
 證^而俱^顯陳^然後^可諮^詎生^浪訴^復有^被役^邊畔^之民^事了^還鄉^之
 日^忽然^得疾^臥死^路頭^於是^路頭^之家^乃謂^之曰^何故^使人^死於^余路^路

○其内長九尺、原本内を
外に作り九の字一字行れ
り北本應本中本に據て訂
す
○宜用小石、喪葬令に凡
墓皆立碑記、具官姓名之
墓あり碑は小石を用
ふべしなり
○其帷帳等宜用白布、集
解に王以下用「白布」を既
に上文に見えれば、行文
なりさて此八字を削れり
○庶民、原本庶人にする
北本應本中本に據て改む
○不得營殯、古來一般に
殯殿して墓を造り畢りし
を墳墓の制を簡略にする
と共に殯を營むことを禁
ぜられしなり
○不得汗穢散理處々、原
本理を理に作る諸本に據
て改む從來墓地は各處に
散在せしを一定の場所に
埋葬することに定められ
しなり喪葬令に凡皇郡及
道路側近並不得葬埋と
あり禁斷の地を指定せら
る
○經自殉、殉死は垂仁天
皇の御世に禁じ給ひしか
ご未だ遺風の存せしなる
べし
○絞殉死、他より強ひて
殉死せしむるなり ○爲亡人斷髮、夫死すれば妻髮を斷る類是なり ○刺股而談、此以外に見えず如此して殉死に代へしにや集解に魏志倉慈傳曰西

因留死者、友伴強使祓除、由是兄雖臥死於路、其弟不收者多、復有百姓
溺死於河、逢者乃謂之曰、何故於我、遇溺人、因留溺者、友伴強使祓
除、由是兄雖溺死於河、其弟不救者衆、復有被役之民、路頭炊飯、於是路
頭之家、乃謂之曰、何故任情炊飯、余路強使祓除、復有百姓就他借飯、炊
飯、其飯觸物而覆、於是飯主乃使祓除、如是等類、愚俗所染、今悉除斷、
勿使復爲、復有百姓、臨向京日、恐所乘馬疲瘦、不行、以布二尋、麻二束、
送參河尾、張兩國之人、雇令養飼、乃入于京、於還鄉日、送餼一口、而參
河人等不能養飼、翻令瘦死、若是細馬、即生貪愛、工作謾語、言被偷失、
若是牝馬、孕於己家、便使祓除、遂奪其馬、飛聞若是、故今立制、凡養馬於
路傍、國者將被雇人、審告村首、也、首長方授酬物、其還鄉日、不須更報、如
致疲損、不合得物、縱違斯詔、將科重罪、罷市司要路津濟渡子之調賦、
給與田地、凡始畿内及四方國、當農作月、早務營田、不合使喫美物與
酒、宜差清廉使者、告於畿内、其四方諸國、國造等、宜擇善使、依詔催勸、

域諸胡聞慈死、悉共會聚、發哀或有以刃畫面以明血誠、見此類、○復有奴婢、復の字は集解に據て補ふ奴婢は、吏學指南に古以罪沒爲奴婢故
有官私奴婢之限、也、○欺主、本來の主家の貧困なるを欺くなり ○留置云々、奴婢の欺言を實さず留置買取て本主に還さぬを云 ○被
放之日、集解に之日の二字を削す ○浪要他女、コトムスビは言結びなり約束するを云 ○亡夫之婦、之の字は北本應本中本に據て補ふ ○妬斯
夫婦云々、上古は夫死すれば再嫁を許さず十年二十年の後若し再嫁する時は祓除せしめしなり又處女の始て婚する時も祓除せしめたるが其理由は詳
ならず ○事暇之婢、事は上文の要コトムスビの事なり ○コト取は天離マサカル遠ざかるなどのサカと同じ離る、意にて夫に離れせられたるが尙之を慕ひて
夫婦の要(チキリ)はさかりても其許に留りて婢となるを云 ○已婦姪他、婦の字は北本應本中本に據て補ふ ○明三證、三つの争ふべからざる
明白なる證據を云 ○邊畔之民、之の字は北本應本中本に據て補ふ ○因留死者友伴云々、行倒れの人あれば埋葬等に憐れ且死穢に觸る、を以て
其友伴に祓除を負はしむるなり祓除は其人より祓物を出さしめて之を行ふ例なるが之に四種の區別ありて其制延曆二十年五月の格文に見ゆ因は原
本困に作る北本應本中本に據て改む下同 ○溺死於河、此は儀式帳に見ゆる國罪の中なる川入なるべし ○借飯云々、抄器皿部に飯(音勝古之岐)
炊飯器也とあり蒸籠の事なり古は飯は籠にて蒸したるなり神宮にては今も尙然り借飯云々の事に至る迄祓除せしむるは全く祓除の精神を忘れ之に
託して貪慾を充たさむとするものなり ○布二尋、周禮注に八尺曰尋倍尋曰常あり ○麻二束、十把爲束とあり ○參河人等、小山田與清云
河の下疑らくは尾張の二字を脱す ○酬物、酬は酬に同じ前に見ゆる布麻の類を云 ○不須更報、原本更を史に作る應本應本中本に據て改む報は報
酬の意 ○市司要路云々、市司は市司に屬するもの、要路は要害の地を守るものにて關守の類津濟渡子は津濟の渡子なり市司以下の者は從來其職業
を以てやがて調賦したるを之を廢して其人々にも一般人民と同じく班田に預らしめ給ひしなり ○美物、イヲは魚なり古書に魚類を美物と書ける
例多し中本及標注にウマキモノと訓るは非なり

○八月、是以、原本是を
見に作る中本楓本引交本
に據て改む
○聖主、北本主を王に作
る
○思人獲所、人々其所を
得其業を樂まむ事を念ま
し給ふなり
○始王之名々々、王の
御名より始めとして
臣連伴造國造等の名も皆
品部の名となれりなり
○以其民品部云々、別れ
て民となれる品部が國縣
に雜居して蕃衍すなり
○父子易姓云々、集解に
警父則爲警津部之民、而
負警津部、而子則爲武部

秋八月、庚申朔癸酉、詔曰、原夫天地陰陽不使四時相亂、惟此天地生乎
萬物、萬物之内、人是最靈、最靈之間、聖爲人主、是以聖主天皇、則天御
寓、思人獲所、暨不廢智、而始王之名々、臣連伴造國造、分其品部、別彼
名々、復以其民品部、交雜使居國縣、遂使父子易姓、兄弟異宗、夫婦更
互殊名、一家五分六割、由是爭競之訟、盈國充朝、終不見治、相亂彌盛、
粵以始於今之御、寓天皇及臣連等、所有品部、宜悉皆罷、爲國家民、其假
借王名爲伴造、其襲據祖名爲臣連、斯等深不悟情、忽聞若是所宣、當

吾子孫可王之地也。宣給ひしを云。
 ○始治國皇祖、神武天皇を申す。
 ○大同、字書に同は齊也。和也。あり大に和なるを云。
 ○固執彼此云々、或は神齋なり。云ひ或は皇孫なり。て自ら高ぶる人を卑む。即ち矜惜貴重義。
 ○前々、注の如く人々なり。講述鈔に今俗ニ神幾座ヲ神何前ト云ヒ及御前ト云手前ト云皆是ヨリ來ル其舊キヲ觀ルベシ云。
 ○(注)前々云々、集解に私記攪入す。
 ○以神名王名云々、賄賂を取て神名王名を以て奴婢の名にさへ爲るものあり。さなり。
 ○治國、中本治の上に將の字あり。
 ○將賜庸調、集解に按以庸調爲賜以定執舊拒新人心所危懼也。さあり。
 ○壞小郡而營宮、攝津志に西成郡上古難波小郡と云。あり壞は民家を壞つならむ而の字は北本中本に據て補ふ。
 ○臨到午時、原本臨一字

巾於前、其鍾臺者起於中庭。工人大山位倭漢直荒田井比羅夫誤穿溝瀆。控引難波而改穿。疲勞百姓。爰有上疏。切諫者。天皇詔曰。妄聽比羅夫所詐。而空穿瀆。朕之過也。即日罷役。冬十月。甲寅朔甲子。天皇幸有間。溫湯。左右大臣羣卿大夫從焉。十二月晦。天皇還自溫湯。而停武庫行宮。武庫地名也。是日。災。皇太子宮時。人大驚恠。是歲。制七色一十三階之冠。一曰織冠。有大小二階。以織爲之。以繡裁冠之緣。服色並用深紫。二曰繡冠。有大小二階。以繡爲之。其冠之緣。服色並同織冠。三曰紫冠。有大小二階。以紫爲之。以織裁冠之緣。服色用淺紫。四曰錦冠。有大小二階。其大錦冠。以大伯仙錦爲之。以織裁冠之緣。其小錦冠。以小伯仙錦爲之。以大伯仙錦裁冠之緣。服色並用眞緋。五曰青冠。以青絹爲之。有大小二階。其大青冠。以大伯仙錦裁冠之緣。其小青冠。以小伯仙錦裁冠之緣。服色並用紺。六曰黑冠。有大小二階。其大黑冠。以車形錦裁冠之緣。其小黑冠。以菱形錦裁冠之緣。服色並用綠。七曰建武。初位。又以黑絹爲之。以紺裁冠之緣。別有鏡冠。以黑絹爲之。其冠之背。張漆。羅。以緣與銅。異其高

行れり北本應本中本に據て削る。
 ○聽鐘而罷、公式令に凡京官皆開門前上閉門後下義解に謂第二開門鼓前後朝鼓後也。さあり。
 ○擊鐘吏、守辰丁なり。
 ○赤巾、集解に按赤巾蓋絳幘鶴人之類。蒙首衣也。非謂蔽膝爲巾之中也。さあり。抄裝束部に觸(知岐利加宇不利今老嫗戴之)覆髻上者也。さあり。
 ○改穿、此二字集解に攪入して削る。
 ○切諫、切は北本應本中本に據て補ふ。○有間溫湯、攝津國有間郡。○晦、辛巳に當る十二月の下朔干支を脱せしなるべし。○武庫行宮、攝津志に在武庫郡藏入村と云。○(注)武庫地名也、集解に攪入す。○時人大驚恠、何事か深き事由ありなるべし。○七色一十三階之冠、推古紀十一年に冠位十二階を定められしより四十四年なり。○織冠、集解に按織即錦綺之屬。さあり。○繡、抄布帛部に繡以五色絲刺萬物形狀也。さあり。○以紫爲之、山田以文の説に紫の下綾の字を脱せしならむむ。○紺、フカキハナダは深縹なり。○車形錦、車形は文を云。○菱形錦、菱の紋形の錦なり。○建武、通證に通典曰。鷲冠一名建武云々。蓋取之而名也。鷲性雄健。武毅。故曰建武。耶。さあり。○(注)初位又名立身、初位は身を立つるの初建武を初位とも立身とも云るなるべし。五年紀十九階には立身の本名さあり。○以黑絹、以の字は集解に據て補ふ。○鏡冠、冠の形に似たるを以て名く鏡冠をトホと訓めるは古代の鏡の狀に似たるに因れり。○紺、髻華なり。推古紀十一年(一一二頁)に出づ。○形似於蟬、似の字は北本應本中本に據て補ふ。蟬をカザリクシと訓めるは飾串にて蟬の形を作りて串に付けしなるべし。是も支那風なり。○大會、即位朝拜等を云。○饗客、唐及三韓人參聘時の饗なり。○齋時、四月八日七月十五日なり。○大阿食、原本食を食に作る中本に據て改む。大阿食は新羅の官名。○小山、小山は上下ありて中なれば中は上又は下の誤なるべし。○善談、ホダキは俗に云ホザキの意なるべし。言多きを云。○淳足柵、越後國沼垂郡(今中蒲原郡)にあり。○柵戸、陵戸官戸などの戸に同じく柵に屬する民戸なり。

下形似於蟬。小錦冠以上之。銅雜金銀爲之。大小青冠之。銅以銀爲之。大小黑冠之。銅以銅爲之。建武之冠。無銅也。此冠者大會饗客。四月七月。齋時所著焉。新羅遣上臣大阿食。金春秋等。送博士小德高。向黑麻呂。小山中。中臣連押熊。來獻孔雀一隻。鸚鵡一隻。仍以春秋爲質。春秋美姿。顏善談。啖造。淳足柵。置柵戸。老人等相謂之曰。數年。鼠向東行。此造柵之兆乎。

【大化四年】難波碕宮、豐碕宮に同じ前後の文を按るに或は豐の字を脱せしか又或は略稱ならむか(二月)三韓、中本此下

(戊申) 四年春正月壬午朔、賀正焉。是夕、天皇幸于難波碕宮。二月壬子朔、於三韓遣學問僧。己未、阿倍大臣請四衆。於四天王寺迎佛像四軀。使

に三韓謂高麗百濟新羅の九字を分注す
 ○遣、中本於の上にある
 ○己未、原本未を來に作る中本及類史に據て改む
 ○四衆、翻譯名義集に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷爲四衆と見ゆ
 ○鐵鷲山、西域記に書閣幡山有兩峰雙立鷲鳥常居其巔山遠望如鷲形故爲鐵鷲山とあり
 【大化五年】制冠十九階、三年改定の七色十三階に六階を増したれど大紫小紫以上は前に同じく花、山、乙は新制、立身は前の建武の名を改めしなり
 ○大織、楓本中本には織をシヨク又シキ、シクミ訓めりシクの訓誤れりシキの方正し常にダイシヨクと云
 ○大花、原本花を華に作る何れにてもあるべけれど今諸本に従ふ下同じ
 ○乙、鶉の音を取れば此の訓イツとあるが理なれどなほ舊訓オツと訓めらるが有り
 ○八省、八省は中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮内を云唐

坐于塔内造靈鷲山像累積鼓爲之夏四月辛亥朔罷古冠左右大臣猶著古冠是歲新羅遣使貢調治磐舟柵以備蝦夷遂選越與信濃之民始置柵戶
 五年春正月丙午朔賀正焉二月制冠十九階一日大織二日小織三日大繡四日小繡五日大紫六日小紫七日大花上八日大花下九日小花上十日小花下十一日大山上十二日大山下十三日小山上十四日小山下十五日大乙上十六日大乙下十七日小乙上十八日小乙下十九日立身是月詔博士高向立理與釋僧旻置八省百官三月乙巳朔辛酉阿倍大臣薨天皇幸朱雀門舉哀而慟皇祖母尊皇太子等及諸公卿悉隨哀哭戊辰蘇我臣日向身刺譖倉山田大臣於皇太子曰僕之異母兄麻呂伺皇太子遊於海濱而將害之將反其不久皇太子信之天皇使大伴狛連三國麻呂公穗積嚙臣於蘇我倉山田麻呂大臣所而問反之虛實大臣答曰被問之報僕面當陳天皇之

の六部に准じて尙ほ二省を増したるなり令制の八省の源をなせるなり省は字書に禁署也とあり
 ○朱雀門、拾芥抄に伴氏造之に二階中間戸五間號朱雀御門とあり南面中央の大門なり
 ○譖、字鏡に譖志己豆とあり醜と三つの意
 ○麻呂、倉山田麻呂を云
 ○赤猪、原本猪を狛に作る北本楓本應本及釋紀に據て改む
 ○注、秦、原本奏に作る楓本引交本及中本に據て改む
 ○茅淳道、茅淳は和泉國なり
 ○長子、エホは他に見えれど古訓なるべし
 ○注、山田之家、大和國十市郡にあり
 ○今來、高市郡の舊名なり新漢にも書けり
 ○大槻近、近は邊の誤にて邊(ホトリ)なるべし下同じ
 ○逆拒、原本逆を送に作る中本に據て改む
 ○注、宮謂小墾田宮、集解撰入とす
 ○夫爲人臣、原本夫を大に作る諸本及紀略に據て

所天皇更遣三國麻呂公穗積嚙臣審其反狀麻呂大臣亦如前答
 天皇乃將興軍圍大臣宅大臣乃將一子法師與赤猪秦更名自茅淳道
 逃向於倭國境大臣長子興志先是在倭謂在山營造其寺今忽聞父逃
 來之事迎於今來大槻近就前行入寺顧謂大臣曰興志請自直進逆
 拒來軍大臣不許焉是夜興志意欲燒宮猶聚士卒宮謂小己巳大臣謂
 長子興志曰汝愛身乎興志對曰不愛也大臣仍陳說於山田寺衆僧
 及長子興志與數十人曰夫爲人臣者安構逆於君何失孝於父凡此
 伽藍者元非自身故造奉爲天皇誓作今我見譖身刺而恐橫誅
 聊望黃泉尙懷忠退所以來寺使易終時言畢開佛殿之戶仰而發
 誓曰願我生々世々不怨君王誓訖自經而死妻子殉死者八是日以
 大伴狛連與蘇我日向臣爲將領衆使追大臣將軍大伴連等及到黑
 山土師連身采女臣使主麻呂從山田寺馳來告曰蘇我大臣既與三男
 一女俱自經死由是將軍等從丹比坂歸庚午山田大臣之妻子及隨

改む ○身刺、原本刺を判に作る諸本に據て改む
 ○仰而發誓、原本仰を伴に作り而の字なし北本應本中本に據て改め補ふ
 ○殉死者八、中本に據れりて下に人の字を補るは非なり同本になし
 ○黒山、河内志に丹南郡黒山村あり今南河内郡黒山村是なり
 ○土師連身、身は名なり當時は身、目なごいふ名ありたり
 ○丹比坂、丹南郡にあり今南河内郡丹比村に屬す
 ○亦自、亦の字は中本に據て補ふ
 ○田口臣筑紫、二年紀に見ゆ
 ○著柳、抄調度部刑罰具に無針者著盤柳(日本紀私記云久比加之)とあり
 ○二田造鹽、天孫本紀に五部造一曰二田造又録右京未定雜姓に二田物部と見ゆ
 ○叱咤啼叫、原本叱を叱に作る北本に據て改む啼は號の誤なるべし
 ○始、イマシは今シにてシは助辭なり

身者亦自經死者衆穗積臣嚙捉聚大臣伴黨田口臣筑紫等著柳反縛是夕木臣麻呂蘇我臣日向穗積臣嚙以軍圍寺喚物部二田造鹽使斬大臣之頭於是二田鹽仍拔大刀刺舉其完叱咤啼叫而始斬之甲戌坐蘇我山田大臣而被戮者田口臣筑紫耳梨道德高田醜此渠額田部湯坐連名秦吾寺等凡十四人被絞者九人被流者十五人是月遣使者收山田大臣資財資財之中於好書上題皇太子書於重寶上題皇太子物使者還申所收之狀皇太子始知大臣心猶貞淨追生悔耻哀歎難休即拜日向臣於筑紫大宰帥世人相謂之曰是隱流乎皇太子妃蘇我造媛聞父大臣爲鹽所斬傷心痛惋惡聞鹽名所以近侍於造媛者諱稱鹽名改曰堅鹽造媛遂因傷心而致死焉皇太子聞造媛徂逝愴然傷怛哀泣極甚於是野中川原史滿進而奉歌歌曰耶麻鵝播爾烏志賦拖都威底陀虞毗預俱陀虞陸屢伊慕乎多例柯威爾雞武一模騰渠等爾婆那播左該騰摸那爾騰柯母于都俱之伊

地名 ○耳梨、大和國十市郡の地名
 ○高田、録右京諸蕃に高田首出高麗人多高子使主とある同氏か
 ○(注)醜此云々、醜の字は中本に據て補ふ
 ○額田部湯坐連、録左京神別に天彥根命子明立天御影命之後也とあり
 ○收山田大臣資財、賊盜律に謀反及大逆者資財田宅並沒官とある是なり
 ○相謂之、北本謂を語に作る
 ○是隱流乎、通證に陽進拜而退還之也と云り
 ○野中、河内國丹比郡野中郷あり河内志に野中村見ゆ是なり
 ○烏志賦拖都威底、鷲鷲を皇太子と造媛とに喩へたり
 ○多例柯威爾雞武、何人が死に誘ひしこの意
 ○模騰渠等、木をたぐにモトと云るこ他の歌にも見ゆ花一もこなご是なり
 ○磨陀左根渠農、木毎に花は咲けるが何さて我が愛づる造媛はまた開きて來ぬのであらうと媛の身失せまじ、を皇太子の悲しみませる其御心を想ひ奉りて詠めるなり
 ○善矣悲矣、此歌を一は美はしとめて又悲ませ給へる意なるべし
 ○細二襲、髪は通證に蒲黃(カマス)也編蒲爲袋也と云
 ○乙亥、原本乙卯に作れり集解に長曆に據て改めたるに從ふ
 ○癸卯朔、長曆を推すに甲辰に當り一日の差あり
 ○掃部連、録和泉神別に掃部連振魂命四世孫天忍人命之後也とあり
 ○沙喙部、推古紀十八年(二二二頁)に見ゆ
 ○沙食、原本食を食に作る應本中本に據て改む新羅の官十七等の第八等
 ○卅七人、七の字は北本應本中本に據て補ふ
 ○(注)侍郎、後漢書百官志に侍郎三十六人主作文書起草とあり
 ○丞、原本承に作る集解に據て改む
 ○達官郎、禮記禮弓に諸達官之長杖注に受命於君者其名達於上故謂之達官とあり
 ○十六人、人の字は中本に據て補ふ

母我磨陀左根涅渠農二皇太子慨然頽歎褒美曰善矣悲矣乃授御琴而使唱賜絹四疋布廿端綿二襲夏四月乙亥朔甲午於小紫巨勢德陀古臣授大紫爲左大臣於小紫大伴長德連授大紫爲右大臣五月癸卯朔遣小花下三輪君色夫大山上掃部連角麻呂等於新羅是歲新羅王遣沙喙部沙食金多遂爲質從者卅七人(僧一人侍郎二人丞一人達官一人并卅七人也)

【白雉元年】味經宮、攝津國東生郡味原郷あり攝津志に東生郡味原方廢味生原存今屬島下郡又云味經宮別府味舌二村即其故址延喜式所謂味原牧爲祭牛牧亦即此とあり

白雉元年春正月辛丑朔車駕幸味經宮觀賀正禮阿賦賦是日車駕還宮二月庚午朔戊寅穴戶國司草壁連醜經獻白雉曰國造首之同族贊正月九日於麻山獲焉於是問諸百濟君百濟君曰後漢明帝永平

○(注)阿賦賦、原本賦也、賦に作る北本中本に據て改む

○穴門國、長門國なり

○卓壁連、日下部連に同じ顯宗紀即位前紀(卷上二九二頁)に出づ

○國造首、國造本紀に穴門國造經向日代朝御世櫻井田部連同姓邇伎都美命四世孫速都鳥命定賜國造(とあり)

○麻山、詳ならず近藤清右の説に麻山は一の山名にあらで麻と云地の山なり蓋し今の美禰郡大嶺村なるべしと云

○百濟君曰、下文に豐璋とあり此百濟君の三字原本になし北本楓本中本に據て補ふ

○白雉所在見焉、後漢書明帝紀に麒麟白雉醴泉嘉禾所在出焉と見ゆ、原本所在を在所に作る後漢書に據て改む

○沙門等、等の字は北本中本及類史に據て補ふ

○耳所未聞、原本所未聞未所と倒置す北本中本及類史に據て改む

○道登、大化元年紀に見ゆ

○白鹿蘭寺、釋氏要覽に

十一年、白雉所在見焉云々、又問沙門等、沙門等對曰、耳所未聞、目所未覩、宜赦天下、使悅民心、道登法師曰、昔高麗欲營伽藍、無地不覽、便於一所、白鹿徐行、遂於此地、營造伽藍、名白鹿蘭寺、住持佛法、又白雀見于一寺、田莊、國人僉曰、休祥、又遣大唐使者持死三足鳥來、國人亦曰、休祥、斯等雖微、尙謂祥物、況復白雉、僧旻法師曰、此謂休祥、足爲希物、伏聞王者、旁流四表、則白雉見、又王者祭祀不相踰、宴食衣服有節、則至、又王者清素、則山出白雉、又王者仁聖、則見、又周成王時、越裳氏來獻白雉、曰、吾聞國之黃者曰、久矣、無烈風淫雨、江海不波溢、三年於茲矣、意中國有聖人乎、蓋往朝之故、重三譯而至、又晉武帝咸寧元年、見松滋、是則休祥、可赦天下、是以白雉使放于園、甲申、朝庭、隊仗如元會儀、左右大臣百官、人等爲四列於紫門外、以粟田臣飯虫等四人、使執雉、輿而在前、去左右、大臣乃率百官及百濟君豐璋、其弟塞城、忠勝、高麗侍醫毛治、新羅侍學士等、而至中庭、使三國公麻呂、猪名、公高見、三輪、君饗穗、紀、臣乎

鹿苑又名鹿林、在波羅奈國、佛成道初轉法輪、度橋陳如等五比丘處、さあり白鹿園寺の名此に據れるなるべし

○三足鳥、治部式祥瑞に三足鳥日之精也とあり上瑞とす

○此謂休祥、北本楓本應本休を佳に作る字書に休は美善也慶也とあり

○旁流、太子傳所引感情符に王者德流四表、則白雉見とあり

○王者祭祀云々、孝經援神契に見ゆ

○又周成王時、又の字は北本應本中本及類史に據て補ふ

○越裳氏、後漢書南蠻傳に交趾之南有越裳國とあり

○黃者、儀禮士冠禮に黃者無疆受天慶、注に黃黃髮也、考凍梁也、皆壽徵也、と烈風淫雨、原本烈を別に作る類史に據て改む、淫雨は字書に久雨也とあり

○松滋、通證に松滋縣在江陵、江陵府屬湖北、即荊州とあり

○隊仗、宮衛令義解に隊仗者衛士陣謂之仗也、兵衛內舍人陣謂之仗とあり

麻呂岐太四人、代執雉、輿而進、殿前、時左右大臣就執輿、前頭伊勢王、三國公麻呂、倉臣小屎、執輿、後頭置於御座之前、天皇即召皇太子、共執而觀、皇太子退而再拜、使巨勢大臣奉賀曰、公卿百官、人等奉賀、陛下以清平之德、治天下之故、爰有白雉、自西方出、乃是陛下及至千秋萬歲、淨治四方、大八嶋、公卿百官及諸百姓等、冀罄忠誠、勤將事、奉賀、詔再拜、詔曰、聖王出世、治天下時、天則應之、示其祥瑞、曩者西土之君周成王、世與漢明帝時、白雉爰見、我日本國、譽田天皇之世、白鳥櫛宮、大鷦鷯、帝之時、龍馬西見、是以自古迄今、祥瑞時見、以應有德、其類多矣、所謂鳳凰、麒麟、白雉、白鳥、若斯、鳥獸及于草木、有符應者、皆是天地所生、休祥嘉瑞也、夫明聖之君、獲斯祥瑞、適其宜也、朕惟虛薄、何以享斯、蓋此專由扶翼、公卿臣連、伴造國造等、各盡丹誠、奉中造制度之所致也、是故始於公卿及百官等、以清白意、敬奉神祇、並受休祥、令榮天下、又詔曰、四方諸國郡等、由天委付之故、朕摠臨而御、寓今我親神祖之所知、穴戶國中、有此嘉瑞、所以大赦天下、改元、白雉、仍禁放鷹於穴戶境、賜

○如元會議、元會は正月元旦の節會を云
 ○紫門、天に紫微宮あり上帝の居處なり王者之に象て宮を立つ依て紫宮といひ其門を紫門と云なり
 ○寒城、皇極紀(一五〇頁)に塞上とあり
 ○忠勝、齊明紀(二二〇頁)に豐璋の叔父とあり
 ○猪名公、宣化紀元年(二五頁)に偉那公と見ゆ
 ○紀臣乎麻呂岐太、北本應本乎を手に作る集解に乎字衍據二年紀刪二年紀曰紀麻利者托臣即此とあり通證には乎麻呂を一人の名とし岐太は新羅侍學士の名ならむと云
 ○伊勢王、詳ならず
 ○倉臣、録和泉神別に椋連天香山命之後也とあれど同族か詳ならず
 ○巨勢大臣、徳大臣なり
 ○奉賀、ヨゴトは賀詞なり
 ○清平之徳、之の字は北本及類史に據て補ふ
 ○淨治、原本治を侶とす北本應本中本に據て改む又中本淨を清に作る
 ○漢明帝、類史漢の上後の字あり
 ○白鳥、原本鳥を鳥に作る下文に據て改むは鳥とす
 ○龍馬、治部式祥瑞に龍馬を上瑞とす白鳥龍馬の事共に本紀に見えざれど據あるべし
 ○鳳凰、治部式に鳳狀如鶴五綵以文云々とあり大瑞とす
 ○我親神祖、祝詞に皇親神祖魯美命とあるに同じ神魯美神は神祖とまします女神の意なるが、は仲哀天皇神功皇后を申奉れるなるが其は仲哀天皇神功皇后が能製御親征の時行宮を穴門に造りましし事のあらばなり
 ○祭放鷹、瑞鳥の栖めばなるべし
 ○穴戸境堺、堺の字は類史に據て補ふ
 ○令史、抄職官部に司曰令史佐官也とあり
 ○大山、上に見えし冠位にて上下あれば上或は下の字あるべきなり
 ○大給祿、祿の字は類史に據て補ふ原本祿の下各有差の三字あり符なれば削る
 ○復、調役を免すなり正韻に復除也、漢書の注に不徭役也とあり
 ○(注)天皇世、世の字は北本中本に據て補ふ
 ○將作大匠、通證に舊秦官唐依之三年作工人とあり
 ○荒田井直、上文に倭漢直荒田井とあり
 ○使侍、使は挾に同じ脇立なり
 ○八部、翻譯名義集に一天二龍三夜叉四乾闥婆五阿脩羅六迦樓羅七緊那羅八摩睺羅伽とあり
 ○漢山口直、録右京諸蕃山口宿禰後漢靈帝四世孫都黃と直之後也とあり是なるべし
 ○白髮部連、清寧紀卷上二九〇頁)に出づ録右京皇別に眞髮部稚武彦男吉備武彦之後也また山城神別に眞髮部造神饒速日命七世孫大賣布乃命之後也とあり二氏の内なるべし白髮部を眞髮部と改めたる事續紀二十八延曆四年五月の詔に見ゆ
 ○胡床、楓木床を麻に作る

○如元會議、元會は正月元旦の節會を云
 ○紫門、天に紫微宮あり上帝の居處なり王者之に象て宮を立つ依て紫宮といひ其門を紫門と云なり
 ○寒城、皇極紀(一五〇頁)に塞上とあり
 ○忠勝、齊明紀(二二〇頁)に豐璋の叔父とあり
 ○猪名公、宣化紀元年(二五頁)に偉那公と見ゆ
 ○紀臣乎麻呂岐太、北本應本乎を手に作る集解に乎字衍據二年紀刪二年紀曰紀麻利者托臣即此とあり通證には乎麻呂を一人の名とし岐太は新羅侍學士の名ならむと云
 ○伊勢王、詳ならず
 ○倉臣、録和泉神別に椋連天香山命之後也とあれど同族か詳ならず
 ○巨勢大臣、徳大臣なり
 ○奉賀、ヨゴトは賀詞なり
 ○清平之徳、之の字は北本及類史に據て補ふ
 ○淨治、原本治を侶とす北本應本中本に據て改む又中本淨を清に作る
 ○漢明帝、類史漢の上後の字あり
 ○白鳥、原本鳥を鳥に作る下文に據て改むは鳥とす
 ○龍馬、治部式祥瑞に龍馬を上瑞とす白鳥龍馬の事共に本紀に見えざれど據あるべし
 ○鳳凰、治部式に鳳狀如鶴五綵以文云々とあり大瑞とす
 ○我親神祖、祝詞に皇親神祖魯美命とあるに同じ神魯美神は神祖とまします女神の意なるが、は仲哀天皇神功皇后を申奉れるなるが其は仲哀天皇神功皇后が能製御親征の時行宮を穴門に造りましし事のあらばなり
 ○祭放鷹、瑞鳥の栖めばなるべし
 ○穴戸境堺、堺の字は類史に據て補ふ
 ○令史、抄職官部に司曰令史佐官也とあり
 ○大山、上に見えし冠位にて上下あれば上或は下の字あるべきなり
 ○大給祿、祿の字は類史に據て補ふ原本祿の下各有差の三字あり符なれば削る
 ○復、調役を免すなり正韻に復除也、漢書の注に不徭役也とあり
 ○(注)天皇世、世の字は北本中本に據て補ふ
 ○將作大匠、通證に舊秦官唐依之三年作工人とあり
 ○荒田井直、上文に倭漢直荒田井とあり
 ○使侍、使は挾に同じ脇立なり
 ○八部、翻譯名義集に一天二龍三夜叉四乾闥婆五阿脩羅六迦樓羅七緊那羅八摩睺羅伽とあり
 ○漢山口直、録右京諸蕃山口宿禰後漢靈帝四世孫都黃と直之後也とあり是なるべし
 ○白髮部連、清寧紀卷上二九〇頁)に出づ録右京皇別に眞髮部稚武彦男吉備武彦之後也また山城神別に眞髮部造神饒速日命七世孫大賣布乃命之後也とあり二氏の内なるべし白髮部を眞髮部と改めたる事續紀二十八延曆四年五月の詔に見ゆ
 ○胡床、楓木床を麻に作る

公卿大夫以下至^ル于^ニ令史^ニ各有^リ差^リ於是^ニ褒^ム美^ム國^ノ司^ノ草^ノ壁^ノ連^ノ醜^ノ經^ノ授^ケ大^ノ山^ノ并^テ大^ノ給^ノ祿^ノ復^ス穴^ノ戸^ノ三^ノ年^ノ調^ノ役^ノ夏^ノ四^ノ月^ノ新^ノ羅^ノ遣^テ使^テ貢^ル調^ル或^レ本^ノ云^ハ是^レ天^ノ皇^ノ世^ニ高^ノ麗^ノ百^ノ濟^ノ冬^ノ十^ノ月^ノ爲^シ入^ル宮^ノ地^ノ所^ノ壞^レ丘^ノ墓^ノ及^テ被^テ遷^ル人^ノ者^ノ賜^ル物^ノ各^ノ有^リ差^リ即^チ遣^テ將^テ作^ル大^ノ匠^ノ荒^ノ田^ノ井^ノ直^ノ比^シ羅^ノ夫^ノ立^ツ宮^ノ堺^ノ標^ノ是^レ月^ノ始^メ造^ル丈^六繡^ノ像^ノ俠^ノ侍^ノ八^ノ部^ノ等^ノ四^{十六}像^ノ是^レ歲^ニ漢^ノ山^ノ口^ノ直^ノ大^ノ口^ノ奉^テ詔^シ刻^ス千^ノ佛^ノ像^ノ遣^テ倭^ノ漢^ノ直^ノ縣^ノ白^ノ髮^ノ部^ノ連^ノ鏡^ノ難^ノ波^ノ吉^ノ士^ノ胡^ノ床^ノ於^テ安^ノ藝^ノ國^ノ使^テ造^ル百^ノ濟^ノ船^ノ二^ノ隻^ノ

【白雉二年】十師、大化元年紀に出づ
 ○六月、文例に據るに此

二年春三月甲午朔丁未丈六繡像等成戊申皇祖母尊請十師等設齋

上に夏の字あるべし
 ○一切經、亦大藏經と云
 唐玄宗開元十年沙門智昇開元釋教目錄二十卷を著し經論章疏を詮次す凡て五千四十八卷是れ大藏定數の始めなり
 ○安宅土側等經、釋紀に或説地鎮之經也或曰側當作測とあり
 ○難波長柄豐碯宮、大化元年紀に遷都難波長柄豐碯宮とあれば此に至て造營全く成れるなり
 ○知万沙食、知万は名沙食は新羅の官なり
 ○追還、集解追を逐に作る
 【白雉三年】自正月至是月、通證に考此文則此上脱二月並支于一といひしを横山由清氏は集解に是月爲二月誤非班田之事は二ヶ月間に能訖ふべきにあらす按に大化二年正月に定班田收授之法とありて漸次に之を諸國に行ひ當年に至りて全國班田の事全く訖りしが故に此に載せたるなり自正月の二字は自大化二年正月の誤にて數字を脱せるなりと云
 ○(注)段租稻云々、集解

六月百濟新羅遣使貢調獻物冬十二月晦於味經宮請二千一百餘僧尼使讀一切經是夕燃二千七百餘燈於朝廷內使讀安宅土側等經於是天皇從於大郡遷居新宮號曰難波長柄豐碯宮是歲新羅貢調使知万沙食等著唐國服泊于筑紫朝廷惡恣移俗訶噴追還于時巨勢大臣奏請之曰方今不伐新羅於後必當有悔其伐之狀不須舉力自難波津至于筑紫海裏相接浮盈艦舳召新羅問其罪者可易得焉三年春正月己未朔元日禮訖車駕幸大郡宮自正月至是月班田既訖凡田長卅步爲段十段爲町段租稻一束半三月戊午朔丙寅車駕還宮夏四月戊子朔壬寅請沙門惠隱於內裏使講無量壽經以沙門惠資爲論議者以沙門一千爲作聽衆丁未罷講自於此日初連雨水至于九日損壞宅屋傷害田苗人及牛馬溺死者衆是月造戶籍凡五十戶爲里每里長一人凡戶主皆以家長爲之凡戶皆五家相保一人爲長以相檢察新羅百濟遣使貢調獻物秋九月造宮已訖其宮殿之狀不可殫論冬十

二月晦、請天下僧尼於內裏設齋大捨燃燈

に二年制段租稻二束二把
町租稻二十二束至此改
制薄租也云云横山氏
の說に此集解の說によらば租法改制の事載すべきを載せざるは租法を緩めたるにはあらず蓋上古令前段租は其實大化二年の租法と同じきが故に撰者の注したるなり本紀の撰進は大寶制令以前にあるが故に令前租法を以て注したるなり又上古五斗の地大化に歩積を改めて一段を三百六十歩と爲すも民間に於てはなほ從來のまゝに代の名をもて稱し歩積も舊に仍れるが故に多く稻の束把穀の斗升も亦從て改まらざりしに因れり近江令撰定の頃などに改めて歩積を舊の高麗尺の方六尺に復し其二百五十歩を以て段とし十段二千五百歩を以て一町とせしならむ是上古の制に全く同じ持統天皇三年に令を諸司に頒ち同六年に班田使を遣して町段を定めしことあるを令前租法の稱あると段積を三百六十歩とし更に改めて二百五十歩とし重ねて復改めて三百六十歩と爲しことあるを以て此制ありしことを證すべしと云 ○惠隱、舒明紀十一年に見ゆ ○惠資、集解に按大化元年紀有惠蓋同人也 ○雨水、水は水の誤なるべし ○宅屋、ヤカスは宅柄なるべし推古紀七年(一〇九頁)に舍屋を訓り ○長一人、長の上置の字あるべし ○彈論、原本彈を彈に作る小寺本集解に據て改む彈は説文に極盡也とあり ○晦、原本皆に作る通證集解に從て改む通證に僧史略曰漢法本内傳曰西域十二月三十日は此方正月望謂之大神變月漢明帝令燒燈表佛法大明也とあり ○大捨燃燈、傳燈錄に内外身心一時俱捨隨力應物能所背忘謂之大捨譬喻經に眞至心割捨然燈佛前所獲福難可稱量也とあり大捨の訓カキテは攝捨なるべし

【白雉四年】道殿、崇峻紀元年に見ゆ ○道光、持統紀八年に見ゆ

○弁正、懷風藻に傳あり ○道昭、續紀一道昭傳に和尙河内國丹比郡人也俗姓船連王辰爾之裔惠釋之子也尙扶桑略記元亨釋書等に委し

○定惠、定慧傳あり元亨釋書に大織冠之長子也云々白雉四年隨遣唐使淨海乃到長安城師慧日寺神泰習學殆十歲調露元年伴百濟使而至とあり ○(注)中臣渠每連、大中臣本系帳に糠手子大連公一男右大臣大錦上金二男

四年夏五月辛亥朔壬戌發遣大唐大使小山上吉士長丹副使小乙上吉士駒、名糸、學問僧道嚴、道通、道光、惠施、覺勝、弁正、惠照、僧忍、知聰、道昭、定惠、之長子也、安達、每連之子、道觀、道觀春日粟田、學、生巨勢、臣藥、豐、足臣、水連、老人、老人、眞玉之子、或本、以學問僧知辨、并一百廿一人、俱乘一船以室原首御田爲送使、又大使大山下高田、首根麻呂、掬屋、副使小乙上掃守連小麻呂、學問僧道福、義向、并一百廿人俱乘一船、以土師連八手爲送使、是月、天皇幸旻法師房而問其疾、遂口勅恩命、或本、於五年七月云僧於是天皇幸而問之、仍執其手曰、六月、百濟新羅遣使貢調獻物、脩治處々大道、若法師今日亡者、朕從明日亡、

許米とあり ○百濟之子、中本子の下俗名眞人の四字あり ○水連、河内神別に水連石上朝臣同祖饒速日命十世孫伊已灯(ヨシト)宿禰之後也とあり天武紀十三年水連賜姓曰宿禰とあり老人は持統紀に出づ ○(注)義德、持統紀四年歸朝のこに見ゆ ○并一百廿一人、并一の二字は北本應本中本に據て補ふ ○室原首、詳ならず ○高田首、五年紀に出づ ○(注)阿曇寺、攝津志に西成郡安曇廢寺大坂安堂寺町地藏石像尙存即此とあり ○天皇、原本大皇に作る北本應本楓本に據て改む ○若法師、原本若を若に作る北本中本に據て改む ○狗堅部子麻呂、原本堅を堅に作る中本小寺本に據て改む姓氏錄に堅部は見えず右京未定雜姓に堅祖氏百濟國人堅祖爲知之後者とあれど百濟人なれば猶と云るに叶はず續紀稱德紀に堅部使主石前とあるは蓋同族なるべし ○鯉魚戸直、詳ならず録右京諸蕃道祖史百濟王孫許里公之後也とあるは同族か ○川原寺、大和志に高市郡廢川原寺川原村一名弘福寺唯大悲堂一字尙存とあり今高市郡高市村大字川原 ○竹島之間、原本間を門に作る北本應本中本及紀略に據て改む竹島は地理纂考に川港より海上十三里硫黃島に隸し硫黃島は當島より南の方三里に在りとあり、薩麻之曲竹嶋之間とあれば薩摩國と竹嶋との中間にて船の沈没せしなるべし ○門部金、録大和神別に門部連牟須比命兒安牟須比命之後也とあり天武紀十年に門部直大島賜姓曰連と見ゆ ○筏、抄舟車部に筏論語注云檣編竹木二大曰筏小曰筏(以賀多)とあり ○神嶋、集解に按地圖肥前國西南海中有神島蓋是とあれど地理に合はず蓋薩摩國薩島列島の内なる上飯島なるべし神をシトキと訓るは抄祭祀具に黍(之度岐)祭餅也とあるに據れるか ○奉皇祖母尊、釋紀に奉の下率の字あれど五年十月の條を參考するに無きを可とす ○皇弟、天武天皇なり ○飛鳥河邊行宮、大和志に在高市郡飛鳥村南傍有井名行幸井とあり ○山崎、山城國乙訓郡山

天皇聞旻法師命終、而遣使弔、并多送贈、皇祖母尊及皇太子等、皆遣使弔、旻法師喪、遂爲法師命畫工狗堅部子麻呂、鯉魚戸直等、多造佛菩薩像、安置於川原寺、或本云、在、秋七月、被遣大唐、使人高田、根麻呂等、於薩麻之曲、竹嶋之間、合、船沒死、唯有五人、繫智一板、流、遇竹嶋、不知所計、五人之中、門部金探竹爲筏、泊于神嶋、凡此五人經、六日六夜、而全不食飯、於是褒美金進位給祿、是歲、太子奏請曰、欲冀遷于倭京、天皇不許焉、皇太子乃奉皇祖母尊、間人皇后并奉皇弟等、往居于倭飛鳥河邊、行宮、于時公卿大夫百官人等皆隨而遷、由是天皇恨欲捨、於國位、令造宮、於山崎、乃送歌於間人、皇后曰、舸娜紀都該、阿我柯賦古麻、播比枳涅世儒、阿我柯賦古麻乎、比騰瀾都羅武箇、

崎郷(今の山崎)なるべし。○送歌、此大御歌は皇后の御心を疑ひ坐して詠みて贈らせ給ひしなり。荒木田久老云り。○新羅紀都該云々、カナキは鉗なり抄刑罰具に鉗(和名加奈岐)以鐵束頸也。○鐵束頸也。○皇后を馬に警へ馬に鉗をつけて絆す如く皇后を宮中より出し給はすして深く愛し給ひしを今天皇の大御許を去て一人倭に行啓し給ひしは或は他人が見て引出てしにはあらずや。疑はしく思はるるなり。

【白雉五年】鎌足、録左京神別に藤原朝臣の下に中臣連鎌子古記曰。鎌足はあり以前皆鎌子と書きしを此に至りて鎌足と改めしなるべし。○遣大唐押使、押使の押は總の意なり。○宮道、原本道を首に作る中本に據て改む宮道氏は舊事紀に稚武王宮道君祖とあり記には日本武尊の御子建貝兒王者宮首之祖とあれば宮首にてもミヤジと訓べきなり阿彌陀は名なり衣縫造孔子文忌釋迦の類あり。○崗君、録右京諸蕃に岡連曰岡王男安貴之後也。○置始連、録右京神別に大椋置始連、左京神別に長谷置始連見え出自各別なれば何れも定め難し。○中臣間人連、録左京神別に間人宿禰神魂命五世孫玉櫛比古命之後也。○別なるべし。○萊州、唐書地理志に河

五年春正月戊申朔夜鼠向倭都而遷壬子以紫冠授中臣鎌足連增封若干戸二月遣大唐押使大錦上高向史玄理、或本云夏五月遣大唐錦下河邊臣麻呂副使大山下藥師惠日判官大乙上書直麻呂宮道阿彌陀、或本云判官小彌陀山下書直麻呂小乙上崗君宜置始連大伯小乙下中臣間人連老此云於田邊史鳥等分乘二船留連數月取新羅道泊于萊州遂到于京奉觀天子於是東宮監門郭文學悉問日本國之地里及國初之神名皆隨問而答押使高向玄理卒於大唐。伊吉博得言學問僧惠妙於唐死知聰於海死智國於海死定惠以乙丑年付劉德高等船歸妙位法勝學生水連老夏四月吐火羅國男二人女二人舍衛女一人被風流來于日向秋七月甲戌朔丁酉西海使吉士長丹等共百濟新羅送使泊于筑紫是月褒美西海使等奉對唐國天子多得文書寶物授小山上大使吉士長丹以少花下賜封二百戸賜姓爲吳氏授小乙上副使吉士駒以小山上冬十月癸卯朔皇太子聞天

南道萊州とあり。○奉觀天子、唐高宗なり。唐書日本傳に永徽初年其王孝德即位改元曰白雉。○琥珀大如斗碼礪若五升器とあり。○東宮監門、唐書百官志に太子左右監門率府率各一人副率各二人掌諸門禁衛とあり。○郭文學、應本中本文を大に作り北本楓本文に作る。○地里、里は理と通ず。○(注)伊吉博得言、録左京諸蕃に伊吉連出、自長安人劉楊雍也とあり。續紀二には博得に作り律令撰定に預りて封戸功田を賜はりし人なり言は下文に據るに書の誤なるべし。

皇病疾乃奉皇祖母尊間人皇后并率皇弟公卿等赴難波宮壬子天皇崩于正寢仍起殯於南庭以小山上百舌鳥土師連土德主殯宮之事十二月壬寅朔己酉葬于大坂磯長陵是日皇太子奉皇祖母尊遷居倭河邊行宮老者語之曰鼠向倭都遷都之兆也是歲高麗百濟新羅並遣使奉帛

日本書紀卷第廿五

○惠妙、集解に按大化元年紀有惠妙云々以天武天皇五年卒然則與此別妙疑誤字蓋白雉四年所遣之僧とあり。○知聰、白雉四年に遣さる。○智國智宗、共に詳ならず。○庚寅年、持統天皇四年に當る。○乙丑年、天智天皇四年に當る。○劉德高、天智紀(二三三頁)に出づ。○妙位、中本位を信に作る。○水連老人、上に見ゆ。○高黃金、詳ならず。○別倭種、我邦人彼國の女を娶て生ぜたる子を云。○韓智興、齊明紀に見ゆ。○趙元寶、詳ならず(以上注)。○吐火羅國、齊明紀三年に親貨邏國とあり隋書西域傳に吐火羅國都葱嶺西五百里與挹怛雜居都城方二里勝兵者十萬人皆習戰其俗奉佛兄弟同一妻迭寢焉云々とあり。○舍衛、淵鑑類函邊塞部に扶南傳曰舍衛國隸屬天竺伽尸國一名波羅奈國亦名波羅奈國とあり。○西海使、即ち遣唐使。○新羅送使、原本送を遣に作る北本應本中本及紀略に據て改む。○小山上大使、四年の例によるに大使小山上とあるべし小乙上副使亦同じ。○吳氏、録右京未定雜姓に百濟人德率吳俊側之後者とあり。○小乙上、原本上を下に作る四年五月紀に據て改む。○赴難波宮、曩に天皇令造宮於山崎とあり。○未だ造り畢へさせ給はぬ中に御病に罹らせ給へるならむ。○天皇崩、大日本史に本書享年關神皇正統記如是院年代記並曰五十九他無所考とあり。○百舌鳥土師連、百舌鳥も土師も和泉國大鳥(今泉北)郡の郷名なり此地に住みしなるべし。○大坂磯長陵、原本磯を機に作る楓本中本及紀略に據て改む諸陵式に大坂磯長陵在河内國石川郡河内志在山村と見え陵墓要覽に南河内郡山田村大字山田とあり。○奉皇祖母尊、原本奉の上母の字あり北本中本に據て削る。○倭河邊行宮、飛鳥河邊行宮と云。○並遣使奉帛、並の字は中本に據て補ふ。

日本書紀卷第廿六

日本書紀卷第廿六

ヤマト フミノ マキノツイデハタチアマリムマキニアタルマキ

天豐財重日足姬天皇 齊明天皇

天豐財重日足姬天皇初適於橘豐日天皇之孫高向王而生漢皇子後適於息長足日廣額天皇而生二男一女二年立為皇后見息長足

日廣額天皇紀十三年冬十月息長足日廣額天皇崩明年正月皇后即天皇位改元四年六月讓位於天萬豐日天皇稱天豐財重日足姬天皇日皇祖母尊天萬豐日天皇後五年十月崩

元年春正月壬申朔甲戌皇祖母尊即天皇位於飛鳥板蓋宮夏五月庚午朔空中有乘龍者貌似唐人著青油笠而自葛城嶺馳隱膽駒山及至午時從於住吉松嶺之上西向馳去秋七月己巳朔己卯於難波朝饗北越蝦夷九十九人東奧蝦夷九十五人并設百濟調使一百

【即位前紀】齊明天皇、天皇の二字は中本に據て補ふ、皇極天皇の御重祚我朝重祚の始なり ○高向王、紹運録に用明天皇の皇子とす孰か正し ○漢皇子、詳ならず ○後五年云々、此文紛はし按に皇極天皇御讓位の後五年十月に孝德天皇崩御し給ひし由なるべし

【元年】飛鳥板蓋宮、大和國高市郡にあり大和志に在岡飛鳥二村間に見ゆ

○乘龍者、中本頭注に時人言豐浦大臣之靈也とあり

○青油笠、青き絹に油を塗りて作れる笠なり油を塗れる絹繩は延喜縫殿寮

式其他に見ゆ北本油の下に絹の字ありて消せり傍訓の本文なれるなるべし
○住吉松嶺、住吉は攝津國住吉なり嶺は嶺と云に同じ集解に此字を削り皇圓略記無蓋與葛城嶺之嶺相涉加耳と云
○西向、中本向西とあり
○設、アヘタマフと訓むべし饗應し給ふを云
○柵養、柵にて養はるゝ蝦夷を云
○津刈蝦夷、夷は原本嶽に作る北本嶽中本に據て改む今の陸奥國津輕の邊に住みし蝦夷なり
○古は皇宮と雖も茅葺にて板蓋は稀しかりし故に板蓋宮と宮號にも用ひられしが更に寺院の如く瓦葺にさせ給はむと給ひしなり
○飛鳥川原宮、孝德紀に見ゆ高市郡なり
○注、百濟大使云々、細注廿三字本文とすべきか西部東部は附録に見ゆ
○奉衆内屬、畿内に移住するを云
○及食、中本及を汲に作る新羅官等の名附録に見ゆ
○太歲、原本太を大に作る例に據て改む

【二年】(注)大使云々、此細注も本文とすべきなり
○磐嶽、五年紀に石布とあり
○犬上君、原本犬を大に作る應本中本に據て改む
○大藏衣縫造、姓氏録に見えざれど内藏氏と同族なること古語拾遺にて明かなり録右京諸蕃に内藏宿禰坂上大宿禰同祖都賀直四世孫東人直之後也と

五十人、仍授柵養蝦夷九人、津刈蝦夷六人、冠各二階、八月戊戌朔、河邊臣麻呂等自大唐還、冬十月丁酉朔己酉、於小墾田造起宮闕、擬將瓦覆、又於深山廣谷、擬造宮殿之材、朽爛者多、遂止弗作、是冬、災飛鳥板蓋宮、故遷居飛鳥川原宮、是歲、高麗百濟新羅並遣使進調、百濟大使西部達部恩率調信仁、蝦夷隼人率衆、內屬詣闕、朝獻、新羅別以及食彌武爲質、以十二人爲才伎者、彌武遇疾而死、是年也太歲乙卯、
二年秋八月癸巳朔庚子、高麗遣達沙等進調、大使達沙、副使伊麗、大使膳、臣葉積、副使坂合部、連磐嶽、大判官犬上君、白麻呂、中判官河內書首、名小判官大藏、衣縫、造麻呂、是歲、於飛鳥岡本更定宮地、時高麗百濟新羅並遣使進調、爲張紺、幕於此宮地、而饗焉、遂起宮室、天皇乃遷、號曰後飛鳥岡本宮、於田身嶺冠、以周垣、此云大務、復於嶺上兩

あり衣縫は集解に按應神天皇四十一年阿智使主奉詔往吳國、率工女吳衣縫數屋衣縫祖等、而來是所以大藏氏爲衣縫造也とあり
○飛鳥岡本、大和國高市郡高市村大字岡本なり
○紺、紺は深縹なり幕は抄調度部屏障具に幕和名萬玖帳和名阿計波利とあれど此には幕をアケハリと訓たりアケハリは揚張にて平張に對する名なり
○田身嶺、多武峯なり大和國十市(今磯城)郡にあり
○注、大務、考本太を大に作る
○石上山、是を山邊郡なる石上とすれば地理懸隔せり五郡神名帳略解石寸水分神社の下に大和國山川名所記を引きて石寸(イハレ)山亦曰石村(イハレ)山多武峯西並在香山南東、齊明紀所載天皇使水工穿渠自香山西至石上(訓)石上云云伊波加美(山)是也とあり信難事ある書なれど暫く之に據る
○功夫、原本功を切に作る北本嶽中本に據て改む
○山椒、スエは未なり山頂を云文選月賦に山頂曰椒とあり
○作吉野宮、吉野山には應神天皇雄略天皇の行幸ありしこと見ゆ大和志に行宮五所一池田莊麻志口村(雄略天皇行幸)一在大瀧村二在宮瀧村三在下市村又御吉野村とあり

【三年】親貨邏國、孝德紀白雉五年に見ゆる吐火羅國に同じ
○男二人、原本二を一に作る北本嶽本嶽本に據て改む
○海見嶋、天武紀に阿麻彌文武紀に菴美元明紀に南島菴美とあり南嶋志に大島在德島東北八里琉球北界也(續文獻通考

楓樹邊起觀、號爲兩楓宮、亦曰天宮、時好興事、迺使水工穿渠、自香山西至石上山、以舟二百隻載石上山、石順流控引於宮、東山累石爲垣、時人謗曰狂心渠、損費功夫三萬餘矣、費損造垣功夫七萬餘矣、宮材爛矣、山椒埋矣、又謗曰作石山丘、隨作自破、若據未成之時、作此謗乎、又作吉野宮、西海使佐伯連栲繩、階級小山、山下難波吉士國勝等、自百濟還獻鸚鵡一隻、岡本宮、
三年秋七月丁亥朔己丑、親貨邏國男二人、女四人、漂泊于筑紫、言臣等初漂泊于海見嶋、乃以驛召、辛丑、作須彌山像於飛鳥寺、西且設盂蘭盆會、暮饗親貨邏人、或本云、九月、有間皇子性黠、陽狂云々、往牟婁溫湯、僞療病、來讚國體勢、曰、纔觀彼地、病自蠲消云々、天皇聞悅、思欲往

謂之琉球北山一是也。國史所謂阿麻彌島或作菴美一或作菴美一並皆謂此阿麻彌者上世神人名也云々後稱爲大島其周廻五十九里十町さあり今大隅國大島郡首島たり。○孟蘭盆會、翻譯名義集四に孟蘭西域之語轉此翻倒懸盆是此方貯食之器三藏云盆羅百味式貫三尊仰大衆之恩光救到懸之窘急義當救到懸器さあり盆は盆と通ず。○觀貨選人、原本觀を都に作る中本に據て改む。○有間皇子、孝德天皇の皇子。○性黠陽狂云々、云々は事實を記さむとして除かれたるなるべしウホリクルヒはウハベクルヒにて表面狂はしき意なるべし。○牟婁温湯、紀伊國牟婁郡(今西牟婁郡)温湯山(湯山)にあり。○間人連、推古紀十八年人間人連鹽蓋と見ゆ。○依網連、推古紀十六年に見ゆ。○還歸、楓本歸を郷に作る。○津臣、津連津宿禰等と同じく王辰爾の子孫ならむか。○僞僕、通證に俱豆麻未詳今俗謂之背虫、新猿樂記訓久々世蓋曲背、セ也左傳一命而僞再命而僞六書故曲背也さあり曲津身(クツク)の義なるべし。○白狐、治部式に白狐を上瑞とす。

謂之琉球北山一是也。國史所謂阿麻彌島或作菴美一或作菴美一並皆謂此阿麻彌者上世神人名也云々後稱爲大島其周廻五十九里十町さあり今大隅國大島郡首島たり。○孟蘭盆會、翻譯名義集四に孟蘭西域之語轉此翻倒懸盆是此方貯食之器三藏云盆羅百味式貫三尊仰大衆之恩光救到懸之窘急義當救到懸器さあり盆は盆と通ず。○觀貨選人、原本觀を都に作る中本に據て改む。○有間皇子、孝德天皇の皇子。○性黠陽狂云々、云々は事實を記さむとして除かれたるなるべしウホリクルヒはウハベクルヒにて表面狂はしき意なるべし。○牟婁温湯、紀伊國牟婁郡(今西牟婁郡)温湯山(湯山)にあり。○間人連、推古紀十八年人間人連鹽蓋と見ゆ。○依網連、推古紀十六年に見ゆ。○還歸、楓本歸を郷に作る。○津臣、津連津宿禰等と同じく王辰爾の子孫ならむか。○僞僕、通證に俱豆麻未詳今俗謂之背虫、新猿樂記訓久々世蓋曲背、セ也左傳一命而僞再命而僞六書故曲背也さあり曲津身(クツク)の義なるべし。○白狐、治部式に白狐を上瑞とす。

四年春正月甲申朔丙申左大臣巨勢德太臣薨夏四月阿倍臣關率船師一百八十艘伐蝦夷。阿倍田淳代二郡蝦夷望怖乞降於是勒軍陳船於鰐田浦。鰐田蝦夷恩荷進而誓曰不爲官軍故持弓矢但奴等性食肉故持若爲官軍以儲弓矢。鰐田浦神知矣將清白心仕官朝矣仍授恩荷以小乙上定淳代津輕二郡々領遂於有間濱召聚渡嶋蝦夷等大饗而歸五月皇孫建王八歲薨。今城谷上起殯而收天皇本以皇

四年春正月甲申朔丙申左大臣巨勢德太臣薨夏四月阿倍臣關率船師一百八十艘伐蝦夷。阿倍田淳代二郡蝦夷望怖乞降於是勒軍陳船於鰐田浦。鰐田蝦夷恩荷進而誓曰不爲官軍故持弓矢但奴等性食肉故持若爲官軍以儲弓矢。鰐田浦神知矣將清白心仕官朝矣仍授恩荷以小乙上定淳代津輕二郡々領遂於有間濱召聚渡嶋蝦夷等大饗而歸五月皇孫建王八歲薨。今城谷上起殯而收天皇本以皇

四年春正月甲申朔丙申左大臣巨勢德太臣薨夏四月阿倍臣關率船師一百八十艘伐蝦夷。阿倍田淳代二郡蝦夷望怖乞降於是勒軍陳船於鰐田浦。鰐田蝦夷恩荷進而誓曰不爲官軍故持弓矢但奴等性食肉故持若爲官軍以儲弓矢。鰐田浦神知矣將清白心仕官朝矣仍授恩荷以小乙上定淳代津輕二郡々領遂於有間濱召聚渡嶋蝦夷等大饗而歸五月皇孫建王八歲薨。今城谷上起殯而收天皇本以皇

淳代云郡名は延喜式に見えず古くありて後に廢れしなるべし。○勒軍、原本勒を勤に作る北本中本に據て改む。○鰐田浦神、神祇志料に今秋田郡小繁村にあり七座神社云即此神なり云。○有間濱、陸奥國津輕郡西濱北濱の地。○渡嶋、今の北海道を云一説には饒澤港十三浦小泊等に擬すべし云持統紀に越渡嶋蝦夷さありも同じ。○建王、天智天皇の皇子。○今城谷上、大和志に建王殯家今日法具良家云々在木村さあり今吉野郡大淀町の大字に今木あり是なり。○輒、北本中本廼に作る。○伊磨紀那屢云々、乎武例は山名大和志に吉野郡今木村上方有乎武例山一説廼隸葛城郡さあり一説に樹群が上になりさも云旨屢俱之多々婆、原本屢を居に作る北本應本楓本に據て改む著しく立たばなり一首の意は御孫を葬りし山上にせめて雲なりさも著しく立たば形見さ

孫有順而器重之故不忍哀傷極甚詔群臣曰萬歲千秋之後要合葬於朕陵輒作歌曰伊磨紀那屢乎武例我禹杯爾俱謨娜尼母旨屢俱之多多婆那爾柯那皚柯武其伊喻之々乎都那遇何播杯能倭柯矩娑能倭柯俱阿利岐騰阿我謨婆俱爾其阿須箇我播瀾瀾蟻羅毗都都喻矩瀾都能阿比娜謨俱母於母保喻屢柯母其天皇時々唱而悲哭秋七月辛巳朔甲申蝦夷二百餘詣闕朝獻饗賜贍給有加於常仍授柵養蝦夷二人位一階淳代郡大領沙尼具那小乙下或本云授位二少領宇婆左建武勇健者二人位一階別賜沙尼具那等銷旗廿頭鼓二面弓矢二具鎧二領授津輕郡大領馬武大乙上少領青蒜小乙下勇健者二人位一階別賜馬武等銷旗廿頭鼓二面弓矢二具鎧二領授都岐沙羅柵造名位二階判官位一階授淳足柵造大伴君稻積小乙下又詔淳代郡大領沙奈具那檢覈蝦夷戶口與虜戶口是月沙門智通智達奉勅乘新羅船往大唐國受無性衆生義於玄奘法師所冬十月庚戌

見て慰むむさなり
 ○伊喻之々乎云々、伊喻之々は私記に言被射之鹿也、あり都那遇は繫なり繫は獵夫に射られし猪鹿の逃げ來りて河邊の若草を喰みそれに繫がる、を云又認の字を字鏡集字類抄等にツナグと注せる其意なりとも云初句より三句若草のまでは若く云む序に置きしなり倭柯俱阿利岐騰の騰は原本膳に作る北本楓本中本に據て改む一首の意は私記に我孫齒雖重稚有老成之意、故彌追感慕乎とあるが如し
 ○阿須箇我播云々、彌羅羅毗は漲るなりキラヒはキルの延びたるなり一首の意は飛鳥川の水烟を立て、勢よく流行く水の絶間なきが如く間斷なく御孫の上を思はせ給ふなり
 (七月)蝦夷、原本夷を蟻に作る諸本に據て改む
 ○贈給、原本贈給に作るを訂す
 ○(注)或本云、原本本在所に作る北本を閱するに所の字の轉訛せしなるべし故に釋紀一本及集解に

朔甲子、幸紀溫湯、天皇憶皇孫建王、愴爾悲泣、乃口號曰、耶麻古曳底、于瀨倭、拖留騰母、於母之樓、枳伊麻紀、能禹知播、倭須羅、庾麻旨、珥其瀨、度能于之哀、能矩娜利、于那俱、娜梨于之廬、母俱例尼、飢岐底、舸庾舸武、其于都俱之枳、阿餓、倭柯枳古弘、飢岐底、舸庾舸武、三詔、秦大藏、造萬里、曰、傳斯歌、勿令忘於世、十一月庚辰朔壬午、留守官蘇我赤兄臣、語有間皇子曰、天皇所治政事有三失矣、大起倉庫、積聚民財、一也、長穿渠水、損費公糧、二也、於舟載石、運積爲丘、三也、有間皇子乃知赤兄之善、已而欣然報答之曰、吾年始可用兵時矣、甲申、有間皇子向赤兄家、登樓而謀、夾膝自斷、於是知相之不祥、俱盟而止、皇子歸而宿之、是夜半赤兄遣物部朴井連、鮪率造宮丁圍、有間皇子於市經家、便遣驛使奏天皇所、戊子、捉有間皇子與守君大石、坂合部連、藥鹽屋連、鯛魚、送紀溫湯、舍人新田部連、米麻呂從焉、於是皇太子親問有間皇子曰、何故謀反、答曰、天與赤兄知、吾全不解、庚寅、遣丹比小澤連、國襲絞

據て改む
 ○建武、北本の武は字體辨じ難きも武に非ず、楓本は戊に作る
 ○銷旗、釋紀に私記云師說未詳、其軀師後說云今現在此旗之頭如銷故名とあり
 ○沙尼具那、北本那を娜に作る
 ○都岐沙羅羅、地理を按ずるに淳足磐船の柵より津輕に至る沿岸の地なること明なれど何所も定め難し、越後出羽の境なる念種關か云説ありよく考ふべし
 ○沙奈具那、上文に奈を尼に作る
 ○掄覈、原本覈を覆に作る中本に據て改む
 ○智通、元亨釋書に見ゆ
 ○智達、上に出づ
 ○無性衆生義、通證に元亨釋書作學唯識楞嚴經偈云諸幻成無性、六祖壇經曰無性亦無生とあり
 ○玄井、翻譯名義集一に河南洛陽人俗姓陳氏、潁川陳仲弓之後云々、既、房梵境、籌略無倦云々、畢究其妙、法師討論一十七周遊、覽百有餘國、貞觀十九年、廻觀上京、勅弘福寺、翻譯

有間皇子於藤白坂、是日、斬鹽屋、連鯛魚、舍人新田部連、米麻呂、於藤白坂、鹽屋、連鯛魚臨、誅言、願令右手作國寶器、流守君大石於上毛野國、坂合部、連藥於尾張國、
 或本云、有間皇子與蘇我臣赤兄、鹽屋連小戈、守君大石、坂合部連、藥、取短籍、卜謀反之事、或本云、有間皇子曰、先燔宮室、以五百人、一日兩夜、邀牟婁津、疾以船師斷淡路國、使如牢圍、其事易成、或人諫曰、不可也、所計既然而無德矣、方今皇子年始十九、未及成人、可至成人而待其德、他日有間皇子與一判事、謀反之時、皇子案机之脚、无故自斷、其謀不止、遂被誅戮也、
 是歲、越國守阿倍引田、臣比羅夫、討肅慎、獻生熊二、熊皮七十枚、沙門智踰造、指南車、出雲國言於北海濱、魚死而積、厚三尺許、其大如鮪、雀喙針、鱗々長數寸、俗曰、雀入於海、化而爲魚、名曰雀魚、或本云、至庚申年七月、百濟還言、百濟伐新羅、還時、馬自行道於寺、金堂晝夜勿息、唯食草、時止、或云、至庚申年爲敵所滅之應也、

字あるは行北本應本に據
 ○石布、續紀十九に坂合
 部宿禰石敷に作る
 ○大山下、原本山を仙に
 作る北本引一本及小寺本
 に據て改む
 ○道與、原本道の上に陸
 の字あり北本應本楓本に
 據て削る
 ○示唐天子、唐書日本傳
 に天智立明年使者與蝦
 夷人皆朝云々がある或
 は是と同じか
 (注)吳唐之路、通證に
 以三國鼎立之遺名併稱
 之也とあり敷田氏は吳
 は我に近き地なれば唐に
 加へて吳唐と書きしに
 やと云
 ○已未年、五年なり
 ○三津浦、仁賢紀六年に
 御津に作る
 ○大津之浦、筑前國博多
 津なり下文大津とある
 に同じ
 ○母分明、私記に母無也
 とあり分明ならざるを云
 ○爾加委、詳ならず
 ○漢長直、皇極紀三年(一
 六三頁)に見ゆ
 ○稻積、白雉四年に磐積
 とあり
 ○括州、唐書地理志に江

爾加委仍爲嶋人所滅便東漢長直阿利麻坂合部連稻積等五人盜乘嶋人
 之船逃到括州々縣官人送到洛陽之京十六日夜半之時吉祥連船行到越州
 會稽縣須岸山東北風風太急廿三日行到餘姚縣所乘大船及諸調度之物
 留着彼處閏十月一日行到越州之底十五日乘驛入京廿九日馳到東京天
 子在東京卅日天子相見問訊之日本國天皇平安以不使人謹答天地合德
 自得平安天子問曰執事卿等好在以不使人謹答天皇憐重亦得好在天
 子問曰國內平不使人謹答治稱天地萬民無事天子問曰此等蝦夷國有何
 方使人謹答國有東北天子問曰蝦夷幾種使人謹答類有三種遠者名都加留
 次者名龜蝦夷近者名熟蝦夷今此熟蝦夷每歲入貢本國之朝天子問曰其國
 有五穀使人謹答無之食肉存活天子問曰國有屋舍使人謹答無之深山之
 中止住樹本天子重曰朕見蝦夷身面之異極理喜惟使人遠來辛苦退在
 館裏後更相見十一月一日朝有冬至之會々日亦觀所朝諸蕃之中倭客最勝
 後由出火之亂棄而不復檢十二月三日韓智興倭人西漢大麻呂枉讓我客々
 等獲罪唐朝已決流罪前流智興於三千里之外客中有伊吉連博德奏因即
 免罪事了後勅旨國家來年必有海東之政汝等倭客不得東歸遂返西京幽

南道處州稽雲郡本括州永
 嘉郡云々大曆十四年更
 州名とあり
 ○洛陽之京、同志に河南
 道東都隋置武德四年廢貞
 觀六年號洛陽宮顯慶二
 年曰東都光宅元年曰神
 都神龍元年復曰東都天
 寶元年曰東京云々とあり
 ○須岸山、集解に江南道
 越州會稽郡有南嶺會稽
 山有祠とあり
 ○廿三日、北本應本楓本
 中本三を二に作る
 ○餘姚縣、唐書地理志に
 江南道越州餘姚縣あり
 ○越州之底、集解に底疑
 府誤とあり ○十五日、
 原本十五日の上に十月の二字あり釋紀に據て削る ○治
 稱、原本稱を講に作る中本及釋紀に據て改む ○龜蝦夷、未だ内地の風に慣れず皇化に順はぬものを云 ○熟蝦夷、皇化に順ひ内地の風に慣れたる
 者を云 ○國有屋舍、北本國の上其の字あり ○止住樹下、原本下を本に作る北本に據て改む ○喜惟、集解喜を奇に改作る ○冬至之會、朔旦冬至
 を賀する會なり ○失火、ミヅナガレと訓るは水流にて火災を忌みたる反語なり ○韓智興、孝德紀白雉五年に見ゆ ○倭人、原本倭人に作る中本に
 據て改む ○大麻呂、北本大を火に作る ○海東之政、百濟を伐たむと云るを云るなり ○返西京、原本中本返を匿に作る西京は唐書地理志に
 關内道上都初曰京城二天寶元年曰西京とあり ○不許東西、私記に東西をカニカクと訓り ○經年、北本逕年に作る ○難波吉士、原本士を出に
 作る北本に據て改む ○觸嶋而覆、而の字は北本に據て補ふ(私注) ○孟蘭盆經、晉竺法護譯 ○七世父母、孟蘭盆經に見ゆ漢土七世廟の説を取
 りて造れる佛説かと伴信友氏云り ○修嚴神之宮、舊讀誤れり神之宮を莊嚴にすべしとの意神之宮は出雲大社なり ○於友郡、出雲國意宇郡なり友
 は子の誤なるべしと敷田氏云り ○言屋社、式に意宇郡揖夜神社あり是なり ○(注)天子崩兆、集解に擡入として削る ○市司、職員令に市司正一
 人掌財貨交易器物真偽度量輕重賣買估價禁察非違事とあり ○高麗畫師子麻呂、姓氏錄に見えず子の字は北本中本に據て補ふ ○借、原本借に
 作る北本應本中本に據
 て改む下同じ

置別處閉戶防禁不許東西困苦經年難波吉士男人書曰向大唐大使觸嶋
 而覆副使親觀天子奉示蝦夷於是蝦夷以白鹿皮一弓三箭八十獻于天子
 庚寅詔群臣於京內諸寺勸講孟蘭盆經使報七世父母是歲命出雲國
 造名修嚴神之宮狐獠斷於友郡役丁所執葛末而去又狗獠置死人
 手臂於言屋社言屋此云伊浮
 又高麗使人持熊皮一枚稱其價曰綿六十
 斤市司咲而避去高麗畫師子麻呂設同姓賓於私家日借官熊皮七十
 枚而爲賓席客等羞恠而退

六年春正月壬寅朔高麗使人乙相賀取文等一百餘泊于筑紫三月遣

○大河側、通證に寺島氏曰蝦夷有「大河」名石刈河、急流、石不可涉、あれど詳ならず
 ○仕宦矣、原本官に作るを北本に據て訂す、宜は字書に仕也とあり
 ○令食嗜、ホシメ欲しめなり、ツノマシを原本にツラマシと訓るは、ノの古體なるを寫誤れるにて津飲まじなるべし、通證には蓋津嘗也、猶言口流涎也と云り
 ○衫、抄裝束部に單衣釋名云、無裏曰單、(比止閉岐沼)と見え、字書に衫は衣也、また小襦也、無袖端也とあり
 ○幣路辨嶋、注に度嶋之別也とあり、別なりとは別嶋の意なるべし
 ○能登臣、記に崇神天皇々々大入杵命能登臣之祖也とあり
 ○賊破、原本破を被に作る北本應本中本に據て改む、通釋信友校本に據て賊の上、爲の字を補るは非なり
 ○高座、抄調度部伽藍具に高座仁王經云、建二百高座、見え、圖書寮式に高座の用具を詳に擧ぐ

阿倍臣、名率船師二百艘、伐肅慎國、阿倍臣以陸奧、蝦夷、令乘己船、到大河側、於是渡嶋、蝦夷一千餘屯聚海畔、向河而營、々中二人進而急叫曰、肅慎船師多來將殺我等之故、願欲濟河而仕宦矣、阿倍臣遣船喚至兩箇、蝦夷聞賊隱、所與其船數、兩箇蝦夷便指隱所曰、船廿餘艘、即遣使喚而不肯來、阿倍臣乃積綵帛、兵鐵等於海畔、而令貪嗜、肅慎乃陳船師、繫羽於木、舉而爲旗、齊棹近來、停於淺處、從一船裏出一老翁、迴行、熟視所積綵帛等物、便換著單衫、各提布一端、乘船還去、俄而老翁更來、脫置換衫、并置提布、乘船而退、阿倍臣遣數船使喚、不肯來、復於幣路弁嶋、食頃、乞和、遂不肯聽、幣路之別也、據己柵戰、于時能登臣馬身龍爲敵、被殺、猶戰未倦之間、賊破殺己妻子、夏五月辛丑朔、戊申、高麗使人乙相賀取文等到、難波館、是月有司奉勅造一百高座、一百納袈裟、設仁王般若之會、又皇太子初造漏剋、使民知時、又阿倍引田臣、名獻夷五十餘、又於石上池邊作須彌山、高如廟塔、以饗肅慎四十七人、又舉國百姓、無故持兵往還於道、失所之相乎、秋七月庚子朔乙卯、高麗使人乙相

○納袈裟、抄調度部に納支并三藏表云、納袈裟一領、納音奴答反字亦作納、(俗云能不一云太比)また袈裟(俗云介佐)天竺語也、此云無垢衣とあり、納は納と通用す
 ○仁王般若之會、仁王護國般若經を講説する會なり
 ○漏剋、時計なり、之を漏刻と稱するは、晝夜十二時を四十八剋に分ち、一時を四剋と定め、銅壺に水を湛へ、銅箭を四十八に刻みて、壺中に之を立て、管より水を漏し、箭の顯れ出るを以て時剋を計るに因れり
 ○阿倍引田臣、比羅夫なり
 ○石上池、大和志に、在山邊郡磯上村、今呼大將軍池とあり
 ○(七月)乙卯、原本己卯に作る、庚子朔に己卯なし、中本引一本に據て改む
 ○都耽羅人、原本耽を耽に作る、楓本中本に據て訂す、上に見ゆ
 ○(注)道顯、天智紀に見ゆ、當時の學僧なり
 ○春秋智、孝德紀大化三年に、金春秋と見え、太宗武烈王と稱す

賀取文等罷歸、又都耽羅人乾豆波斯達阿欲歸本土、求請送使曰、願後朝於大國、所以留妻爲表、乃與數十人入于西海之路、
 高麗沙門道顯日本世記曰、七月云々、春秋智借大將軍蘇定方之手、使擊百濟亡之、或曰、百濟自亡、由君大夫人妖女之無道、擅奪國柄、誅殺賢良、故召斯禍矣、可不慎歟、可不慎歟、其注云、新羅春秋智不得願於內臣蓋金、故亦使於唐、捨俗衣冠、請媚於天子、投禍於隣國、而構斯意行者也、伊吉連博德書云、庚申年八月、百濟已平之後、九月十二日、放客本國十九日、發自西京、十月十六日、還到東京、始得相見、阿利麻等五人、十一月一日、爲將軍蘇定方等所、捉百濟王以下、太子隆等諸王子十三人、大佐平沙宅、千福國、辨成以下卅七人、并五十許人、奉進朝堂、急引趨向天子、天子恩勅、見前、放著十九日、賜勞廿四日、發自東京、
 九月己亥朔癸卯、百濟遣達率、名沙彌、覺從等來、奏曰、或本云、逃今年七月、新羅恃力作勢、不親於隣、引搆唐人、傾覆百濟、君臣摠俘、略無噍類、或本年七月十日、大唐蘇定方率船師軍于尾資之津、新羅王春秋智率兵馬軍于忍受利之山、夾擊百濟、相戰三日、陷我王城、同月十三日、始破王城、怒受利山、百濟之東堺也、於是西部

○借大將軍蘇定方、原本借在借に作る北本應本中本に據て改む唐書列傳に蘇烈字定方以字行冀州武邑人云々率師討百濟あり

○使擊百濟云々、中本使を挾に作る三國史記高麗太宗王七年百濟義慈王二十年の條に此事詳なり

○誅殺賢良、三國史記百濟義慈王十六年の條に王與宮人淫荒耽樂飲酒不止佐平成忠極諫王怒囚之獄中一由是無敢言者あり

○蓋金、天武紀三年に高麗大臣蓋金終於其國あり是なり

○庚申年、今年なり

○百濟已平、百濟義慈王の唐に降りしは七月十八日に新羅大に置酒將士を勞せしは八月二日なり故に八月已平云

○阿利麻等五人、五年七月の注に東漢長直阿利麻坂合部連稱積等五人あり

○太子隆、百濟本紀には太子孝と見え隆は王子隆とあり太子は釋紀に私記曰古爾於留古爾世之並百濟之語とあり釋紀傍

恩率鬼室福信赫然發憤據任射岐山或本云北任叙利山、達率餘自進據中部久麻怒利城或本云都岐留山、各營一所誘聚散卒、兵盡前役、故以倍戰、新羅軍破百濟奪其兵、既而百濟兵翻銳、唐不敢入、福信等遂鳩集同國、共保王城、國人尊曰佐平福信、佐平自進、唯福信起神武之權、興既亡之國、冬十月、百濟佐平鬼室福信遣佐平貴智等來獻唐俘一百餘人、今美濃國不破片縣二郡、唐人等也、又乞師請救、并乞王子余豐璋曰、智達率正珍也、唐人率我蝥賊、來蕩搖我疆場、覆我社稷、俘我君臣、百濟王義慈其妻恩古、其子隆等凡五十餘、於七月十三日、爲蘇將軍所捉而送、去於唐國、蓋是無故持兵之徵乎、而百濟國遙賴、天皇護念、更鳩集以成邦、方今謹願、迎百濟國遣侍、天朝王子豐璋、將爲國主、云云、詔曰、乞師請救、聞之古昔、扶危繼絕、自著恒典、百濟國窮來、歸我以本邦、喪亂靡依、靡告枕戈、營膽必存、燧救遠來、表啓志有難奪、可分命將軍百道俱前、雲會雷動、俱集沙喙、翦其鯨鯢、紓彼倒懸、宜有司具爲與之、以禮發遣云云、送王子豐璋及妻子與其叔父忠勝等、其正發遣之時、見于七年、或本云、天皇立豐璋爲王、立塞上爲輔、而以禮發遣焉、十二月丁卯

訓はコニセシムと訓りに據て補ふ

○沙宅、姓なるべし

○千福國辨成、舊點に千福國辨成とあれど唐書三國史記等に千福と見えて國の字なしとされば千福國辨成と句讀すべきかされど國辨成もいかなり國は誤字か或は國の上下に脱字にてもあらむか

○奉進朝堂、唐書高宗紀に顯慶五年十一月戊戌蘇定方俘百濟王と以獻とあり

○恩勅、原本恩を息に作る北本應本中本に據て改む

○見前放著、東國通鑑に顯慶五年十一月蘇定方以義慈等一見帝貴而看之とあるを云（九月）沙彌、名義集一に南山沙彌別行篇云此翻息慈謂息世梁之情以慈濟群生也音義云沙彌二字古訛略也唐三藏云室利摩拏路迦此翻勸策男寄歸傳云授十戒己名室羅末尼譯爲求寂三元亨釋書に國俗不

○全梵儀、有妻子者在、家稱沙彌云々あり

○引據、キイアハセテは率あ合せての意イは添へていふ辭（注）大唐蘇定方、中本蘇の上に大將軍

○軍于尾資之津、百濟の屎山郡馬西良縣今の全羅北道沃溝郡舊邑面沃溝に近き海岸なるべし于の字は北本應本中本に據て補ふ

○怒受利山、下文に百濟の東界とあり三國史記に唐羅羅兵已過白江炭峴、將軍塔伯帥死士五千出黃山與羅羅兵戰四合皆勝之兵寡力屈竟敗塔伯死之とある炭峴是にて慶尙忠清兩道の境なる秋風嶺なるべし

○東界、原本界を境に作る北本應本中本に據て改む（以上注）

○西部、部曲の名

○恩率、官號なり

○鬼室福信、鬼室は氏の名なり錄右京諸蕃に百濟公因鬼神感和之義命氏謂鬼室廢帝天平寶字五年改賜百濟公姓とあり福信は史記に武王從子福信と見ゆ

○任射岐山、通證に東國通鑑所謂任存城山と云り忠清道に在り（注）北任叙利山、原本叙を劍に作る北本中本に據て改む

○久麻怒利、通證に東國通鑑作熊津城とあり

○兵盡前役、兵器は前の役に盡きはてたりとあり

○倍、握之木の意手に握るばかりの木を云字書に倍は棒本字謂木杖也杖也打也とあり

○百濟兵、原本百の字なし中本に據て補ふ

○尊曰、原本曰を月に作る應本中本に據て改む

○十月、片縣、抄國郡部に方縣に作る

○余豐璋、原本璋を障に作る中本及下文に據て改む（注）正珍、原本珍を改に作る北本應本中本に據て改む

○千福、原本及應本千を子に誤る北本中本に據て改む

○於七月、原本於の上（注）其臣佐平、原本臣を巨に作り其下に王の字あり中本に據て訂す

○千福、原本及應本千を子に誤る北本中本に據て改む

○於七月、原本於の上

○秋の字あり北本應本に據て削る（以上注）

○自著恒典、原本自著を倒置す小寺本に據て改む

○燧、通證に燧當作燧といひ集解には拯に改めたれど名義抄に標俗燧スクフ、タスクとあり字類抄にも此字を擧げたれば舊に從て改めず

○沙喙、東國通鑑白沙に作れり

○翦其鯨鯢、原本鯨を鯨に作る北本應本中本に據て改む鯨鯢は左傳の注に大魚之名以喻不義之人吞食小國とあり百濟を亡したる新羅を討伐するを云

○紓彼倒懸、孟子的注に倒懸猶困苦とありて百濟の困苦を緩め紓むとあり紓は原本に縛とあれど縛は厚繒也と云へば改む紓は說文に緩也とあり

○具爲與之、

朔庚寅、天皇幸于難波宮、天皇方隨福信所乞之意、思幸筑紫將遣救軍、而初幸斯備諸軍器、是歲欲爲百濟將伐新羅、乃勅駿河國造船、已訖挽至續麻郊之時、其船夜中無故艫舳相反、衆知終敗、科野國言、蠅群向西飛、踰巨坂、大十圍許、高至蒼天、或知救軍敗績之恠、有童謠曰、摩比邏矩都能、俱例豆例、於能幣陀乎、邏賦俱能、歌理鵝、美和陀騰能、理歌、美烏能、陞陀烏、邏賦俱能、歌理鵝、甲子騰和、與騰美、烏能陞陀烏、邏賦俱能、歌理鵝

中本爲を備に作る ○(注)忠勝、孝德紀白雉元年に百濟君豐璋其弟寒城忠勝と有 ○塞上、皇極紀元年に塞上恒作惡さあり寒城忠勝と同人ならむ
(十二月)續麻郊、詳ならず續を北本應本楓本續に作る續通用す ○科野國、信濃國なり ○巨坂、信濃國より美濃國惠奈郡に越る坂なり ○有童
謠、此童謠はいさ解き難し釋紀には初句より一字毎に一二三の符號を附け其符號によりて語を整へて之を解説せり然るに契沖以後之を非なりとて
文字を轉到せず其儘にて解釋を試みたる人少からず契沖を始め荷田東滿伴信友橘守部等の諸氏は何れも文字のまゝに解釋せらる契沖の説は通證に、
羽倉翁の説は集解に、伴氏の説は比古婆衣に、守部氏の説は後威言別難語考に見えたり然るに本居宣長翁は釋紀の轉到して讀るも由ありとて大體は
之に據り甲子とあるが童謠の讀み初めなりとて解釋を試みられ其説は玉勝周三に見えたりされど之も穩當なられば伴信友氏も之を信ぜずして別
比古婆衣に説を擧げ數田氏の標注も同じく倒讀を排して文字のまゝに説き試み通釋には守部の説優れたりとて之に據りて解釋したれど解き得たり
とも思はれず一々之を擧るは煩に堪へざれば主として釋紀の説を掲ぐ ○麻比遲矩能、私記にツマヒラクノと讀み妻開也と云 ○俱例豆例、ツク
レレと讀み作也言「女之田作」也と云 ○於能幣陀乎、原本能を社に作る北本中本に據りて改むヲノタヘテと讀み謂「小野田」也云守部は於弘の誤にて
尾上田なりと云 ○暹賦俱能理歌、カリカリノクヲフと讀み雁々之食也と云守部も亦同じ ○美和陀騰能理歌、ミトワタノカリと讀み所名也雁
也と云 ○美鳥能陸陀鳥、チミノタヘテと讀み謂「女田」也と云此句は契沖の説に美の上の句につけ尾上田と解けり ○暹賦俱能理歌、カリカリ
ノクヲフと讀み雁々之食也と云 ○甲子、私記曰義不「逆語」甲子謂「太子」也太子者諸子之長也故云「甲之子」也和與者吾也云「玉勝間」此二字は次句
より讀始むべき事を知らせたる標なりと云 ○美鳥能陸陀鳥、チミノタヘテと讀み謂「女田」也と云是も美は上の句に附け尾上田をさ解くを可
とす原本陸階に作る北本應本中本に據りて改む ○暹賦俱能理歌、前と同じくカリカリノクヲフと讀み雁々之食也と云かくて一首の大意を述て
齊明女帝也仍以「天下」之「女」之作田「如」鷹之「食」稻實了「不」祥遺「百濟」救軍之事可「敗」績之童謠也と云

〔七年〕大北海、抄國郡部に備前國邑久郡於保久
と見え國造本紀に大北海
造あり大北海は之に同じ
○大田姫皇女、天智天皇
の皇女にて天武天皇の妃
○大田皇女、天武天皇の
皇女なり本紀に大來に作
る
○石湯行宮、伊豫國溫泉
郡にあり石湯は今の道後
溫泉是なり
〔三月〕大津、原本大
津に作る中本に據りて改
む筑前國那珂郡にあり今
の博多津なり
○磐瀨行宮、左馬寮式に
筑前國馬石瀨五疋とあ

七年春正月丁酉朔壬寅御船西征始就于海路甲辰御船到于大北海
時大田姫皇女產女焉仍名是女曰大田皇女庚戌御船泊于伊豫熟
田津石湯行宮備前國此云三月丙申朔庚申御船還至于大津居于磐
瀨行宮天皇改此名曰長津夏四月百濟福信遣使上表乞迎其王子
糺解釋道顯日本世記曰百濟福信獻書祈其君糺五月乙未朔癸卯天皇遷居于朝
倉橋廣庭宮是時斷除朝倉社木而作此宮之故神忿壞殿亦見宮中
鬼火由是大舍人及諸近侍病死者衆丁巳耽羅始遣王子阿波伎等

り遠賀郡にあり
○(注)日本世記、原本記
を紀に作る北本應本中本
に據りて改む
○東朝、我皇國を指す
〔五月〕朝倉橋廣庭宮、
抄國郡部に筑前國下座郡
下都安佐久良上座准上
とあり始朝倉と云しな
後に上下に分けて座の一
字に古名を負せたり橋も
地名なるべし
○朝倉社、神名式上座郡
麻氏良布神社なるべし
○亦見宮中鬼火、原本宮
及鬼火の二字なし中本及
紀略に據りて補ふ北本傍書
火を女に作る
○大舍人、原本舍を倉に
作る北本應本中本に據り
て改む
○耽羅、繼體紀二年に見

○(注)辛酉年、今年なり
○越州、前に餘姚縣とあり
る邊にて今の紹興府なり
○檀岸山明、檀岸山は詳
ならず明は釋紀に明讀南
也とあり
○八夜、原本八を八に入に作
る北本楓本中本に據りて改
む九日と八夜の意
○東漢草直、釋紀に私記
曰草讀加也人姓也とあれ

貢獻

伊吉連博得書云辛酉年正月廿五日還到越州四月一日從越州上路東歸七
日行到檀岸山明以八日鷄鳴之時順西南風放船大海々中迷途漂蕩辛苦
九日八夜僅到耽羅之嶋便即招慰嶋人王子阿波岐等九人同載客船擬獻
帝朝五月廿三日奉進朝倉之朝耽羅入朝始於此時又爲智興僱人東漢草
直足嶋所讓使人等不蒙寵命使人等怨徹于上天之神震死足嶋時人稱
曰大倭天報之近

六月伊勢王薨秋七月甲午朔丁巳天皇崩于朝倉宮八月甲子朔皇太
子奉從天皇喪還至磐瀨宮是夕於朝倉山上有鬼著大笠臨視喪儀
衆皆嗟恠冬十月癸亥朔己巳天皇之喪歸就于海於是皇太子泊於一
所哀慕天皇乃口號曰枳瀨我梅能姑哀之枳羅爾婆底底威底威
矩野姑悲武謀枳瀨我梅弘報梨乙酉天皇之喪還泊于難波十一月壬
辰朔戊戌以天皇喪殯于飛鳥川原自此發哀至于九月日本世記云十一
月福信所獲唐人
續守言等至于筑紫或本云辛酉年百濟佐平福信所獻唐俘一百
六口居于近江國壘田庚申年既云福信獻唐俘故今存注其決焉

○通證に草直疑當作東直(即擲直云) ○徹、原本撤に作る北本中本に據て改む(以上注) (七月)崩于朝倉宮、大日本史に本書享年闕水鏡神皇正統記一代要記皇胤紹運錄皇年代略記並日六十八あり (八月)奉從、原本從を徒に作る中本に據て改む ○有鬼云々、標注に是も朝倉の神の御所爲にて先に社木を伐りし時の神怒の解け給はぬなるべし云 (十月)口號、クチツウタは口つ歌なり繼體紀七年には口唱あり ○根瀾我梅能云々、根瀾我梅能は君が目のなり目さは面を云姑衰之根軻羅爾は戀しき故になり婆底々威底は泊て、居てにて一所に泊り給ふを云婆の字は原本姿に作る中本及釋紀に據て改む根瀾我梅弘報梨は君が目を欲りなり君さは天皇を申奉れり此御歌は天皇の崩御を甚しく悲しみ慕ひ奉りて詠ませ給へるなり ○還泊于難波、北本應本還の字なし(十一月)飛鳥川原、大和高市郡にあり ○(注)續守言、原本續を續に作る北本應本に據て改む天智紀二年にも唐倭續守言あり ○聖田、抄國郡部に近江國栗本郡治田を發多と注す此地なり

日本書紀卷第廿六

日本書紀卷第廿七

天命開別天皇 天智天皇

天命開別天皇、息長足日廣額天皇太子也、母日天豐財重日足姬天皇、天豐財重日足姬天皇、四年、讓位於天萬豐日天皇、立天皇爲皇太子、天萬豐日天皇、後、五年、十月崩、明年、皇祖母尊即天皇位、七年七月、丁巳崩、皇太子素服稱制、是月、蘇將軍與突厥王子契苾加力等、水陸二路、至于高麗城下、皇太子遷居于長津宮、稱聽水表之軍政、八月、遣前將軍大花下阿曇比羅夫、連小花下河邊百枝、臣等、後將軍大花下阿倍引田比羅夫、臣、大山上物部連熊、大山上守君大石等、救於百濟、仍送兵仗五穀、或本續此末云、別使大山下狹井連檳榔小山下秦造田來津、守中護百濟九月、皇太子御長津宮、以織冠授於百濟王子豐璋、復以多臣蔣敷之妹妻之焉、乃遣大

【即位前紀】天命開別天皇、通證に蓋誅入鹿定日位之美稱云云、ひ集解に按天皇恭遜待時而登天位、如有命所開故以爲諡也云、開は排開廣庭天皇の間に同じく天命を押し開かせ給ふ意なるべし ○後五年、齊明紀即位前紀に云 ○素服、仁德紀即位前紀に見ゆ喪葬令に凡天皇爲本服二等以上親喪賜錫紵義解に錫紵者細布即用淺黒染也とあり ○蘇將軍、齊明紀に見えし蘇定方なり ○突厥、通證に韻會突厥世居金山、工於鐵作金山狀如兜蓋俗呼兜蓋爲突厥、因爲國號、通鑑注曰秦漢曰匈奴、唐曰突厥、即今韃靼とあり ○契苾加力、唐書契苾何力傳に鐵勒可汗之孫顯慶

中爲沮江軍行軍大總督
與蘇定方及劉伯英、伐高麗、不克龍朔初復拜遼東道行軍大總督、率諸蕃三十五軍進討次鴨綠水、
○節略とあり
○遷居于長津宮、原本于子に作る中本及紀略に據て改む此宮のこ齋明紀七年に出づ
○稱聽水表之軍政、水表は海外を云原本稱を稍に作る中本に據て改む
○前將軍、後將軍に對し前隊の將軍を云
○大花下、原本花を華に作る今諸本に據る下同じ
○河邊百枝、天武紀六年民部卿なる
○後將軍、後の部隊の將軍

山下狹井、連檳榔、小山下秦、造田來津、率軍五千餘、衛送於本鄉、於是豐璋入國之時、福信迎來、稽首奉國朝政、皆悉委焉、十二月、高麗言、惟十二月、於高麗國寒極、浪凍、故唐軍雲車衝棚、鼓鉦吼然、高麗士卒膽勇雄壯、故更取唐二壘、唯有二塞、亦備夜取之計、唐兵抱膝而哭、銳鈍力竭而不能拔、噬臍之耻、非此而何、先擊百濟、言春秋之志、正起于高麗、而國司岸田臣麻呂等獻寶劍、言於狹夜郡人禾田穴內獲焉、又日本救高麗軍將等、泊于百濟、加巴利濱而燃火焉、灰變爲孔、有細響如鳴鏑、或曰、高麗百濟終亡之徵乎、

○引田比羅夫臣、原本田を由に作る應本中本に據て改む
○(注)狹井連、天武紀十三年宿禰を賜ふ録左京神別に佐爲連鏡速日命六世孫伊香我色乎命之後也、見ゆ佐爲は狹井に同じ大和國城上郡の地名
○高麗言、原本麗の字なし北本應本中本に據て補ふ
○浪凍、浪は説文に浪水出樂浪、見ゆ、樂浪郡は今の京畿平安兩道の地なれば大同江なり、鴨綠江なりとも云へ、輿地勝覽に本國自有三浪水、而今衆所、知者則獨大同江、此は大同江ならむ
○雲車、後漢書光武紀に雲車十餘丈注に雲車即樓車稱雲言其高也とあり
○衝棚、楓本中本棚を棚に作る同じく光武紀に爲地道衝棚、注に衝棚車也とあり通證に私記にコシキヲツクルと訓るを非としツキクルマと訓べしと云
○吼然、吼は字書に牛鳴也とも、城聲とも注す雲車衝棚鉦鉦なご寒風の爲に自然に音を發するを云
○士卒、原本卒を率に作る中本に據て改む
○抱膝而哭、膝を抱きて獨自ら哭するを云
○噬臍之耻、唐兵の遠征を悔ゆるを云
○(注)釋道顯云、日本世記の文なり
○春秋、新羅王金春秋なり
○先擊百濟、原本擊を擊に作る中本引イ本に據て改む(以上注)
○岸田臣麻呂、大化二年紀に涯田臣に作る此氏の事、見ゆ是なり
○禾田、粟生なり粟を作れる畠を云風土記に圃彼地之墟とあるにて知るべし
○加巴利濱、詳ならず百濟の北なるべきか
○燃、原本然に作る北本應本中本に據て改む
○爲孔、積みたる灰に自ら孔を生じたるなるべし
○鳴鏑、字鏡に鏑奈利加夫良と注せり鏑の形無に似たるに穴を穿ち射る時空氣其穴に觸れて鳴るやうに作れるを云

【元年】十萬隻、原本隻を侯に作る中本及釋紀に據て改む
○章、抄調度部に唐韻云章(乎之賀波)柔皮也とあり今云なめし皮なり
○疏留城、集解に齊明天皇六年紀所謂怒受利山即周留城也とあり齊明紀に怒受利山百濟之東境也とあり然るに周留城は百濟と唐との交戦の條に見えて其西境なれば此説非なり按るに三國史記に支羅城或云周留城とある即ち疏留にて今の忠清南道扶餘なるべし
○輸、釋紀に私記曰輸可讀於止須穀梁傳輸者墜也とあり
○北國之人云々、鼠は子にして北方なり馬は午にして南方なり故にかく占ひしなるべし源平盛衰記に平清盛の廐の馬尾に鼠の巢を作りしを安倍泰親の占ひしは之と能く似たり
○五月、原本五月の上に夏の字あり中本に據て削る
○大錦中、按に大錦は上下にて申なければ、はは大錦下とあるべきなり

元年春正月辛卯朔丁巳、賜百濟、佐平鬼室福信矢十萬隻、絲五百斤、綿一千斤、布一千端、韋一千張、稻種三千斛、三月庚寅朔癸巳、賜百濟王布三百端、是月、唐人新羅人伐高麗、々々乞救國家、仍遣軍將據疏留城、由是唐人不得略、其南堺、新羅不獲輸、其西壘、夏四月、鼠產於馬尾、釋道顯占曰、北國之人將附南國、蓋高麗破而屬日本乎、五月、大將軍大錦中阿曇比羅夫、連等、率船師一百七十艘、送豐璋等於百濟國、宣勅以豐璋使繼其位、又予金策於福信、而撫其背、褒賜爵祿、于時豐璋等與福信稽首受勅、衆爲流涕、六月己未朔丙戌、百濟遣達率萬智等進調獻物、冬十二月丙戌朔、百濟王豐璋、其臣佐平福信等、與狹井連、名朴市田來津、議曰、此州柔者、遠隔田畝、土地磽确、非農桑之地、是拒戰之場、此焉久處、民可飢饉、今可遷於避城、々々者、西北帶以古連、且涇之水、東南據深渥、巨堰之防、繚以周田、決渠降雨、華實之毛、則三韓之上、腴焉、衣食之源、則二儀之隩、區矣、雖曰地卑、豈不遷歟、於是朴

○於百濟國、於の字は北
本應本中本に據て補ふ
○以豐璋、原本璋の下の
の字あり行なり考本に據
て削る
○金策、孝德紀即位前紀
（一七〇頁）に見ゆ
○爵祿、字書を爵は封也
とあり封祿を賜ふを云カ
ツケモノは被物纏頭をカ
ツケモノと云意は同じ
○百濟王豐璋、原本王の
字なし北本應本中本に據
て補ふ
○（注）關名、前文に檳榔とあり
之別なり州柔は北史百濟傳の百濟五方城の中西方刀先城とあるもの即ち三國史記の豆車城、百濟の所夫里郡悅已縣にて今の忠清南道青陽郡定山面
なり
○磯碓、字書を磯碓石地與境同とあり脊薄の地なり
○避城、中本に據る通釋に文獻備考を引て全羅道碧骨郡辟城縣今の金堤郡とあれ
三國史記地理百濟部に西原一云辟城とあり西原は今の忠清南道清州なり從て古連且涇水は清州錦江支流無心川なるべし
○周
田、マトキは韓語なり
○上腴、原本腴を腹に作る北本應本に據て改む
○二儀、天地なり
○陝區、神武紀己未年に陝區をモナカと訓り陝は奥に
通す説文に陝四方之士可定居者也とあり、クムシラは字鏡に陝藏也久牟志良（名義抄には陝カクル）とあれば此の訓も其意なるべし
○亡者、原本
亡を己に作る楓本中本に據て改む
○谿隘、原本隘を溢に作る中本に據て改む
○守易、易の字は考本集解に據て補ふ
○固居、原本固を國に作る
中本北イ本に據て改む應本釋紀因に作る
○是年也、也は北本應本中本に據て補ふ
○王戊、原本戊の下也の字あり諸本に據て削る

市田來津獨進而諫曰、避城與敵所在之間、一夜可行、相近、茲甚、若有
不虞、其悔、難及者矣、夫飢者後也、亡者先也、今敵所以不妄來者、州柔
設置山險、盡爲防禦、山峻高而谿隘、守易而攻難之故也、若處卑地、何
以固居而不搖動、及今日乎、遂不聽諫、而都避城、是歲爲救百濟、修繕
兵甲、備具船舶、儲設軍糧、是年也太歲壬戌、

○二年、達率、率の字は
北本應本中本に據て補ふ
○安德、蓋し德安の誤な
るべし德安は現今の忠清
南道恩津郡なり
○避城、北本應本中本辟
城に作る
○間人連、推古紀十八年
にも見ゆ孝德紀には中臣
を冠す
○中將軍、前後の將軍に
對して云

二年春二月乙酉朔丙戌、百濟遣達率金受等進調、新羅人燒燔百濟南
畔、四州并取、安德等要地、於是避城去、賊近、故勢不能居、乃還居於州
柔、如田來津之所計、是月、佐平福信上送唐俘續守言等、三月、遣前將軍
上毛野君稚子、間人連大蓋、中將軍巨勢神前臣譯語、三輪君根麻呂、後
將軍阿倍引田臣比羅夫、大宅臣鎌柄、率二萬七千人、打新羅、夏五月癸

○巨勢神前、神前は近江
國にある巨勢氏にて神前
に住みしより氏とされる
ならむ
○根麻呂、麻の字は北本
應本中本に據て補ふ
○大宅臣、推古紀三十年
に出づ
○打新羅、集解打を伐に
改作る
○犬上君、君の字は北本
應本中本に據て補ふ
○糺解、齊明紀七年に百
濟王糺解とあり
○石城、百濟の所夫里郡
珍惡山縣即ち今の忠清南
道扶餘郡石城面なるべし
○沙鼻岐奴江、沙鼻は慶
尙北道尙州なれば岐奴江
も其附近なるべし
○可斬以不、原本可を所
に作る中本に據て改む以
は中イ本に據て補ふ
○腐狗、集解腐狗に作る
に醢肉醬、字鏡に醢肉比
志保、抄飲食部に爾雅注
云醢（之々比之保）完醬也
陶隱居曰肉醬魚醬皆呼爲
醢不入藥用とあり
○謂諸將曰、北本應本謂
の字なし
○盧原君臣、錄右京皇別
に盧原公稚武彦命之後也

丑朔、犬上君名馳告兵事於高麗、而還見糺解於石城、糺解仍語福信之
罪、六月、前將軍上毛野君稚子等、取新羅沙鼻岐、奴江二城、百濟王豐璋
嫌、福信有謀反心、以革穿掌、而縛時難自決、不知所爲、乃問諸臣曰、
福信之罪既如此焉、可斬以不、於是達率德執得曰、此惡逆人、不合放捨、
福信即唾、於執得曰、腐狗癡奴、王勒、健兒、斬而醢首、秋八月
壬午朔甲午、新羅以百濟王斬己良、將謀直入國、先取州柔、於是百濟
知賊所計、謂諸將曰、今聞大日本國之救、將盧原君臣率健兒萬餘、正當
越海而至、願諸將軍等應預圖之、我欲自往待饗、白村、戊戌、賊將至於
州柔、繞其王城、大唐軍將率戰船一百七十艘、陣烈於白村、江、戊申、日
本船師初至、者、與大唐船師合戰、日本不利而退、大唐堅陣而守、己酉、
日本諸將與百濟王、不觀氣象、而相謂之曰、我等爭先、彼應自退、更率日
本亂伍、中軍之卒、進打大唐堅陣之軍、大唐便自左右夾船、繞戰、須臾之
際、官軍敗績、赴水溺死者衆、艦舳不得迴旋、朴市田來津仰天而誓、切

○於百濟國、於の字は北
本應本中本に據て補ふ
○以豐璋、原本璋の下の
の字あり行なり考本に據
て削る
○金策、孝德紀即位前紀
（一七〇頁）に見ゆ
○爵祿、字書を爵は封也
とあり封祿を賜ふを云カ
ツケモノは被物纏頭をカ
ツケモノと云意は同じ
○百濟王豐璋、原本王の
字なし北本應本中本に據
て補ふ
○（注）關名、前文に檳榔とあり
之別なり州柔は北史百濟傳の百濟五方城の中西方刀先城とあるもの即ち三國史記の豆車城、百濟の所夫里郡悅已縣にて今の忠清南道青陽郡定山面
なり
○磯碓、字書を磯碓石地與境同とあり脊薄の地なり
○避城、中本に據る通釋に文獻備考を引て全羅道碧骨郡辟城縣今の金堤郡とあれ
三國史記地理百濟部に西原一云辟城とあり西原は今の忠清南道清州なり從て古連且涇水は清州錦江支流無心川なるべし
○周
田、マトキは韓語なり
○上腴、原本腴を腹に作る北本應本に據て改む
○二儀、天地なり
○陝區、神武紀己未年に陝區をモナカと訓り陝は奥に
通す説文に陝四方之士可定居者也とあり、クムシラは字鏡に陝藏也久牟志良（名義抄には陝カクル）とあれば此の訓も其意なるべし
○亡者、原本
亡を己に作る楓本中本に據て改む
○谿隘、原本隘を溢に作る中本に據て改む
○守易、易の字は考本集解に據て補ふ
○固居、原本固を國に作る
中本北イ本に據て改む應本釋紀因に作る
○是年也、也は北本應本中本に據て補ふ
○王戊、原本戊の下也の字あり諸本に據て削る

日本書紀卷第廿七 天智天皇 二年

孫吉備建彥命景行天皇御世被遣東方伐毛人及兎鬼神到于阿倍原國復命之日以廬原國給之續紀四に廬原公柏守等賜朝臣姓とあり臣は名なり

○待饗白村、原本待饗時に作る北本楓本中本に據て改む白村は唐書に白江口とあり

○陣烈、烈列通用す

○船師初至、原本船初師とあり中本考本に據て訂す

○亂伍、原本伍を倍に作る諸本に據て改む

○大唐堅陣之軍、堅陣之の三字北本應本中本に據て補ふ

郡鳥城附近なり ○枕服岐城、牟豆に近き地なるべく百濟の所非分縣蓋し其地ならむか今の全羅南道長城郡森溪面なり ○牟豆、原本豆を互に作る北本應本中本に據て改む欽明紀十七年の彌氏と同じ地ならむ今の全羅南道高敬郡茂長面に近き地なるべし ○余自信、錄右京諸蕃高野造百濟國人余自信之後也とあり ○木素貴子、錄左京諸蕃に林連百濟國人木貴公之後也とあり同人なるべし ○谷那晉首、聖武紀に賜谷那庚受賜難波連とあり錄右京諸蕃高麗に難波連高麗好大王之後也とあり高麗人なりしが百濟に貫せしか ○憶禮福留、錄左京諸蕃に石野連百濟國人近速古王孫憶賴福留之後也とあり

齒而嘖殺數十人於焉戰死是時百濟王豐璋與數人乘船逃去高麗九月辛亥朔丁巳百濟州柔城始降於唐是時國人相謂之曰州柔降矣事無奈何百濟之名絕于今日丘墓之所豈能復往但可往於豆禮城會日本軍將等相謀事機所要遂教本在枕服岐城之妻子等令知去國之心辛酉發途於牟豆癸亥至豆禮甲戌日本船師及佐平余自信達率木素貴子谷那晉首憶禮福留并國民等至於豆禮城明日發船始向日本

【三年】天皇 通證に據上下例當作皇太子とあり本紀中下文七年即位まで天皇と書ることなし此は誤れるなるべし

○大皇弟、類史には大皇太子に作れり皇太弟又太弟とも稱るは儲君に坐すが故なり此は天武天皇を申す

三年春二月己卯朔丁亥天皇命大皇弟宣增換冠位階名及氏上民部家部等事其冠有廿六階大織小織大縫小縫大紫小紫大錦上大錦中下大錦下小錦上小錦中下大山上大山中大山下小山上小山中下小山下大乙上大乙中下小乙上小乙中下大建小建是爲廿六階焉改前花曰錦從錦至乙加十階又加換前初位一階爲大建小建二階以此爲異餘並依前其大氏之氏上賜大刀小氏之氏上賜小刀其伴造等之氏上賜干楯弓矢亦定其民部家部三月以百濟王善光王等居于難波有星殞於京北是春地震夏五月戊申朔甲子百濟鎮將劉仁願遣朝散大夫郭務悰等進表函與獻物是月大紫蘇我連大臣薨或本大臣薨注五月六月鳴皇祖母命薨冬十月乙亥朔宣發遣郭務悰等是日勅中臣內臣遣沙門智祥賜物於郭務悰戊寅饗賜郭務悰等是月高麗大臣蓋金終於其國遺言於兒等曰汝等兄弟和如魚水勿爭爵位若不如是必爲隣啖十二月甲戌朔乙酉郭務悰等罷歸是月淡海國言坂田郡人小竹田史身之猪槽水中忽然稻生身取而收日夕致富栗太郡人磐城村主殷之新婦床席頭端一宿之間稻生而穗其旦垂穎而熟明日之夜更生一穗新婦出庭兩箇鑰匙自天落前婦取而與殷々得始富是歲於對馬鳴壹岐鳴筑紫國等置防人與烽又於筑

す大日本史に本書例大凡立皇太子必再書於前紀某年立某皇子爲皇太子至嗣帝紀書曰某天皇某年立爲皇太子至天智紀不書立皇太子至天武紀始曰天命開別天皇元年立爲東宮既與前書例異且其書大皇弟東宮大皇弟者名稱書法亦不明白とあり

○冠位階名、原本冠の下倍の字あり應本中本に據て削る

○氏上、氏族の長なり天武紀に氏上文武紀に氏助あり中古氏長者といへるが如く其氏の上たる家を定められしなり天武紀に物部雄君連忽發病而卒天皇聞之天驚云々賜氏上續紀二に詔甲子年定氏上時不所載氏上被賜姓者自伊美吉以上並悉令申さあり甲子年は即ち今年なれば此時氏上を定め給ふのみならず氏姓を定め給ひしこと續紀の文にて知られたり

○民部、雄略紀廿三年に出づ

○家部、之を私民部とも云り後世の家人と云に同じ

六階焉改前花曰錦從錦至乙加十階又加換前初位一階爲大建小建二階以此爲異餘並依前其大氏之氏上賜大刀小氏之氏上賜小刀其伴造等之氏上賜干楯弓矢亦定其民部家部三月以百濟王善光王等居于難波有星殞於京北是春地震夏五月戊申朔甲子百濟鎮將劉仁願遣朝散大夫郭務悰等進表函與獻物是月大紫蘇我連大臣薨或本大臣薨注五月六月鳴皇祖母命薨冬十月乙亥朔宣發遣郭務悰等是日勅中臣內臣遣沙門智祥賜物於郭務悰戊寅饗賜郭務悰等是月高麗大臣蓋金終於其國遺言於兒等曰汝等兄弟和如魚水勿爭爵位若不如是必爲隣啖十二月甲戌朔乙酉郭務悰等罷歸是月淡海國言坂田郡人小竹田史身之猪槽水中忽然稻生身取而收日夕致富栗太郡人磐城村主殷之新婦床席頭端一宿之間稻生而穗其旦垂穎而熟明日之夜更生一穗新婦出庭兩箇鑰匙自天落前婦取而與殷々得始富是歲於對馬鳴壹岐鳴筑紫國等置防人與烽又於筑

紫築大堤貯水名曰水城

○小織、原本に脱す北本... ○大建小建は同紀三年なる建武を大小に分けたるなり... ○加十階、藤原本に六階あり... ○百濟鎮將劉仁願、鎮將は事物紀原に通典曰鎮將後... ○乙亥朔、原本朔の下戊寅の二字あり北本中... ○淡海、中本及紀略近江に作る... ○小竹田史、

〔四年〕間人大后、舒明天皇の皇女にて孝德天皇の皇后なり諸陵式に龍田清水墓間人女王在大和國平群郡天和志に在龍田村南小吉田村に見ゆ今高市郡越智岡村大字車木にあり

四年春二月癸酉朔丁酉間人大后薨是月勸授百濟國官位階級仍以佐平福信之功授鬼室集斯小錦下復以百濟百姓男女四百餘人居于近江國神前郡三月癸卯朔爲間人大后度三百卅人是月給

○鬼室集斯、考に福信の功を賞せむとて位を進め給へば集斯は福信が子なるべしと云り ○答林春初、原本初字を脱す北本中本に據て補ふ懷風藻には答本とあり ○長門國、長門の國始めて見ゆ ○憶禮福留、二年紀に出づ ○四比福夫、續紀九神龜元年賜正七位上四比忠勇稚野連と見ゆ ○大野及椽、通證に豐前國築城郡大野郷嶋木郷なりと云へど郡郷考に嶋木はツイキと訓むべし即築城なりとあり及椽と云に當らず ○沂州司馬上柱國劉德高、沂州は河南道なり明には山東兗州に屬す唐書百官志に司馬は行軍司馬掌弼戎政居則習蒐狩有役則申戰守之法器械糧糈軍籍賜予皆專焉注に武德元年改發治曰治中太宗即位曰司馬下州亦置上柱國は司馬即掌官吏勳級凡十有二轉爲上柱國視正二品とあり原本司馬の下馬一字衍れり中本に據て削る ○右戎衛將軍上柱國、唐書百官志十六衛の注に顯慶五年改左右領軍衛曰左右戎衛とあり上柱國の下姓名を脱せり ○百濟將軍朝散大夫上柱國、朝散の散及上の字は中本に據て補ふ ○大閱、周禮中冬教大閱の注に謂大閱兵而習戰也とあり ○是歲、原本歲の字を脱す諸本に據て補ふ ○小錦、上中下を略したるなり下の分注亦同じ ○守君大石、齊明紀四年に見ゆ ○(注)大乙、原本大の下小の字あり應本中本に據て削る ○吉士岐彌、吉士は中本に據て補ふ

神前郡百濟人田秋八月遣達率答林春初築城於長門國遣達率憶禮福留達率四比福夫筑紫國築大野及椽二城耽羅遣使來朝九月庚午朔壬辰唐國遣朝散大夫沂州司馬上柱國劉德高等等謂右戎衛將軍朝散大夫上柱國郭務懷凡二百五十四人七月廿八日冬十月己亥朔己酉大閱于菟道十一月己巳朔辛巳饗賜劉德高等十二月戊戌朔辛亥賜物於劉德高等是月劉德高等罷歸是歲遣小錦守君大石等大唐云々等謂小山坂合部岐彌吉士針間蓋送唐使人乎

〔五年〕始如、中本始如に作る ○元從之功、皇極紀四年に見ゆ入鹿を誅する時に大に力を盡せるを云 ○復租調、租と調を免するを云字書に復は除也とあり

五年春正月戊辰朔戊寅高麗遣前部能婁等進調是日耽羅遣王子始如等貢獻三月皇太子親往於佐伯子麻呂連家問其所患慨歎元從之功夏六月乙未朔戊戌高麗前部能婁等罷歸秋七月大水是秋復

○乙相奄部、齊明紀六年に出づ部は都に同じ
 ○(注)二位武若光、通證に二位猶大使副使之類あり
 ○細素、西域記の注に細素黒白也今世僧俗之謂也さあり
 ○癸亥年、二年なり
 ○知由、中本知を智に作り齊明紀に智跡さあり
 【六年】合葬云々、異本大織冠傳裏書に前年丙寅八月葬齊明天皇さあり
 貞幹云按に異本大織冠傳丁卯歲二月遷都于近江國而日本紀丁卯歲二月二十七日葬齊明帝可疑
 ○間人皇女、孝德天皇の皇后なれば太后さ書すべきを間人皇女させば聞えず
 ○小市岡上陵、諸陵式に越智岡上陵飛鳥川原宮御宇皇極天皇在大和國高市郡さあり今高市郡越智岡村大字車木にあり按ずるに齊明天皇崩後七年なり是に至りて始めて小市岡上陵に合葬し奉り又間人皇女を夫君孝德天皇磯長陵に合葬さるべきに同時に齊明天皇の御陵に合葬せられしを思ふに由あり

租調、冬十月甲午朔己未、高麗遣臣乙相奄部等進調、大使臣乙相奄部等進調、使達相通二位武若光、是冬、京都之鼠向近江移、以百濟男女二千餘人居于東國、凡不擇緇素、起癸亥年至于三歲、並賜官食、倭漢沙門知由獻指南車、
 六年春二月壬辰朔戊午、合葬天豐財重日足姬、天皇與間人皇女於小市岡上陵、是日以皇孫大田皇女葬於陵前、之墓高麗百濟新羅皆奉哀於御路、皇太子謂羣臣曰、我奉皇太后、天皇之所勅、憂恤萬民之故、不起石槨之役、所冀永代以爲鏡、誠焉、三月辛酉朔己卯、遷都于近江、是時天下百姓不願遷都、諷諫者多、童謠亦衆、日夕夜々失火處多、六月、葛野郡獻白鵝、秋七月己未朔己巳、耽羅遣佐平椽磨等貢獻、八月、皇太子幸倭京、冬十月、高麗太兄男生出城巡國、於是城內二弟、聞側助士大夫之惡言、拒而勿入、由是男生奔入大唐謀滅其國、十一月丁巳朔乙丑、百濟鎮將劉仁願遣熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等送大山下境部連石積等於筑紫都督府、己巳、司馬法聰等罷歸、以

るこなるべし
 ○太田皇女、天皇の皇女にて天武天皇の妃なり皇孫と申奉りしは皇祖母命の御陵に對してなり
 ○陵前之墓、大和志に俗呼石家さあり
 ○御路、送葬の道を云す
 ○皇太后、齊明天皇を申す天皇に續けて請奉るべし

小山下伊吉、連博德、大乙下笠、臣諸石爲送使、是月、築倭國、高安、城讚吉、國、山田郡、屋嶋、城、對馬國、金田、城、潤十一月丁亥朔丁酉、以錦十四疋、纈十九匹、緋廿四疋、紺布廿四端、桃染布五十八端、芥廿六、釵六十四、刀子六十二枚、賜椽磨等、

○石槨之役、石槨は字の如く石もて作れる城なり字書に棺は關也所以掩屍也、槨は外棺也葬有木槨也さあり木槨は外棺なるが石槨は石を以て空室を作り其處に棺を納むるなり石室は土石を以て之を覆ひ其周圍には溝を廻らし城の如くなれば石城と云り其工事を石作と云し事姓氏錄石作連の條の記事にて明なり石槨之役さば即ち石作の工事を云
 ○遷都于近江、扶桑略記一代要記には正月に遷都さあり大織冠傳には三月に太子傳拾遺記には七年正月さあり、此宮の跡は滋賀郡錦部郷今の錦織村に御所内と稱する地あり其處なりと岡部東平云り
 ○諷諫、物に喩へて遠廻りに諫むるを云
 ○白鵝、抄羽族部に爾雅集注云鵝(豆波久良米)白鵝小鳥也字鏡には鵝を豆波比良古さ注し鴉鵝等をか訓り
 ○耽羅遣、原本遣の字なり北本應本中本に據て補ふ
 ○太兄男生、東國通鑑高句麗寶藏王廿五年の條に高句麗泉蓋蘇文死子男生代爲莫離支初男生以蔭補中衷小兄遷中衷大兄知國政凡辭令皆主之進中衷位頭大兄及蘇文死男生代爲莫離支又高句麗男建自爲莫離支男生據國內城降于唐先是男生出按諸部使其弟男建男產留知後事或謂二弟曰男生惡君等又有告男生者曰二弟恐兄奪權欲拒之男生懼不歸男建自爲莫離支發兵討男生走保國內城遣子獻誠于唐求內附秋九月男生舉哥勿南蘇會巖等城降附(三國史記)脫身奔唐(見)さあり寶藏王廿五年は天智天皇五年に當れり
 ○側助、齊明紀六年に引なキイと訓りキイタスクルは率助くるなり
 ○熊津都督府、熊津は熊川に同じ唐より此地に都督を置て百濟を管せしめしなり
 ○熊山、熊津地方なり
 ○縣令、後漢書百官志に每縣邑道大者置令一人千石さあり
 ○於筑紫都督府、大宰府なり於には中本に據て補ふ
 ○高安城、河内志に高安郡高安故城在服部川村上方俗呼志貴城同國名所圖會に高安郡郡川村の上に在り記し其地を高安山と稱し山上に大和の堺を標せり城趾今は大和の國內に在りさ如此大和河内の堺なれば後に河内國に屬せしも此御所の頃には大和國なりしなるべし
 ○讚吉國、讚岐國なり
 ○屋嶋、海上に突出たる要害の地にて名高き所なり
 ○金田城、通證に或曰下縣郡與良鄉黑瀨城疑此と云り
 ○緇、抄布帛部に夾纈東宮切韻云釋氏曰緇結帛爲文綵也さありユハタは結帛(ユヒハタ)の意今のしほり染なり
 ○緋、字書に緋色又赤練さあり赤き練絹なり
 ○桃染布、通證に當訓阿良會本江次第荒染萬葉集桃花褐(アラハ)延喜衛門式衛士桃染布衫褌正式縫殿式に退紅(アラハ)亦同訓さあり名義は荒染にて深き色に對して淺きを荒きと云なるべし
 ○芥、抄調度部木工具に兼名苑注云芥(平能)一云(與岐)さあり
 ○釵、字書に釵は大鎌也さあり內宮儀式帳に奈太二柄さ見ゆ
 ○六十二、原本二を一に作る北本應本中本に據て改む

【七年】七年、本紀には壬戌年を元年として本年(戊辰)を七年としたれど

(戊辰) 七年春正月丙戌朔戊子、皇太子即天皇帝、或本云、六年歲次七壬辰、宴群臣於

天武紀に四年十二月天命開別天皇崩とあるに據れば此年を元年としたるなり然るに此に七年とあるは舊記のまゝを記したるなるべし按るに先帝崩後此に七年に至るまで即位し給はざりしを一代要記に天智天皇元年壬戌諱闕至孝不稱即位經六年而即位と云れど故あることなるべし

○皇太子即天皇位、北本に天皇の二字なし

○(注)六年云々、貞幹が天智天皇外記に所引の異本大織冠傳日本決釋にも此と同じくて月は五月に係けたり

○服命、水本服を復に作る服復相通す

○(注)美濃津子娘、孝徳紀に造媛とあり此に或本と云るは持統紀の始遠智娘の注に更名云々也とあるを云るなり

○鷗野皇女、原本皇字を脱す中本紀略に據て補ふ持統天皇に坐す

○飛鳥淨御原宮、天武天皇の宮なり天武紀に注す

○藤原、持統天皇の宮なり本紀に出づ

○啞、抄疾病部に説文云

内裏、戊申、送使博德等服命、二月丙辰朔戊寅、立古人大兄皇子、女倭姫王爲皇后、遂納嬪有蘇我山田、石川麻呂大臣女、曰遠智娘、或本濃津子娘、生一男二女、其一曰大田皇女、其二曰鷗野皇女、及有天下、居于飛鳥淨御原宮、後移宮于藤原、其三曰建皇子、啞不能語、或本云、遠智娘生一男二女、其一曰建皇

皇女與阿陪皇女、阿陪皇女及有天下、居于藤原宮、後移都于乃樂、或本云、名部

皇女與阿陪皇女、阿陪皇女及有天下、居于藤原宮、後移都于乃樂、或本云、名部

櫻井娘曰次有阿倍倉梯麻呂大臣女、曰橘娘、生飛鳥皇女與新田部皇女、次有蘇我赤兄大臣女、曰常陸娘、生山邊皇女、又有宮人生男女者四人、有忍海造小龍女、曰色夫古娘、生一男二女、其一曰大江皇女、其二曰川嶋皇子、其三曰泉皇女、又有栗隈首德萬女、曰黑媛娘、生水主皇女、又有越道、君伊羅都賣、生施基皇子、又有伊賀采女宅子娘、生伊賀皇子、復、字曰大友皇子、夏四月乙卯朔庚申、百濟遣末都師父等進調、庚午、末都師父等罷歸、五月五日、天皇縱獵於蒲生野、于時太皇弟、諸王、內臣、及羣臣皆

瘖(於布之)不能言也

○(注)山田麻呂、原本山を小に作る應本中本に據て改む

○婆羅々皇女、上の鷗野皇女なり

○姪娘、元明紀に宗我嬪に作る

○阿陪皇女、應本楓本陪を倍に作る元明天皇に坐す天武紀には阿間皇女に作れり

○乃樂、大和國添上下兩郡に亘れる地今の奈良市は其一部に過ぎず元明天皇より七代七十餘年間の皇都なり乃樂の名稱は崇神紀十年に官軍屯聚而躡頭(ミナト)草木因以號其山曰那羅山とあるより出でしなるべし

○倉梯麻呂、原本麻呂を磨の一字に作る中本類史に據て改む

○新田部皇女、天武天皇の妃と爲らせ給ふ

○山邊皇女、大津皇女の妃と爲り給ふ

○宮人、宮中に仕ふる婦人の意

○忍海造、忍海部は記に建豐波豆羅和氣王(開化天皇の御子)者忍海部造

悉從焉、六月、伊勢王與其弟王接日而薨、未詳官位秋七月、高麗從越之路遣使進調、風浪高故不得歸、以栗前王拜筑紫率于時近江國講武、又多置牧而放馬、又越國獻燃土與燃水、又於濱臺之下、諸魚覆水而至、又饗蝦夷、又命舍人等爲宴於所々、時人曰、天皇天命將及乎、九月壬午朔癸巳、新羅遣沙喙級、金東嚴等進調、丁未、中臣內臣使沙門法弁秦筆、賜新羅上臣大角于庾信船一隻、付東嚴等、庚戌、使布勢、臣耳麻呂、賜新羅王輸御調船一隻、付東嚴等、冬十月、大唐大將軍英公打滅高麗、高麗仲牟王初建國時、欲治千歲也、イロハノオリク(北)母夫人云、若善治國可得也、若不可得也、但當有七百年之治也、今此國亡者、當在七百年之末也、十一月辛巳朔、賜新羅王絹五十疋、綿五百斤、韋一百枚、付金東嚴等、賜東嚴等物各有差、乙酉、遣小山下道守臣麻呂、吉士小鮪於新羅、是日、金東嚴等罷歸、是歲、沙門道行盜草薙劍、逃向新羅、而中路風雨、荒迷而歸、

稻羽忍海部之祖さあり ○色夫古娘、紹運録には宮人と同人に記せり ○大江皇女、天武天皇の妃と爲らせ給ふ ○川嶋皇子、持統紀五年八月薨す
 天武天皇の皇子にも御同名あり ○泉皇女、續紀二に遣泉内親王侍於伊勢齋宮同十一に二品泉内親王薨さあり ○栗隈首、山城國久世郡栗隈郷
 あり是に由ある氏なるべけれと姓氏録に見えず天武紀十二年に栗隈首賜姓曰連さあり ○水主皇女、ミヌシと訓べし山城國久世郡水主郷に由ある
 御名なり續紀十二に三品水主内親王薨さあり ○越道君、原本越の字なり北本應本中本及紀略に據て補ふ ○施基皇子、續紀七に二品志貴親王薨天
 智天皇第七皇子也寶龜元年追尊稱御春日宮天皇さあり光仁天皇の皇考に坐す ○伊賀采女宅子娘、原本娘の字を脱す中本に據て補ふ通證に信西國
 分日宅子媛伊賀國山田郡郡司之女也此腹生三子其一曰大友皇子其二曰阿閉皇子其三曰阿雅皇女今按此紀唯一皇子蓋脱文也さあり ○復字、復
 は中本に後に作る ○大友皇子、大鏡には天智天皇第四の皇子さあり後の弘文天皇に坐す ○四月末都師父、原本未に作る北本中本に據て改む下同
 ○五月五日、甲戌朔戊子に當る ○蒲生野、近江國蒲生郡にあり九年紀に蒲生郡置遊と云野さあり萬葉一に天皇遊獵蒲生野時額田王作歌皇太
 子(天武天皇を申す)答御歌さあるは此時の事なり此繼體は藥獵なり ○太皇弟、原本太を大に作る類史に據て改む ○伊勢王、系詳ならず ○(注)
 未詳官位、原本本文さす中本に據て分注さす(七月)高麗、高麗寶藏王二十七年 ○越之路、こは若狹越前なり ○栗前王、天武紀に栗隈王さあ
 り録左京皇別稱朝臣の條に敏達天皇々子難波皇子男贈從二位栗隈王さあり ○拜築紫率、即ち大宰帥なり扶桑略記に之を始任大宰帥とせり ○講
 武、持統紀に兵士者毎於一國四分而點其一令習武事さあり ○置牧、抄土地部田野類に尙書云萊夷爲牧(和名无万岐)さあり馬欄(ウマカケ)の意
 ○燃土燃水、今の石炭及石油なり石油は之を臭水(ウツク)と云り臭き水なればなり ○濱臺、大織冠傳に濱臺さあるに同じ大津の内裏にて湖濱の眺
 望よき地に樓を造られしなるべし ○響蝦夷、原本蝦の字を脱す中本に據て補ふ ○天命將及乎、敷田氏は上に落字あるか流言の意かすさあり ○大
 角子、東國通鑑新羅太宗王七年の條に贈戰死者官有差初置大角子以天將軍金庾信爲之在十七位之上さあり新羅最上の冠位なり乎は原本千に
 作る三國史記に據て改む ○庚信、原本庚を庚に作る北本に據て改む ○船一隻、庚信に船を賜ふこと大織冠傳に見ゆ ○庚戌、通釋に此條は上の
 丁未の條の上にあるべしと云 ○布勢臣、孝德紀大化二年に富制臣さあり ○仲牟王、録右京諸蕃長背連及山城諸蕃高井造條に都牟王、三國史記
 三李勣傳に見ゆ ○打滅高麗、唐書太宗紀貞觀十八年及三國史記等に詳なり ○仲牟王、録右京諸蕃長背連及山城諸蕃高井造條に都牟王、三國史記
 に高句麗始祖東明聖王姓高氏諱朱蒙一云鄒さあり ○母夫人、ホリクシと訓るは韓語なるべし ○若不可得也、此五字原本分注さし若の下或本有の
 三字あり中本及釋紀に據て補ふ ○道守臣、録左京皇別に道守朝臣多矢代宿禰之後也天武紀十三年道守臣賜姓曰朝臣さあり ○於新羅、
 伊勢國二夜之間神劍自脱袈裟還著本社道行更還到練禪禱請又袈裟還逃到攝津津國海中失度更亦漂著難波津託宣曰吾是熱
 田神劍也然被救救妖僧一殆著新羅袈裟七條袈裟二脱出還社後袈裟九條袈裟甚難解脫于時吏民驚恠東西認求道行中心作念若棄去此劍則將免捉搦之
 責乃地棄神劍劍不離身道行術盡力窮拜畢自首遂當斬刑云々見ゆ ○風雨荒迷而歸、原本荒を芒に作り而の字なり北本應本中本及紀略に據て
 改め補ふ

〔八年〕三月、原本月の
 字を脱す北本應本中本に
 據て補ふ
 ○山科野、山城國宇治郡
 山科郷にあり此も藥獵な
 り
 ○太皇弟、原本太を大に

(己)
 八年春正月庚辰朔戊子、以蘇我赤兄臣拜筑紫率三月己卯朔己丑、耽
 羅遣王子久麻伎等貢獻丙申、賜耽羅王五穀種是日、王子久麻伎等
 罷歸夏五月戊寅朔壬午、天皇縱獵於山科野、太皇弟、藤原内大臣及群

作る中本及類史に據て改
 む
 ○藤原内大臣、此に藤原
 内大臣と記せるは後より
 廻らして書けるなり此時
 未だ藤原の姓を賜はらず
 内大臣にも任ぜられざり
 しなり
 ○高安嶺、六年紀に出づ
 ○霹靂、楓本礎を礎に作
 る字書に礎與霹靂同さあ
 り抄土地部に釋名云霹靂
 (和名加美渡計)霹靂也霹
 歷也所歷皆破析也さあ
 り
 ○内大臣家、大和志に高
 市郡有藤原村即此さあ
 り
 ○積善餘慶、易坤卦に積
 善之家必有餘慶さあり
 ○若有所須、字書に須は
 資也用也與需通さあり
 ○軍國、軍事と國務を云
 通證に如言千乘國さあ
 り
 ○何敢重難云々、通證に
 難患也さあり大織冠傳に
 即位二年冬十月稍經沉
 痾遂至大漸帝臨私第
 親問所思云々即詔曰若
 有所思便可聞大臣
 對曰臣既不敏敢當何言
 但其葬事願用輕易生則
 无益於軍國死何有勞

臣皆悉從焉秋八月丁未朔己酉、天皇登高安嶺、議欲修城、仍恤民
 疲、止而不作、時人感而歎曰、寔乃仁愛之德、不亦寬乎、云々、是秋、霹靂
 於藤原内大臣家、九月丁丑朔丁亥、新羅遣沙食督儒等進調、冬十月丙
 午朔乙卯、天皇幸藤原内大臣家、親問所患、而憂悴極甚、乃詔曰、天道
 輔仁、何乃虛說、積善餘慶、猶是無徵、若有所須、便可以聞、對曰、臣
 既不敏、當復何言、但其葬事、願用輕易、生則無務於軍國、死則何敢
 重難、云々、時賢聞而歎曰、此之一言、竊比於往哲之善言矣、大樹將
 軍之辭、賞詎可同年而語哉、庚申、天皇遣東宮大皇弟於藤原内大
 臣家、授大織冠與大臣位、仍賜姓爲藤原氏、自此以後、通曰藤原内大臣、
 辛酉、藤原内大臣薨、日本世記曰、内大臣春秋五十薨、于私第、遷殯於山南、天
 幸藤原内大臣家、命大錦上蘇我赤兄臣奉宣恩詔、仍賜金香鑪、十二月、
 災大藏、是冬、修高安城、收畿内之田稅、于時災斑鳩寺、是歲遣小錦
 中河内直鯨等使於大唐、又以佐平餘自信、佐平鬼室集斯等、男女七百

餘人遷居近江國蒲生郡又大唐遣郭務悰等二千餘人

於百姓之有之に據るに重難の下に云々あるは元々の訛にはあらざるか ○大樹將軍、後漢書馮異傳曰異爲人謙退軍中號爲「整齊」每所止舍諸將並座論功異獨屏樹下軍中號曰「大樹將軍」あり ○東宮大皇弟、五字釋にヒツギノミコと訓り ○大臣位、職原抄に孝德天皇御宇以中臣鎌子連爲内大臣天智朝擢爲内大臣云々此時其位在左右大臣上とあり鎌足は此に始て内大臣に昇進したるなれば内大臣の位と書すべきを内字を略したるなり ○賜姓爲藤原氏、此の姓は氏を云り姓氏錄にはたゞ賜藤原氏とあり ○曰藤原内大臣、原本内の字を脱す中本及紀略に據て補ふ ○内大臣藤原、大織冠傳に十六日辛酉薨于淡海之第時年五十有六上哭之甚慟廢朝五日云々とあり ○(注)春秋五十、十の下六の字を脱せしなるべし ○遷葬於山南、釋紀遷遷を遷に作る山南は集解に按淡海國山也不知指何山とあり大織冠傳に傳以庚午閏九月六日葬於山階精舍とあり山階精舍は山城志に宇治郡山階廢寺在東野村云齊明天皇三年冬十月丙子鎌子建山階寺於山州陶原家とありされ其處に大臣の墓なれば後改め葬りしものなるべし元亨釋書に始て攝州阿武山に葬りしを大和國談峰に改葬すとあり初め近江國の山南に殯し山階精舍に葬り阿武山に移し更に談峰に改葬せしなり阿武山は攝津國嶋下(今三嶋)郡の地にて鎌足が前に住みし三嶋の別業に近き地なり ○不憚遺書、原本想を整に作る應本中本想に作れるに従ふ想は左傳哀十六年に不憚遺一老とあれば愁の訛なるべし ○碑、エリイシと訓るは鎬石なり喪葬令に凡墓皆立碑記具官姓名之墓義解に碑者刻石銘文也とあり(以上注) ○奉宣恩詔、大織冠傳に詳なり ○田稅、神祇令義解に新輸曰租經貯曰稅也とあり ○河内直、欽明紀二年に見ゆ ○二千餘人、中本人の下に來の字あり

【九年】宣朝庭之禮儀、元正朝賀の儀を始め其他の朝儀を定め給ひしなるべし別式に載せられたれば詳なることは知り難し ○行路之相避、儀制令に凡行路巷街賤避貴少避老輕避重續紀一に禁正月往來拜賀之禮如有違犯者依淨御原朝廷制決罰之但聽拜祖兄及氏上者なご見えたり ○誣妄、字鏡に訛偽也謂誣偽也化也太波已止とあり ○妖偽、オヨゾレは天武紀に妖言を訓り語義詳ならず ○二月造戶籍、戶籍の事

九年春正月乙亥朔辛巳詔士大夫等大射宮門内戊子宣朝庭之禮儀與行路之相避復禁斷誣妄妖偽二月造戶籍斷盜賊與浮浪于時天皇幸蒲生郡匱邇野而觀宮地又脩高安城積穀與鹽又築長門城一筑紫城二三月甲戌朔壬午於山御井傍敷諸神座而班幣帛中臣金連宣祝詞夏四月癸卯朔壬申夜半之後突法隆寺一屋無餘大雨雷震五月童謠曰于知波志能都梅能阿素弭爾伊堤麻栖古多麻提能伊鞞能野鞞能古能度理伊提麻志能俱伊播阿羅珥茹伊提麻西古多麻提

は已に屢見えなれど更に嚴重に正しく造れるなるべし後年まで庚午の年籍として保藏せられたり戸令に凡戶籍恒留五比其遠年者依次除近江大津宮庚午年籍不除とある是なり

能鞞能野鞞能古能度理六月邑中獲龜背書申字上黃下玄長六寸許秋九月辛未朔遣阿曇連頰垂於新羅是歲造水碓而冶鐵

○浮浪、日本靈異記に宇加禮比止と訓めり本籍地を離れ所定めず他郷に浮浪し居るものを云 ○匱邇野、原本匱を遣に作る中本に據て改む北本應本遣に作るも亦匱の訛なり北本應本及紀略邇を遣に作るは途の訛歟今の日野町なり ○長門城、近藤清石云長門城は豊浦村大唐櫃山小唐櫃山にはあらざと思ふざるは達率答煉春は韓人にてそれが築く所なれば後世カラヒト山といひむなカラヒツ山と訛り櫃山と文字を當てしならむといへり ○筑紫城、原本城の字を脱す中本紀略に據て補ふ ○山御井傍、通證に疑此近江滋賀郡長等山三井寺之地宜與天武紀上山前併考三井舊作御井寺之西岩有泉井見元亨釋書とあり伴信友の説亦同じ ○敷諸神座、通證に今按此如大嘗祭之式也蓋古者有此禮可以觀矣敷田氏標注には、は神祇官を設けられたるなりと云り ○班幣帛、義解に班猶頒也とあり諸社の禰宜祝部等なごに召集へて供るべき幣帛を頒ちしなり思部の文字は見えざれど之を頒ちしは思部なり ○中臣金連、公卿補任に可多能古連之孫糠手子連之子也とあり ○宣祝詞、神祇令義解に謂宣者布也祝者贊辭也言以告神祝詞宣聞百官故曰宣祝詞同集解に中臣宣祝詞者時行事宣參集之社々祝部等也但依文宣百官可云耳と見えたり ○災法隆寺、大和國平群(今生駒)郡舊斑鳩寺と云大和志に法隆寺名區也金堂講堂五級浮屠東院西圓堂其餘殿堂二十七宇僧院六十餘宇寺有厩戶皇子遺器物とあり一屋無餘とあれば現存の堂宇は再建せるなり ○大雨、原本大を火に作る北本應本中本及類史に據て改む ○童子の八重此外に出で坐し悔は有らざる出で坐せ玉子の家の八重此外に玉子の家は法隆寺を指せるなるべし釋紀に玉子の遊に出で坐せ玉子の寺の邊にもさる地名あるにや野鞞能古能度理は八重九重と云を省けるにやあらむといひ守部の説、或は八重此所にて垣なごの八重に周れる所を云といひ(標注)或は八重園外(ヤヘカコト)かとも云(通釋)八重此外にて八重に取圍める此寺の外なるべし一首の意は火災のあるべければかく取圍める家の内にある子は外に出でて此災を免れよとの意なるべし但し集解には按蓋童謡之意勸天武天皇出家逃位也と云り ○申字、通證に按壬申之亂兆と云ひ敷田氏は申字は日に立點を加へたるにて日を貫くの意なり是は近江朝の亡ぶる兆なりと云 ○上黃下玄、通證に天地易位之色と云 ○造水碓而冶鐵、原本治を治に作る中本に據て改む水車に懸けて鐵を治する機巧を爲れるなり

【十年】巨勢人臣、天武紀に人を比等に作る補任に巨勢毗登臣小徳大海之男とあり ○命宣神事、中本命字なり神事は神語(カミゴト)なり舊事紀に天種子命奏天神壽詞とあり神代の古事を年の始に宣らしめ給ひしなるべし此事後に

十年春正月己亥朔庚子大錦上蘇我赤兄臣與大錦下巨勢人臣進於殿前奏賀正事癸卯大錦上中臣金連命宣神事是日以大友皇子拜太政大臣以蘇我赤兄臣爲左大臣以中臣金連爲右大臣以蘇我果安臣巨勢人臣紀大人臣爲御史大夫大納言乎甲辰東宮太皇弟奉宣

は絶えたり
 ○是日、中本此二字なし
 ○太政大臣、此官を任ずるに此時を始とす令義解の古訓にオホイマツリコトノオホマヘツキミ抄職官部に於保萬豆利古止乃於保萬豆岐美といひ後にはオホキオホイマウチキミと呼べり職員令に太政大臣師範一人儀刑四海經邦論道變理陰陽無其人則闕あり
 ○紀大人臣、續紀三に正二位紀朝臣麻呂薨淡朝御史大夫正二位大人之子也
 ○御史大夫、魏志武帝紀に漢罷三公官置丞相御史大夫とあり下の注の如く後の大納言なり
 ○注、御史云々、集解に擧入る大納言は抄職官部に於保伊毛乃萬字須豆加佐職員令に大納言四人掌參議庶事敷奏宣旨侍從獻替義解に納言王者喉舌之官也言納言下言於上言上言於下也とあり
 ○甲辰、通證に六日叙位始于此見公事根源とあり
 ○施行冠位法度事、注に

或本云、大友、施行冠位法度之事、大赦天下、法度冠位之名、九具載於新律令、丁未、高麗遣上部大相可婁等進調、辛亥、百濟鎮將劉仁願遣李守眞等上表、是月、以大錦下授佐平余自信、沙宅紹明、法官、以小錦下授鬼室集斯、頭職、以大山下授達率谷那晉首、法兵、木素貴子、法兵、憶禮福留、法兵、答炆春初、法兵、日比子、贊波羅金羅金須、藥解、鬼室集信、藥解、以小山上授達率德頂上、藥解、吉大尙、藥解、許率母、明五、角福牟、陰陽、以小山下授餘達率等五十餘人也、童謠云、多致播那播、於能我曳多曳多、那例々、騰母、陀麻爾農、矩騰岐、於野兒弘爾農、俱、二月戊辰朔庚寅、百濟遣臺久用善等進調、三月戊戌朔庚子、黃書造本實獻水臬、甲寅、常陸國貢中臣部若子、長尺六寸、其生年丙辰、至於此歲十六年也、夏四月丁卯朔辛卯、置漏尅於新臺、始打候時、動鍾鼓、始用漏尅、此漏尅者、天皇爲皇太子時、始親所製造也云々、是月、筑紫言、八足之鹿生而即死、五月丁酉朔辛丑、天皇御西小殿、皇太子群臣侍宴、於是再奏、田饒、六月丙寅朔己巳、宣百濟三部使人所請軍

具載於新律令とあれば此は近江朝廷の令なるべし弘仁格序に至天智天皇元年制令二十二卷世人所謂近江朝廷之令也とあるに據れば令は即位元年即ち七年に成りしを是に至りて施行せられしなるべし
 ○上部、原本部を都に作る北本楓本中本に據て改む
 ○注、法官大輔、法官は唐書百官志に見ゆ我武部に當れり大輔は次官なり
 ○以小錦下、四年紀に小錦下を授くされば下は上或は中の誤なるべし
 ○學職頭、即ち大學頭なり
 ○日比子贊波羅、蓋二人ならむ
 ○金羅金須、之も二人か
 ○以小山上、原本小の上の字あり中本に據て削る
 ○吉大尙、續紀九神龜元年賜從五位上吉宜從五位下吉智首並吉田連と見ゆ
 ○角福牟、續紀二大寶元年八月勅云々惠羅姓録名兄麻呂とある録は角と同音にて角氏即ち録氏なり

事、庚辰、百濟遣羿眞子等進調、是月、以栗隈王爲筑紫帥、新羅遣使進調、別獻水牛一頭、山鷄一隻、秋七月丙申朔丙午、唐人李守眞等、百濟使人等、並罷歸、八月乙丑朔丁卯、高麗上部大相可婁等罷歸、壬午、饗賜蝦夷、九月、天皇寢疾不豫、或本云、八月、天皇疾病、冬十月甲子朔庚午、新羅遣沙食金萬物等進調、辛未、於內裏開百佛眼、是月、天皇遣使奉袈裟、金鉢、象牙、沈水香、栴檀香、及諸珍財於法興寺、佛、庚辰、天皇疾病彌留、勅喚東宮、引入臥內、詔曰、朕疾甚、以後事屬汝云々、於是再拜稱疾固辭不受曰、請奉洪業、付屬大后、令大友王奉宣諸政、臣請願奉爲天皇、出家脩道、天皇許焉、東宮起而再拜、便向於內裏佛殿之南、踞坐胡床、剃除鬢髮、爲沙門、於是天皇遣次田生磐送袈裟、壬午、東宮見天皇請之、吉野脩行佛道、天皇許焉、東宮即入於吉野、大臣等侍送、至菟道而還、十一月甲午朔癸卯、對馬國司遣使於筑紫大宰府言、月生二日、沙門道久、筑紫君薩野馬、韓嶋、勝娑婆、布師、首磐、四人從唐來、曰、唐國使人郭務棕等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、摠合二千人、乘船四十七隻、俱

○云是等の人々多くは大友皇子に侍して文學の御對手申し上げたるなり
 ○多致播那播云々、橋は己が枝々成れ、ごも玉に貫く時同じ緒に貫くなり成れ、は成りてあるにて實を結ぶをいひ學問才藝は各異なりと雖も榮爵に預る事は同じくて共に朝廷の臣列に貫せるを譬へたるなり通證に歌言言才藝各異而相共叙爵也蓋橋是異邦產故譬諸韓人也といひ守部は異國の人なると採用して皇國の舊臣と同じ位階を授け給ふを密に告めたるなりと云
 ○黃書造、錄山城諸蕃に黃文連、出自高麗國人久斯那王也、あり天武紀十二年に黃文造賜姓曰連、本實は持統紀八年三月に鑄錢司に任ず
 ○水泉、原本泉を泉に作る釋紀に據て改む文選景福殿賦に作無微而不違、於水泉注に水泉水平也抄調度部造作具に漢語抄云准繩(美豆波加利)とあり

泊^{トマリテ}於比智鳴^ニ相謂^テ之曰、今吾輩^ガ人船數衆、忽然^ニ到彼、恐彼防人驚駭^シ射戰、乃遣道久等豫稍披^テ陳來朝之意、丙辰、大友皇子在內裏西殿、織^{オリモノ}佛像^{ミカタノ}前、左大臣蘇我赤兄^ニ、右大臣中臣金連、蘇我果安臣、巨勢人臣紀大人^{ワシ}、臣侍焉、大友皇子手執香鑪、先起誓盟曰、六人同心奉^ク天皇詔、若有違者、必被^ラ天罰云々、於是左大臣蘇我赤兄^ニ、臣等手執香爐、隨^テ次而起、泣血誓盟曰、臣等五人、隨^テ於殿下奉^ル天皇詔、若有違者、四天王打^{タム}天神地祇亦復誅罰、卅三天證^{ミコトノコト}知^ル此事、子孫當絕、家門必亡云々、丁巳、災^{ヒツケリ}近江宮、從大藏省第三倉出^{タリ}壬戌、五臣奉大友皇子盟^ニ天皇前、是日、賜^フ新羅王絹五十匹、緇五十匹、綿一千斤、韋一百枚、十二月癸亥朔乙丑、天皇崩于近江宮、癸酉、殯^ス于新宮、于時童謠曰、美曳之弩能^ノ阿喻、阿喻舉會播^ハ施麻倍母^モ、曳岐^キ愛俱流^ク之衛^シ、奈疑能^ノ母滕^ト、制利能^ノ母滕^ト、阿例^ア播俱流^ハ之衛^シ、其^ノ於彌能^ノ古能^ノ野^ノ陛能^ノ比母^ノ騰^ト、俱^ク比騰^ト、陛^ヘ多爾^ニ、伊麻拖^ハ滕^ト柯^カ彌^ミ波^ハ美^ミ古^コ能^ノ比母^ノ騰^ト、矩^ク阿箇^ア箇^カ悟^ウ馬^マ能^ノ以^テ喻^ル企^キ波^ハ々^々箇^カ屢^ル麻^マ矩^ク儒^ニ播^ハ羅^ラ奈^ナ何^カ

○子は名なり
 ○生年丙辰、齊明天皇二年なり
 ○至於此歲、於^レは中本に據^レて補ふ
 ○(四月)漏越、齊明紀六年に出づ
 ○始親、中本親を新に作る

(五月)西小殿、小殿はコアドノとあれ、コヤスミドノと訓むべきか江次第に九月十一日小安殿行幸あり大極殿の後房なり
 ○田儻、北本にツ、マヒと訓り續紀十四に天皇御^ニ大安殿宴^シ群^レ臣^ニ酒^ヲ酣^シ奏^シ五節田舞^ニ皇^ニ大神宮儀^ヲ式帳^ニ御刀代田耕始^ニ即田耕歌^ニ豆田儻^ニ止^シ由氣宮儀^ヲ式帳^ニ管裁物忌父田儻^ニ仕奉^ルあり田を植る時に舞ひしが後宮中なごにても用ひらるゝに至りしなるべし其所作詳なられご後の田樂は田儻の遺風なるべし
 (六月)百濟三部、上部中部下部を云なるべし
 ○弄真子、釋紀に弄を却に作れり
 ○筑紫帥、原本帥を師に作る北本に據て改む中本は率に作る此王七年紀に率あり今又赤兄に代て再任せらる

爾能^ニ都底^ツ舉^{コト}騰^ト多^ク拖^タ尼^ニ之^シ曳^エ雞^ケ武^ム、其^レ己^ト卯^ト新羅^ニ進^シ調使^シ沙^ハ食^ク金^ニ萬^ノ物^ヲ等^ニ罷^シ歸^ル、是^レ歲^ニ讚^シ岐^ノ國^ヲ山^ノ田^ノ郡^ヲ、人^ノ家^ニ有^ル雞^ノ子^ノ四^ノ足^ノ者^ヲ、又^チ大^ニ炊^ク省^ニ有^ル八^ノ鼎^ノ鳴^ル、或^ハ一^ノ鼎^ノ鳴^ル、或^ハ二^ノ或^ハ三^ノ俱^ニ鳴^ル、或^ハ八^ノ俱^ニ鳴^ル、

日本書紀卷第廿七

○水牛、抄牛馬部に水牛文選上林賦注曰洗牛(今按又一名潛牛也見南越志)即水牛也

能沈没於水中一者也唐韻云抗(音岡)水牛也。○山鷄、本草和名に也未止利也。○九月、或本云、云は應本中本に據て改む。(十月)開百佛眼、開眼とは佛の眼を開く意、真俗佛事編に鳥羽瀝覽軌中日刻本尊乃至以彩色敷之像額間點朱或黃至來月一日開眼あり。○金鉢、金の鉢なり抄僧坊具に鉢四聲字苑云鉢(博末反俗云波智)學佛道者食器也。○梅檀香、倭名抄に雜香四十二種の中に梅檀は抄草木部に唐韻云梅檀(仙壇二音俗云善短)香木也。○以後事屬汝云々、天武紀即位前紀に勅東宮授鴻業あり云々あるは詔詞を省けるなり。○大后、皇后倭姫王を申す。○奉宣諸政、中本奉を奏に作る此東宮の奉答は天皇の御志大伴皇子にあるを察し給ひて吾は多病にして其任に堪へず皇位は天后に付屬し諸政は大友皇子をして奉宣せしめ給へし申されしなり。○内裏佛殿、所謂内道場なり。○次田、録河内神別に次田連大明命兒天香山命之後也。○大臣等侍送云々、北本に大臣以下十字なり略記に同月立天友太政大臣爲皇太子水鏡亦同。○懷風藻には大友皇子年甫弱冠拜太政大臣年二十三(信友は廿四の誤とす)立爲皇太子會王申之亂天命不遂時年二十五ありに據るに七年戊辰に皇子年廿一にて太政大臣となり九年庚午に皇太子と成り坐るなり本書及水鏡略記等に異る也。(十一月)月生二日、月を見初めて二日と云ことなれば五日頃なり上代朔と云は月立にて月の見え初めたる日なれば合朔を上日とする事は支那曆に據りしものなり。○道久、中本楓イ本久を丈に作る下文亦同じ。○韓嶋勝婆婆、豐前國宇佐郡辛嶋郷なり扶桑略記養老四年に辛嶋勝代豆米見ゆ勝は姓婆婆は名なり原本婆を婆に作る中本に據て改む。○布師首、錄左京皇別に布師首武内宿禰之後也。○送使、原本使を脱す中本に據て補ふ。○比智嶋、詳ならず中本智を知に作る。○在內裏西殿、通證に內裏西殿後世所謂眞言院あり中本内の上の字あり。○左大臣蘇我赤兄臣云々、此五人天皇の御志を承りて大友皇子を助け天武天皇を逐ひ奉りしなり。○四天王打、打は罰する意、四天王は崇峻紀即位前紀に見ゆ。○廿三天、集解に大論曰昔摩伽陀國中有婆羅門一名摩伽姓橋戸迦淨名疏曰釋提桓因翻爲能作此間帝釋是迦葉佛滅後有福德命終皆生須彌山頂第二天上摩伽婆羅門爲天主三十二人爲輔臣喚其本姓故言橋戸迦淨名疏曰釋提桓因翻爲能作此間帝釋是迦葉佛滅後有一女人發心修塔復有三十二人發心助修修塔功德爲初利天主其助修者而作輔臣君臣合之名三十三天あり。○災近江宮、伴氏云時勢によりて推考ふるに若は吉野の前坊に心よせある人の所爲には非ざりしが聊疑あり。(十二月)天皇崩、扶桑略記に十年立天友太政大臣爲皇太子十二月三日天皇崩同日大友皇太子即位二年二十五あり水鏡も同じ又本紀に寶算を闕く一代要記水鏡には御年五十三神皇正統記正統錄皇年代略記紹運錄興福寺年代記一本知是院年代記には五十八あり法王帝説には四十七あり。○殯于新宮、大津宮は十一月丁巳に火災に罹りしが假に新に造りし宮に坐し、なり故に新宮に殯す云標注並に通釋に新に殯宮を造りたるなりとあれ殯宮の新に造るべき事は論を待す此は新宮の内殯宮を設けられしなり。○美曳之努能云々、吉野川の年魚こそは鳴邊も宜しけれ水葱の下或は芹の下にては年魚も苦しく住み難るべしとなり吉野は上代はエシヌと云てヨシノと云はざりしなり故に此にもミエヌとあり愛俱流之衛の愛は阿と通ひて嗚呼の意下はよこ同意の歎息の辭なり奈疑能母膝の膝は北本中本騰に作る下も同じ奈疑は水葱なり其形慈姑に似て俗に水葵亦澤桔梗とも云水葱も芹も多く濁川に生るものなり阿例播の清流に住まずして濁川の水葱芹等の下に住むが如く苦しみ給ふに譬へ諷せるなりと云り守部は鮎を以て大友皇子に譬へたりと云。○於彌能古能云々、臣の子の八重の紐解く一重だに未だ解かれれば皇子の紐解くなり此諺の意は伴氏の説に天智天皇俄に世を去り給ひて世は紐の八重に結ばれて解けぬが如く大臣等其一重をも未解きかゝる間に大海人皇子は既に兵を起し始め給ふ事あるべしと諷せるなりと云り是も異説あり大友皇子を八重に取圍めるを解かむとするに譬へたりとも大海人皇子の軍の大津の圍を解くは譬へたりとも云。○阿箇悟馬能云々、赤駒の伊住き憚りか真葛原何の傳て言直々にし吉けむなり此諺の意は伴信友氏の説に吉野宮へ人を差遣はして治むと思はせるに其道には馬だにも往き難るばかりに葛のはびこりたる如く防禦ありし聞き猶豫し給へるは何人の流言を信じ給へるに於て時を失はす直に物したるむ宜しかるべきものをこの意なりと云又守部は大海人皇子の表面のみ世を棄て佛道に入られしを刺り取つらす眞實に有の儘ならば宜からむと云るなりと云。○大炊省、職員令に宮内省に屬して察せり頭一人掌諸國春米雜穀分給とあり。○八鼎、抄器皿部に説文云鼎(阿之加奈倍)三足兩耳和五味寶器也とあれ此の鼎は釜なり即ち金甕なりなり是は大炊寮大八嶋龜神なり。○嗚、釜鳴の事此に始て見ゆ後々にも時々ありて式に鎮釜鳴祭あり此釜鳴は天下亂れむとするを諷せるなるべし。

日本書紀卷第廿八

天淳中原瀛真人天皇上 天武天皇

天淳中原瀛真人天皇上、天命開別天皇同母弟也。幼曰大海人皇子、生而有岐嶷之姿、及壯雄拔神武、能天文遁甲、納天命開別天皇女菟野皇女爲正妃、天命開別天皇元年立爲東宮、四年冬十月庚辰、天皇臥病、以痛之甚矣、於是遣蘇賀臣安麻侶、召東宮引入大殿、時安摩侶素東宮所好、密顧東宮曰、有意而言矣、東宮於茲疑有隱謀、而慎之、天皇勅東宮授鴻業、乃辭讓之曰、臣之不幸、元有多病、何能保社稷、願陛下舉天下附皇后、仍立大友皇子、宜爲儲君、臣今日出家、爲陛下欲修功德、天皇聽之、即日出家、法服、因以收私兵器、悉納於司。壬午、入吉野宮、時左大臣蘇賀赤兄臣、右大臣中臣金連、及

【即位前紀】天淳中原瀛真人天皇、御幼名を大海人皇子と申し、より思ひ寄せて稱奉れる御名なり。淳中原は海原なりと云或は又は瓊にて海をほめて云るか瀛は海の奥なるべし真人は美稱なり。○(注)淳中云々、此六字天皇の下にあるべき例なり中本難を難に作る。○岐嶷、原本疑を疑に作る北本に據て改む綬靖紀即位前紀に出づ。○天文遁甲、推古紀十年(一一頁)に注す。○菟野皇女、持統天皇に坐す。○元年、天智天皇七年戊辰の年。○立爲東宮、天智紀に此事を脱す信友云天武天皇立太子の事本紀に天智の御世の元年に立爲東宮と記され主たる天智紀に其事を漏らす然るに扶桑

略記水鏡に倭姫皇女立后
と共に大海人皇子皇太子
に立つと見ゆ天智紀には
同年同月立后の事見ゆる
のみ正月の條に戊子皇太
子即天皇位壬辰宴群臣
於内裏と見えたるを鎌
足傳に七年正月皇太子
(即天智天皇)即天皇位
云々於皇皇太弟(天武天
皇)以長槍刺貫數板帝
驚大怒以將執害とあり即ち執殺さむとさへ給ひたりけむを二月に皇太子に立て給ふべくもあらず然れどもさる過失を宥め給ふとして鎌足公に
ぞ詔合せ給ひたりけむやがて其月戊寅に立皇后の時品つけて皇太弟と申すになし參らせけるを皇太子と書きなせるにて實は紹運要略紹運錄等天智
七年戊辰爲皇太弟とあるを正しかるべき ○四年、楓本に十年とあり按るに此下十二月までの事は天智紀十年十月庚辰の條に載せられたるを此に
四年とあるは此本紀が天智天皇七年を同元年としたるに據る此も亦當時の書にありしまゝを載せたるにて自ら前紀と違へるなり蓋に改め難し(通
釋の説) ○蘇賀臣安麻呂、中本に據るは履中紀二年に蘇賀滿智宿禰あり子石足の時姓を改めて石川朝臣となれり ○順
東宮、原本願を領に作る北本中本に據るは北本應本中本に據る改む ○附皇后、原本附を陸に作る北本中本に據る改む
○宜爲儲君、天智紀に此事見えす ○收私兵器、天武天皇の御心遣ひし給ふこと至れりといふべし ○大納言蘇賀果安臣、天智紀十年には紀大入臣
勢人臣と共に爲御史大夫とあり此紀に皆大納言と書せるは採り給へる記録の異なるなり ○返焉、焉は北本中本に據る補ふ ○虎著翼放之、韓詩
外傳に無爲虎傅翼將飛入邑擇入而食とあるに據る評せるなり ○嶋宮、大和國高市郡島莊村(今高市村大字)にあり ○至吉野而居之、
吉野宮は應神紀雄略紀近くは齊明紀に行幸のこ見えれば其宮を修繕して坐せしなるべし

大納言蘇賀果安臣等送之自菟道返焉或曰虎著翼放之是夕御
鳴宮癸未至吉野而居之是時聚諸舍人謂之曰我今入道脩行故隨
欲修道者留之若仕欲成名者還仕於司然無退者更聚舍人而詔
如前是以舍人等半留半退十二月天命開別天皇崩

【元年】内小七位、内位
の事始めて見ゆ但其名目
は冠位制定の時より始り
しならむ内臣は外位に對
して尋常の位を云式部式
に凡元正行列次第外位不
得列内位上三代孫
神龜五年奏五位已上子孫
累世之冠蓋及明經秀才堪
爲儒者即叙内位自餘
先叙外位積勞入内等
とあり小七位は小建に當

元年春三月壬辰朔己酉遣内小七位阿曇連稻敷於筑紫告天皇喪於
郭務悰等於是郭務悰等咸著喪服三遍舉哀向東稽首壬子郭務悰
等再拜進書函與信物夏五月辛卯朔壬寅以甲冑弓矢賜郭務悰等是
日賜郭務悰等物總合緇一千六百七十三匹布二千八百五十二端綿
六百六十六斤戊午高麗遣前部富加抔等進調庚申郭務悰等罷歸是

れり
【五月】郭務悰等罷歸、
筑前郡大津より本國へ歸
るを云
○舍人朴井連、原本舍人
の二字なく連を遣に作る
舍人は中本に據り連は北
本應本中本に據る補ひ改
む續紀二に榎井連小君に
作る
○若不早避、原本早を早
に作る北本楓本應本に據
て改む
○倭京、下文に倭古京と
ある是なり後飛鳥岡本宮
を云
【六月】村國連男依、世
系詳ならず美濃國各務郡
村國郷あり神名式に同郡
村國神社續紀三に美濃國
言村國連等志實云々など
見ゆれば美濃の人なるべ
し
○和珥臣君手、録右京皇
別に和邇部天足彦國押人
命三世孫彦國革命之後也
とあり古くは和珥臣との
み書せり
○身毛君廣、身毛君は雄
略紀七年に見ゆ
○安八磨郡、美濃國安八
郡是なり
○湯沐令、原本令を命に
作る應本中本に據る改む

月、舍人朴井連雄君奏天皇曰臣以有私事獨至美濃時朝庭宣美濃尾
張兩國司曰爲造山陵豫差定人夫則人別令執兵臣以爲非爲山
陵必有事矣若不早避當有危歟或有人奏曰自近江京至于倭京處處
置候亦命菟道守橋者遮皇大弟宮舍人運私糧事天皇惡之因令
問察以知事已實於是詔曰朕所以讓位遁世者獨治病全身永終
百年然今不獲已應承禍何默亡身耶六月辛酉朔壬午詔村國連男
依和珥部臣君手身毛君廣曰今聞近江朝庭之臣等爲朕謀害是以汝
等三人急往美濃國告安八磨郡湯沐令多臣品治宣示機要而先發
當郡兵仍經國司等差發諸軍急塞不破道朕今發路甲申將入東時
有一臣奏曰近江群臣元有謀心必告天下則道路難通何無一人兵徒
手入東臣恐事不就矣天皇從之思欲返召男依等即遣大分君惠
尺黃書造大伴逢臣志摩于留守司高坂王而令乞驛鈴因以謂惠尺
等曰若不得鈴廼志摩還而復奏惠尺馳之往於近江喚高市皇子大

通證に謂湯沐邑令也
 ○多臣品治、多臣は綏靖紀即位前紀(卷上一〇二頁)に出づ品治は古事記の撰者安麻呂の父なり
 ○不破道、不破は美濃國不破郡なり軍防令に三關さあるを義解に伊勢鈴鹿美濃不破越前愛發さあり畿内の要路なり
 ○將入東、北本應本入の字なり伴氏云東は大和にして専ら伊賀伊勢邊を指したる文なりそれより近江路を指して物し給ひ大津の都に向ひて情狀を明め給はむとて發ます由にて御言舉し給へるなるべし
 ○元有謀心、原本元を无に作る應本中本に據て改む
 ○必告天下、原本告を造に作る中本に據て改む
 ○大分君、記に神八井耳命者大分君等之祖也さあり
 ○黃書造、天智紀十年(二四二頁)に見ゆ
 ○逢臣、世系詳ならず
 ○留守司、大和の古京に置かれたる司なり
 ○高坂王、世系詳ならず

津皇子逢於伊勢、既而惠尺等至留守司、舉東宮之命、乞驛鈴於高坂王、然不聽矣。時惠尺往近江、志摩乃還之。復奏曰、不得鈴也。是日發途入東國、事急不待駕、而行之。儻遇縣犬養連大伴鞍馬、因以御駕乃皇。后載輿從之。逮于津振川、車駕始至、便乘焉。是時元從者草壁皇子、忍壁皇子及舍人朴井連雄君、縣犬養連大伴佐伯連大目、大伴連友國、稚櫻部臣五百瀨、書首根摩呂、書直智德、山背直小林、山背部小田安斗、連智德、調首淡海之類、廿有餘人、女孺十有餘人也。即日、到菟田、吾城、大伴連馬來田、黃書造大伴、從吉野宮追至。於此時、屯田司舍人土師連馬手供從駕者、食過甘羅村、有獺者廿餘人、大伴朴本連大國爲獺者之首、則悉喚令從駕、亦徵美濃王乃參赴而從矣。運湯沐之米、伊勢國、五十匹、遇於菟田、郡家頭仍皆棄米而令乘步者、到大野、以日落也、山暗不能進行、則壞取當邑家籬爲燭、及夜半、到隱郡、焚隱驛家、因唱邑中曰、天皇入東國、故人夫諸參赴、然一人不肯來矣。將及

○高市皇子、大津皇子、共に天皇の御子なり
 ○東宮之命、大海人皇子は去年東宮を辭給ひたれど如此云はしめ給ふなり
 ○皇后、持統天皇に坐す持統紀に從天淳中原藏真人天皇避難東國、鞠旅會衆遂與定謀云々さあり
 ○津振川、大和志に吉野郡北至、宇陀界、村里津、風呂在龍門莊、疑是さあり今吉野郡龍門村津風呂
 ○草壁皇子、忍壁皇子、共に天皇の御子なり
 ○佐伯連大目、佐伯連は崇峻紀即位前紀に見ゆ大伴氏と同祖、天武紀十三年宿禰姓を賜ふ續紀に佐伯連大目封八十戸と連姓にせるは史の失なり
 ○大伴連友國、持統紀に贈大伴宿禰友國直大貳さあり
 ○稚櫻部臣五百瀨、原本百を十に作る北本應本中に據て改む持統紀十年直大壹を贈らる
 ○書首根麻呂、書首は應神紀十六年に出づ根麻呂は續紀大寶元年には尼麻呂に作り慶雲四年十月戊子に文忌寸禰麻呂卒さあり同人なり
 ○山背直、神代紀瑞珠盟約章に見ゆ
 ○安斗連智德、錄山城神別に阿刀宿禰石上朝臣同祖饒速日命孫味饒田命之後也阿刀連同上さあり阿刀は安斗に同じ
 ○調首淡海、錄左京諸蕃に調連水海道同祖百濟國努理使主之後也云々億計天皇御世蠶織獻綿絹之樣仍賜調首姓さあり
 ○菟田吾城、神名式に大和國宇陀郡阿紀神社あり大和志に宇陀郡拾生村舊名城(野)野さある是なり
 ○大伴連馬來田、本紀十二年六月大伴連望多薨さあり同人なり
 ○屯田司、仁德紀即位前紀に見ゆ天皇東宮に坐し時の司なるべし
 ○土師連馬手、續紀五に從四位下土師宿禰馬手卒さあり
 ○甘羅村、大和志に宇多郡有葛村疑此さあれ地理合はず
 ○大伴朴本連、錄左京神別に榎本連道臣命十世孫佐豆彦之後也さあり
 ○美濃王、二年紀に以小紫美

横河有黑雲、廣十餘丈、經天、時天皇異之、則舉燭親秉式、占曰、天下兩分之祥也。然朕遂得天下、歟。即急行到伊賀郡、焚伊賀驛家、逮于伊賀中山、而當國郡司等率數百衆歸焉。會明至荊萩野、暫停駕而進食、到積殖山口、高市皇子自鹿深、越以遇之。民直大火、赤染造德足、大藏直廣隅、坂上直國麻呂、古市黑麻呂、竹田大德、膽香瓦臣、安倍從焉。越大山至伊勢、鈴鹿、爰國司守三宅連石床、介三輪君子首、及湯沐令田中臣足麻呂、高田首新家等參遇于鈴鹿郡。則且發五百軍塞鈴鹿山道、到川曲坂下、而日暮也。以皇后疲之、暫留輿而息。然夜噎、欲雨、不得淹息。而進行、於是寒之雷雨已甚、從駕者衣裳濕以不堪寒、乃到三重郡家、焚屋一間、而令燼寒者。是夜半、鈴鹿關司遣使奏言、山部王、石川王、並來歸之、故置關焉。天皇便使路直益人徵。

濃王拜造高市大寺司あり傳詳ならず ○湯沐之米、湯沐の邑の租税を云 ○駄、上の租税米を運ぶ駄馬なり ○郡家頭、郡家は郡司の居所、下にコホリノミヤケと訓り ○大野、山邊郡なり大和より伊賀の名張へ越る道に今も大野村大野寺あり宇陀郡の堺に近し ○隱郡、伊賀國名張郡なり ○唱邑中、原本唱を昌に作る北本應本中本に據て改む ○天皇入東國、邑中に唱へしめられし令なる故に天皇と宣給はしめ給ひしなるべし ○不肯來矣、原本不を於に作る應本中本に據て改む ○横河、伴信友の説に今長田川といふ川なるべし云 ○乘式云々、通證に天皇精於通甲之故也史記日者傳旋式案隱曰按式即試也旋轉也試之形上圓象天方法地用之則轉天綱加地之辰故曰旋式前漢書王莽傳天文郎按試於前師古曰試所、以占時曰天文郎今之用試者也さあり ○伊賀驛家、通證に此疑今阿保驛云 ○逮于伊賀中山、中山は通證に在伊賀郡岡田村下河原村之間今中山寺之名存矣云原本逮を還に作る北本中本に據て改む ○多羅尾、近江甲賀郡信樂郡相接云云も地理違へり ○積殖山口、伊賀國阿拜郡積殖、郷太真さあり荆は蒨と同字、其地詳ならず同書に今云多羅尾、近江甲賀郡信樂郡相接云云も地理違へり ○積殖山口、伊賀國阿拜郡積殖、郷あり今の上中下栢植村にて加太越の山口なり ○白鹿深、鹿深は通證に近江甲賀郡此今所謂信樂越也さあれ通釋に伊勢國鈴鹿郡鹿太越にて加太分江より來ませるなり ○民直大火、民直は錄左京神別に天兒屋根命の後なること天穗日命の後なることあれ此大火は續紀大寶三年七月に民思寸大火さあり坂上氏と同祖なり ○赤染造德足、續紀十八に赤染造廣足等賜當世連姓錄左京諸蕃に當世連燕國王公孫淵之後也さあり ○大藏直、詳ならずあり坂上直、欽明紀廿一年に見ゆ ○古市黒麻呂、録河内諸蕃に古市村主出自百濟虎王さあり ○竹田大德、錄左京皇別に竹田朝臣武淳川別命の後左京神別に竹田連(神魂命の後)あり何れなるか詳ならず ○騰香瓦臣安倍、錄左京神別に伊香連天兒屋命十世孫巨知人命之後也さあり ○大山、伊賀國柘植より伊勢國鈴鹿に越ゆる山にて加太越なり云 ○國司守、伊勢國守なり ○三宅連石床、三宅連は垂仁紀九十九年に見ゆ石床は九年紀に卒す ○三輪君子首、五年紀に子あり子首は名なり云 ○田中臣足麻呂、田中臣は推古紀三十一年に見ゆ蘇我稻目の後なり ○高田首、孝德紀白雉四年に見ゆ續紀三に贈正六位上高田首新家從五位上さあり ○川曲、伊勢國河曲郡是なり ○夜曉、原本曉を曉に作る中本に據て改む ○三重郡家、三重は伊勢國三重郡是なり ○鈴鹿關司、軍防令に三關者設鼓吹軍器義解に謂伊勢鈴鹿美濃不破越前愛發等さあり ○山部王、世系詳ならず ○石川王、同上 ○路直益人、路直は錄右京諸蕃に路宿禰坂上大宿禰同祖さあり此同姓か

○迹太川、伊勢國朝明郡にあり通證に考地圖今朝開川南別有迹太川出海さあり五鈴遺響朝明郡迹保造拜所の條に町屋川の上流は星川と稱し下は途太河なりと云る説を非なりと今今朝明川なるべしと云り ○望拜天照大神、タヨセニヲガミタマフのタヨセは倭訓栞に手寄の義にヤ類案名物考には手寄にて手よりと云に同じと云惠

丙戌、旦於朝明郡迹太川邊望拜天照大神、是時益人到之奏曰、所置關者非山部王石川王是大津皇子也、便隨益人參來矣。大分君惠尺、難波吉士三綱、駒田勝忍人、山邊君安摩呂、小墾田猪手、渥部砥枳、大分君稚臣、根連金身、漆部友背之輩從之。天皇大喜、將及郡家、男依乘驛來奏曰、發美濃師三千人得塞不破道、於是天皇美雄依之務、既到

慶法師集に神の社に舟よりゆく人の波の高ければたよせにみてぐら奉る所をよめる、たよせは思はざらなむわつうみにいひの心は神ぞ知らむと見ゆ此事釋紀に私記曰按安斗智德日記云二十六日辰時於朝明郡迹太川上而拜天照大神さあり ○益人到之、原本人の下に益の字あり衍なり北本應本中本に據て削る ○難波吉士三綱、原本士を上に作る中本に據て改む ○駒田勝忍人、他に見えす勝は尸なればマサと訓むべし ○山邊君安摩呂、山邊君は雄略紀に見ゆ安摩呂は他に見えす ○小墾田猪手、舒明紀即位前紀に小墾田臣見ゆ猪手は他に見えす ○渥部砥枳、原本砥を賦に作る北本應本に據て改む渥部は系詳ならず砥枳は他に見えす ○大分君稚臣、原本君を若に作る北本に據て改む ○根連金身、録和泉皇別に根連布留宿禰同祖天足

郡家、先遣高市皇子於不破令監軍事、遣山背部小田安斗、連阿加布、發東海軍、又遣稚櫻部臣五百瀨、土師連馬手、發東山軍。是日天皇宿于桑名郡家、即停以不進。是時近江朝聞大皇弟入東國、其群臣悉愕。京内震動、或遁欲入東國、或退將匿山澤。爰大友皇子謂羣臣曰、將何計、一臣進曰、遲謀將後、不如急聚驍騎、乘跡而逐之。皇子不從、則以韋那公磐鍬、書直藥、忍坂直大摩侶、遣于東國、以穗積臣百足及弟五百枝、物部首日向、遣于倭京、且遣佐伯連男於筑紫、遣禰使主磐手於吉備國、並悉令興兵、仍謂男與磐手曰、其筑紫大宰栗隈王、與吉備國守當摩公廣嶋二人、元有隸大皇弟、疑有反歟、若有不服色、即殺之。於是磐手到吉備國、授符之日、給廣嶋令解刀、磐手乃拔刀以殺也。男至筑紫時、栗隈王承符對曰、筑紫國者元成邊賊之難也、其峻城深、湟臨海守者、豈爲內賊耶、今畏命而發軍、則國空矣。若不意之外、有倉卒之事頓社稷傾之、然後雖百殺臣、何益焉。豈敢背德耶、輒不動兵者、其是緣也。時栗隈王之二子三野王、武家王、佩劍立于側、而無退、於是男

國彥押人命之後也。こあり
 金身は他に見えず
 ○漆部友背、原本友を支
 に作る北本應本本に據
 て改む漆部は用明紀二年
 に見ゆ
 ○郡家、朝明の郡家なり
 五鈴遺響に朝明郡鶴村伊
 加留我神社より申酉一丁
 許に緒土の小山あり其麓
 に小祠あり是天武天皇頓
 宮地なりと云
 ○雄依之務、雄依は村國
 男依なり務はイサヲ、イ
 サミと訓めるに據れば勞
 の誤か
 ○到郡家、伊勢の桑名の
 郡家なり
 ○東海軍、東海道の軍な
 り
 ○東山軍、東山道の軍な
 り釋紀に私紀曰安斗智德
 日記云令發信濃兵とあ
 り
 ○桑名郡家、通證に勢陽
 雜記曰桑名郡矢田村有
 小祠相傳祭天武天皇此
 蓋頓宮跡也と云
 ○大皇弟、當時の稱にて
 書きしま、改められざり
 じなり
 ○章那公磐楯、章那公は
 宣化紀元年に見ゆ
 ○書首樂、書直は舒明紀

按、劍欲進、還恐見亡、故不能成事而空還之、東方驛使磐楯等將及
 不破磐楯獨疑山中有兵、以後之緩、之行時伏兵自山出遮藥等之後
 磐楯見之知藥等見捕、則返逃走僅得脫、當是時、大伴連馬來田弟吹
 負並見時、否、以稱病退於倭家、然知其登嗣、位者必所居吉野、大皇
 弟、矣、是以馬來田先從天皇、唯吹負留謂、立名于一時、欲寧、艱難、
 即招一二族及諸豪傑、僅得數十人、丁亥、高市皇子遣使於桑名、郡家以
 奏言、遠居、御所、行、政、不、便、宜、御、近處、即日、天皇留皇后而入、不
 破、比及郡家、尾張國、司守小子部連鉏鉤率二萬衆、歸之、天皇即美之、
 分、其軍塞處處、道也、到于野上、高市皇子自和暨參迎、以便奏言、昨夜
 自近江、朝驛使馳至、因以伏兵而捕者、則書直藥、忍坂、直大麻呂也、問何
 所往、答曰、爲所居吉野、大皇弟、而遣發東國軍、章那公、磐楯之徒也、然磐
 楯見兵起、乃逃還之、既而天皇謂高市皇子曰、其近江朝、左右大臣及智
 謀群臣共定議、今朕無與計事者、唯有幼少孺子耳、奈之何皇子、攘
 臂、按劍奏言、近江羣臣雖多、何敢逆天皇之靈、哉、天皇雖獨、則

(一四七頁)に見ゆ
 ○忍坂直大摩侶、忍坂直
 は皇極紀三年に見ゆ
 ○及弟五百枝、北本應本
 に及の字なし原本五の字
 を脱す下文に據て補ふ
 ○物部首日向、物部首は
 垂仁紀卅九年に見ゆ
 ○佐伯連男、續紀四に
 授大倭守從五位下佐伯
 宿禰男從五位上に見ゆ
 ○榊使主榊手、榊使主は
 系詳ならず原本磐の上に
 盤の字あるは衍なり北本
 應本中本に據て削る
 ○栗隈王、天智紀十年に
 以栗隈王爲筑紫帥と
 あり
 ○當摩公廣嶋、當摩公は
 用明紀元年に見ゆ
 ○大皇弟、中本此下に也
 の字あり
 ○到吉備國、原本吉の字
 を脱す北本中本に據て補
 ふ
 ○武家王、他に見えず
 ○緩之行、北本應本之
 字なし
 ○吹負、始めて見ゆ十二
 年の紀に大伴連吹負卒
 以壬申年之功賜大錦中
 位とあり
 ○遠居御所、通證に遠居
 之御所也舊讀誤とあり

臣高市賴神祇之靈、請天皇之命、引率諸將而征討、豈有距乎、爰天皇
 譽之、携手撫背、曰、慎不可怠、因賜鞍馬、悉授軍事、皇子則還和暨、天皇
 於茲行宮、與野上而居焉、此夜、雷電雨甚、則天皇祈之曰、天神地祇扶
 朕者、雷雨息矣、言訖、即雷雨止之、戊子、天皇往於和暨、檢校軍事而還、
 己丑、天皇往和暨、命高市皇子號令軍衆、天皇亦還于野上而居之、是
 日、大伴連吹負密與留守司坂上直熊毛議之、謂一二漢直等曰、我詐稱
 高市皇子率數十騎、自飛鳥寺北路出之、臨營、乃汝內應之、既而繕兵
 於百濟家、自南門出之、先秦造熊令、犢鼻而乘馬馳之、俾謂於寺西營
 中曰、高市皇子自不破至、軍衆多從、爰留守司高坂王及興兵使者穗積
 臣百足等、據飛鳥寺西槻下爲營、唯百足居小墾田兵庫、運兵於近江、時
 營中軍衆聞熊叫聲、悉散走、仍大伴連吹負率數十騎、劇來、則熊毛
 及諸直等共與連和、軍士亦從、乃舉高市皇子之命、喚穗積臣百足於小
 墾田、兵庫、爰百足乘馬、緩來、逮于飛鳥寺西槻下、有人曰、下馬也、時百
 足下馬遲之、便取其襟、以引墮、射中一箭、因拔刀斬而殺之、乃禁穗積

○留皇后云々、通證に桑名至於熱田之海路謂間遠濟蓋天皇憶皇后故爲名云々云々

○小子部連、雄略紀六年(卷上二六八頁)に見ゆ

○組鈎、原本鈎を鈎に作る下文に據て改む

○野上、美濃國不破郡野上鄉是なり

○和豐、美濃國各務郡にあり今の不破郡野原なり云

臣五百枝、物部、首日向、俄而赦之置軍中、且喚高坂王、稚狹王、而令從軍焉、既而遣大伴連安麻呂、坂上直老、佐味君宿那麻呂等、於不破宮、令奏事狀、天皇大喜之、因乃令吹負拜將軍、是時、三輪君高市麻呂、鴨君蝦夷等、及羣豪傑者、如響、悉會將軍麾下、乃規襲近江、因以撰衆中之英俊爲別將及軍監、初向乃樂。

○則書直樂、則の字は北本應本中本に據て補ふ

○緩行、原本緩の下に之の字あり北本楓本に據て削る

○則、北本中本に據て補ふ

○爲所居吉野大皇弟云々、詭て天皇の御方なりと答へたるなり

○幼少孺子、原本幼の下小の字あり北本中本に據て削る此時草壁太子は十一歳大津皇子は九歳高市皇子は十八九歳に坐まじ、なり故にかく宣給へり

○天皇雖獨、四字の句なり獨の下に居の字を補へるは非なり

○則天皇、北本楓本則の字なし

○留守司、大倭舊京の留守司なり

○飛鳥寺、高市郡飛鳥村にあり

○臨營、營は留守司高坂王軍を興して屯み居る所なり下文に寺西營また據飛鳥寺西楓下爲營とも見ゆ

○百濟家、吹負が家なり今北葛城郡に百濟村あり

○秦造熊、原本秦を奏に作る北本應本中本に據て改む

○積積臣五百枝、物部首日向、二人共に興兵使代紀に見ゆ是は裸體を云近江より急ぎて馳至れるさまにものしたるなり集解に按令下脱著字云云

○積積臣五百枝、物部首日向、二人共に興兵使波朝右大臣大紫長徳之弟之子也とあり

○坂上直老、此氏後に思寸の姓さなれり續紀六に大將軍正三位大伴宿禰安麻呂薨帝深悼之詔贈從二位安麻呂難諸本に據て改む十四年紀に直廣肆佐味朝臣少(ス)麻呂に作る録右京皇別佐味朝臣上毛野朝臣同祖豐城入彦命之後也とあり

○三輪君高市麻呂、三輪君は崇神紀八年に見ゆ高市麻呂は續紀三に左京大夫從四位上大神朝臣高市麻呂卒贈從三位とあり懷風藻には從三位中納言と見えたり

○鴨君蝦夷、原本鴨の下茂の字あり北本應本に據て削る中本には鴨を甘茂に作る蝦夷は持統紀九年に以直廣參贈賀茂朝臣蝦夷并賜賻物本位勳大壹とあり

○因以、此二字北本應本中本になじ

○別將及軍監、別將の傍訓に據れば別將の誤ならむか、軍防令に凡將帥出征兵滿二萬人以上將軍一人副將軍二人軍監三人とあり軍監の下原本庚寅の二字あり集解に據釋述義刪とあるに從ふ

秋七月庚寅朔辛卯、天皇遣紀臣阿閉麻呂、多臣品治、三輪君子首置始連、莚、率數萬衆、自伊勢大山越之向倭、且遣村國連男依、書首根麻呂、和珥部臣君手、膳香瓦臣安倍、率數萬衆、自不破出、直入近江、恐其衆

(七月)置始連莚、此氏孝德紀白雉五年に見ゆ續紀七に贈小錦上置始連宇佐支息正八位下虫麻呂賜田とあり

○伊勢大山、鈴鹿山なり但此なるは其山續きの鹿

太越なり

○以赤色著衣上、通證に荒井氏曰此後世笠標之所由起也とあり

○屯于菟野、于の字は北本應本中本に據て補ふ

○令守倉歷道、倉歷は近江國甲賀郡藏部郷あれ此は伊賀國伊賀郡倉部なるべし

○犬上川、近江國犬上郡の中央を流る、川なり

○山部王云々見殺、山部王は此軍將に任ぜられ給ひしが變心して吉野方にならむと爲給へる事なごのありて殺され給ひしにやあらむ

○羽田公八國、原本八を矢に作る北本及十二年紀に據て改む録左京皇別に八多真人出自自證應神皇子稚野毛二侯王とあり十二年十月紀に羽田公賜姓曰真人八國卒以王申年之功贈直大壹位とあり

○入越、八國が大津朝の將軍なりしを耻かしめ給はず更に將軍に拜して越を治めに遣はし給ひしなり

○玉倉部、記景行天皇の

與近江師難別、以赤色著衣上、然後別命多臣品治、率三千衆、屯于菟野、遣田中臣足麻呂、令守倉歷道、時近江命山部王蘇賀、臣果安、巨勢臣比等、率數萬衆、將襲不破、而軍于犬上川濱、山部王爲蘇賀、臣果安、巨勢臣比等見殺、由是亂以軍不進、乃蘇賀、臣果安自犬上返刺頸而死、是時近江將軍羽田公八國、其子大人等率已族來降、因授斧鉞、拜將軍、即北入越、先是近江放精兵、忽衝玉倉部邑、則遣出雲臣狛擊追之、壬辰、將軍吹負屯于乃樂山上、時荒田尾直赤麻呂啓將軍曰、古京是本營處也、宜固守、將軍從之、則遣赤麻呂忌部首子人、令戍古京、於是赤麻呂等詣古京、而解取道路橋板、作楯豎於京邊、衢以守之、癸巳、將軍吹負與近江將大野君果安戰于乃樂山、爲果安所敗、軍卒悉走、將軍吹負僅得脫身、於是果安追至八口、而視京、每街豎楯、疑有伏兵、乃稍引還之、甲午、近江別將田邊小隅越鹿深山、而卷幟抱鼓詣于倉歷、以夜半之、衛梅穿城、劇入營中、則畏已卒、與足摩侶衆難別、以每人令言金、仍拔刀而毆之、非言金乃斬耳、於是足摩侶衆悉亂、事忽起、不知所爲、唯足摩

段に倭建命命到玉倉部之清水云々○出雲臣狛、續紀大寶二年八月授出雲臣狛從五位下あり

○擊追之、下文に初將軍吹負向乃樂至種田之日云々是時河内國司來目臣塩籠有歸於不破宮之情以集軍衆爰韓國到之、密聞其謀而將殺之、鹽籠鹽籠知事漏乃自死焉○壬辰、是より大和にての事なり

侶聰知之獨言金以僅得免、乙未、小隅亦進欲襲、荊萩野營而急到、爰將軍多、臣品治遮之、以精兵追擊之、小隅獨免走焉、以後遂復不來也、丙申、男依等與近江軍戰、息長橫河破之、斬其將境部、連藥、戊戌、男依等討近江、將秦、友足於鳥籠山、斬之、是日、東道將軍紀臣阿閉麻呂等聞倭京將軍大伴、連吹負爲近江所敗、則分軍以遣置始、連莢、率千餘騎而急馳、倭京、

○荒田尾直赤麻呂、楓本中本赤を明に作る次も同じ録和泉皇別に荒田尾直高魂命五世孫銀根命之後也○古京、飛鳥岡本宮 ○宜固守、原本固を國に誤る中本楓一本に據て改む ○忌部首子人、續紀八に散位從四位上忌部宿禰子人卒○大野君果安、錄右京皇別に大野朝臣豐城入彦命四世孫大荒田別命之後也 ○八口、詳ならず古京に近き所なるべし集解に八田に改作り城下郡の地名なり ○企、楓本企に作る字書に企は人在山上と注せり ○京、上に所謂古京なり ○田邊小隅、詳ならず ○鹿深山、原本鹿を麻に作る北本應本中本に據て改む ○抱鼓、原本抱を拖に作る北本應本中本に據て改む ○倉歷、上に令守倉歷道と見ゆ ○銜梅、應本及紀略梅を枚に作るクチキは口木なり釋紀に私記曰師說梅與枚同也字書に枚如箸軍士銜之禁其語也○已卒、原本卒を率に作る諸本に據て改む ○足應侶、原本摩を麻に作る諸本及下文に據て改む ○男依等、上文二日の條に男依等自不破出直入近江とあり ○息長橫河、近江國坂田郡にあり續紀十三に從不破發至坂田郡橫川頓宮と見ゆ息長川は今能登瀨川と云湖の出口にては天川とも云橫河は後の醜井の宿なりとぞ ○鳥籠山、近江國大上郡にあり萬葉四に淡海路乃鳥籠之山と詠み今鳥居本村の南大字原なる正法寺山を云とぞ ○是日、尙九日にて是より大和の事に係れり

○社戸臣大口、孝徳紀大化元年に阿倍渠曾倍臣と見ゆ ○栗太軍、栗太は近江國栗太郡是なり栗太軍は近江方の軍を云 ○瀨田、近江國栗太郡にあり ○群臣等、略記に亦率數萬兵とあり ○營於橋西、勢田橋の西なり ○旗幟蔽野、以下十六字後漢書光武紀に據れり列弩以下十字亦同じ ○列弩、抄調度部に兼名苑注云弩於保田美黃帝造也とあり ○大分君稚臣、八年紀に大分君稚見卒當壬申年大役爲先鋒之破瀨田營由是功贈外小錦上位とあり ○將軍智尊、原本將の字なし北本應本に據て補ふ ○粟津岡、粟津は勢多橋の西にあり ○三尾城、近江國高嶋郡にあり續紀即位前紀に見ゆ ○犬養連五十君、孝徳紀大化二年に見ゆ ○谷直鹽手、錄山城諸蕃に谷直漢師建王之後也と

矢下如雨、其將智尊率精兵以先鋒距之、仍切斷橋中、須容三丈置一長板、設有蹋板度者、乃引板將墮、是以不得進襲、於是有勇敢士曰大分君稚臣、則棄長矛以重擲甲、拔刀急蹈板度之、便斷著板綱、以被矢入陣、衆悉亂而散走之、不可禁、時將軍智尊拔刀、斬退者、而不能止、因以斬智尊於橋邊、則大友皇子左右大臣等、僅身免以逃之、男依等即軍于粟津岡下、是日、羽田公矢國、出雲臣狛、合共攻三尾城、降之、壬子、男依等斬近江將犬養連五十君、及谷直鹽手於粟津市、於是大友皇子走、無所入、乃還隱山前、以自縊焉、時左右大臣及群臣皆散亡、唯物部連麻呂且一二舍人從之、初將軍吹負向乃樂、至稗田之日、有人曰、自河内軍多至、則遣坂本臣財長尾直眞墨、倉壻直麻呂、民直小鮪、谷直根麻呂、率三百軍士距於龍田、復遣佐味君少麻呂、率數百人屯大坂、遣鴨君蝦夷、率數百人守石手道、是日、坂本臣財等次于平石野、時聞近江軍在高安城、而登之、乃近江軍知財等來、以悉焚稅倉、皆散亡、仍宿城中、會明臨見西方、自大津丹比兩道軍衆多至、顯見旗幟、有人曰、近江將壹伎、史韓國之

あり
 ○走無所入、懷風藻に時
 經亂離、悉從煨燼、こあ
 れば近江京は兵火に罹り
 し故に入らせ給ふべき所
 も無りしなりむ
 ○山前、廟陵記に山前長
 等山之前也、あり今の三
 井寺の地なり
 ○自縊、此天皇御終焉の
 地及御陵所は上にも云る
 如く山前にて別所村に在
 り、陵墓一覽にも滋賀郡別
 所村塚字龜つかさ稱す元
 は三井寺山内の地なりと
 ぞ其地は天皇崩給ひにけ
 れば與多王計ひ給ひて先
 づ御骸を其地に葬奉り置
 きて天武天皇三年に至て
 遺詔の如く其陵地に圓城
 寺三井寺を建立させて與
 多王に司り奉仕せしめ給へ
 るなり
 ○物部連麻呂、五年紀に
 大乙上にて爲新羅大使、
 十年紀に授小鏡下位、續
 紀に養老元年三月癸卯左
 大臣正二位上朝臣麻呂
 薨帝深悼惜焉爲之罷朝
 百姓追慕無不痛惜焉大
 臣泊瀬朝倉朝廷大連物部
 目之後難波朝衛部大花上
 字麻呂之子也、あり
 ○初將軍吹負云々、是よ

師也、財等自高安城降、以渡衛我河、與韓國戰于河、西財等衆少不能距、
 先是遣紀臣大音令守懼坂道、於是財等退懼坂道而居、大音之營是時、
 河内國司守來目、臣鹽籠有歸於不破宮之情、以集軍衆、爰韓國到之、密
 聞其謀、而將殺鹽籠、鹽籠知事漏、乃自死焉、經一日、近江軍當諸道多
 至、即並不能相戰、以解退、是日、將軍吹負爲近江所敗、以獨率一二騎、走
 之、逮于墨坂、遇逢菟軍至、更還屯金綱井、而招聚散卒、於是聞近江軍
 至、自大坂道、而將軍引軍如西、到當麻、衢與壹伎、史韓國軍戰葦池、側時
 有勇士來目者、拔刀急馳直入軍中、騎士繼踵而進之、則近江軍悉走
 之、追斬甚多、爰將軍令軍中曰、其發兵之元意非殺百姓、是爲元凶、
 故莫妄殺、於是韓國離軍獨逃也、將軍遙見之、令來目以俾射、然不中、
 而遂走得免焉、將軍更還本營、時東師頻多臻、則分軍各當上中下道、
 而屯之、唯將軍吹負親當中道、於是近江將犬養連五十君自中道至之、
 留村屋、而遣別將廬井造鯨、率二百精兵、衝將軍營、當時麾下軍少、以
 不能距、爰有大井寺、奴名德麻呂等五人從軍、即德麻呂等爲先鋒、以進

り立返りて又大和にての
 事を記せるなり下文によ
 りて推考ふるに七月庚寅
 朔に當れり
 ○稗田、神名式大和國添
 上郡賣太神社稗田村にあり
 ○軍多至、近江の軍なり
 ○坂本臣財、坂本臣は安
 康紀に見ゆ財は二年紀に
 大錦上坂本財臣卒、由王
 申年之勞贈小紫位、あり
 ○長尾直眞鬮、系詳なら
 ず
 ○倉嶋直麻呂、姓氏錄に
 椋桓朝臣あれ、異姓なり
 氏族志に按坂上系圖引
 姓氏錄藏垣氏系出志努
 子刀禰、又有無姓者、見
 外記日記、又見除目大成
 鈔蓋皆是族也、云り
 ○民直小鮪、六月に出づ
 ○龍田、神武紀戊午年に出づ
 龍田より河内へ越ゆ
 る今の龍野越なり
 ○大坂、大和國葛上郡大
 坂郷にあり記垂仁の段に
 大坂戸とある是なり
 ○鴨君、中本鴨を甘茂に
 作る
 ○石手道、集解に按河内
 志曰間道岩室イハ、嶺葛
 下郡堺至山田二十町蓋

射之、鯨軍不能進、是日、三輪君高市麻呂置始、連菟當上道戰于箸、
 大破近江軍、而乘勝兼斷鯨軍之後、鯨軍悉解走、多殺士卒、鯨乘白馬、以
 逃之、馬墮溼田不能進行、則將軍吹負謂甲斐勇者曰、其乘白馬者、廬
 井鯨也、急追以射、於是甲斐勇者馳追之比、及鯨、々急鞭馬、馬能拔以出
 溼、即馳之得脫、將軍亦更還本處、而軍之自此以後、近江軍遂不至、先
 是軍金綱井之時、高市郡大領高市縣主許梅、儵忽口閉而不能言也、
 三日之後、方著神以言、吾者高市社所居名事代主神、又牟狹社所居名
 生靈神者也、乃顯之曰、於神日本磐余彥天皇之陵、奉馬及種々兵器、
 便亦言、吾者立皇御孫、命之前後、以送奉于不破、而還焉、今且立官軍中、
 而守護之、且言、自西道軍衆將至之、宜慎也、言訖、則醒矣、故是以便遣許
 梅、而祭拜御陵、因以奉馬及兵器、又捧幣而禮祭高市身狹二社之神、然
 後、壹伎史韓國自大坂來、故時人曰、二社神所教之辭、適是也、又村屋
 神著、祝曰、今自吾社中道軍衆將至、故宜塞社中道、故未經幾日、廬井
 造鯨軍自中道至、時人曰、即神所教之辭是也、軍政既訖、將軍等舉是三

神教言而奏之即勅登進三神之品以祠焉

此あり ○平石野、河内志に平石嶺在平石村上方葛下郡城あり今南河内郡に平石あり白木村と稱す ○登之、京極本に登を發に作る云 ○焚稅倉、原本稅の上に秋の字あり北本に據て削る ○仍宿南河内郡高鷲村なり ○丹比、河内國丹比郡なり原本丹を舟に作る北本楓本中本に據て改む ○兩道、高安郡より西方に當れり ○壹伎史韓國、壹改む懼坂は萬葉六に手向爲等恐乃坂爾幣奉とある恐乃坂にて略解に之を大和より河内へ越ゆる坂なり ○退懼坂道、原本道の字なり釋紀に據て補ふ ○來目臣鹽籠、來目臣は孝德紀大化元年に見ゆ鹽籠は詳ならず ○經一日、中一日を隔て、なり即ち癸巳四日 ○以解退、大音等が戰に堪へずして近江の軍解退せるなり ○奉一二騎走之、上文に癸巳將軍吹負僅得脱身見えし時の事なり ○墨坂、大和國宇陀郡なり神武紀崇神紀に見ゆ同郡秋原の西にありて伊賀伊勢へ越ゆる坂路なり ○金網井、集解に據下文蓋高市郡地名高市郡有飛鳥井井谷井遊部井桑原井秀泉井御蔭井等郡なり其舊趾は大和志に今葛下郡真福寺村有衢池廣三十畝即衢舊趾あり今北葛城郡當麻村に當麻寺あり ○將軍、吹負なり ○當麻、當麻は大和國葛下寺村廣三百三十餘畝あり ○俾財、俾は衍ならむ ○本營、集解に按據前文本營即高市郡岡本とあり ○上中下道、集解に按據後文上道城上郡、中道城下郡、下道高市郡と云 ○村屋、城下郡の地名なり式に城下郡村屋坐彌富都比賣神社あり今磯城郡川東村大字森屋あり其附近をかつて云 ○廬井造鯨、姓氏錄に見えず鯨も詳ならず ○衝將軍營、原本衝を衝に作る應本楓本中本に據て改む ○高市郡なり ○大井寺、詳ならず按に敏達紀元年に百濟大井家あり是は河内國錦郡百濟郷にあり今其地に大井村あれば其地に在りし寺なるべし ○箸陵、倭迹々姫命の御墓なり崇神紀十年に見ゆ大和國磯城郡織田村大字箸中にあり ○本處、高市郡の本營 ○高市縣主、記に天津日子根命者高市縣主之祖也(姓氏錄亦同)とあり ○高市社、原本社を村に作る北本楓本中本に據て改む神名式に大和國高市郡平佐坐神社志に在三瀬村(今畝傍町大字見瀬)今稱境原天神とあり ○生靈神、原本靈を雷に作る應本及釋紀に據て改む(北本には雷をミタマと訓み中本には靈歟と傍書す)伴氏の説に生靈は生産日神に同じく事代主神と共に神祇官に坐御巫祭神八座の中なりと云り ○顯之、神意を顯すを云 ○立皇御孫命云々、皇御孫命は神より天皇を申奉らせ給ふ稱なり天皇の吉野を發し給へるより二神其前後に立ちて守護し奉り給ふことなり ○自西道云々、近江方の壹伎史韓國が西道より至らむ事を豫め示し給へるなり ○祭拜御陵云々、是は金網井の營にて吹負が計ひて捧幣せしなり ○村屋神、神名式に城下郡村屋坐彌富都比賣神社大和志に在藏堂村今稱天王とあり藏堂は今川東村の大字なり森屋と隣接す ○宜塞社中道、道は上中下の道と當なり ○軍政既訖、此時の亂治りて後の事を因に此に載せられたるなり ○登進三神之品以祠、三神は上の高市平狹村屋三社の神、品を登進とは當時の恒例の祭典を更めて此度の守護の報賽に其品を登進て祭り給へる由なるべし當時神に位階を授け給へる事は未だあらず

辛亥、將軍吹負既定倭地、便越大坂往難波、以餘別將等各自三道進至于山前屯河南、即將軍吹負留難波小郡而仰以西諸國司等令進官

次を逐て記したるなり ○往難波、大坂を越えて河内に入りそれより難波に往きしなり ○以餘別將、上の大和にての條の合吹負三將軍是時三輪君高市麻呂云々及群豪傑者云々爲別將軍監とある人々なり ○自三道進、上に見たる上中下の道より近江に進み入たるなり一説には三道とは一は難波、一は山城、一は伊賀よりなるべしと云り ○即將軍留難波小郡、即及留の字は北本應本中本に據て補ふ小郡は孝德紀大化三年に見ゆ ○以西諸國、難波以西の國々なり ○官鑰驛鈴傳印、官鑰は國郡の諸庫の鍵なり驛鈴傳印は國司に附せられし驛鈴傳印にて使を遣し兵器糧食を輸送するには最も必要のものなれば一時之を官に返上せしめて近江方に應ずることを得ざらしめられしなり ○彼浪、原本彼をに作る類史に據て改む應本中

鑰驛鈴傳印、癸丑、諸將軍等悉會於彼浪、而探捕左右大臣及諸罪人等乙卯、將軍等向於不破宮、因以捧大友皇子、頭而獻于營前、八月庚申朔甲申、命高市皇子宣近江、群臣犯狀、則重罪八人坐極刑、仍斬右大臣中臣連金於淺井田根、是日左大臣蘇我臣赤兄、大納言巨勢臣比等及子孫并中臣連金之子蘇我臣果安之子悉配流、以餘悉赦之、先是尾張國司守少子部連鉏鉤、山自死之、天皇曰、鉏鉤有功者也、無罪何自死、其有隱謀歟、丙戌、恩勅、諸有功勳者而顯寵賞、九月己丑朔丙申、車駕還宿伊勢桑名、丁酉、宿鈴鹿、戊戌、宿阿閉、己亥、宿名張、庚子、詣于倭京、而御嶋宮、癸卯、自嶋宮移岡本宮、是歲、營宮室於岡本宮、南、即冬遷以居焉、是謂飛鳥淨御原宮、冬十一月戊子朔辛亥、饗新羅客、金押實等於筑紫、即日賜祿各有差、十二月戊午朔辛酉、選諸有功勳者增加冠位、仍賜小山位以上各有差、壬申、船一隻賜新羅客、癸未、金押實等罷歸、是月大紫韋那公高見薨

本條に作る倭瀛は志賀の地方の總名なり
 ○捧、應本及釋紀になし
 (八月)八月、按に扶桑略記に八月天皇幸于野上宮立年號爲朱鳥元年大宰府獻三足赤雀仍爲年號さあり水鏡亦同然れ年號の事は未だ徧く天下に行はれざりしが故に此紀には漏じたるなるべし續紀九神龜元年の詔に白鳳以來朱雀以前年代支遠さあれば年號のありしこ明なり
 ○淺井田根、淺井は近江國の郡名田根は郡に田根郷あり今田根村(東淺井郡)云其處なるべし北本應本及類史には根の字なく中本及紀略本書に同
 ○果安之子、父果安は軍中に死せり
 ○配流、令義解に凡配流之人官位皆悉追取さあり此所に出たる人々は天智紀十一年の誓盟に與りし者なり然るを此五人の中紀大人臣一人は此に見えず紀中にも記せる事なきは御軍の事起れる頃より竊に吉野に心を寄せ時を窺ひて逃匿れて在りしなるべく紀氏系圖に大口臣子大人大納言天武十五、十六、三薨さあるを詳なる證なるさ長等の風に云り(九月)阿閉、原本阿を河に作る北本應本中本に據て改む伊賀國阿拜郡にあり地理志料に阿閉郷は政國神社所在の地にて後の一宮郷なり云一宮郷は一宮千歲佐那具外山の諸村なれば此の御舊蹟は蓋佐那具附近なるべし○名張、伊賀國名張(今名賀)郡に名張町あり其地なるべし○移岡本宮、嶋宮に三宿して此宮に移り給へり岡本宮は大津に遷都の後離宮として遺し置かれたるべし○飛鳥淨御原宮、大和國十市高市兩郡古述考に高市郡上屋村は淨御村なり人皇四十代天武天皇の皇居也さあり今の高市郡高市村大字上居村なり(十二月)仍賜祿、原本祿の字なき考に據て補○各有差、二年紀にも二月乙酉有勳功二人等賜爵有差さありかくて壬申役に出でし人々の官位を進め食封を賜ふ、こ持統紀に見ゆ

日本書紀卷第廿八

日本書紀卷第廿九

御座なり
 ○二年(二月)壇場、高時特貴故曰尊釋作日下太子又曰日並皇子文武元正之皇考也萬葉には日並皇子命又日並皇子ともあり御追號の事は續紀廿一に天平寶字二年八月日並知皇子命追崇尊號奉稱岡宮御宇天皇と見ゆ
 ○大田皇女、天智天皇の皇女
 ○大來皇女、齊明紀七年に大伯に作る續紀二に大寶二年十二月大伯内親王薨さあり
 ○大津皇子、持統紀即位前紀に皇子大津謀反發覺賜死さあり
 ○大江皇女、天智天皇の皇女

天淳中原瀛真人天皇下 天武天皇
 二年春正月丁亥朔癸巳置酒宴 群臣二月丁巳朔癸未天皇命
 有司設壇場即帝位於飛鳥淨御原宮立正妃爲皇后后生草壁皇子
 尊先納皇后姉大田皇女爲妃生大來皇女與大津皇子次妃大江皇
 女生長皇子與弓削皇子次妃新田部皇女生舍人皇子又夫人藤原
 大臣女氷上娘生但馬皇女次夫人氷上娘弟五百重娘生新田部皇子
 次夫人蘇我赤兄大臣女大薤娘生一男二女其一曰穗積皇子其二曰
 紀皇女其三曰田形皇女天皇初娶鏡王女額田姬王生十市皇女次納
 胷形君德善女尼子娘生高市皇子命次完人臣大麻呂女櫛媛娘生
 二男二女其一曰忍壁皇子其二曰磯城皇子其三曰泊瀨部皇女其四

○長皇子、續紀六に靈龜元年六月一品長親王薨天武天皇第四之皇子也とあり
 ○弓削皇子、續紀一に文武天皇三年七月弓削皇子薨天武天皇之第六皇子也とあり
 ○新田部皇女、天智天皇の皇女
 ○舍人皇子、續紀十二に天平七年十一月知太政官事一品舍人親王薨賜太政大臣親王天淳中原瀧真人天皇第三皇子也同廿二に天平寶字三年六月詔自今以後追尊舍人親王宜稱崇道盡敬皇帝とあり
 ○但馬皇女、續紀四に和銅元年六月三品但馬內親王薨天武天皇之皇女也とあり
 ○新田部皇子、續紀十二に天平七年九月一品新田親王薨天淳中原瀧真人天皇第七子也とあり
 ○大養娘、續紀九に神龜元年七月夫人正三位石川朝臣大養比賣薨とあり北本應本中大太に作る
 ○櫻積皇子、續紀六に靈龜元年七月知太政官事一品櫻積親王薨天武天皇第五子也とあり
 ○紀皇女、萬葉十二に紀皇女竊嫁高安王とあり
 ○田形皇女、續紀十に神龜五年三月二品田形親王薨天淳中原瀧真人天皇之皇女也とあり
 ○鏡王女額田姬王、原本女字なし北本應本中本及紀略に據て補ふ鏡王は系詳ならず集解に疑舒明天皇孫とあり額田姬王は始め天武天皇にめされて十市皇女を生み後又天智天皇の妃とされたり
 ○十市皇女、天皇の御長女なり天武天皇の未だ皇子に坐し、時の皇女也故竊以謀事、隱進消息也と記せり本紀七年に薨す
 ○智形君德善、原本智野宮に告し給ふ事あり此事を扶桑略記に世傳大友皇子之妃是天武天皇女也故竊以謀事、隱進消息也と記せり本紀七年に薨す
 ○智形君德善、原本智野宮に告し給ふ事あり此事を扶桑略記に世傳大友皇子之妃是天武天皇女也故竊以謀事、隱進消息也と記せり本紀七年に薨す
 ○智形君德善、原本智野宮に告し給ふ事あり此事を扶桑略記に世傳大友皇子之妃是天武天皇女也故竊以謀事、隱進消息也と記せり本紀七年に薨す

日託基皇女乙酉、有勳功人等賜爵有差、三月丙戌朔壬寅、備後國司獲白雉於龜石郡而貢、乃當郡課役悉免、仍大赦天下、是月、聚書生始寫一切經於川原寺、夏四月丙辰朔己巳、欲遣待大來皇女于天照大神宮、而令居泊瀨齋宮、是先潔身、稍近神之所也、五月乙酉朔、詔公卿大夫及諸臣連并伴造等曰、夫初出身者、先令仕大舍人、然後選簡其才能、以充當職、又婦女者、無問有夫無夫及長幼、欲進仕者聽矣、其考選准官人之例、癸丑、大錦上坂本財臣卒、由壬申年之勞、贈小紫位、

城上郡泊瀨齋宮古蹟在泊瀨氣比坂下とあり是後世野宮の權輿なり齋宮に關する事は齋宮式に詳なり(五月)五月、原本此上に夏字あり衍なれば削る
 ○出身、宮仕のことなり選叙令に凡秀才出身上上第八位上、上中正八位下云々とあり
 ○大舍人、職員令左右大舍人寮の義解に謂大舍人は供奉之人云々とあり
 ○選簡其才能、其の字は應本中本及類史に據て補ふ
 ○當職、其才能に適當なる官職を云
 ○無夫、原本夫を吏に作る北本中本に據て改む
 ○欲進仕者聽矣、後宮職員令に凡諸氏別貢女皆限三十以下十三以上雖非氏名欲自進仕者聽とあり
 ○考選、品定なり
 ○准官人之例、原本官を宮に作る北本應本中本に據て改む
 ○贈小紫位、贈位なり
 ○但馬皇女、續紀四に和銅元年六月三品但馬內親王薨天武天皇之皇女也とあり
 ○新田部皇子、續紀十二に天平七年九月一品新田親王薨天淳中原瀧真人天皇第七子也とあり
 ○大養娘、續紀九に神龜元年七月夫人正三位石川朝臣大養比賣薨とあり北本應本中大太に作る
 ○櫻積皇子、續紀六に靈龜元年七月知太政官事一品櫻積親王薨天武天皇第五子也とあり
 ○紀皇女、萬葉十二に紀皇女竊嫁高安王とあり
 ○田形皇女、續紀十に神龜五年三月二品田形親王薨天淳中原瀧真人天皇之皇女也とあり
 ○鏡王女額田姬王、原本女字なし北本應本中本及紀略に據て補ふ鏡王は系詳ならず集解に疑舒明天皇孫とあり額田姬王は始め天武天皇にめされて十市皇女を生み後又天智天皇の妃とされたり
 ○十市皇女、天皇の御長女なり天武天皇の未だ皇子に坐し、時の皇女也故竊以謀事、隱進消息也と記せり本紀七年に薨す
 ○智形君德善、原本智野宮に告し給ふ事あり此事を扶桑略記に世傳大友皇子之妃是天武天皇女也故竊以謀事、隱進消息也と記せり本紀七年に薨す
 ○智形君德善、原本智野宮に告し給ふ事あり此事を扶桑略記に世傳大友皇子之妃是天武天皇女也故竊以謀事、隱進消息也と記せり本紀七年に薨す
 ○智形君德善、原本智野宮に告し給ふ事あり此事を扶桑略記に世傳大友皇子之妃是天武天皇女也故竊以謀事、隱進消息也と記せり本紀七年に薨す

閏六月乙酉朔庚寅、大錦下百濟沙宅昭明卒、爲人聰明叡智、時稱秀才、於是天皇驚之、降恩以贈外小紫位、重賜本國大佐平位、壬辰、耽羅遣王子久麻藝、都羅、宇麻等朝貢、己亥、新羅遣韓阿淦、金承元、阿淦金祇山、大舍霜雪等賀、騰極、并遣一吉、食金薩儒、韓奈末、金池山等、弔先皇喪、調使其送使貴于寶、眞毛、送承元、薩儒於筑紫、戊申、饗貴于寶、等於筑紫、賜祿各有差、即從筑紫返于國、秋八月甲申朔壬辰、詔在伊賀國紀臣阿閑麻呂等、壬申年勞勳之狀而顯寵賞、癸卯、高麗遣上部位頭大兄耶子、前部大兄碩于等朝貢、仍新羅遣韓奈末、金利益、送高麗使人于筑紫、戊申、喚賀騰極、使金承元等中客以上廿七人於京、因命大宰、詔耽羅使人曰、天皇新平天下、初之即位、由是唯除賀使、以外不召、則汝等親所見、亦時寒波嶮、久淹留之、還爲汝愁、故宜疾

(閏六月)沙宅昭明、天智紀十年昭を紹に作る
 ○外小紫位、位の内外に就ては元年紀内小七位の下に云り
 ○大佐平位、佐平は齊明紀に見ゆ(附錄參照)
 ○久麻藝都羅宇麻、通證に三王子之名釋爲一人、恐不足とあり
 ○韓阿淦、原本阿を河に作る北本中本に據て改む
 ○大舍、新羅官名(附錄參照)
 ○一吉、同上
 ○韓奈末、原本末を末に作る中本に據て改む
 ○(注)調使、原本使を訣に誤る北本應本に據て改む
 ○貴于寶眞毛、一人の名、北本于を干に作る
 ○(八月)紀臣阿閑麻呂、原本麻呂を臣の一字に作る元年七月辛卯の條に紀臣阿閑麻呂と見え本紀三年二月にも紀臣阿閑麻呂卒とあり之に據て改む

日本書紀卷第廿九 天武天皇 二年

○上部位頭大兄那子、上部は方名位頭大兄は官位なり那子は楓木傍注に交本寒師とあり見ゆ
○碩子、中本活字本于を干に作る
○波嶮、中本波を浪に作る
○其爵者大乙上、廿六階の第十九階なり國王及使者に同階の位を賜ふこと不審なり大乙上は使者に賜ひし階か考ふべし
○更以錦繡云々、集解に按大乙上第六位也黑冠以車形錦裁冠之緣言錦繡潤飾者是也とあり
○十一月、筑紫大郡、詳ならず持統紀に筑紫小郡見ゆされば難波の大郡小郡と同じく筑紫にも大郡小郡を置かれしならむ
○十二月、天嘗、略記には十一月大嘗會丹波播磨供奉其事とありて月違へり神祇令に凡大嘗者每世一度とあり此なるは御一代一度の大嘗なり大嘗は北本右傍にオホナへ、オホへ左傍にオホニへ私記とあり釋紀前田本にオホニへ私記説(板本にはオホムベ)とあり私記の訓正しかるべし記傳にニへは新饗ニヒアを約めたるにて新稻を以て饗(テ)する意なりと云
○播磨丹波、此二國は所謂悠紀主基の國なり
○紀臣詞多麻呂、下に堅麻呂とあり
○高市寺、大和志高市郡古蹟に廢大官大寺小山村東礎石尙存云々此寺元廣瀨(今北葛城)郡百濟村に在りて熊凝道場とも百濟大寺とも云り後平城に移して大安寺と云
○知事、通證に代辭編曰梵云羯磨陀此云知事僧蓋糞抄曰都維那翻云寺護又云知事とあり
○注、大官、原本官を宮に作る北本應本楓本に據て改む
○小僧都、此に始て見ゆ應本小僧に作る
○佐官、僧尼令佐官の義解に謂僧綱之録事也とあり
○有、四佐官、通證に就高市大寺而言とあり
○大歲、原本太を大に作る北本應本中本に據て改む

【三年】百濟王昌成、續紀廿七天平神護二年六月百濟王敬福の傳に義慈王

マカリカヘルテ 仍在國王及使者久麻藝等肇賜爵位其爵者大乙上更以錦繡
潤飾之當其國之佐平位則自筑紫返之九月癸丑朔庚辰饗金承元等於難波奏種々樂賜物各有差冬十一月壬子朔金承元罷歸之壬申饗高麗那子新羅薩儒等於筑紫大郡賜祿各有差十二月壬午朔丙戌侍奉大嘗中臣忌部及神官人等并播磨丹波二國郡司亦以下人夫等悉賜祿因以郡司等各賜爵一級戊戌以小紫美濃王小錦下紀臣詞多麻呂拜造高市大寺司今大官是時知事福林僧由老辭知事然不聽焉戊申以義成僧爲小僧都是日更加佐官二僧其有四佐官始起于此時也是年也太歲癸酉

三年春正月辛亥朔庚申百濟王昌成薨贈小紫位二月辛巳朔戊申

の子禪廣其子昌成とあり敬福の父なり
○贈小紫位、原本贈を賜に作り小の上此の字あり北本應本に據て訂す
○二月、贈大紫位、原本贈を賜に作る北本應本に據て改む
○三月、忍海造、神功紀天智紀に出づ
○銀始出、三代實錄十一に大宰府言對馬鳴銀穴在下縣郡自高山底二穿鑿巖石四十許丈云々神名式に下縣郡銀山上神社銀山神社あり銀は下縣郡より出でしなり
○亦周、原本周を同に作る中本及紀略に據て改む(八月)膏油、職員令主油司義解に謂肉脂爲膏自餘爲油兵庫式に猪膏五合整料胡麻油一合洗刷料とあり
○即日、原本日を日に作る北本應本中本に據て改む
○神府、神庫なり垂仁紀八十七年に神庫此云保玖羅とあり
○今皆、原本今を今に作る北本應本中本及紀略類史に據て改む
○自泊瀬齋宮云々、齋宮式に凡齋内親王在京潔齋三年即每朔日著木綿鬘參入齋殿遙拜大神云々齋終之後乃向伊勢大神宮とあり三年の潔齋終て伊勢に參向せられしなり

【四年】大學寮、オホツカサとあれど中本にフムヤとあるが當れり職員令に大學寮頭一人掌簡試學生及釋奠事學生四百人掌分受經業とあり
○陰陽寮、抄職官部に於牟夜字乃豆加佐とあり
○外藥寮、典藥寮を云職員令に内藥司は中務省に屬し典藥寮は宮内省に屬す故に内藥司に對して外

紀、臣阿閉麻呂卒、天皇大悲之、以勞壬申年之役、贈大紫位、三月庚戌朔丙辰、對馬國司忍海造大國言、銀始出于當國、即貢上、由是大國授小錦下位、凡銀有倭國、初出于此時、故悉奉諸神祇、亦周賜小錦以上、大夫等、秋八月戊寅朔庚辰、遣忍壁皇子於石上神宮、以膏油瑩神寶、即日勅曰、元來諸家貯於神府寶物、今皆還其子孫、冬十月丁丑朔乙酉、大來皇女自泊瀬齋宮、向伊勢神宮

四年春正月丙午朔、大學寮諸學生、陰陽寮外藥寮、及舍衛女墮羅女、百濟王善光、新羅仕丁等、捧藥及珍異等物、進丁未、皇子以下百寮、諸人拜朝、戊申、百寮諸人、初位以上、進薪、庚戌、始興占星臺、壬子、賜宴群臣於朝廷、壬戌、公卿大夫及百寮諸人、初位以上、射于西門庭、亦是日、大倭國貢瑞雞、東國貢白鷹、近江國貢白鷄、戊辰、祭幣諸社、二月乙亥朔癸未、勅

藥寮稱す ○舍衛女、孝德紀白雉五年に見ゆ ○墮羅女、通證に疑墮羅當作都貨羅見孝德紀齊明紀二あり ○百濟王善光、原本光が先に作る北本應本楓本及類史に據て改む即禪廣王なり ○捧藥、通證に延喜式元日獻屠蘇酒尚藥執御蓋率女嬪昇殿令藥司童女先嘗然後供御次白散度嶂散三朝而畢公事根源曰御藥儀式始于弘仁中今按當以此紀爲始也云々あり ○進新、釋紀にミカマギ私記説ありミカマギは御窻木なり御窻にて焼く木を云年中行事歌合に御新正月十五日御新に申は百官悉新を奉るなり假令ば是も民の肩を休むむ爲に宮内省に納りけるなり雜令に凡文武官人毎年正月十五日並進新長七尺以二十株爲一擔江次第に年中所用御新諸司并五畿内國司供進見主殿寮式あり年中御窻にて焼く木を初位以上の百官悉く之を進獻するなり ○占星臺、天文即ち日月五星二十八宿及風雲の氣色等を窺ひ察する臺なり ○賜宴群臣、子日の宴なり文德實錄齊衡四年(天安元年)正月禁中有曲宴預之者不過公卿近侍數十人昔者上月之中必有此事時謂之子日也今日之宴備舊迹也見ゆる子日の始なるべし ○射于西門庭、是れ正月射禮なり此事は孝德天皇九年正月七日に行はれしを始す天智天皇九年正月十七日にも行はれたり西宮記北山抄江次第等には正月十八日定日す代々多少の沿革ありしなり ○白鷹、抄羽族部に鷹廣雅云一歳名之黃鷹二歳名之無鷹三歳名之青鷹白鷹俗説鷹白者不論雌雄皆名之良太賀あり ○白鷄、抄羽族部に鷄本草云鷄一名鷄(和名度比)あり ○祭幣諸社、年中行事秘抄に史記曰天武天皇四年二月甲申祈年祭延喜式有祝

大倭、河内、攝津、山背、播磨、淡路、丹波、但馬、近江、若狹、伊勢、美濃、尾張等國、日、選、所部百姓之能歌、男女及侏儒伎人而貢上、丁亥、十市皇女、阿閉皇女、參赴於伊勢神宮、己丑、詔曰、甲子年諸氏被給部曲者、自今以後除之、又親王諸王及諸臣、并諸寺等所賜、山澤嶋浦、林野陂池、前後並除焉、癸巳、詔曰、群臣百寮、及天下人民、莫作諸惡、若有犯者、隨事罪之、丁酉、天皇幸於高安城、是月、新羅遣王子忠元、大監級喰金比蘇、大監奈末金天沖、弟監大麻朴武麻、弟監大舍金洛水等進、調、其送使奈末金風那、奈末金孝福、送王子忠元於筑紫、三月乙巳朔丙午、土左大神以神刀一口進于天皇、戊午、饗金風那等於筑紫、即自筑紫歸之、庚申、諸王四位栗隈王爲兵政官長、小錦上、大伴連御行爲大輔、是月、高麗遣大兄富子、大兄多武等朝貢、新羅遣級喰朴勤脩、大奈末金美賀進、調、

詞あり本紀二月に此事見えされは是れ正しく祈年祭の奉幣なるべし通證に祈年穀奉幣の始とするは非なり祭は奉の誤なりと云る説あれど下文にも同じ祭幣とあれば輒改めず(二月)淡路、原本淡を涉に作る北本應本中本及類史に據て改む ○能歌男女、通證に此蓋采其國曲也と云り萬葉古今等に東歌部を立てられたる皆其國風なり十四年九月の詔に凡諸歌男女笛吹者即傳言子孫令習歌節と見えたるは其體秀なるものを後世に傳ふる方法を講ぜられたり ○侏儒伎人、侏儒は武烈紀に見ゆ同紀に倡優をも訓り俳優の態を侏儒に爲さしむるなり伎人は琴笛をよくし歌舞に長じたる人を云是等の人々を貢らしめ給ひ十三國は何れも畿内及都に近き國なり ○甲子年、天智天皇三年 ○諸氏被給部曲云々、天智紀二年に命大皇弟定氏上民部家部等事とある民部家部を云 ○親王諸王、親王の名此に始て見ゆ繼嗣令に凡皇兄弟皇子皆爲親王以外並爲諸王とあり推古紀十三年に大臣及諸王諸臣と見え上代に諸王と稱せしは皇親の總稱なりしを後に天皇の御子等兄弟姉妹を親王と稱し自餘を諸王と申して五世を限こし或は六七世迄も王名を廢せざるもあり繼嗣令に自親王五世雖得王名不在皇親之限と云り ○莫作諸惡、水本には諸惡莫作とあり ○高安城、天智紀六年に見ゆ ○大監、新羅の官號 ○級喰、同上 ○金比蘇、原本比を此に作る北本應本中本及類史に據て改む ○弟監、新羅の官號 ○大風土記に土佐郡々家西去四里有土佐高賀大社其神名爲一言主尊也云々一説曰大穴六道尊子味鋸高尊根尊也とあり今の國幣中社土佐神社なり ○神刀一口云々、集解に蓋祠官奉神語而獻之とあり ○諸王四位、集解に諸王の二字を傍注の擡入とす ○栗隈王、原本隈を限に作る北本應本中本に據て改む天智紀七年に出づ ○兵政官長、兵政官は後の兵部省にて長は卿なり ○大伴連御行、續紀二に大寶元年正月大納言正廣參大伴宿禰御行薨帝甚悼惜之云々贈正廣貳右大臣御行難波朝右大臣大紫長德之子也とあり

(四月)當摩公廣麻呂、原本麻を摩に作る下文に據る本紀十四年に卒す ○久努臣麻呂、原本努を奴に作る北本應本中本に據て改む下文に直廣肆阿部久努朝臣麻呂とあり ○貸稅、孝德紀大化二年に貸稅とあり雜令に其規程見ゆ ○三等、上戸中戸下戸を云通證に此上戸中戸下戸を猶言上農中農小農とあり尙田令義解に詳なり ○仍、原本乃に作る北本應本中本及類史に據て改む ○小紫、年中行事秘抄此下に上字あり

夏四月甲戌朔戊寅、請僧尼二千四百餘、而大設齋焉、辛巳、勅小錦上當摩公廣麻呂、小錦下久努臣麻呂、二人勿使朝參、壬午、詔曰、諸國、貸稅、自今以後、明察百姓、先知富貧、簡定三等、仍中戸以下、應與貸、癸未、遣小紫美濃王、小錦下佐伯連廣足、祠風神于龍田、立野、遣小錦中間人連大蓋、大山中曾禰、連韓犬祭、大忌神於廣瀨河曲、丁亥、小錦下久努臣麻呂坐對捍、詔使、官位盡追、庚寅、詔諸國曰、自今以後、制諸漁獵者、莫造檻、及施機槍等之類、亦四月朔以後、九月卅日以前、莫置比滿沙伎理梁、且莫食牛馬犬猿雞之完、以外不在禁例、若有犯者、罪之、辛

○風神、龍田神社をいふ神名式に大和國平群郡龍田坐天御柱國御柱神社二座並名神月次新嘗とあり立野村龍田に鎮座せらる此御祭の起源は崇神天皇の御世なること祝詞式風神祭の條に明なり

○間人連大蓋、原本連大の二字を脱す北本應本中本及紀略に據て補ふ

○曾爾連韓犬、原本犬を大に作る北本應本中本に據て改む録右京神別に曾爾連神饒速日神六世孫伊香我色雄命之後也とあり

○大忌神、廣瀨神社を云神名式に大和國廣瀨郡廣瀨坐和加宇加乃實命神社瀨郡河合村に鎮座せらる其起源は廣瀨縁起に當社者人皇十代崇神天皇御宇大和國廣瀨郡河合村出現給と見えたり

○廣瀨河曲、大和志に廣瀨川、初瀬、百濟、葛城、鳥見四水會于河合曰廣瀨川流至葛下平群二郡界爲龍田川とあり龍田川の上流にて其下流は大和川なり河曲は河の曲れる所を云河の打合ふ所は自ら彎曲を爲す故に河曲と云り

○久努臣、原本久を文に作る應本中本及類史に據て改む

○對捍詔使、名例律八虐の六に大不敬對捍詔使而無人臣之禮とあり

○官位盡追、原本盡を書に作る北本應本中本に據て改む

○櫛弁、原本弁を牽に作る北本應本中本に據て改む

卯、三位麻績王有罪流于因播、一子流伊豆嶋、一子流血鹿嶋、丙申、簡諸才藝者、給祿各有差、是月、新羅王子忠元到難波、六月癸酉朔乙未、大分君惠尺病將死、天皇大驚、詔曰、汝惠尺也、背私向公、不惜身命、以遂雄心、勞于大役、恒欲慈愛、故爾雖既死、子孫厚賞、仍騰外小紫位、未及數日、薨于私家、秋七月癸卯朔己酉、小錦上大臣、連國麻呂爲大使、小錦下三宅吉士入石爲副使、遣于新羅、八月壬申朔、耽羅調使王子久麻伎泊筑紫、癸巳、大風、飛沙破屋、丙申、忠元禮畢以歸之、自難波發船、己亥、新羅高麗二國、調使饗於筑紫、賜祿有差、九月壬寅朔、戊辰、耽羅王姑如到難波、冬十月辛未朔、癸酉、遣使於四方、覓一切經、庚辰、置酒宴群臣、丙戌、自筑紫貢唐人卅口、則遣遠江國而安置、庚寅、詔曰、諸王以下、初位以上、每人備兵、是日、相摸國言、高倉郡女人生三男、十一月辛丑朔、癸卯、有人登宮東岳、妖言而自刎、死之、當是夜直者、悉賜爵一級、是月、大地動

改む櫛は字類抄にヲリと訓み神功紀にはウナヤと訓リナリは居ナリは義ウナヤは呻吟ウツ屋の義ならむか弁は獸穴なり和爾雅にオトシアナと注せり

○機槍、フムハナチと訓るは踏發ウナヤの意にて此處を踏めば彼處の機動きて獸の陷るより付たる名なれども是は神武紀なる機にて世にいふオトシナリとされば機槍はオシと訓べきなりと云

○比滿沙伎理梁、詳ならず通證に遮障之義、荀子注石絶水爲梁、所以取魚とあり數田氏は隙狹マサキの延語にて四月より九月の間は魚水上に浮び之を漁るに透間の狹き梁を架け小魚迄も盡すまじきとの意なりと云り北本應本中本滿を彌に作る是非決め難し

○牛馬犬猿雞之完、牛馬は人に代りて勞動し、犬は夜を守り雞は曉を告げて人を益する故に之を愛護し猿は人に甚だ類するに依て之を殺すに忍びざるなるべし法苑珠林畜生部述意に犬動夜吠雞曉鳴牛犢馬勞行陣又猿類人故不食見涅槃經と見え佛經の影響もあるべし

○我國は神代より近世に至るまで此等の肉を食ひしこと書に見えしは少く鹿肉と魚類の外は食はざる事全浙兵制録にも見たり

○三位、紫冠なり

○麻績王、世系詳ならず

○流于因播、因幡國なり萬葉一には麻績王流于伊勢國伊良處島云々とありて伊勢國とす標注には因幡は式に伊勢國壹志郡稻葉神社あり此地なりと云り

○血鹿嶋、肥前國松浦郡にあり

○六月、背私向公、原本向を同に作る北本應本中本に據て改む

○以遂雄冠心、集解に雄下原有之字衍として削れるに従ふべし

○勞于大役、壬申の役を云

○原賞、原本厚を原に作る北本應本中本に據て改む

○以遂雄冠伴連國麻呂、應本伴を津に作る

○三宅吉士、十二年紀九月に三宅吉士賜姓曰連

○八月、久麻伎、上文に久麻藝とあり

○忠元、二月來りし新羅國王の子

○十月、貢唐人卅口、是歲唐兵と戦ひて俘虜せし人々なるべし

○遠江國、城飼郡に鹿城郷(加良古)あり此時の唐人を置きし地ならむと云今同國小笠郡(舊城東郡)に鹿城郷あり内田村とされり

○初位以上、此時未だ初位の稱なければ大建小建をかく云しか

○高倉郡、後に高座郡と書す

○生三男、生の上の一の字を脱せるか

○十一月、直者、トノキは殿居なり文選の注に直謂宿禁中備非常とあり

〔五年〕百寮拜朝、原本寮の下に朔の字あり北本應本中本に據て削る

○襜、推古紀に見ゆ

○腰帶、石帶なり衣服令に一品以下五位以上金銀裝腰帶六位烏油(クワツクリ)腰帶裝束要領抄に腰帶或云宛腰とあり

○脚帶、雄略紀即位前紀に見ゆ

○机杖、机と杖となり机は抄調度部に凡西京雜記云漢制天子玉几公侯皆以竹木爲几(於之萬都岐今案几屬又有脇息之名所出未詳)とあり

○中的者、者の字は類史に據て補ふ

五年春正月庚子朔、群臣百寮拜朝、癸卯、高市皇子以下、小錦以上、大夫等、賜衣袴、褶、腰帶、脚帶及机、杖、唯小錦三階、不賜机、丙午、小錦以上、大夫等、賜祿各有差、甲寅、百寮初位以上進薪、即日、悉集朝廷、賜宴、乙卯、置祿射于西門庭、中的者則給祿有差、是日、天皇御嶋宮宴之、甲子、詔曰、凡任國司者、除畿內及陸奥長門國以外、皆任大山位以下、人二月庚午朔、癸巳、耽羅客賜船一艘、是月、大伴連國麻呂等至、自新羅、夏四月戊戌朔、辛丑、祭龍田風神、廣瀨大忌神、倭國添下郡鰐積吉事、貢瑞鷄

○除畿内云々、畿内は皇都の守衛を兼ね陸奥は邊要の地長門は西海の關門なれば他國より重きが故なり

○大山位、大山は後の五位に准す

○(一月)庚午朔、原本朔の下に拜の字あり中本に據て削る

○鰐積、詳ならず集解に按鰐積氏即阿曇氏略和阿仁之始終音則爲阿都美(さあれ)といかざらむ

○瑞雞、原本瑞を端に作る諸本及類史に據て改む

○冠、抄羽族部に冠野王案鷲鷲頭上有毛冠(冠讀佐賀)鳥冠也とあり

○飽波郡、抄に大和國平群郡飽(郡郷考云飽の誤)波郷阿久奈美あり

○才能長、イサセは詳ならず

○礪杵郡、美濃國土岐郡あり ○紀臣阿佐麻呂、集解に按阿佐麻呂蓋近江朝人配流在於美濃也非大人及阿門麻呂之族續紀養老二年有無位紀臣龍麻呂等十八人賜朝臣姓一蓋是此黨也とあり

○(五月)進調過期限、賦役令に凡調庸物毎年八月月中旬起輸送國十月三十日中國十一月三十日遠國十二月三十日以前納訖其調系七月三十日以前輸訖とあり

○飢之、水本集解之を乏に作る下同じ ○欲賣子、通證に賣子爲奴婢也とあり ○南淵山、大和國高市郡にあり ○細川山、同郡細川村にあり萬葉七に南淵之細川山立禮云々、今同郡高市村大字細川あり淨御原宮に近き地なればなり ○燒折、野を燒き木を折るを云原本折を折に作る北本應本中本に據て改む

○(六月)栗隈王、原本隈を限に作る應本中本及紀略に據て改む ○物部雄君卒、前紀に朴井連とあり中本卒の傍注に御本薨とあり ○贈内大紫位、原本贈を賜に作る北本應本中本に據て改む ○捧幣帛云々、臨時祭式に祈雨神祭八十五座を載せたり

○(七月)百寮、原本百の下姓の字あり中本に據て削る

○有星云々、慧星なり ○長七八尺、長の字は北本應本中本に據て補ふ

○(八月)内命婦、仁德紀四十年に出づ

○食封、孝德紀大化二年に出づ

○大解除、此の解除は慧星に因て臨時に行はれしなりといへど下に爲新嘗下國郡とあれば此祭を行ふにつきての解除ならむ

○被柱、被具なり原本被を抜に作る北本應本中本に據て改む

○布一常、賦役令義解に布一丈三尺是爲二常とあり常(キタ)は段(キタ)に同じ

○刀云々、神祇令に凡諸國須大祓者每郡出刀一口皮一張鐵一口及雜物等戸別麻一條とあり

○(通證)に當作鑿とあり

○矢一具、三代格延喜二十年の文に大祓物矢二具の分注に以二十隻爲二具とあり

○死刑没官三流、死刑は

其冠似海石榴華是日倭國飽波郡言雌鷄化雄辛亥勅諸王諸臣被給封戸之稅者除以西國相易給以東國又外國人欲進仕者臣連伴造之子及國造子聽之唯雖以下庶人其才能長亦聽之己未詔美濃國司曰在礪杵郡紀臣阿佐麻呂之子遷東國即爲其國之百姓五月戊辰朔庚午宣進調過期限國司等之犯狀云々甲戌下野國司奏所部百姓遇凶年飢之欲賣子而朝不聽矣是月勅禁南淵山細川山並莫芻薪又畿内山野元所禁之限莫妄燒折六月四位栗隈王得病薨物部雄君連忽發病而卒天皇聞之大驚其壬申年從車駕入東國以有大功降恩贈內大紫位因賜氏上是夏大旱遣使四方捧幣帛祈諸神祇亦請諸僧尼祈于三寶然不雨由是五穀不登百姓飢之

秋七月丁卯朔戊辰卿大夫及百寮諸人等進爵各有差甲戌耽羅客歸國王午祭龍田風神廣瀨大忌神是月村國連雄依卒以壬申年之功贈外小紫位有星出于東長七八尺至九月竟天八月丙申朔丁酉親王以下小錦以上大夫及皇女姬王内命婦等給食封各有差辛亥詔曰四方爲大解除用物則國別國造輸祓柱馬一匹布一常以外郡司各刀一口鹿皮一張鑿一口刀子一口鎌一口矢一具稻一束且每戸麻一條壬子詔曰死刑没官三流並除一等徒罪以下已發覺未發覺悉赦之唯既配流不在赦例是日詔諸國以放生是月大三輪眞上田子人君卒天皇聞之大哀以壬申年之功贈內小紫位仍謚曰大三輪眞上田迎君九月丙寅朔雨不告朔乙亥王卿遣京及畿内按入別兵丁丑筑紫大宰三位屋垣王有罪流于土左戊寅百寮人及諸蕃人等賜祿各有差丙戌神官奏曰爲新嘗下國郡也齋忌則尾張國山田郡次須岐也丹波國訶沙郡並食下是月坂田公雷卒以壬申年功贈大紫

○(五月)大博士、通證に即大學博士也。職原抄大學寮の條に博士一人明經道之極官也。中古以來清中兩家依位次一任之。號大博士。○(六月)大博士、原本母を丹に作る。北本應本中本に據て改む。○倭書師、錄左京諸蕃に大岡忌寸出自。魏文帝之後安貴王。五世孫勳。大惠尊亦工。繪才。天命開別天皇御世賜。姓倭書師。亦高野天皇神護景雲三年依居地改賜。大岡忌寸姓也。○(七月)大博士、原本從を徒に作る。楓本中本に據て改む。○天社地社、崇神紀七年に天社國社あるに同じ。○神祇、神祇令に凡神戶調庸及田租者並充。造神宮及供神調度。其稅者一准。義倉。義解に准。義倉者不出舉也。○(八月)大博士、祈雨祭なり。禮記月令に仲夏大雩注に雩吁嗟求雨之祭也。○(九月)大博士、天地震動、原本地の字なし。類史に據て補ふ。○(十月)大博士、崇峻紀五年皇極紀四年孝德紀大化元年

世、至于近江朝常以謀汝等爲事、今當朕世將責汝等不可之狀、以隨犯應罪、然頓不欲絕漢直之氏、故降大恩、以原之、從今以後、若有犯者、必入不赦之例、秋七月辛酉朔癸亥、祭龍田風神、廣瀨大忌神、八月辛卯朔乙巳、大設齋於飛鳥寺、以讀一切經、便天皇御寺南門而禮三寶、是時、詔親王諸王及群卿、每人賜出家一人、其出家者、不問男女、長幼、皆隨願度之、因以會于大齋、丁巳、金清平歸國、即漂著朴刺破等、付清平等返于本土、戊午、耽羅遣王子都羅朝貢、九月庚申朔己丑、詔曰、凡浮浪人、其送本土者、猶復還到、則彼此並科課役、冬十月庚寅朔癸卯、丙小錦上河邊、臣百枝爲民部卿、丙大錦下丹比公麻呂爲攝津職大夫、十一月己未朔、雨不告朔、筑紫大宰獻赤烏、則大宰府諸司人賜祿各有差、且專捕赤烏者、賜爵五級、乃當郡々司等、加增爵位、因給復郡內百姓以一年之是日、大赦天下、己卯、新嘗、辛巳、百寮諸有位人等賜食、乙酉、侍奉新嘗神官及國司等賜祿、十二月己丑朔、雪、不告朔。

○(五月)大博士、通證に即大學博士也。職原抄大學寮の條に博士一人明經道之極官也。中古以來清中兩家依位次一任之。號大博士。○(六月)大博士、原本母を丹に作る。北本應本中本に據て改む。○倭書師、錄左京諸蕃に大岡忌寸出自。魏文帝之後安貴王。五世孫勳。大惠尊亦工。繪才。天命開別天皇御世賜。姓倭書師。亦高野天皇神護景雲三年依居地改賜。大岡忌寸姓也。○(七月)大博士、原本從を徒に作る。楓本中本に據て改む。○天社地社、崇神紀七年に天社國社あるに同じ。○神祇、神祇令に凡神戶調庸及田租者並充。造神宮及供神調度。其稅者一准。義倉。義解に准。義倉者不出舉也。○(八月)大博士、祈雨祭なり。禮記月令に仲夏大雩注に雩吁嗟求雨之祭也。○(九月)大博士、天地震動、原本地の字なし。類史に據て補ふ。○(十月)大博士、崇峻紀五年皇極紀四年孝德紀大化元年

○(五月)大博士、通證に即大學博士也。職原抄大學寮の條に博士一人明經道之極官也。中古以來清中兩家依位次一任之。號大博士。○(六月)大博士、原本母を丹に作る。北本應本中本に據て改む。○倭書師、錄左京諸蕃に大岡忌寸出自。魏文帝之後安貴王。五世孫勳。大惠尊亦工。繪才。天命開別天皇御世賜。姓倭書師。亦高野天皇神護景雲三年依居地改賜。大岡忌寸姓也。○(七月)大博士、原本從を徒に作る。楓本中本に據て改む。○天社地社、崇神紀七年に天社國社あるに同じ。○神祇、神祇令に凡神戶調庸及田租者並充。造神宮及供神調度。其稅者一准。義倉。義解に准。義倉者不出舉也。○(八月)大博士、祈雨祭なり。禮記月令に仲夏大雩注に雩吁嗟求雨之祭也。○(九月)大博士、天地震動、原本地の字なし。類史に據て補ふ。○(十月)大博士、崇峻紀五年皇極紀四年孝德紀大化元年

七年春正月戊午朔甲戌、射于南門、己卯、耽羅人向京、是春、將祠天神地祇、而天下悉被禊之、豎齋宮於倉梯河上、夏四月丁亥朔、欲幸齋宮、卜之、癸巳食、卜、仍取平旦時、警蹕既動、百寮成列、乘輿命蓋、以未及出行、十市皇女卒、然病發、薨於宮中、由此鹵簿既停、不得幸行、遂不祭神祇矣、己亥、霹靂新宮西廳柱、庚子、葬十市皇女於赤穗、天皇臨之、降恩以發哀、秋九月、忍海造能麻呂獻瑞稻五莖、每莖有枝、由是徒罪以下悉赦之、三位稚狹王薨之、冬十月甲申朔、有物如綿、零於難波、長五六尺、廣七八寸、則隨風以飄于松林及葦原、時人曰甘露也、己酉、詔曰、凡内外文武官、每年史以上、屬官人等、公平而恪勤者、議其優劣、則定應進階、正月上旬以前、具記送法官、則法官按定、申送大辨官、然緣公事以出使

析也。靈歷也。所歷皆被析。義雷の解け墮るを云。
 ○新宮、五年の紀に將都新宮とある新宮に造らせ給ひし宮殿なるべし。
 ○赤穗、大和志に廣瀨郡仁基墓十市皇女在赤部村とあり。
 ○九月、瑞穂、治部式に嘉禾を中瑞とす。
 ○稚狹王、世系詳ならず。本八の字なし。
 ○甘露、治部式詳瑞に甘露美露也。神靈之精也。凝如脂其甘如飴とありて上瑞とす。
 ○内外文武官、考課令義解に依公式令。在京諸司爲京官。自餘皆爲外官。又五衛府軍團及諸帶仗者爲武自餘並如文とあり。○毎年、北本年々に作る。○史以上屬官人等、史は主典なり。屬官人は考課令の義解に謂次官以下とあり。○送法官、法官は式部なり。天智紀十年に見ゆ。○按定、義解に謂計考結階とあり。○大辨官、職員令に左大辨一人掌管中務式部治部民部受付庶事。判官内署文案勾稽失知諸司宿直諸國朝集云々。右大辨一人掌管兵部刑部大藏宮内。餘同。左大辨あり。オホトモヒは大伴ひにて諸司諸國の官人を伴ひ率ゐて政を申す義なり。○重服、忌服に重輕の別あり。重服は父母の喪を云。十二月、臘子鳥、北本應本臘を騰に作る抄羽族部に楊氏漢語抄云。臘子鳥(俗云阿止利)辨色立成云。騰鷲鳥和名同上。云胡雀。箋注に今俗呼。過止利。漢名未詳とあり。○蔽天、原本蔽を弊に作る中イ本に據て改む。○級食、原本級を汲に作る北本應本に據て改む。○以消勿等、集解には以の字を衍とす。

之日、其非眞病及重服輒緣小故而辭者不在進階之例。十二月癸丑朔己卯、臘子鳥蔽天、自西南飛東北。是月、筑紫國大地動、地裂廣二丈、長三千餘丈。百姓舍屋、每村多仆壞。是時百姓一家有岡上、當于地動夕、以岡崩處遷。然家既全而無破壞。家人不知岡崩家避。但會明後、知以大驚焉。是年新羅、送使奈末加良井山、奈末金紅世到于筑紫。曰、新羅王遣級食金消勿、大奈末金世々等、貢上當年之調。仍遣臣井山送消勿等、俱逢暴風於海中、以消勿等皆散之。不知所如。唯井山僅得著岸。然消勿等遂不來矣。

〔八年〕正月之節云々、此事文武紀元年並に儀制令を參考すべし。

八年春正月壬午朔丙戌、新羅送使加良井山、金紅世等向京。戊子、詔曰、凡當正月之節、諸王諸臣及百寮者、除兄姉以上親、及己氏長、以外莫拜焉。其諸王者、雖母非王姓者、莫拜。凡諸臣亦莫拜。卑母雖非正月節、復

〔二月〕大相桓父、原本父を欠に作る應本中本に據て改む。下同。○紀臣堅麻呂、北本應本中本堅を堅に中本麻を摩に作る。○辛巳年、十年なり。

〔三月〕兵衛、軍防令に凡兵衛者國司簡郡司子弟強幹便於弓馬者郡別一人貢とあり。○稚見死、稚見は上文に稚臣とあり。通證に死は卒に作るべしと云。○越智、高市郡なり。今も越智村並に北越智村あり。○後岡本、天皇陵、齊明天皇の御陵なり。北越智村にあり。○吉備大宰、集解に按吉備畿西之國九州之衝故置大宰。以諸王鎮焉。とあり。國守の上に大宰を置き遙に大宰府を援引して中國を監せしめられしなるべし。○施綿布、中本施の下に絶の字あり。〔四月〕定諸寺名、定額の寺を定められしなるべし。

准此若有犯者、隨事罪之。己亥、射于西門。二月壬子朔、高麗遣上部大相桓父、下部大相師需婁等朝貢。因以新羅遣奈末甘勿那、送桓父等於筑紫。甲寅、紀臣堅麻呂卒。以壬申年之功、贈大錦上位。乙卯、詔曰、及于辛巳年、檢校親王諸臣及百寮人之兵及馬、故豫貯焉。是月、降大恩恤貧乏、以給其飢寒。三月辛巳朔丙戌、兵衛大分君稚見死。當壬申年大役、爲先鋒之、破瀨田營。由是功、贈外小錦上位。丁亥、天皇幸於越智。拜後、岡本天皇陵。己丑、吉備大宰石川王病之、薨於吉備。天皇聞之、大哀。則降大恩云々。贈諸王二位。壬寅、貧乏僧尼施綿布。夏四月辛亥朔乙卯、詔曰、商量諸有食封寺所由、而可加加之、可除除之。是日定諸寺名也。己未、祭廣瀨龍田神。五月庚辰朔甲申、幸于吉野宮。乙酉、天皇詔皇后及草壁皇子、尊大津皇子、高市皇子、河嶋皇子、忍壁皇子、芝基皇子。曰、朕今日與汝等俱盟于庭。而千歲之後、欲無事、奈之何。皇子等共對曰、理實灼然。則草壁皇子、尊先進盟。曰、天神地祇及天皇證也。吾兄弟長幼并十餘王、各出于異腹。然不別同異。俱隨天皇勅。而相扶無忤。若自今以後、不如此盟。

○河嶋皇子、原本河を阿に作る諸本に據て改む此皇子は天智天皇の御子に坐す
 ○芝基皇子、天智天皇の皇子なり
 ○庭、吉野宮の庭なり
 ○證也、皇極紀四年(一六六頁)に乞垂審察を訓り
 ○不別同異、原本別を列に作る北本應本中本に據て改む
 ○同産、中本産の下に而の字あり
 ○襟、原本にアリノヒモさあるはミノノヒモの誤なり
 ○六月、大伴杜屋連、父祖詳ならず
 ○七月、葛城王、詳ならず敏達天皇の御子に同名あれど天皇崩御より此に九十四年を経たれば其さは隨に言ひ難し
 ○八月、諸氏貢女人、後宮職員令に凡諸氏氏別貢女人皆限二年三十以下十三以上云々ある是なり
 ○迹、淵上、大和志に城上郡迹淵、白川村(今磯城郡初瀬村大字白川)あり
 ○細馬、駿馬なり
 ○迹見驛家、城上郡にあ

者、身命亡之、子孫絶之、非忘非失矣、五皇子以次相盟如先、然後天皇曰、朕男等各異腹而生、然今如一母同産、慈之則披襟抱其六皇子、因以盟曰、若違茲盟、忽亡朕身、皇后之盟、且如天皇丙戌、車駕還宮、己丑、六皇子共拜天皇於大殿前、六月庚戌朔、冰零、大如桃子、壬申、零乙亥、大錦上大伴、杜屋連卒、秋七月己卯朔、甲申、零、壬辰、祭廣瀨龍田神、乙未、四位葛城王卒、八月己酉朔、詔曰、諸氏貢女人、己未、幸泊瀨、以宴迹驚淵上、先是、詔王卿曰、乘馬之外、更設細馬、隨召出之、即自泊瀨還宮之日、看群卿、儲細馬於迹見驛家道頭、皆令馳走、庚午、綬造忍勝獻嘉禾、異畝同穎、癸酉、大宅王薨、九月戊寅朔、癸巳、遣新羅使人等返之、拜朝、庚子、遣高麗使人、遣耽羅使人等返之、共拜朝廷、冬十月戊申朔、己酉、詔曰、朕聞之、近日暴惡者、多在巷里、是則王卿等之過也、或聞暴惡者也、煩之忍而不治、或見惡人也、倦之匿以不正、其隨見聞以糺彈者、豈有暴惡乎、是以自今以後、無煩倦而上責下過、下諫上暴、乃國家治焉、戊午、地震、庚申、勅制僧尼等威儀及法服之色、并馬從者往來巷閭之狀、甲子、

り今磯城郡城嶋村大字外山あり櫻井に近じ此地なり
 ○綬造、十二年紀に綬造賜姓曰連さあり錄大和蕃別に覆連出自百濟人猶之後也さある是か舊事紀天孫本紀に奄智連連三川紀連城連比尼連連など見ゆるは物部氏の裔なり別なるべし
 ○大宅王、系詳ならず
 ○十月、威儀、裝束の状を云
 ○法服之色、僧尼令に凡僧尼聽著、木蘭青碧皂黃及壞色等衣、餘色及綾羅錦綺並不得服用さあり
 ○阿食、原本阿を河に作る北本應本中本に據て改む
 ○綿絹、絹の字は北本應本中本に據て補ふ
 ○驛、抄牛馬部に驛説文云驛(字佐岐无末)似馬長耳驛驢父馬母所生也さあり
 ○十一月、倭馬飼部造連、姓氏錄に見えず十二年九月倭馬飼造賜姓曰連さあり連は名なり
 ○上寸主光欠、寸は村の省文なり錄左京諸蕃に上村主陳思王植之後也さあり光欠は名なり楓本中本欠を作
 ○遺多禰嶋、高麗に遣されたるにあらじか多禰嶋へ大使小使を遣す事は似つかはしからず誤あらむか
 ○龍田山、大和志に平群郡關屋趾在立野村天武八年始置關于此天文八年收立野關錢事見信貴山寺目錄さあり
 ○大坂山、原本坂を江に作る北本應本中本に據て改む中本には枝に作る古くは葛上郡に屬せしが後葛下郡に屬す今北葛城郡下田村の西に逢坂あり其西に關屋(二上村大字)あり此より河内へ越ゆるを大坂さいふ二上山の北に接す今穴虫越さ稱す
 ○羅城、三代實錄貞觀十三年十月の條に稱羅城者是周之國門唐之京城門云々今謂之羅城門其義未詳但大唐六典注云自大明宮夾東羅城復道經通化門磴道而入興慶宮焉今案其文勢蓋此羅城之意乎さあり集解に訓蒙字會曰郭俗稱羅城一由之觀之羅羅網羅之義謂羅城門者郭城門也さあり外部に羅ラれる意なり(十二月)由嘉禾以、類史不を樂に作るは訛なり以は集解に衍さして削る
 ○大辟罪以下、獄令義解に辟者罪也死刑爲大辟さあり
 ○伊刀郡、伊都郡なり

新羅遣阿食金項那、沙食薩蘖生朝貢也、調物、金銀鐵鼎、錦絹布皮、馬狗騾駱駝之類十餘種、亦別獻物、天皇々后太子貢金銀刀旗之類各有數、是月、勅曰、凡諸僧尼者、常住寺內、以護三寶、然或及老或患病、其永臥陝房、久苦老病者、進止不便、淨地亦穢、是以自今以後、各就親族及篤信者、而立一二舍屋于間處、老者養身、病者服藥、十一月丁丑朔、庚寅、地震、己亥、大乙下倭馬飼部造連爲大使、小乙下上寸主光欠爲小使、遣多禰嶋、仍賜爵一級、是月初置關於龍田山、大坂山、仍難波築羅城、十二月丁未朔、戊申、由嘉禾以親王諸王諸臣及百官人等、給祿各有差、大辟罪以下悉赦之、是年、紀伊國伊刀郡貢芝草、其狀似菌、莖長一尺、其蓋二圍、亦因播國貢瑞稻、每莖有枝、

〔九年〕向小殿、集解に按謂向子正殿也謂小對正也江家次第所謂小安殿大極殿之後房即此也

○大殿、大極殿を云

○忌部首首、元年七月紀に忌部首子人さあると同人にて首の上に子の字を補ふべきかと思へど十年三月紀にも首さあれば舊に從ふ

○色弗、持統紀四年に色夫知に作る

○活田村、倭名抄に八田部郡生田郷是なり今神戸市に屬す

○二月、鹿角、原本鹿を麟に作る北本中本に據て改む

○其角、其の字は北本中本に據て補ふ

○麟角歟、抄毛群部に麒麟瑞應圖云麒麟亦作麒麟仁獸也牡曰麒麟牝曰麟さあり治部式祥瑞に之を大瑞とす

○三月、白巫鳥、字鏡には駕を訓み倭名抄に漢語抄云巫鳥之止々あり本朝食鑑林禽の訓に鴟訓之止々或今訓阿於之鴟似雀而色亦略同頭背有斑眉頰稍黃白有斑云々

九年春正月丁丑朔甲申、天皇御于向小殿、宴王卿於大殿之庭。是日、忌部首賜姓曰連、則與弟色弗共悅拜。癸巳、親王以下至于小建、射南門、丙申、攝津國言活田村桃李實也。二月丙午朔癸亥、如鼓音聞于東方、辛未、有人云得鹿角於葛城山、其角本二枝而末合有完、完上有毛、毛長一寸、則異以獻之、蓋麟角歟、壬申、新羅仕丁八人返于本土、仍垂恩以賜祿、有差、三月丙子朔乙酉、攝津國貢白巫鳥、巫鳥、此云戊戌、幸于菟田、吾城、夏四月乙巳朔甲寅、祭廣瀨龍田神、乙卯、橘寺尼房失火、以焚十房、己巳、饗新羅、使人項那等於筑紫、賜祿各有差、是月勅、凡諸寺者、自今以後、除爲國大寺三三以外、官司莫治、唯其有食封者、先後限三十年、若數年滿三十、則除之、且以爲飛鳥寺、不可關于司治、然元爲大寺、而官司恒治、復嘗有功、是以猶入官治之例、五月乙亥朔、勅繩綿絲布、以施于京內、廿四寺各有差、是日、始說金光明經于宮中及諸寺、丁亥、高麗遣南部大使卯問、西部大兄俊德等朝貢、仍新羅遣大奈末考那、送高麗使人卯問等於筑紫、乙未、大錦下秦造綱手卒、由壬申年之功、贈大錦上位、辛丑

腹白脛微赤帶黃聲短而小轉さあり

○〔注〕此云芝苔々、原本云を言に作る中本に據て改む

○菟田吾城、元年紀に見ふ

○四月、乙巳朔、原本已を脱す北本中本に據て補ふ

○橘寺、大和志に在高市郡橘村、今高市村大字橘、菩提寺一名橘寺さあり

○官司恒治、原本司の字なし北本應本中本及類史に據て補ふ

○復嘗有功、集解に按壬申之年大伴連弟吹貫拔高坂王飛鳥寺西槻下營蓋此時有援官軍之功也さあり

○五月、說金光明經于宮中、通證に大極殿御齋會起于此さあり

○南部大使、小山田氏は使恐くは兄の誤さあり

○秦造綱手卒、持統紀十年に五月甲辰大錦上秦造綱手賜姓爲思寸さあり此に卒さあるに合はず誤あるべし

○星川臣麻呂、錄大和皇別に星川朝臣武内宿禰之

小錦中星川臣麻呂卒、以壬申年之功、贈大紫位、六月甲辰朔戊申、新羅客項那等歸國、辛亥、灰零、丁巳、雷電之甚也、秋七月甲戌朔、飛鳥寺西槻枝自折而落之、戊寅、天皇幸縣犬養連大伴家、以臨病、即降大恩、云々、是日、零之、辛巳、祭廣瀨龍田神、癸未、朱雀在南門、庚寅、朴井連子麻呂授小錦下位、癸巳、飛鳥寺弘聽僧終遣大津皇子、高市皇子、而弔之、丙申、小錦下三宅、連石床卒、由壬申年功、贈大錦下位、戊戌、納言兼宮內卿五位舍人王病之臨死、則遣高市皇子、而訊之、明日卒、天皇大驚、乃遣高市皇子、川嶋皇子、因以臨殯、哭之、百寮者從而發哀、八月癸卯朔丁未、法官人貢嘉禾、是日、始之三日雨、大水、丙辰、大風折木破屋、九月癸酉朔辛巳、幸于朝婦、因以看大山位以下之馬於長柄、杜乃俾馬的射之、乙未、地震、己亥、桑內王卒於私家、冬十月壬寅朔乙巳、恤京內諸寺貧之僧尼及百姓而賑給之、一每僧尼各緇四匹、綿四屯、布六端、沙彌及白衣、各緇二匹、綿二屯、布四端、十一月壬申朔、日蝕之、甲戌、自戊至子、東方明焉、乙亥、高麗八十九人返于本土、是當後岡本天皇之喪、而弔使留之、未

後也敏達天皇御世依三居地賜星川臣等賜應本中本麻之摩に作る

○六月項那等、原本項を須に作る北本應本及上文に據て改む

○七月縣犬養連大伴、縣の字は前紀及十四年九月紀に據て補ふ此人續紀に大寶元年正月卒と見ゆ

○朱雀在南門、續紀卅八に桓武天皇延曆四年五月先皇皇后宮赤雀見仍下所司一令檢圖牒孫氏瑞應圖曰赤雀者瑞鳥也王者奉口儉約動作應天時則見

還者也戊寅詔百官曰若有利國家寬百姓之術者詣闕親申則詞合於理立爲法則辛巳雷於西方癸未皇后體不豫則爲皇后誓願之初興藥師寺仍度一百僧由是得安平是日赦罪丁亥月蝕遣草壁皇子訊惠妙僧之病明日惠妙僧終乃遣三皇子而弔之乙未新羅遣沙喰金若彌大奈末金原升進調則習言者三人從若彌至丁酉天皇病之因以度一百僧俄而愈之辛丑藤子鳥蔽天自東南飛以度西北

○納言、此に大小を言はざるは此時其區別未だ無かりしにや ○宮内卿、職員令に宮内省卿一人掌出納諸國調雜物春米官田及奏宣御食產諸方口味事とあり ○舍人王、詳ならず ○九月朝嬬、大和志葛下郡古蹟に朝嬬行宮朝妻村(今南葛城郡葛城村大字朝妻)とあり ○長柄社、同郡長柄村にあり今南葛城郡吐田郷村字長柄なり長柄はナガサエと訓むべきを轉じてナガラとも呼べり ○馬的、抄術藝部に楊氏漢語抄云馬射(字未由美)案馬射即騎射也とあり兵器考に之を以て騎射の始とす ○桑内王、詳ならず ○十月一僧僧尼、北本應本每の字なし ○各繩四匹、原本各を冬に作る北本應本中本に據て改む ○白衣、俗人を云 ○絶二匹、原本匹を正に作る北本應本に據る下同 ○十一月興藥師寺、北本に興を立に作る藥師寺は木殿村礎石尙存天武天皇建後遷于平城右京また添下郡佛刹の條に藥師寺在砂村一名西京寺天武天皇九年十一月建文武天皇二年十月移寺高市郡岡本郷養老中復移于此云々とあり ○惠妙、上文に同名の僧あり大化元年紀に以惠妙法師爲百濟寺々司白雉五年の細注に僧惠妙於唐死とある是なり元亨釋書誤て此二人を一人とす ○習言者、通證に釋兼方按通事之類今按此習倭語者也とあり ○草壁皇子、子の下尊の字を脱せしか

十年春正月辛未朔壬申頒幣帛於諸神祇癸酉百寮諸人拜朝廷丁丑天皇御向小殿而宴之是日親王諸王引入內安殿諸臣皆侍于外安殿共置酒以賜樂則大山上草香部吉士大形授小錦下位仍賜姓曰

○內安殿、外安殿に對して云り通證に內安殿疑謂小安殿とあれ向小殿を小安殿とすれば別なるべし大安殿の大極殿なることは明なれと其他は詳ならず

難波連辛巳勅境部連石積封六十戸因以給繩卅匹綿百五十斤布百五十端鏤一百口丁亥親王以下小建以上射于朝廷己丑詔畿內及諸國修理天社地社神宮二月庚子朔甲子天皇皇后共居于大極殿以喚親王諸王及諸臣詔之曰朕今更欲定律令改法式故俱修是事然頓就是務公事有關分人應行是日立草壁皇子尊爲皇太子因以令攝萬機戊辰阿倍夫人薨己巳小紫位當麻公豐濱薨三月庚午朔癸酉葬阿倍夫人丙戌天皇御于大極殿以詔川嶋皇子忍壁皇子廣瀨王竹田王桑田王三野王大錦下上毛野君三千小錦中忌部連首小錦下阿曇連稻敷難波連大形大山上中臣連大嶋大山下平群臣子首令記定帝紀及上古諸事大嶋子首親執筆以錄焉庚寅地震甲午天皇居新宮井上而試發鼓吹之聲仍令調習夏四月己亥朔庚子祭廣瀨龍田神辛丑立禁式九十二條因以詔之曰親王以下至于庶民諸所服用金銀珠玉紫錦繡綾及氎褥冠帶并種々雜色之類服用各有差辭具有詔書庚戌錦織造小分田井直吉麻呂次田倉人樞足武矩石勝川内

は大綱を擧げたるものに
て式之に伴はざれば實際
事務を執り難ければ式も
定められしなるべく儀式
禮法も日常必要のものな
れば之も同時に調査せし
められしなるべし
○阿倍夫人、原本倍を部
に作る諸本に據て改む集
解に按天智天皇妃阿倍倉
梯麻呂女橘媛とあり
○當麻公豐濱、上に漏れ
たり
○(三月)廣瀨王、父祖詳
ならず續紀九に養老六年
正月廣瀨王卒とあり
○竹田王、同じく詳なら
ず續紀四(和銅元年三月)
に竹田王爲刑部卿とあり
○桑田王、紹運錄に敏達
天皇の孫にて彦人大兄皇
子の男とあり
○三野王、上に見ゆ
○上毛野君三千、八月丁
丑卒す
○忌部連首、九年正月に
見ゆ
○中臣連大嶋、下文及持
統紀には藤原又葛原とも
あり中臣系圖に糠手子大
連公一男右大臣金二男許
米許米之子即大嶋祭主中
納言直大貳神祇伯とあり

直縣忍海造鏡荒田能麻呂大狛造百枝足坏倭直龍麻呂門部直大嶋
完人造老山背狛鳥賊麻呂并十四人賜姓曰連乙卯饗高麗客卯問等
於筑紫賜祿有差五月己巳朔己卯祭皇祖御魂是日詔曰凡百寮諸人
恭敬宮人過之甚也或詣其門謁己之訟或捧幣以媚於其家自今
以後若有如此者隨事共罪之甲午高麗卯問歸之六月己亥朔癸卯饗
新羅客若弼於筑紫賜祿各有差乙卯零之壬戌地震秋七月戊辰朔朱
雀見之辛未小錦下采女臣竹羅爲大使當摩公楯爲小使遣新羅國是
日小錦下佐伯連廣足爲大使小墾田臣麻呂爲小使遣高麗國丁丑祭
廣瀨龍田神丁酉令天下悉大解除當此時國造等各出祓柱奴婢一
口而解除閏七月戊戌朔壬子皇后誓願之大齋以說經於京内諸
寺八月丁卯朔丁丑大錦下上毛野君三千卒丙子詔三韓諸人曰先日
復十年調稅既訖且加以歸化初年俱來之子孫並課役悉免焉
壬午伊勢國貢白茅鷄丙戌遣多禰嶋使人等貢多禰國圖其國去京五
千餘里居筑紫南海中切髮草裳粳稻常豐一菴兩收土毛支子莞

○平群臣子首、詳ならず
○帝紀及上古諸事、帝紀
は帝皇の本紀なり古事記
序に諸家之所記豐帝紀及
本辭とあるを下文に帝皇
日繼及先代舊辭と書けり
此に上古諸事とある即ち
先代舊辭なり
○天皇居新宮井上、原本
居の字天皇の上とあり北
本中本に據て改む新宮は
新城に新に造られし宮な
るべし
○(四月)夏四月、原本夏
の字なし集解に據て補ふ
○禁式、禁制なり
○珠玉、職員令内藏寮の
義解に自生爲珠作爲玉
とあり
○氈席、同義解に撚レ毛
爲氈席とあり
○錦織造、録河内諸蕃に
錦織連百濟國速古大王之
後也とあり
○田井直、舊事紀天孫本
紀に物部金弓連公田井連
等祖とあり
○次田倉人、姓氏錄に次
田連に作る天智紀十年
二四二頁に見ゆ
○横足石勝、二人の名な
り
○(注)武矩、原本矩を規

子及種々海物等多是日若弼歸國九月丁酉朔己亥遣高麗新羅
使人等共至之拜朝辛丑周芳國貢赤龜乃放嶋宮池甲辰詔曰凡
諸氏有氏上未定者各定氏上而申送于理官庚戌饗多禰嶋人等
于飛鳥寺西河邊奏種種樂壬子彗星見癸丑熒惑入月冬十月丙
寅朔日蝕之癸未地震乙酉新羅遣沙喙一吉食金忠平大奈末金壹世
貢調金銀銅鐵錦絹鹿皮細布之類各有數別獻天皇々后太子金銀霞
錦幡皮之類各有數庚寅詔曰大山位以下小建以上人等各述意見
是月天皇將蒐於廣瀨野而行宮構訖裝束既備然車駕遂不幸矣唯
親王以下及群卿皆居于輕市而檢按裝束鞍馬小錦以上大夫皆列坐
於樹下大山位以下者皆親乘之共隨大路自南行北新羅使者至而告
曰國王薨十一月丙申朔丁酉地震十二月乙丑朔甲戌小錦下河邊臣
子首遣筑紫饗新羅客忠平癸巳田中臣鍛師柿本臣猿田部連國忍高
向臣麻呂粟田臣真人物部連麻呂中臣連大嶋曾禰連韓犬書直智德
并壹拾人授小錦下位是日舍人造糠虫書直智德賜姓曰連

に作る中本に據て改む ○川内直、欽明紀二年に見ゆ ○忍海造、三年紀に見ゆ ○荒田能麻呂、前紀元年七月壬辰に荒田尾直赤麻呂見ゆ之と同性ならば荒田の下に尾直の二字脱せしなり荒田尾直は姓氏録に見えず通釋に荒田尾直とて引るは荒田直にて皇別と云るも神別の誤なり ○大狗造、既録河内諸蕃に大狗連高麗國人伊利沙禮斯之後也、大狗連高麗國益士福貴王之後也とあり此に連を賜ひたるは百枝と足坏との二人なり ○倭直、既に出づ記傳に欽明紀迄は國造とのみありて直とばなきを此に於てあるは何れの御代より直の姓にはなりけむと云 ○山背狗、録山城諸蕃に狗造出年紀に門部直賜姓曰連とあれば此に連を賜ひしは大鳴のみなり ○完人造、完人造、完人臣と同祖なり崇峻紀二年に見ゆ ○宮人、女官を云 ○謁、内謁なり説文に告也請也とあり ○五月皇祖、集解に按皇祖皇祖父謂押坂彥人皇子蓋非歷代帝皇故別祭之疑是日或忌辰也とあり ○宮人、女は下文筑羅に作る ○廣足、原本廣なし北本應本に據て補ふ ○奴婢一口、天下の大解除を行はせ給ふにつき其祓物として國造をして之を出さしめらる、なり五年八月の大解除には馬一匹布一常を出さしめられしが今度は奴婢を出さしめられしにて其趣旨は同じ ○八月丙子、此一節丁丑の條に入替れり集解には正したれど姑く舊に據て改めず ○多福國、六年紀に云り ○去京五千餘里、雜令に凡度地五尺爲步三百步爲里とあり ○一薙兩收、原本薙を道に兩を雨に作る北本風本に據て改む中本道を薙に作る一度苗を薙て兩度收穫あるを云一年に兩度の收穫あるなり今も臺灣は然なりと云 ○支子、字鏡に久知奈之と注す抄染色具には梶子を充て、木實可染黃色者也とあり ○莞子、抄草木部に唐韻云莞(漢語抄云於保井)可以爲席者也玉篇に莞似蘭而圓可爲席とあり ○九月赤龜、治部式祥瑞に神龜を大瑞とし史記に神龜者天下之寶也與物變化四時變色居而自匿伏而不食云々と云り ○鳴宮池、大和國高市郡高市村にあり ○氏上、氏人の上と云意魁帥をヒトコノカミと訓むは人子の上の意なり ○理官、後の治部省なり職員令に治部省卿一人掌本姓繼嗣婚姻祥瑞喪葬贈國忌諱及諸蕃朝聘事とあり ○癸惑、三才圖會に癸惑火曜和名災星漢書天文志に癸惑出則有大兵入則兵散とあり ○十月細布、龜布に對して云續紀六に和銅七年二月上總國言去京遙遠實調極重請代細布願省負擔延喜主計式に凡諸國調細布二丁成端と見ゆ ○霞錦、原本錦霞に作る朱鳥元年四月の條に霞錦とあるに據て改む霞の欄引たる狀を彩れる錦ならむ推測の説あれご明解なし ○蒐、字鏡集名義抄等にかりと注せり段注説文一下に經傳多以爲春獵字とあり春獵を云るがそれより汎く狩の事に用ふるに至れり ○廣瀨野、大和志に行宮古蹟に廣瀨郡大野村(今北葛城郡河合村大字大野)とあり ○輕市、高市郡にあり ○國王薨、新羅文武王なり ○十二月本臣賜姓曰朝臣續紀四に從四位下柿本朝臣佐留卒とあり ○田部連、舒明紀元年に見ゆ ○高向臣、舒明紀即位前紀に見ゆ ○粟田臣真人、推古紀十九年に見ゆ續紀八に正三位粟田朝臣真人薨とあり ○壹拾人、原本壹を臺に作る應本中本に據て改む十人とあれ一人足らざるは古くより脱せるか諸本悉く同じ ○舍人造、舊事紀天神本紀に饒速日命天降從者に舍人造あり是か

【十一年】大山上、原本上の字を脱す應本中本に據て補ふ
 ○壬子、北本壬午に作る
 ○氷上夫人、二年紀に夫人藤原大臣女氷上娘とあり
 ○赤穗、大和志に高津笠墓氷上夫人在廣瀨郡赤部村とあり

十一年春正月乙未朔癸卯大山上舍人連糠虫授小錦下位乙巳饗金忠平於筑紫壬子氷上夫人薨于宮中癸丑地動辛酉葬氷上夫人於赤穗二月甲子朔乙亥金忠平歸國是月小錦下舍人連糠虫卒以壬申年之功贈大錦上位三月甲午朔命小紫三野王及宮内官大夫等遣于新

〔三月〕小紫三野王、小紫は諸臣の位なれば誤あるべし
 ○宮内官大夫、上に宮内卿と見えたるに同じ
 ○境部連石積、孝德紀白雉四年に坂合部磐積見ゆ同人にや
 ○新字、詳ならず釋紀に私記曰師説此書今在圖書寮但其字體似梵字未詳其字所准據也とあり日傳に之を引て神代文字なりと云數田氏標注にも是は古く使用せる支那字に對して新字と云なるめれど實は神代文字なり造は四十四卷を撰作りしことなり世に神代字に製りしにやと云ふ説あれ四十四卷と云に合ふはすさ云へど輕く定め難しよく考ふべし
 ○禪、マヘモは前裳なるべし其制は詳ならず抄裝束部に禪禪本朝式云禪禪各一條禪讀知波夜今案未詳とあれ後のチハヤと云ものは異なるべし
 ○脛裳、抄行旅具に本朝式云脛巾(俗波々伎)とあり脛著ハキハキの義なるべし下にも男夫着脛裳婦女垂髮于背猶如故とあり
 ○采女等之の二字、重覆す應本中本に據て削る
 ○手織、神代紀寶鏡開始章に注す
 ○肩巾、領巾なり崇神紀十年に出づ
 ○食封皆止之云々、五年四月の勅に諸王諸臣被給封戸之稅者除以西國相易給以東國とありしを是時に至りて實行し給はむとて從來の封戸を盡く公に返さしめ給ひしなるべし
 ○是月土師連、原本師の下連の上に喚玉卿等於殿前以下十二月壬申朔乙亥遣筑紫防人等颯蕩海に至る四百五十七字あり是は十四年九月紀の文誤りて此に出しものにて北本應本中本に無し故に削る
 ○四月丹比真人嶋、此氏宣化紀に見ゆ嶋は持統紀四年右大臣と爲り續紀二に大寶元年七月壬辰薨す宣化天皇玄孫多治比王の子也とあり
 ○大鍾、原本鍾を鐘に作る北本中本に據て改む字

城令見其地形仍將都矣乙未陸奥國蝦蟇廿二人賜爵位庚子地震丙午命境部連石積等更肇俾造新字一部四十四卷己酉幸于新城辛酉詔曰親王以下百寮諸人自今已後位冠及禪褶脛裳莫著亦膳夫采女等之手緇肩巾並莫服是日詔曰親王以下至于諸臣被給食封皆止之更返於公是月土師連眞敷卒以壬申年功贈大錦上位夏四月癸亥朔辛未祭廣瀨龍田神癸未筑紫大宰丹比真人嶋等貢大鍾甲申越蝦夷伊高岐那等請俘人七十戸爲一郡乃聽之乙酉詔曰自今以後男女悉結髮十二月卅日以前結訖之唯結髮之日亦待勅旨婦女乘馬如男夫其起于是日也五月癸巳朔甲辰倭漢直等賜姓曰連戊申遣高麗大使佐伯連廣足小使小墾田臣麻呂等奏奉使旨於御所己未倭漢直等男女悉參赴之悅賜姓而拜朝

書に鐘は樂器なり又鐘は琴名なりともあり又鐘通すともあれば何れも定め難し ○倭人七十戸、原本十を千に作る北本應本に據て改む ○男女
悉結髮 集解に按始制庶人首飾さあり男女の古風の髮の狀を盡く改めたるなり十三年に至りて女年四十以上は任意さして此制を緩め十五年には婦
女垂髮于背猶如故云て再び舊に復せられたり ○婦女乘馬、集解に古婦人乘馬不跨鞍至于此始有制跨乘與男子同さあり ○麻呂等奏、原
本等の字なく奏を奉に作る北本中本に據て補ひ訂す

○六月助有卦婁毛切、

二人の名か、通證に大古

○大古昂加、通證に大古

大那末金釋起送高麗使人於筑紫丁卯男夫始結髮仍著漆紗冠

○疑當作大兄さあり原

癸酉五位殖栗王卒秋七月壬辰朔甲午隼人多來貢方物是日大隅隼

○本昂を昂に作る諸本に據

人與阿多隼人相撲於朝廷大隅隼人勝之庚子小錦中膳臣摩漏病遣

○改む

草壁皇子尊高市皇子而訊病壬寅祭廣瀨龍田神戊申地震己酉膳

○男夫始結髮、原本夫を

臣摩漏卒天皇驚之大哀壬子摩漏臣以壬申年之功贈大紫位及祿更

○女に作る北本應本中本に

皇后賜物亦准官賜丙辰多禰人掖玖人阿麻彌彌人賜祿各有差戊午饗

○據て改む應本中本始の下

隼人等於飛鳥寺西發種々樂仍賜祿各有差道俗悉見之是日信

○之の字あり

濃國吉備國並言霜降亦大風五穀不登八月壬戌朔令親王以下及

○漆紗冠、原本紗を沙に

諸臣各俾申法式應用之事甲子饗高麗客於筑紫是夕昏時大星自東

○作る北本應本中本及釋紀

度西丙寅造法令殿內有大虹壬申有物形如灌頂幡而火色浮空流北

○に據て改む漆紗は字の如

每國皆見或曰入越海是日白氣起於東山其大四圍癸酉大地動戊寅

○上下漆のりの紗なり正統記

○相撲、隼人式に大衣者

○相撲、隼人式に大衣者

○阿麻彌、齊明紀三年に

○阿麻彌、齊明紀三年に

○造法令、十年紀に更

○造法令、十年紀に更

○大星は流星なるべし

○大星は流星なるべし

○海見島さある是なり

○海見島さある是なり

○癸未、詔禮儀言語之狀且詔曰凡諸應考選者能檢其族姓及景迹方

○癸未、詔禮儀言語之狀且詔曰凡諸應考選者能檢其族姓及景迹方

後考之若雖景迹行能灼然其族姓不定者不在考選之色己丑勅爲

○欲定律令改法式さあり

日高皇女更名新之病大辟罪以下男女并一百九十八人皆赦之庚寅百

○欲定律令改法式さあり

四十餘人出家於大官大寺九月辛卯朔壬辰勅自今以後跪禮匍匐

○謂淨御原朝廷令是なり

禮並止之更用難波朝廷之立禮庚子日中數百鶴當大宮以高翔於

○云蟬(和名爾之)虹也さ

空四尅而皆散冬十月辛酉朔戊辰大舖十一月庚寅朔乙巳詔曰

○見ゆ

親王諸王及諸臣至于庶民悉可聽之凡糾彈犯法者或禁省之中或

○戊寅、集解に此條甲戌

朝廷之中其於過失發處即隨見聞無匿蔽而糾彈其有犯重者應請

○詔禮儀言語之狀、詔の

則請當捕則捉若對捍以不見捕者起當處兵而捕之當杖色乃杖

○下に定まざるの字脱せしな

一百以下節級決之亦犯狀灼然欺言無罪則不伏辨以爭訴者累加

○訓るはウヤハシハヒ

其本罪十二月庚申朔壬戌詔曰諸氏人等各定可氏上者而申送亦其

○ウヤハシハヒのハヒのつ

眷族多在者則分各定氏上並申送於官司然後斟酌其狀而處分之因

○抄にはウヤマフさ注せり

承官判唯因少故而非己族者輒莫附

○族姓、標注に姓に尊卑

○景迹、考課令に凡定

○官人景迹功過義解に景

○承官判唯因少故而非己族者輒莫附

分れて奉仕せり之を左右

に分ちて相撲せしめられ

しなり

○阿麻彌、齊明紀三年に

○海見島さある是なり

○大星は流星なるべし

○造法令、十年紀に更

○欲定律令改法式さあり

○謂淨御原朝廷令是なり

○云蟬(和名爾之)虹也さ

○見ゆ

○戊寅、集解に此條甲戌

○詔禮儀言語之狀、詔の

○下に定まざるの字脱せしな

○訓るはウヤハシハヒ

○ウヤハシハヒのハヒのつ

○抄にはウヤマフさ注せり

○族姓、標注に姓に尊卑

○景迹、考課令に凡定

○官人景迹功過義解に景

像也猶言狀述也也あり ○行能、考課令に功過行能義解に善惡爲行才藝爲能也あり ○一百九十八人、人の字は北本應本中本及紀略に據て補ふ
 ○出家於大官大寺、略記には十二年に入る (九月)跪禮、續紀慶雲元年正月の條には停百官跪伏禮也あり跪き伏して禮するを云祝祠萬葉に十六自
 物膝折伏也ある是なり ○匍匐禮、通證に舊唐書倭傳曰其誦訟者匍匐前地史范唯傳膝行蒲伏今俗有波伊留之語蓋匍匐入也也あり ○難波朝廷之立
 禮、孝德紀には見えざるが立禮は唐朝の制に倣ひしなり ○鶴、鶴に同じ抄羽族部に鶴(都流)似鶴長喙高脚也ありオホトリは鶴を訓り但し字鏡集
 にはオホトリと訓り ○四越、漏刻は一時(今の二時間)を四越に分ちたり故に第四越をば時の終と訓るなり (十月)大舖、清寧紀四年に出づ (十
 一月)紕彈犯法者、非違を糾彈するは彈正臺の職掌なり ○禁省、禁中を云 ○起當處兵、當界の軍團の兵を云 ○杖色、名例律に見ゆ色は色目な
 り ○節級、通證に謂有品節等級也也あり (十二月)官司、治部省を云 ○官判、大政官の判決なり ○輒莫附、集解に按一氏族之中他有小故
 欲爲其族者少故蓋謂母黨妻黨疎遠者也あり

【十二年】

○大八洲、原本洲を州に
 作る北本應本及類史に據
 て改む

○一則以喜、原本喜を嘉
 に作る類史に據て改む
 ○小墾田儂、釋紀に兼方
 按之推古天皇小墾田宮朝
 所製之樂歎也あり儂は
 原本に舞に作る諸本及類
 史に據る
 (三月)僧正僧都律師、
 僧正僧都は推古紀廿二年
 に律師は敏達紀六年に注
 す僧綱の官を任命せし始
 なり

十二年春正月己丑朔庚寅百寮拜朝廷筑紫大宰丹比真人鳴等貢三
 足雀乙未親王以下及群卿喚于大極殿前而宴之仍以三足雀示于
 群臣丙午詔曰明神御大八洲日本根子天皇勅命者諸國司國
 造郡司及百姓等諸可聽矣朕初登鴻祚以來天瑞非一二多至之
 傳聞其天瑞者行政之理協于天道則應之是今當于朕世每年重至
 一則以懼一則以喜是以親王諸王及群卿百寮并天下黎民共相歡
 也乃小建以上給祿各有差因以大辟罪以下皆赦之亦百姓課役並
 免焉是日奏小墾田儂及高麗百濟新羅三國樂於庭中二月己未朔
 大津皇子始聽朝政三月戊子朔己丑任僧正僧都律師因以勅曰統
 領僧尼如法云々丙午遣多禰使人等返之夏四月戊午朔壬申詔曰自

○統領僧尼如法云々、此
 に僧尼令に見えたる文
 ものありしなるべし
 (四月)莫用銀錢、
 に銀錢を止めて専ら銅錢
 を用ひよされ銀錢銅
 錢何れもいかなるものな
 りしか詳ならず
 (六月)大伴連望多、昨
 の子にて上文は馬來田に
 作れり
 ○弔、原本予に作る中本
 に據て改む
 ○贈大紫位、續紀に内大
 紫に作る
 ○發鼓吹葬、鼓吹を用ひ
 て送葬するは古代の
 禮なれど之を賜ふは異邦
 の制の移れるなるべし賜
 ふべき鼓吹の數は喪葬令
 に詳なり
 ○高坂王薨、元年六月紀
 に出づ中本及紀略、薨を
 卒に作る
 (七月)鏡姬王、始は天
 智天皇にめされ後には鎌
 足公の室也なれり
 ○安居、五雜俎卷二に四
 月十五日天下僧尼就禪
 利搭挂謂之結夏又謂之
 之結制蓋方長養之辰出
 外恐傷草木虫蟻故九
 十日安居至七月十五日
 始盡散去謂之解夏又謂

今以後必用銅錢莫用銀錢乙亥詔曰用銀莫止戊寅祭廣瀨龍田
 神六月丁巳朔己未大伴連望多薨天皇大驚之則遣泊瀨王而弔之
 仍舉壬申年勳績及先祖等每時有功以顯寵賞乃贈大紫位發鼓
 吹葬之壬戌三位高坂王薨秋七月丙戌朔己丑天皇幸鏡姬王之家訊
 病庚寅鏡姬王薨是夏始請僧尼安居于宮中因簡淨行者卅人出家
 庚子零之癸卯天皇巡行于京師乙巳祭廣瀨龍田神是月始至八月
 旱之百濟僧道藏零之得雨八月丙辰朔庚申大赦天下大伴連男吹
 負卒以壬申年之功贈大錦中位九月乙酉朔丙戌大風丁未倭直栗隈首
 水取造矢田部造藤原部造刑部造福草部造凡川内直川内漢直物部
 首山背直葛城直殿服部造門部直錦織造縵造鳥取造來目舍人造檜
 隈舍人造大狛造秦造川瀬舍人造倭馬飼造川内馬飼造黃文造席集
 造勾管作造石上部造財日奉造渥部造穴穗部造白髮部造忍海造
 羽束造文首小泊瀨造百濟造語造凡卅八氏賜姓曰連冬十月乙卯
 朔己未三宅吉士草壁吉士伯耆造船史壹伎史娑羅々馬飼造菟野馬

之解制(節略)あり僧侶が陰曆四月十五日より同七月十五日まで即ち一夏九旬の間禁足して静に家に籠り居ることを安居とも結夏とも云

飼造、吉野首紀酒人直采女造、阿直史、高市縣主、磯城縣主、鏡作造、并十四氏賜姓曰連、丁卯、天皇狩于倉梯、十一月甲申朔丁亥、詔諸國習陣法、丙申、新羅遣沙食金主山、大那末金長志進調、十二月甲寅朔丙寅、遣諸王五位伊勢王、大錦下羽田公八國、小錦下多臣品治、小錦下中臣、連大嶋、并判官、錄史、工匠者等、巡行天下而限分諸國之境、是年不堪限分、庚午、詔曰、諸文武官人及畿內有位人等、四孟月必朝參、若有死病不得集者、當司具記申送法官、又詔曰、凡都城宮室非一處必造兩參、故先欲都難波、是以百寮者各往之請家地、

○栗隈首、原本隈を隅に作る中本に據て改む系詳ならず通證には可美真手命之後也云云 ○水取造、録右京神別に水取連神饒速日命六世孫伊香我色乎命之後也云云 ○矢田部造、推古紀廿三年に出づ ○藤原部造、原本藤原部に作る藤原部より轉訛せしものなり應本中本及釋紀に據て改む藤原部は允恭紀十一年に出づ續紀廿に改藤原部姓爲久須波、其部と見え録和泉皇別に葛原部豐城入彦命三世孫大御諸別之後也云云 ○刑部造、舊事紀天孫本紀に物部石持連公刑部造等祖とあり ○福草部、記上卷に天津日子根命者三枝部造等之祖也とあり ○凡川内直、中本川を河に作る神代紀瑞珠盟約章上に天津彦根命之後とあり ○川内漢直、王仁の末なり ○物部首、垂仁紀に見ゆ天足彦國押人命の後なり録山城未定雜姓に饒速日命の後なる物部首とあり ○山背直、神代紀瑞珠盟約章に見ゆ ○葛城直、劍根命之後なり ○殿服部造、詳ならず録大和神別に服部連天御中主命十一世孫天御神命之後とあり其同族か ○門部直、孝德紀及本紀十年四月に出づ ○錦織造、十年四月紀に見ゆ ○綬造、八年八月紀に見ゆ ○鳥取造、天湯河命の後なり垂仁紀廿三年に出づ ○來目舍人造、原本來目未にする北本應本に據て改む來目氏は皇別(武內宿禰の後)と神別(高皇產靈尊の後)とありて來目舍人は何れか詳ならず ○檜隈舍人造、録左京神別に檜前舍人造火明命十四世孫波利那乃連公之後也とあり ○大狛造、十年四月紀に出づ ○秦造、融通王の後なり雄略紀十五年に出づ ○川瀨舍人造、録和泉皇別に川瀨造神魂命五世孫天道根命之後也とあり ○倭馬飼造、系詳ならず ○川内馬飼造、同上 ○黃文造、天智紀及本紀元年六月に黃書造と見えたり ○藤集造、録大和未定雜姓に藤集造天津彦根命之後也とあり ○勾笥作造、系詳ならず勾は和國高市郡の地名なり職員舍宮内省に笥岡司(ハコツクリ)あり是に縁ある氏か ○石上部造、系詳ならず ○財日奉造、詳ならず中本には財の字ありて財造と云ふ二氏と云ふに合はす考造は氏族志に聖武帝時有越前江沼郡主帳財造住田と見え日奉造は録右京神別に日奉連見ゆ財造と日奉部造と二氏とせば三十八氏と云ふに合はす考ふべし ○聖部造、上に見ゆ ○穴穗部造、系詳ならず雄略紀十九年に置穴穗部とあり ○白髮部造、清寧紀三年白髮部武國押稚(清寧)天皇御名

を後世に傳むが爲に置かせ給ひし部曲なれば皇別神別諸蕃ありしなるべし ○忍海造、七年紀に出づ ○羽束造、録攝津皇別に羽束首天足彦國押人命男彦姥津命之後也と見え又攝津神別に羽束も見ゆ ○文首、書首に同じ應神紀十六年に出づ ○小泊瀨造、神八井耳命の後なり原本瀨の字を脱す北本應本中本に據て補ふ ○百濟造、姓氏録に百濟公(百濟國酒王の後)見えて百濟造又は連は見えす ○語造、録右京神別天語連天日鷲命之後也とあり ○十月)三宅吉士、四年七月紀に出づ ○草壁吉士、十年正月紀に草香部吉士に作る ○伯耆造、原本伯耆を泊に作る應本中本に據て改む國造本紀に伯耆國造の祖は兄多毛比命兒大八木足尼と見え其同族か ○船史、欽明紀十四年に出づ ○壹伎史、欽明紀四年に見ゆ ○婆羅々馬飼造、婆羅々は河内國讚良郡是なり贊良記に河内國更荒(ウラカ)郡馬甘(ウカカ)里も見ゆ上文川内馬飼造の同族か ○菟野馬飼造、菟野は河内國讚良郡鷲野邑なるべし ○吉野首、神武紀元年八月に出づ ○紀酒人直、詳ならず記に景行天皇段に神御王者木國之酒部阿比古之祖とあれど同氏にはあらず ○采女造、詳ならず録右京神別に采女朝臣和泉神別に采女臣あり何れも饒速日命の後とあり別姓なるべし ○阿直史、應神紀十五年に見ゆ ○高市縣主、元年七月に出づ ○磯城縣主、神武紀二年に出づ ○鏡作造、神代紀上に見ゆ ○倉梯、大和國十市郡 (十一月)詔、原本治に作る應本中本に據て改む ○習陣法、原本陣を陳に作る應本中本紀略に據て改む持統紀に遣陣法博士等教習諸國と見え (十二月)伊勢王、父祖詳ならず ○羽田公八國、上に元年七月に矢國に作れり ○巡行天下而、而の字は北本應本に據て補ふ ○諸國境、成務紀に隔山河而分國縣とあり其後允恭天皇の御世造立國境之標(孝德紀にも宜觀國々境、或書或圖持來奉示國縣之名來時將定等ありしを此御世に更に改定め給ひしなり) ○四五五月、春夏秋冬の初の月を云 ○欲都難波云々、これ後の難波宮の始なり

【十二年】三野縣主、清寧紀即位前紀に出づ三野は河内國若江郡(今中河内郡)の地名なり ○内藏衣縫造、齊明紀二年に大藏衣縫造の下に注す (二月)陰陽師、職員令に掌古筮相地とあり ○視占、原本古を古に作る諸本に據て改む (三月)宇間直、姓氏録に載せず續紀十三に於て宿禰乙女等見ゆれど系詳ならず ○白海石榴、白樺なり按に紀中ツバキに海石榴を充て新撰字鏡を始め其他椿を充てたり抄草木部椿

(甲申)十三年春正月甲申朔庚子、三野縣主、内藏、衣縫、造、二氏賜姓曰連、丙午、天皇御于東庭、群卿侍之時、召能射人、及侏儒、左右、舍人等射之、二月癸丑朔丙子、饗金主山於筑紫、庚辰、遣淨廣肆廣瀨王、小錦中大伴、連安麻呂、及判官、錄事、陰陽師、工匠等、於畿內、令視占應都之地、是日、遣三野王、小錦下采女、臣筑羅等、於信濃、令看地形、將都是地、歟、三月癸未朔庚寅、吉野人、宇間直、弓貢、白海石榴、辛卯、天皇巡行於京師、而定宮室之地、乙巳、金主山歸國、夏四月壬子朔丙辰、徒罪以下皆免之、甲子、祭廣瀨、大忌神、龍田、風神、辛未、小錦下高向、臣麻呂爲大使、小山下都努、臣牛

の下に楊氏漢語抄云海石榴(和名豆波岐式文用)あり鑿法に按西陽雜俎云山茶似海石榴山茶即茶梅今俗呼左々无花者則海石榴爲豆波岐爲允云云

甘爲小使遣新羅閏四月壬午朔丙戌詔曰來年九月必闕之因以教百寮之進止威儀又詔曰凡政要者軍事也是以文武官諸人務習用兵及乘馬則馬兵并當身裝束之物務具儲足其有馬者爲騎士無馬者爲步卒並當試練以勿鄣於聚會若忤詔旨有不便馬兵亦裝束有闕者親王以下逮于諸臣並罰之大山位以下者可罰之可杖之其務習以能得業者若雖死罪則減二等唯特已才以故犯者不在赦例又詔曰男女並衣服者有襪無襪及結紐長紐任意服之其會集之日著襪衣而著長紐唯男子者有圭冠冠而著括緒禪女年四十以上髮之結不結及乘馬縱橫並任意也別巫祝之類不在結髮之例壬辰三野王等進信濃國之圖丁酉設齋于宮中因以赦有罪舍人等乙巳坐飛鳥寺僧福揚以下獄庚戌僧福揚自刺頸而死五月辛亥朔甲子化來百濟僧尼及俗人男女并廿三人皆安置于武藏國戊寅三輪引田君難波麻呂爲大使桑原連人足爲小使遣高麗

組は胸の開かざる爲に紐著て結び也長紐は其紐の長く垂れたるを云ひ結紐は短くして垂れざるを云 ○圭冠、諸本ハシハカウフリとあるを中本の漆紗冠は圭冠の事にて即ち今の烏帽子なり云ひ秋齋閑語四にも侍烏帽子は古の圭冠にて昔は上下を通はして著たるなり圭冠は上をすべ括りて著せし物故はしじばるの心にてはしじばる訓するなるべし云ひ通釋には端を括りてある冠の義なり彼禮冠の如く冠冠の形異なるを云るなるべし云

六月辛巳朔甲申、雲之、秋七月庚戌朔癸丑、幸于廣瀨、戊午、祭廣瀨龍田神、壬申、彗星出于西北、長丈餘、冬十月己卯朔、詔曰、更改諸氏之族姓、作八色之姓、以混天下萬姓、一曰真人、二曰朝臣、三曰宿禰、四曰忌寸、五曰道師、六曰臣、七曰連、八曰稻置、是日、守山公路公、高橋公、三國公、當麻公、茨城公、丹比公、猪名公、坂田公、羽田公、息長公、酒人公、山道公、三氏賜姓曰真人、辛巳、遣伊勢王等定諸國界、是日、縣犬養連手繼爲大使、川原連加尼爲小使、遣耽羅壬辰、逮于入定、大地震、擧國男女叫唱、不知東西、則山崩河涌、諸國郡官舍及百姓倉屋、寺塔神社、破壞之類、不可勝數、由是人民及六畜多死傷之、時伊豫湯泉沒而不出、土左國田苑五十餘萬頃沒爲海、古老曰、若是地動未曾有也、是夕、有鳴聲如鼓、聞

我國は建國以來族制々度の行はれし國にて諸家職業を世々にし同一血族の人々相集りて一部落をなこ其宗家たる人之を統率して朝廷に奉仕せり伴造是なり伴造は團體をなして公家に仕奉るの意なり伴造には各統領たる人あり之をカバネと云其部の根幹なりカバネはカブにてカブは頭なり統領を云其統領は中臣にありては連といひ忌部にありて首さいひ猿女にありて君さいひ大伴にありて宿禰と云り氏の名と同一く姓(カバネに姓の字は當らざれど慣例に依て用ふ)の稱も其數の多かりしを此に至りて八種と定めら

組は胸の開かざる爲に紐著て結び也長紐は其紐の長く垂れたるを云ひ結紐は短くして垂れざるを云 ○圭冠、諸本ハシハカウフリとあるを中本の漆紗冠は圭冠の事にて即ち今の烏帽子なり云ひ秋齋閑語四にも侍烏帽子は古の圭冠にて昔は上下を通はして著たるなり圭冠は上をすべ括りて著せし物故はしじばるの心にてはしじばる訓するなるべし云ひ通釋には端を括りてある冠の義なり彼禮冠の如く冠冠の形異なるを云るなるべし云

十二月)大伴連、神代紀に出づ
 ○佐伯連、錄左京神別に佐伯宿禰大伴宿禰同祖道臣命七世孫室屋大連公之後也
 ○阿曇連、神代紀に出づ
 ○尾張連、同上
 ○尾張連、神代紀宣化紀に出づ
 ○倉連、錄和泉神別に椋連大明命天香山命之後也
 ○中臣酒人連、錄左京神別に中臣酒人宿禰大中臣朝臣同祖天兒屋根命十世孫巨狹山命之後也
 ○土師連、神代紀垂仁紀に出づ
 ○掃部連、孝德紀に出づ
 ○境部連、火明命の裔大彦命の裔の二氏あり何れも定め難し雄略紀に注す
 ○櫻井田部連、應神紀崇峻紀に出づ
 ○伊福部連、錄左京神別に伊福部宿禰火明命之後也
 ○巫部連、錄右京神別に巫部宿禰神饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也
 ○忍壁連、十二年紀に刑部に作る
 ○草壁連、孝德紀に出づ
 ○三宅連、垂仁紀に出づ
 ○見部連、錄左京神別に子部火明命三世孫建刀米命之後也
 ○手櫛丹比連、原本櫛の下に連の字あり北本吉本中本に據て削る、此氏は録河内神別に櫛多治比宿禰火明命十一世孫殿諸足尼命之後也男兄弟其心如女故賜櫛爲御膳部次弟男庶其心勇健其力足制十千軍衆故賜櫛號四千健彦因負姓櫛負あり
 ○靱丹比連、靱のこは上の手櫛連に注せるが如し
 ○漆部連、用明紀元年紀に出づ
 ○大湯人連、集解に按姓氏錄左京神別天孫額田部湯坐連天津彥根命子明立天御影命之後也云々大湯人連則湯坐連也云々
 ○若湯人連、錄左京神別に若湯坐連石上同祖、また攝津神別に若

十二月戊寅朔己卯大伴連佐伯連阿曇連忌部連尾張連倉連中臣酒人連土師連掃部連境部連櫻井田部連伊福部連巫部連忍壁連草壁連三宅連兒部連手櫛丹比連靱丹比連漆部連大湯人連若湯人連弓削連神服部連額田部連津守連縣犬養連稚犬養連玉祖連新田部連倭文連倭文、此云氷連、凡海連、山部連、矢集連、狹井連、爪工連、阿刀連、茨田連、田目連、小部連、菟道連、猪使連、海犬養連、間人連、春米連、美濃矢集連、諸會臣、布留連、五十氏賜姓曰宿禰、癸未、大唐學、生土師、宿禰甥、白猪、史寶然、及百濟、役時、没、大唐者猪使連子首、筑紫、三宅連得許、傳新羅、至、則新羅遣、大奈末、金物儒、送甥等、於筑紫、庚寅、除、死刑、以下、罪人皆、赦、焉、是、年、詔、伊賀、伊勢、美濃、尾張、四國、自、今、以後、調、年、免、役、役、年、免、調、

湯坐宿禰神饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也河内若湯坐連藤杵丹杵穗命之後也
 ○弓削連、雄略紀に出づ
 ○神服部連、錄和泉神別に綺連津守連同祖天香山命之後也天孫本紀に建田背命神服部連等祖あり
 ○額田部連、神代紀に出づ
 ○津守連、神功紀皇極紀に出づ
 ○縣犬養連、錄左京神別に縣犬養宿禰神魂命八世孫阿居太都命之後也
 ○孝德紀に出づ
 ○稚犬養連、皇極紀に出づ
 ○玉祖連、神代紀天孫降臨章に出づ
 ○見部連、錄左京神別に子部火明命三世孫建刀米命之後也
 ○手櫛丹比連、原本櫛の下に連の字あり北本吉本中本に據て削る、此氏は録河内神別に櫛多治比宿禰火明命十一世孫殿諸足尼命之後也男兄弟其心如女故賜櫛爲御膳部次弟男庶其心勇健其力足制十千軍衆故賜櫛號四千健彦因負姓櫛負あり
 ○靱丹比連、靱のこは上の手櫛連に注せるが如し
 ○漆部連、用明紀元年紀に出づ
 ○大湯人連、集解に按姓氏錄左京神別天孫額田部湯坐連天津彥根命子明立天御影命之後也云々大湯人連則湯坐連也云々
 ○若湯人連、錄左京神別に若湯坐連石上同祖、また攝津神別に若湯坐連藤杵丹杵穗命之後也
 ○問人連、天玉櫛彥命の後にて推古紀に出づ
 ○春米連、錄左京神別に春米宿禰石上同祖神饒速日命五世孫伊香我色雄命之後也
 ○仁德紀十三年に置春米部あり此氏の起源なり
 ○美濃矢集連、矢集の二字は北本中本に據て補ふ矢集連は上に見ゆ美濃國可兒郡に矢集郷あれば此は美濃に住みし矢集氏なるべし
 ○諸會連、詳ならず
 ○布留連、錄大和皇別に布留宿禰柿本朝臣同祖天足彥國押人命七世孫米餅搗大使主之後也
 ○筑紫三宅連得許、記中卷に神八井耳命者筑紫三宅連之祖あり
 ○是年、以下四十八字原本十一月の末猪史古注に騰津者王辰爾之甥也云々あり
 ○筑紫三宅連得許、記中卷に神八井耳命者筑紫三宅連之祖あり
 ○是年、以下四十八字原本十一月の末にありしを中本所引の或本に據て此に置く

【十四年】拜朝庭、原本拜を朔に作る北本應本中本に據て改む
 ○明位二階、明大一位明廣一位明大二位明廣二位之を二階とす
 ○淨位四階、淨大一一位淨廣一位淨大二位淨廣二位淨大三位淨廣三位淨大四位淨廣四位之を淨位四階なり如此定められしか
 ○此御世には明位を賜はりし人なく淨位を親王に賜ひしのみなり文武天皇の御世に至りて明位を親王の階淨位を諸王の階と定めらる其後官位令に親王の品位を定めて諸王に

十四年春正月丁未朔戊申百寮拜朝庭丁卯更改爵位之號仍增加階級明位二階淨位四階每階有大廣并十二階以前諸王已上之位正位四階直位四階勳位四階務位四階追位四階進位四階每階有大廣并四十八階以前諸臣之位是日草壁皇子尊授淨廣壹位大津皇子授淨大貳位高市皇子授淨廣貳位川嶋皇子忍壁皇子授淨大參位自此以下諸王諸臣等增加爵位各有差二月丁丑朔庚辰大唐人百濟人高麗人并百四十七人賜爵位三月丙午朔己未饗金物儒於筑紫即從筑

區別せられたり
 ○有大廣、原本廣を塵に作る中本に據て改む此大廣をば大寶令に至りて正從と改められたり故に倭名抄に正をばオホイ従をばヒロイと訓りオホイは大ヒロイは廣なり
 ○淨廣壹、諸王以上の位十二階の第六級に當れり壹貳參等の字は之を大字と云ひ唐制に倣ひしなり公式令に凡公文悉作眞書凡是簿帳科罪計職過所抄勝之類有數者爲大字とある是なり
 ○(三月)京職大夫、令制左京職右京職を置き其長官は何れも大夫と稱す
 ○辛檀努、孝徳紀に紫檀に作る
 ○信濃國、原本濃を農に作る諸本に據て改む
 ○(四月)牟婁湯泉、齊明紀三年に見ゆ
 ○庚子、北本應本中本及類史庚寅に作る恐らくは非ならむ庚寅は十五日なり原本傍書には壬寅とあり壬寅は廿八日
 ○(五月)讓位于父、公卿補任に粟田朝臣眞人左大臣嶋一男とあり父は嶋を云

紫歸之、仍流著新羅人七口、附物儒還之、辛酉、京職大夫直大參巨勢朝臣辛檀努卒、壬申、詔、諸國每家作佛舍、乃置佛像及經、以禮拜供養、是月、灰零於信濃國、草木皆枯焉、夏四月丙子朔己卯、紀伊國司言、牟婁湯泉沒、而不出也、丁亥、祭廣瀨龍田神、壬辰、新羅人金主山歸之、庚子、始請僧尼安居于宮中、五月丙午朔庚戌、射於南門、天皇幸于飛鳥寺、以珍寶奉於佛而禮敬、甲子、直大肆粟田朝臣眞人讓位于父、然勅不聽矣、是日、直大參當麻眞人廣麻呂卒、以壬申年之功、贈直大壹位、辛未、高向朝臣麻呂、都努朝臣牛飼等、至自新羅、乃學問僧觀常雲觀、從至之、新羅王獻物、馬二疋、犬三頭、鸚鵡二隻、鵲二隻、及種々寶物、六月乙亥朔甲午、大倭連、葛城連、凡川內連、山背連、難波連、紀酒人連、倭漢連、河內漢連、秦連、大隅直書連、并十一氏賜姓曰忌寸、秋七月乙巳朔乙丑、祭廣瀨龍田神、庚午、勅定明位已下、進位已上之朝服色、淨位已上並著朱華、朱華、此云正位、深紫直位、淺紫、勤位、深綠、務位、淺綠、追位、深蒲萄、進位、淺蒲萄、辛未、詔曰、東山道、美濃、以東、東海道、伊勢、以東、諸國有位人等、並免課役、八月

○至自新羅、十三年四月に發せしなり
 ○雲觀、中本水本靈觀に作る
 ○(六月)大倭連、倭直に同じ根津津彦の後なり
 ○葛城連、十二年紀に出づ、凡川內連、山背連亦同じ ○難波連、十年紀に出づ ○紀酒人連、十二年紀に出づ ○倭漢連、十一年紀に出づ ○書連、十二年紀文連に作る ○(七月)勅、原本初に作る北本應本中本に據て改む ○朝服、衣服令に禮服朝服見ゆ朝服は朝參の服にて後の束帶なり此時は未だ禮服をば定められざりし故に此に載せられず ○朱華、萬葉十一に翼酢(ホス)色乃赤裳同八に唐棣とあり詩召南の注に與李也一名雀梅論語には郁李也と注せり郁李は本草啓蒙にニハウメとよみ首夏花咲き白色紅邊にて遠くよりは薄紅色に見ゆと云 ○深紫、字の如くフカムラサキとも訓むべけれどコキムラサキとよめる方勝れり ○蒲萄、衣服令義解に蒲萄者紫色之最淺者也とあり ○(八月)川原寺、高市郡川原村にあり

甲戌朔乙酉、天皇幸于淨土寺、丙戌、幸于川原寺、施稻於衆僧、癸巳、遣耽羅使人等還之、

(九月)宴于舊宮、岡本宮を云九月九日なれば重陽宴なるべし
 ○宮處王、詳ならず
 ○廣瀨王、上に出づ
 ○難波王、持統紀六年に出づ
 ○竹田王、上に出づ
 ○彌努王、上に三野王に作る
 ○路真人迹見、續紀大寶二年從四位下路真人登見卒とあり
 ○筑紫、西海道なり
 ○巡察、此に六人を六道に使者として遣されしは即ち巡察使なり其職掌は職員令太政官の條に巡察使掌巡察諸國權於内外官取情正灼然者充とあり

九月甲辰朔壬子、天皇宴于舊宮安殿之庭、是日、皇太子以下、至于忍壁、皇子、賜布各有差、甲寅、遣宮處王、廣瀨王、難波王、竹田王、彌努王於京、及畿內、各令授人夫之兵、戊午、直廣肆都努朝臣牛飼爲東海使者、直廣肆石川朝臣虫名爲東山使者、直廣肆佐味朝臣少麻呂爲山陽使者、直廣肆巨勢朝臣粟持爲山陰使者、直廣參路真人迹見爲南海使者、直廣肆佐伯宿禰廣足爲筑紫使者、各判官一人、史一人、巡察國司郡司及百姓之消息、是日、詔曰、凡諸歌男歌女、笛吹者、即傳己子孫、令習歌、笛、辛酉、天皇御大安殿、喚王卿等於殿前、以令博戲、是日、宮處王、難波王、竹

○大安殿、大極殿なり
 ○博戲、僧尼令義解に双六擲蒲之類也
 ○縣犬養宿禰大侶、北本大の下麻の字あり集解には侶をトモと訓て元年紀六月作大伴と注せり
 ○藤原朝臣大嶋、十年紀に中臣連大嶋とあり
 ○熊皮、類史熊を熊に作る
 ○山羊、カモシシなり
 ○十月、常輝、類史輝を耀に作る
 ○優婆塞、翻譯名義集に優婆塞優波夷摩日義名信士男信士女淨名疏此云清淨士清淨女亦云善宿男善宿女雖在居家持五戒男女不同宿あり
 ○益田直金鍾、原本直の字なし北本應本中本に據て改む父祖詳ならず
 ○今煎白朮、白朮は字鏡に平介良と注し萬葉十四にウケラとあり葉は一葉或は三葉、花は白し本草綱目に久服輕身延年不病を愈し奉らむ爲に之を採らしめ給ひしにあらざるか原本煎を並に作る應本中本に據て改む

田王、三國眞人友足、縣犬養、宿禰大侶、大伴、宿禰御行、境部、宿禰石積、多朝臣品治、采女、朝臣竹羅、藤原朝臣大嶋、凡人賜御衣、袴、壬戌、皇太子以下、及諸王卿并四十八人、賜熊皮、山羊皮、各有差、癸亥、遣高麗國使人等還之、丁卯、爲天皇體不豫之、三日誦經於大官、大寺、川原寺、飛鳥寺、因以稻納三寺各有差、庚午、化來高麗人等賜祿各有差、冬十月癸酉朔丙子、百濟僧常輝封卅戶、是僧壽百歲、庚辰、遣百濟僧法藏、優婆塞益田直金鍾於美濃、令煎白朮、因以賜繩綿布、壬午、遣輕部朝臣足瀨、高田首新家、荒田尾、連麻呂於信濃、令造行宮、蓋擬幸東間溫湯、歟、甲申、以淨大肆泊瀨王、直廣肆巨勢、朝臣馬飼、判官以下并廿人、任於畿內之役、己丑、伊勢王等亦向于東國、因以賜衣袴、是日、說金剛般若經於宮中、十一月癸卯朔甲辰、儲用鐵一萬斤、送於周芳摠令所、是日筑紫大宰請儲用物、繩一百疋、絲一百斤、布三百端、庸布四百常鐵一萬斤、箭竹二千連、送下於筑紫、丙午、詔四方國曰、大角、小角、鼓吹、幡旗、及弩、拋之類、不應存私家、咸收于郡家、戊申、幸白錦、後苑、丙寅、法藏法師、金鍾、獻白

○荒田尾連麻呂、元年紀に荒田尾赤麻呂あり同姓ならむ
 ○東間溫湯、信濃國筑摩の溫泉なり筑摩は倭名抄に豆加萬と訓り今松本市より一里許の地に淺間溫泉あり是ならむ
 ○畿內之役、行幸せられむとするにつきて畿內を守らしめ給ふなるべし
 ○向于東國、行幸あるべき爲なるべし

尤煎、是日、爲天皇招魂之、己巳、新羅遣波珍、食金智祥、大阿、食金健勳、請政、仍進調、十二月壬申朔乙亥、遣筑紫防人等飄蕩海中、皆失衣裳、則爲防人衣服、以布四百五十八端、下於筑紫、辛巳、自西發之地震、丁亥、絁綿布以施大官、大寺、僧等、庚寅、皇后命以、王卿等五十五人賜朝服各一具、

○是日、原本日本に作る前十一の錯簡文及北本に據て改む、十一月儲用鐵、十一年の錯簡及北本應本には錢とあれど恐らくは非ならむ、周芳摠令所、持統紀に伊豫惣領續紀一文武四年に筑紫惣領周芳摠令も同じかるべし水戸訂本には總領とあれど姑く諸本に據る、○是日、原本此二字なし應本中本に據て補ふ、○庸布、孝德紀に注す、○箭竹二千連、矢に作る竹にて抄調度部征戰具に箭釋名云笑、音矢夜、其體曰、箭、音幹夜賀良、とあり連は通證に今亦云幾連猶云幾束也とあり、○大角小角、抄調度部征戰具に箭釋名云笑、音矢夜、其體曰、江小角久太乃布江、本出胡中、或云出吳越、以象龍吟也通證に波良寶螺所調螺角是也久太管也と云り、○弩、同書に弩兼名苑注云弩、於保由美、とあり、○拋、原本光に作る北本應本及釋紀に據て改む推古紀に注す、○郡家、ミヤケと訓むは古訓なり後字音にてグムゲと呼べり郡政を掌る所なり、○白錦後苑、所在詳ならず應本白を自に作り諸本苑を苑に作る苑苑通す、○招魂、釋紀に兼方按今鎮魂祭即此とあり丙寅は廿四日にて下の寅なれば、此は毎年行はる、鎮魂祭ならむ、○波珍、原本珍を彌に作る中本に據て改む、十二月四百五十八端、八の字は北本應本中本に據て補ふ、○絁綿布、水本以の字繩の上に置く、されど下文の皇后命以も同じ文體なれば改めず

【朱鳥元年】無端事、釋紀に兼方案之今世何々、子ノナク、歟とあり即ち謎なり
 ○秦措御衣、四時祭式に宮主秦措、ハリスリ袍とありこれハリスリともいふは秦を秦に通はせたるなり萬葉七に住吉之遠里小野之眞様以須禮留衣乃盛過去とある様は俗にハ

朱鳥元年春正月壬寅朔癸卯、御大極殿而賜宴於諸王卿、是日、詔曰、朕問王卿、以無端事、仍對言得實、必有賜、於是高市皇子被問、以實對、賜秦措御衣三具、錦袴二具、并絁廿疋、絲五十斤、綿百斤、布一百端、伊勢王亦得實、即賜皂、御衣三具、紫袴二具、絁七疋、絲廿斤、綿四十斤、布四十

改む
 ○鍍金器、字の如し鍍は字鏡に刻也金乃知利婆女さあり
 ○霞錦、釋紀に霞色之錦さあり通證に杜陽雜編曰女王國有明霞錦練水香麻爲之光耀分複五色相間而美麗過中國之錦さあり次なるも霞錦なるを原本轉倒せり之に據て改む

○屏風、通證に三禮圖曰屏風之名出于漢世禮明堂位註今屏風遺象也さあり ○多紀皇女、天皇の皇女、文武紀に當者皇女に作る ○山背姫王、詳ならず集解には紹運錄を引て按押坂彦人大兄子舒明天皇弟有山城王蓋其女也さあり ○石川夫人、同書に按二年紀夫人蘇我赤兄大臣女大蘇我蘇我石川同姓即此さあり ○五月、體不安、中本體の上に始の字あり ○藥師經、藥師瑠璃光如來七佛本願功德經二卷なり ○金智祥等、原本祥を詳に北本群に作る應本中本に據て改む ○左右大舍人、職員令に左右大舍人各八百人さあり ○六月、槻本村主、原本村を材に作る應本本に據る後漢獻帝の後なり ○崇草薙劍、原本崇を崇に作る中本に據て改む通證に熱田古記天智時國人捕獲道行國司道連奏納劍于帝宮さありされば天智天皇七年僧道行觸冒以來禁中に奉藏し奉れるかとも思はる、が新撰和漢合圖には天武天皇十三年村雲劍自熱田宮被置内裏さありたり伴信友氏は之を證さして道行觸冒以來禁中に奉藏し奉りたりさあり ○送置子尾張國熱田社、熱田社鎮座紀に朱鳥元年五月庚子賜可奉還奉還新宮以前下之永宣旨始勤行之さあり ○以身體、原本以の字一字行れり北本應本に據て削る ○四寺、詳なられど大官大寺川原飛鳥の三寺一寺を加へしならむ元亨釋書に四方和尚に作る ○和上、懸苑音義に和上按五天雅言和上謂之鳩波陀耶然彼土流俗謂之殭鳥沒切社于闐疏勒乃云鶴社今此方訛音謂之和上云々言鳩波者此云近也陀耶者讀也言此尊師爲弟子親近習讀之者也舊云親教師者是也さあり上の字を用ふるは律宗にして他は皆尙の字を用ふさ云 ○師位僧、通證に傳燈大法師位傳燈法師位之類さあり ○御被、抄裝東部に說文云衞(布須万)大被也四聲字苑云衞被別名也さあり ○燃燈供養、燈火を燃して衆生の罪過を懺悔するを云 ○悔過、翻譯名義集に懺悔此翻悔過應法師云此云忍謂容恕我罪也さあり ○庚寅、通證に當與丙申互換さ云 ○名張厨司、名張は伊賀國名張郡なり通證に按厨司奉御贊所さあり

○(七月)己亥、原本己を乙に作る干支を推すに己亥の誤なること明なり故に訂す
 ○脛裳、上に出づ
 ○垂髮于背、十一年紀に此風を禁められしかご又古の風に復し給へるなり

是以僧正僧都及衆僧應誓願、則奉珍寶於三寶、是日、三綱律師、及四寺和上、知事、并現有師位僧等、施御衣御被各一具、丁亥、勅遣百官人等於川原寺、爲燃燈供養、仍大齋之悔過也、丙申、法忍僧、義照僧、爲養老各封卅戶、庚寅、名張厨司災之、

秋七月己亥朔庚子、勅、更男夫著脛裳、婦女垂髮于背、猶如故、是日、僧正僧都等參赴宮中、而悔過矣、辛巳、詔諸國大解除、壬寅、半減天下之調、仍悉免徭役、癸卯、奉幣於居紀伊國國懸神、飛鳥四社、住吉、大神、丙午、請

通證に今俗謂之須邊、其加之云々さ云り
 ○徭役、通證に美由伎蓋自征(ユキ)さ云り吏學指南曰科調曰徭工作征成曰役さあり
 ○國懸神、神名式に紀伊國名草郡國懸神社(今海草郡宮村秋月)さあり天照大神の前御靈を祀り現に官幣大社たり
 ○飛鳥四社、神名式に大和國高市郡飛鳥坐神社四座是なり
 ○住吉大神、式に攝津國住吉郡住吉坐四座さあり此社の事神功紀に出づ
 ○藏庸舍屋、庸を納むる所なり
 ○詔曰、類史免官物の條に載せたり
 ○乙酉年、昨年なり
 ○改元、此年朱鳥の出でたるを瑞さして改元し給へるなり其は此紀に漏れたれ扶桑略記に十五年大倭國進赤雉仍七月改爲朱鳥元年さあり
 ○(注)阿訶美吉利、原本苦を苦に作る北本應本に據て改む
 ○名宮云々、原本宮を官に作る諸本に據て改む記傳に此飛鳥はトブトリさ

一百僧讀、金光明經於宮中、戊申、雷光南方而一大鳴、則天災於民部省藏庸舍屋、或曰、忍壁皇子宮、失火延燒、民部省癸丑、勅曰、天下之事不問、大小悉啓于皇后及皇太子、是日、大赦之、甲寅、祭廣瀨龍田神、丁巳、詔曰、天下百姓、由貧乏而餓稻及貨財者、乙酉、年十二月卅日以前、不問公私、皆免原、戊午、改元曰朱鳥元年、詞美吉利、仍名宮曰飛鳥淨御原宮、丙寅、選淨行者七十人、以出家、乃設齋於宮中、御窟院、是月、諸王臣等爲天皇、造觀音像、則說觀世音經於大官大寺、八月己巳朔、爲天皇、度八十僧、庚午、度僧尼并一百、因以坐百菩薩於宮中、讀觀世音經二百卷、丁丑、爲天皇體不豫、祈于神祇、辛巳、遣秦忌寸石勝、奉幣於土左大神、是日、皇太子、大津皇子、高市皇子、各加封四百戶、川嶋皇子、忍壁皇子、各加百戶、癸未、芝基皇子、磯城皇子、各加二百戶、己丑、檜隈寺、輕寺、大窪寺、各封百戶、限、卅年、辛卯、巨勢寺封二百戶、九月戊戌朔辛丑、親王以下逮于諸臣、悉集川原寺、爲天皇病誓願云々、丙午、天皇病遂不差、崩于

訓むべしこれなアスカ
訓は非なり其故は朱鳥の
祥瑞の出来たるをめで給
ひて年號をも然改め給ひ
大宮の名にも其朱雀を取
て飛鳥云々名づけ給へ
るなりアスカといはむは
本よりの地名なれば殊更
に仍名宮曰なご云べき
由なきを思ふべしと云り
○宮中御齋院、上の御齋
殿に同じ
○觀音像、中本觀の下に
世の字あり翻譯名義集に
阿那婆婁吉低輪此云觀
世音能所圓融有無兼暢
照窮正性察其本末未故
稱觀也世音者是所觀之
境也云々とあり
(八月)觀世音經二百
卷、原本世の字なし北本
應本中本及紀略に據て補
ふ觀音經は法華經第八の
普門品を云
○土左大神、土佐國土佐
郡土佐神社を云
○皇太子、原本皇の上
にの字あり北本應本中本
に據て削る
○檜隈寺、大和志に高市
郡檜隈廢寺檜前村故跡今
存十三層石浮圖とあり
○輕寺、大和志に高市郡
輕廢寺在大歌留村屬東

正宮、戊申、始發、哭、則起、殯、宮於南庭、辛酉、殯于南庭、即發、哀、當是時、大
津、皇子謀、反於皇太子、甲子、旦、諸僧尼發、哭於殯庭、乃退之、是日、肇
進、奠、即誅、之、第一、大海宿禰、菖蒲、誅、壬生事、次、淨、大肆、伊勢、王、誅、諸
王事、次、直、大參、縣、犬養、宿禰、大伴、摠、誅、宮內事、次、淨、廣、肆、河內、王、誅、左右
大舍人、事、次、直、大參、當、摩、真人、國見、誅、左右、兵衛、事、次、直、大肆、采、女、朝臣
筑羅、誅、內命、婦、事、次、直、廣、肆、紀、朝臣、真人、誅、膳、職、事、乙丑、諸僧尼亦
哭、於殯庭、是日、直、大參、布、勢、朝臣、御主人、誅、太政官、事、次、直、廣、參、石
上、朝臣、麻呂、誅、法、官、事、次、直、大肆、大、三、輪、朝臣、高市、麻呂、誅、理、官、事、次、
直、廣、參、大、伴、宿、禰、安、麻呂、誅、大、藏、事、次、直、大肆、藤、原、朝臣、大、嶋、誅、兵、政、官
事、丙寅、僧尼亦、發、哀、是日、直、廣、肆、阿、倍、久、努、朝臣、麻呂、誅、刑、官、事、次、直
廣、肆、紀、朝臣、弓、張、誅、民、官、事、次、直、廣、肆、穗、積、朝臣、虫、麻呂、誅、諸、國、司、事、
次、大、隅、阿、多、牟、人、及、倭、河、內、馬、飼、部、造、各、誅、之、丁、卯、僧尼發、哀、之、是日、百
濟、王、良、虞、代、百、濟、王、善、光、而、誅、之、次、國、々、造、等、隨、參、赴、各、誅、之、仍、奏、種

種、歌舞

明寺邑とあり
○大窪寺、北本窪を致菩
の二字に作る大和志に高
市郡大窪廢寺大久保村故
址尙有觀音堂とあり
○巨勢寺、大和志に葛上
郡巨勢廢寺古瀨村礎石尙
在即是とあり
○崩于正宮、大日本史に
本書享年闕一代要記皇胤
紹運錄並曰壽六十五と
○大津皇子謀反、此の事
持統紀即位前紀に見ゆ
○肇進奠、字書に奠薦也
より肇めて御饌を奠りて
誄詞を奏したるなり崩御
以來第七日なり
○大海宿禰、通證に與
凡海、同、今、按、天皇、元、名、大
海、皇子、則是、爲、乳、母、家、故
誄、壬生事、也、と云へり書
誄は續紀二に大寶元年二
月凡海宿禰産に作る
○壬生事、御産生の御事
なり ○當摩真人國見、中本摩を麻に作る ○是日云々、通證に前日誄禁中事次日誄天下政と云へるはさることなり ○布勢朝臣御主人、持
統紀十年に大納言阿部朝臣御主人とあり ○石上朝臣麻呂、北本應本麻を摩に作る續紀七に和銅元年三月左大臣正二位石上朝臣麻呂薨云々泊瀨朝倉
朝廷大連物部之後難波朝臣衛部大華上宇麻古之子也とあり ○大三輪朝臣高市麻呂、北本應本麻を摩に作る持統紀に中納言直大貳三輪朝臣高市麻呂と
あり續紀三に左京大夫從四位上大神朝臣高市麻呂卒云々大花上利金之子也と云る如く大三輪或は三輪又大神と書けれど皆同氏なり ○理官事、治部
省の事なり ○兵部省の事なり ○僧尼亦、北本應本亦の字なし ○阿倍久努朝臣、續紀五に和銅五年十一月阿倍朝臣宿麻呂の上言に久
努朝臣は阿倍氏の正宗なるが居處に縁て別氏とされり見ゆ ○刑官事、刑部省の事なり ○民官事、民部省の事なり ○虫麻呂、北本應本麻を摩
に作る ○大隅阿多牟人、牟人に關係の事に就て誄び奉りしなるべし ○倭河内馬飼部造、馬飼の事に關して誄び奉りしなるべし ○百濟王良虞、
續紀十二に百濟王良虞卒とあり善光の子なり

日本書紀卷第廿九

日本書紀卷第卅

ヤマトフミノマキノツイデミソチニアタルマキ

高天原廣野姬天皇 持統天皇

高天原廣野タカアノハラヒロノ姬ヒメノ天皇ハハカキクノミナハウ少名シヤカキ鷓野シヤカキ讚良皇女シヤカキノリ天命開別タカハライカシヒ天皇タラシ第二女也（天智）ノ母（養明）ノ曰遠智シヤカキ娘リ津オホキナル子アメトヨ美濃タカラ也イカシヒ天皇タラシ深沈（養明）ノ有大度（養明）ノ天豐財重（養明）ノ日足（養明）ノ姬（養明）ノ天皇（養明）ノ三年（養明）ノ適天（養明）ノ淳中原瀛（養明）ノ真人（養明）ノ天皇（養明）ノ爲（養明）ノ妃（養明）ノ雖（養明）ノ帝（養明）ノ王女（養明）ノ而好（養明）ノ禮節（養明）ノ儉（養明）ノ有（養明）ノ母儀（養明）ノ德（養明）ノ天命開（養明）ノ別（養明）ノ天皇（養明）ノ元年（養明）ノ生（養明）ノ草壁（養明）ノ皇子（養明）ノ尊於（養明）ノ大津宮（養明）ノ十年（養明）ノ十月（養明）ノ從（養明）ノ沙門（養明）ノ天淳（養明）ノ中原瀛（養明）ノ真人（養明）ノ天皇（養明）ノ入（養明）ノ於（養明）ノ吉野（養明）ノ避（養明）ノ朝（養明）ノ猜忌（養明）ノ語（養明）ノ在天命開（養明）ノ別（養明）ノ天皇（養明）ノ紀（養明）ノ天淳（養明）ノ中原瀛（養明）ノ真人（養明）ノ天皇（養明）ノ元年（養明）ノ夏（養明）ノ六月（養明）ノ從（養明）ノ天淳（養明）ノ中原瀛（養明）ノ真人（養明）ノ天皇（養明）ノ避（養明）ノ難（養明）ノ東國（養明）ノ鞠（養明）ノ旅（養明）ノ會（養明）ノ衆（養明）ノ遂（養明）ノ與（養明）ノ定（養明）ノ謀（養明）ノ廼（養明）ノ分（養明）ノ命（養明）ノ敢（養明）ノ死（養明）ノ者（養明）ノ數（養明）ノ萬（養明）ノ置（養明）ノ諸（養明）ノ要（養明）ノ害（養明）ノ之（養明）ノ地（養明）ノ秋（養明）ノ七月（養明）ノ美濃軍將等（養明）ノ與（養明）ノ大倭（養明）ノ豪（養明）ノ共（養明）ノ誅（養明）ノ大友（養明）ノ皇子（養明）ノ傳（養明）ノ首（養明）ノ詣（養明）ノ不破宮（養明）ノ二年（養明）ノ立（養明）ノ爲（養明）ノ皇后（養明）ノ皇后（養明）ノ從（養明）ノ始（養明）ノ迄（養明）ノ今（養明）ノ佐（養明）ノ天皇（養明）ノ定（養明）ノ天下（養明）ノ每（養明）ノ於（養明）ノ待（養明）ノ執（養明）ノ之際（養明）ノ輒（養明）ノ言（養明）ノ及（養明）ノ政事（養明）ノ多（養明）ノ所（養明）ノ毗（養明）ノ補（養明）ノ朱鳥（養明）ノ元年（養明）ノ九月（養明）ノ戊戌（養明）ノ朔（養明）ノ丙午（養明）ノ天淳（養明）ノ中原瀛（養明）ノ真人（養明）ノ天皇（養明）ノ崩（養明）ノ皇后（養明）ノ臨朝（養明）ノ稱制（養明）ノ

【即位前紀】高天原廣野
 姫天皇、鷓野皇女と申奉
 るより廣野と稱へ廣とい
 へるより高天原と冠らせ
 て御徳の廣大に坐す由を
 稱へ奉れるなり
 ○少名鷓野讚良皇女、北
 本少を小に作る少名とあ
 れど後迄も此御名にて坐
 し、なり鷓野は河内國讚
 良郡の地名なり御母遠智
 娘の父蘇我石川麻呂の食
 邑なれば遠智娘其地に住
 りて天皇も此地に生坐し、
 に因りて御名としたりな
 るべし
 ○遠智娘、天智紀七年二
 月に出づ
 ○雖帝王女云々、以下十
 三字は後漢書郭皇后紀の
 文に據れり有母儀徳と
 は天下の母たる御徳のま
 します云
 ○大津宮、齊明紀五年七
 月同七年三月に見えたる

病也。あり篤疾に同じ戸令に殘疾廢疾篤疾と區別し惡疾癩狂二支廢兩目盲如レ此之類皆爲篤疾とあり

○貧不能自存者、老疾或は貧窮にして自ら生活すること能はざるものを云ふ

○二月、賦田受稟、字書に賦は給與也稟は賜穀也とあり

○縵、原本縵を漫に作る北本楓本中本に據て改む時花を風流に糸に貫て鬘とせざるものなり内藏寮式大神祭有忍冬花鬘萬葉に百合花鬘あり又翻譯名義集七に俱蘇摩此云華摩羅云鬘應法師云西域結鬘師多用蘇摩羅華一行列結之、以爲條貫、無問男女貴賤、皆此莊嚴或首或身以爲飾好正法念云生、天華鬘在額と見ゆ

○新羅人、中臣本人の字なし

○五月、隼人大隅阿多魁帥、天武紀朱鳥元年八月に出づ魁帥は首領なり

○七月、負債者、原本債を債に作る北本中本及類史に據て改む職員令刑部省義解に徵財日債也受賃不償日負とあり

卯、以テオゾカラマキオモグル、化高麗五十六人、居于常陸國、賦田受稟、使安生業、甲申、以テハナカツラテ、花縵進于殯宮、此日御蔭、是日丹比真人麻呂誅之、禮也、丙戌、以テオゾカラカツラテ、新羅人十四人、居于下毛野國、賦田受稟、使安生業、夏四月、甲午、朔癸卯、筑紫大宰獻投化新羅僧尼及百姓男女廿二人、居于武藏國、賦田受稟、使安生業、五月、甲子、朔乙酉、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭焉、於是隼人大隅阿多魁帥各領己衆、互進誅焉、六月、癸巳、朔庚申、赦罪人、秋七月、癸亥、朔甲子、詔曰、凡負債者、自乙酉年以前、物莫收、利也、若既役身者、不得役利、辛未、賞賜隼人大隅阿多魁帥等三百卅七人、各有差、八月、壬辰、朔丙申、嘗于殯宮、此日御青飯也、丁酉、京城耆老男女、皆臨慟哭、於橋西己未、天皇使直大肆藤原朝臣大嶋直大肆黃書連大伴請集三百龍象大德等於飛鳥寺、奉施袈裟、人別一領、曰、此以天淳中原瀛真人、天皇御服所縫作也、詔詞酸刻、不可具陳、九月、壬戌、朔庚午、設國忌齋於京師、諸寺辛未、設齋於殯宮、甲申、新羅遣王子金霜

○乙酉年、天武天皇十四年にて三年前なり

○利、利息なりコノシロは子代の意

○各有差、原本各一字衍れり北本中本に據て削る

○八月、嘗于殯宮、嘗は新嘗祭の嘗と同じ前文に奉奠とあると同じく御饌を供ふるを云

○青飯、魚鳥の内を用ひずして専ら菜蔬を用ふるを云之をヒシキオホノと訓るは葬禮私考(栗田博士)に喪葬令集解に古記を引て生目天皇の孽園目王の妻伊賀比自支和氣の女が殯殿の事を司れる事を云て凡天皇崩時者比自支和氣等到殯所供奉其事云々の事ありしによりて御世の殯宮に奉れる御飯を比自支飯と名けられたるなるべしと云り

○耆老男女、戸令に六十一爲老六十六爲耆とあり

○龍象、祖庭事苑に智度論云龍象言其力大龍水行中力大象陸行中力大今以鉅禪碩師比之龍象とあり

○大德、釋氏要覽に智度論云梵語娑檀陀秦言大德律中多呼佛爲大德增輝記云行滿德高曰大德とあり

○酸刻、原本刻を割に作る釋紀に據て改む字書に悲痛曰酸刻痛也とあり極めて悲しきを云

○九月、國忌齋、職員令治部省の義解に國忌謂先皇崩日とあり天武天皇は前年九月九日崩じ給ひしによりて周忌の齋會を行ひ給ひしなりハテは最終の義なり

○十月、大内陵、二年十一月紀に出づ

○十二月、爲饗新羅勅使、集解に羅の下に人の字を補ふ

○太歲、原本太を大に作る前例に據て補ふ

林、級、喰、金、薩、募、及、級、喰、金、仁、述、大、舍、蘇、陽、信、等、奏、請、國、政、且、獻、調、賦、學、問、僧、智、隆、附、而、至、焉、筑、紫、大、宰、便、告、天、皇、崩、於、霜、林、等、即、日、霜、林、等、皆、著、喪、服、東、向、三、拜、三、發、哭、焉、冬、十、月、辛、卯、朔、壬、子、皇、太、子、率、公、卿、百、寮、人、等、并、諸、國、司、國、造、及、百、姓、男、女、始、築、大、內、陵、十、二、月、辛、卯、朔、庚、子、以、直、廣、參、路、眞、人、迹、見、爲、饗、新、羅、勅、使、是、年、也、太、歲、丁、亥、

(戊子) 二年春正月、庚申朔、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭焉、辛酉、梵衆發哀於殯宮、丁卯、設無遮大會於藥師寺、壬午、以天皇崩奉宣新羅金霜林等、金霜林等乃三發哭、二月、庚寅、朔辛卯、大宰獻新羅調賦、金銀絹布、皮、銅、鐵、之、類、十、餘、物、并、別、所、獻、佛、像、種、種、彩、絹、鳥、馬、之、類、十、餘、種、及、霜林所獻、金、銀、彩、色、種、種、珍、異、之、物、并、八、十、餘、物、己亥、饗霜林等於筑紫館

○(五月)夏五月、原本夏の字なし通釋に従て補ふ
○(六月)輕繫、トラヘヒトノカロキハ訓むべし中本に擊輕に作る
○(七月)沙門道藏、天武紀十二年七月に見ゆ
○不崇朝、毛詩鄭風に崇朝其雨大全に崇終也從日至食時爲終朝也

○(九月)筑紫館、大宰府にある館なり
○(十一月)楯節儺、釋紀に私記曰師說今之吉士舞也以楯爲節度故名また職員令雅樂令集解に別記云楯臥舞十人五人土師宿禰等五人文忌寸等右著甲并持刀楯さあり又三代實錄貞觀元年十一月十九日に見ゆ

○遞進、原本遞を遙に作る通證集解に據て改む下同じ
○遞進而誅、而の字は北本中本に據て補ふ

賜物各有差、乙巳、詔曰、自今以後、每取國忌日、要須齋也、戊午、霜林等罷歸、三月己未、朔己卯、以花縵進于殯宮、藤原朝臣大嶋誅焉、夏五月戊午、朔乙丑、以百濟敬須德那利、移甲斐國、六月戊子、朔戊戌、詔令天下繫囚極刑、減本罪一等、輕繫皆赦除之、其令天下皆半入今年調賦、秋七月丁巳、朔丁卯、大雩早也、丙子、命百濟沙門道藏、請雨不崇朝、遍雨天下、八月丁亥、朔丙申、嘗于殯宮、而慟哭焉、於是大伴宿禰安麻呂誅焉、丁酉、命淨大肆伊勢王奉宣葬儀、辛亥、耽羅王遣佐平加羅來獻方物、九月丙辰、朔戊寅、饗耽羅佐平加羅等於筑紫館、賜物各有差、冬十一月乙卯、朔戊午、皇太子奉公卿百寮人等與諸蕃賓客適殯宮、而慟哭焉、於是奉奠奏楯節儺、諸臣各舉己先祖等所仕狀、遞進誅焉、己未、蝦夷百九十餘人負荷調賦而誅焉、乙丑、布勢朝臣御主人、大伴宿禰御行、遞進而誅焉、直廣肆當麻真人智德、奉誅皇祖等之騰極次第禮也、古云日嗣也、畢葬于大內陵、十二月乙酉、朔丙申、饗蝦夷男女二百一十三

人於飛鳥寺西槻下、仍授冠位、賜物各有差

○當麻真人智德、續紀五に和銅四年五月當麻真人智得卒あり
○騰極次第、御代ノの日嗣知看し、天皇等の御次第より當今天皇の相承給へるまでの御事を具に申して誅に奉れるなり智德は皇別なれば此誅を仕奉らしめじならむ ○古云日嗣也、通證に恐五字當作分註あり ○大內陵、諸陵式に檜隈大內陵在大和國高市郡大和志に在、五條野村西俗呼圓山又名東明寺家岩窟廣八尺許深九尺許內有雙石棺、陵墓要覽に高市郡高市村大字野口字王墓あり (十二月)各有差、原本各の字なし北本中本に據て補ふ

【三年】朝萬國、朝拜の儀なり

○前殿、正殿なり
○獻杖八十枚、卯杖を奉るなり文德天皇仁壽二年正月の條に諸衛府獻卯杖、遂精魅也さあり尙此事延喜左兵衛式大舍人寮式等に詳なり
○詔曰、集解に此二字を衍として削れり
○務大肆、集解に此三字を脂利古の上に置き改めたり
○優嗜曇郡、抄國郡部にあり出羽國置賜郡於伊太三れば是なるべし通證には陸奥國浮田即ち宇多郡さす
○鐵折、原本鐵を鐵に作る北本中本に據て改む鐵器なり
○蔬食、抄菜蔬部に菜蔬兼名苑注云草可食曰菜蔬 (和名上奈下久佐比

(己丑) 三年、春正月、甲寅、朔、天皇朝萬國于前殿、乙卯、大學寮獻杖八十枚、丙辰、詔曰、務大肆陸奥優嗜曇郡城養蝦夷脂利古男麻呂與鐵折、請別鬢髮爲沙門、詔曰、麻呂等少而閑雅寡欲、遂至於此、蔬食持戒、可隨所請、出家修道、庚申、宴公卿賜袍袴、辛酉、遣新羅使人田中朝臣法麻呂等還自新羅、壬戌、詔出雲國司上送遣值風浪蕃人、是日、賜越蝦夷沙門道信佛像一軀、灌頂幡、鍾鉢各一口、五色綵各五尺、綿五屯、布一十端、鍬一十枚、鞍一具、筑紫大宰粟田真人朝臣等獻隼人一百七十四人、并布五十常、牛皮六枚、鹿皮五十枚、戊辰、文武官人進薪、己巳、賜官人等食、辛未、天皇幸吉野宮、甲戌、天皇至自吉野宮、二月甲申、朔丙申、詔筑紫防人滿年限者替己酉、以淨廣肆竹田王、直廣肆土師宿禰根

良)箋注に逸周書大臣篇注可食之菜曰蔬按說文無蔬字古只作蔬廣本作和名蔬菜久佐非良恐非是也

○庚申宴公卿、七日の節會なり

○遣新羅、原本遣の字なし集解に據て補ふ

○越蝦夷、原本夷を越に作る北本中本に據て改む

○五尺、通釋に尺を正に改めたる所據なし

○(一)滿年限者替、軍防令に防人の年限は三年あり其年限滿つれば交代せしむるを云

○竹田王、天武紀に出づ

○藤原朝臣史、史又不比等に作る鎌足の第二子なり

○當麻真人櫻井、續紀靈龜元年二月の條に從四位下當麻真人櫻井卒あり

○中臣朝臣臣鷹、原本に朝臣の二字なし北本中本に據て補ふ即位前紀に出づ

○大三輪朝臣安鷹、續紀六和銅七年正月の條に兵部卿大神朝臣安鷹呂卒あり

○判事、通證に此謂判事者恐總判決朝廷政事之

鷹、大宅朝臣鷹、藤原朝臣史、務大肆當麻真人櫻井、穗積朝臣山守、中臣朝臣臣鷹、巨勢朝臣多益須、大三輪朝臣安鷹、爲判事、三月癸丑朔丙子、大赦天下、唯常赦所不免、不在赦例、夏四月癸未、朔庚寅、以投化新羅人、居于下毛野、乙未、皇太子草壁皇子尊薨、壬寅、新羅遣級食金道那等、奉弔瀛真人、天皇喪、并上送學問僧明聰、觀智等、別獻金銅阿彌陀像、金銅觀世音菩薩像、大勢至菩薩像、各一軀、綵帛錦綾、甲辰、春日王薨、己酉、詔諸司仕、丁一月、放假四日、五月癸丑、朔甲戌、命土師宿禰根麻呂、詔新羅弔使級食金道那等曰、太政官卿等奉勅奉宣、二年遣田中朝臣法鷹等、相告大行天皇喪、時新羅言、新羅奉勅人者、元來用蘇判位、今將復爾、由是法鷹等不得奉宣、赴告之詔、若言前事者、在昔難波宮治天下、天皇崩時、遣巨勢稻持等告喪之日、醫食金春秋奉勅、而言用蘇判奉勅、即違前事也、又於近江宮治天下、天皇崩時、遣一吉食金薩儒等奉弔、而今以級食奉弔、亦違前事、又新羅元來奏云、我國自日本遠皇祖代、並舐不干檄奉仕之國、而今一艘亦乖、故典也、又奏云、自日本遠

職名也云々あり後世の參議大辨の職なるべし

○(二月)大赦常赦、大赦は常赦より一段重き罪を赦すを云常赦は常體の赦にて天下一般なり曲赦は其國其所に限る赦なり非常大赦は罪不殘赦を云

○(四月)草壁皇子尊薨、天武天皇は朱鳥元年九月に崩せられ持統天皇の即位せられしは四年正月なれば其間は事實上此尊の御世なりしなり然るに即位前紀臨朝稱制の注に述べたるが如き理由にて御母の皇后政治を總覽せられたり故に日嗣の並に御世を知食したるに准へて尊の御諡を日並知皇子尊と稱し奉りしなり

○瀛真人天皇、水本此上天淳中原の四字を補ふ

○金銅觀世音、金銅の二字北本になし恐くは衍

○春日王、詳ならず紹運錄に天智天皇の御孫施基皇子の男に春日王あれど此王卒去の事續紀一に見えれば別なり

○放假、假は暇なり假寧令に凡在京諸司每六日並給休假一日あり之に准へて知るべし

○太政官卿等奉勅云々、此詔詞宣命なりしを漢文に改めしものなるべし

○(五月)奉宣、奉勅も奉宣も同じ事のやうなれど宣命の體よりかく重ねて書けるなり

○二年、釋紀に當作元年あり此事元年正由是法麻呂等云々、蘇判は我三位に當れるを法鷹此時直廣肆にて第十六等の爵位なりしかば使人より下位なりし故にかく云り

○蘇判、新羅第三等の官なり

○巨勢稻持、此人孝德天皇の御喪を告げしと紀に洩れたる位は猶下がりけむを證に引出たり

○醫食、通釋に之を新羅第二等の官なる伊食なるべしと云り金春秋は大化三年我國に實たりし時大阿食(第五等官)たりしが孝德帝崩御の時醫食として弔使たりしなるべし

○一吉食、原本吉を告に作る中本に據て改む七等官なり

○級食、八等官なり

○(六月)皇子施基、詳ならず

○宿那鷹、天武紀十四年に少麻呂あり

○羽田朝臣鷹、續紀二大寶元年六月の條に以正五位上波多朝臣率胡門任造藥師寺司あり

○(注)齊、原本なし集解に據て補ふ

○伊余部連馬飼、錄右京神別に伊與部高彌率須比命三

皇祖代、以清白心仕奉、而不惟竭忠宣揚本職、而傷清白詐求幸媚、是故調賦與別獻、並封以還之、然自我國家遠皇祖代、廣慈汝等之德、不可絕之、故彌勤彌謹、戰々兢兢、修其職任、奉遵法度者、天朝復益廣慈耳、汝道那等奉斯所勅、奉宣汝王、六月壬午朔、賜衣裳筑紫大宰等、癸未、以皇子施基、直廣肆佐味、朝臣宿那鷹、羽田朝臣齊、齊、此云勤廣肆伊余部、連馬飼、調忌寸老人、務大參大伴、宿禰手拍、與巨勢朝臣多益須等、拜撰善言司、庚子、賜大唐續守言薩弘恪等稻各有差、辛丑、詔筑紫大宰粟田真人、朝臣等賜學問僧明聰、觀智等、爲送新羅師友、綿各一百四十斤、乙巳、於筑紫小郡設新羅弔使金道那等、賜物各有差、庚戌、班賜諸司、令一部廿二卷、

世孫天辭代主命之後也... 造宮卿大伴宿禰手拍卒... 北本中本に據て補ふ... 年八月の條に造法令... 先朝に改定せられ是に至りて班賜ひしなるべし此書世に傳はらざるは惜むべき事なり

〔七月〕婆羅、抄器皿部に唐韻云鈔羅(二音與沙羅同俗云沙布羅)今案或説云新羅金梳出(新羅國)後人謂之雜羅(者新之訛也正説未詳)銅器也... 〇偽兵衛、軍防令に凡兵衛者國司簡郡司子弟強幹使弓馬者郡別一人貢...

秋七月壬子朔付賜陸奥蝦夷沙門自得所請金銅藥師佛像觀世音菩薩像各一軀... 丙寅詔左右京職及諸國司築習射所... 戊賜越蝦夷八釣魚等各有差... 官而奉宣天神地祇之事... 國武庫海一千步內紀伊國阿提郡那耆野二萬頃... 二萬頃置守護人准河內國大鳥郡高脚海丁酉賞賜公卿各有差... 丑詔伊豫摠領田中朝臣法磨等曰讚吉國御城郡所獲白鷺宜放養焉... 癸卯觀射潤八月辛亥朔庚申詔諸國司曰今冬戶籍可造宜限九月糺捉浮浪其兵士者每於一國四分而點其一令習武事丁丑以淨廣

〇神祇官、此に始めて見えたれば此官は古くよりありしこと言ふまでもなし此に天神地祇の事を奉宣せられし理由は明ならぬ此明年正月即位に先だち此事ありしなるべし... 〇武庫海、攝津國武庫郡にあり... 〇一千歩、一歩は雜令に度地五尺爲歩あり... 〇阿提郡那耆野、阿提郡は大同年七月安謐郡を改めて在田郡とすあり今の在田郡なり那耆野は倭名抄に在田郡奈郷あり是か... 〇伊賀郡身野、記に師水津日子命者伊賀三野稱置之祖とあり今の美濃波多村蓋是なり... 〇高脚海、今も南北高石村あり高脚海は萬葉集以下の歌集に多く見ゆ... 〇伊豫摠領、摠領の事は天武紀十四年十一月に見ゆこれ當時の國司大國に宰して數國を兼知するを云伊豫の摠領は即ち四國の管領なり... 〇御城野、畿岐國に三木郡あり(潤八月)糺捉浮浪、此事天智紀九年にも見ゆ戸籍を造て浮浪者を整理せられしなり... 〇四分而點其一、此兵制は大寶令制の時も亦同じ... 〇通前、五年の條を參考するに通前二百戸とあるべし(九月)石上朝臣磨、四年正月には物部とあり... 〇給送位記、位記を賜はる事此に初て見ゆ此は筑紫に在任する人々に賜はるべき位記なり五年一月にも授官人位記と見ゆ... 〇新城、標注に三代實錄十二に大宰府司於城山四天王院轉讀金剛般若經云々とある地にて大宰府より筑後に越ゆる處の山なりと云りなほよく考ふべし(十月)高安城、河内國高安郡... 〇下毛野朝臣子磨、續紀四和銅二年十二月式部卿大將軍下毛野朝臣古麻呂卒とあり... 〇奴婢云々、賤を免じて良と爲すを云(十一月)己卯、原本卯を丑に作る中本に據て改む... 〇於市中云々、原本市中を中市に作る類史に據て改む通證に今按以矛戟弓劍戈爲五兵疑三兵是弓劍槍也とあり殊更に市中にて褒美あるは石成が名譽を人に知らしめむが爲なるべし(十二月)雙六、抄術藝部に雙六兼名苑云雙六一名六采(今按簿亦是也簿音博俗云須久呂久)とあり延喜禪正式に雙六者不論高下一切禁斷と見ゆ

肆河内王爲筑紫大宰帥授兵仗及賜物以直廣壹授直廣貳丹比真人嶋增封一百戸通前九月庚辰朔己丑遣直廣參石上朝臣磨直廣肆石川朝臣虫名等於筑紫給送位記且監新城冬十月庚戌朔庚申天皇幸高安城辛未直廣肆下毛野朝臣子磨奏欲免奴婢陸佰口奏可十一月己卯朔丙戌於市中褒美追廣貳高田首石成之閑於三兵賜物十二月己酉朔丙辰禁斷雙六

〔四年〕大盾、即位式に宮門に大盾を樹る事の起源は古語拾遺に詳なり大嘗祭には之を神楯と云... 〇天神壽詞、神祇令に凡踐祚之日中臣奏天神之壽詞義解に謂以神代之

四年春正月戊寅朔物部磨朝臣樹大盾神祇伯中臣大嶋朝臣讀天神壽詞畢忌部宿禰色夫知奉上帝神璽劍鏡於皇后皇后即天皇位公卿百寮羅列匝拜而拍手焉己卯公卿百寮拜朝如元會儀丹比嶋眞

古事爲萬壽之寶詞也。ある是なり中臣氏必ず之を奏するを以て中臣壽詞とも云其全文台記別記康治元年十一月大嘗會記に出づ平田家にて出版せる祝詞正訓に之を載す。

○忌部宿禰色夫知、續紀二に正五位忌部宿禰色布知卒詔贈從四位上とあり。

○神璽劍鏡、神祇令義解に凡踐祚之日忌部上神璽之鏡劍とあり。

○皇后即天皇位、原本后の字なし北本中本に據て補ふ。

○拍手、天皇を拜み奉りて手を拍つなり拍手は上代よりの禮にして神事はもこより天皇を拜し奉りて手を拍つことば上古は常の事なりき出雲國造を任する時國造が眞幸物を賜はりて拍手する事儀式延喜臨時祭式に見ゆ。

○如元會儀、正月元日の儀の如しとなり。

○丹比嶋真人、今年七月右大臣に任ぜられ十年十月には輿杖を賜へり。

○布勢御主人朝臣、十年の祭に大納言阿部朝臣御主人とあり續紀三大寶三

人與布勢御主人朝臣奏賀騰極庚辰宴公卿於內裏仍賜衣裳壬辰百寮進薪甲午大赦天下唯常赦所不免不在赦例賜有位人爵一級鰥寡孤獨篤癯貧不能自存者賜稻蠲服調役丁酉以解部一百人併刑部省庚子班幣於畿內天神地祇及增神戶田地二月戊申朔壬子天皇幸于腋上陂觀公卿大夫之馬戊午新羅沙門詮吉級食北助知等五十人歸化甲子天皇幸吉野宮丙寅設齋於內裡壬申以歸化新羅韓奈末許滿等十二人居于武藏國三月丁丑朔丙申賜京與畿內人年八十以上者鳴宮稻人廿束其有位者加賜布二端夏四月丁未朔己酉遣使祭廣瀨大忌神與龍田風神癸丑賜京與畿內者老男女五千卅一人稻人廿束庚申詔曰百官人及畿內人有位者限六年無位者限七年以其上日選定九等四等以上者依考仕令以其善最功能氏姓大小量授冠位其朝服者淨大壹已下廣貳已上黑紫淨大參已下廣肆已上赤紫正八級赤紫直八級緋勤八級深綠務八級淺綠追八級深縹進八級淺縹別淨廣貳已上一畱一部之綾羅

年閏四月の條に右大臣從二位阿部御主人朝臣薨と見ゆ。

○甲申、此一條七字中本になし。

○蠲服調役、賦役令に凡應免課役者皆符蠲符至然後注免とあり通證に蠲符令所謂諸役御免除之札也と見えたり。

○解部、職員令刑部省に大解部十人掌問窮爭訟中解部廿人掌問中解部卅人掌問大解部あり大同元年に廢せらる。

○併刑部、原本併を拜に作る類史に據て改む。

○神戶田地、神社の封戸と神田とあり。

○二月、腋上陂、大和國葛上郡にあり推古紀廿一年に見ゆ。

○三月、鳴宮、高市郡鳴莊村。

○四月、善老男女、原本本男を著に作る集解に據て改む善老は戸令義解に凡男女六十一爲老六十六爲善とあり。

○上日、上とは出勤するを云出勤の日數なり。

○選定九等、考課令に凡内外文武官初位以上毎年當司長官考其屬官應考者皆具錄一年功過行能並集對讀議其優劣定九等第と見ゆ。

○考仕令、令の考課令なり。

○善最、此事考課令に見ゆ善は善事なり之を四つに區別して四善と稱す最は勝也優也又軍功上曰最下曰殿とあり。

○勤務の優秀なるを云之を四十二最に區別せり。

○功能、考課令に功過行能と見え義解に職事條理爲功公務廢闕爲過善惡爲行才能爲能とあり。

○朝服、參朝の服なり衣服令に禮服朝服制と區別して記載せり。

○黑紫、孝德紀及衣服令に深紫とあり。

○赤紫、衣服令に淺紫に作れり。

○一畱一部、一畱一部、原本畱を當に作る北本中本に據て改む通證に富與幅通用倭名抄訓能と云て幅なりと見集解には幅に改作れり部は舊訓にツホと訓りツホは一坪又は一壺と云も同じく別に一區劃をなせる意にて所謂窩なり一幅に大きく一窩あるを一幅一部といひ一幅に二窩あるを一幅二部と云るにて綾羅の紋の大小を云なるべし。

○上下通用縹帶白袴、原本上の字の上に縹あり中本及集解に據て改む縹は抄布帛部に縹と云於利毛能又一訓加無波太似錦而薄者也とあり帶袴等の事は衣服令に詳なり。

○五月、安居、天武紀十二年に出づ。

○六月、泊瀨、城上郡。

等種々聽用淨大參已下直廣肆已上一畱一部綾羅等種々聽用上下通用縹帶白袴其餘者如常戊辰始祈雨於所々旱也五月丙子朔戊寅天皇幸吉野宮乙酉百濟男女廿一人歸化庚寅於內裏始安居講說六月丙午朔辛亥天皇幸泊瀨庚午盡召有位者唱知位次與年齒

○七月、丹比嶋真人、原本本嶋の字なし北本中本に據て補ふ。

○遷任、原本遷を還に作る北本中本に據て改む下同じ。

○蓋昔者云々、以下十一字集解に私記の攙入とす。

○如常、從前の如しとす。

○拜禮の事は儀制令延喜彈正臺式等に詳なり。

秋七月丙子朔公卿百寮人等始著新朝服戊寅班幣於天神地祇庚辰以皇子高市爲太政大臣以正廣參授丹比嶋真人爲右大臣并八省百寮皆遷任焉辛巳大宰國司皆遷任焉壬午詔令公卿百寮凡有位者自今以後於家內著朝服而參上未開門以前蓋昔者到宮門而著朝

○王、一世の王なり
 ○二王以上、二王は一世の王に對して二世の王を云通證に蓋謂天子二等以上之親也云り以上は以下の誤なるべし
 ○動坐而跪、これは甲申の詔よりも大臣の禮を輕くし給へるなり動坐は下坐よりも輕きこと儀制令義解等に見ゆ
 ○七寺、詳ならず
 ○三千三百六十三、六十三年の年中行事秘抄に口の字あり通釋は考本に據りて人の字を補ふ下文の三百二十九の下も亦同じ
 ○九月諸國司等、原本司の字なし集解に據て補ふ
 ○京師田租口賦、原本京を貢に作る中本及類史に據て改む口賦は他に見えざれど人毎に輸す調なるべし續紀三慶雲三年二月の條に準令京及畿内人身輪調と見えたる是ならむ
 ○軍丁、通釋に續紀二十五(天平寶字八年九月)の詔に一二乃國仁軍丁乎乞兵發之武、解云兵士を軍にたす云云あり
 ○上陽野郡、筑後國上妻

服乎甲申詔曰凡朝堂座上見親王者如常大臣與王起立堂前二王以上下座而跪己丑詔曰朝堂座上見大臣動坐而跪是日以繩絲綿布奉施七寺安居沙門三千三百六十三別爲皇太子奉施於三寺安居沙門三百廿九癸巳遣使者祭廣瀨大忌神與龍田風神八月乙巳朔戊申天皇幸吉野宮乙卯以歸化新羅人等居于下毛野國九月乙亥朔詔諸國司等曰凡造戶籍者依戶令也乙酉詔曰朕將巡行紀伊之故勿收今年京師田租口賦丁亥天皇幸紀伊丁酉大唐學問僧智宗義德淨願軍丁筑紫國上陽野郡大伴部博麻從新羅送使大奈末金高訓等還至筑紫戊戌天皇至自紀伊冬十月甲辰朔戊申天皇幸吉野宮癸丑大唐學問僧智宗等至于京師戊午遣使者詔筑紫大宰河內王等曰饗新羅送使大奈末金高訓等准上送學生土師宿禰甥等送使之例其慰勞賜物一依詔書乙丑詔軍丁筑紫國上陽野郡人大伴部博麻曰於天豐財重日足姬天皇七年救百濟之役汝爲唐軍見虜洎天命開別天皇

郡なり
 ○十月大伴部博麻、類史に博麻呂とあり下同じ
 ○送使之例、天武紀十三年に見ゆ
 ○泊、原本泊に作る楓本に據て改む
 ○氷連老、孝德紀白雉四年に氷連老人に作る
 ○筑紫君薩夜麻、天智紀十年に薩野馬に作る
 ○元寶兒、原本寶を實に作る中本及類史に據て改む
 ○任博麻計、北本任を依に作る
 ○及至曾孫、田令に凡功田大功世々不絶上功傳三世中功傳二世下功傳レ子あり
 ○三族、父族母族妻族なり
 ○藤原、大和國高市郡大原村
 ○十一月行元嘉曆與儀鳳曆、元嘉曆は宋元嘉二十年(元嘉天皇二十二年)何承天造る儀鳳曆は一に麟德曆と稱し唐麟德二年(天智天皇四年)李淳風造り儀鳳中(天武天皇五年より七年の間)に我國に傳へたり故に儀鳳曆と云【五年】親王、通證に此

三年土師連富杼氷連老筑紫君薩夜麻弓削連元寶兒四人思欲奏聞唐人所計緣無衣糧憂不能達於是博麻謂土師富杼等曰我欲共汝還向本朝緣無衣糧俱不能去願賣我身以充衣食富杼等任博麻計得通天朝汝獨淹滯他界於今卅年矣朕嘉厥尊朝愛國賣己顯忠故賜務大肆并絶五匹綿一十屯布卅端稻一千束水田四町其水田及至曾孫也免三族課役以顯其功壬申高市皇子觀藤原宮地公卿百寮從焉十一月甲戌朔庚辰賞賜送使金高訓等各差甲申奉勅始行元嘉曆與儀鳳曆十二月癸卯朔乙巳送使金高訓等罷歸甲寅天皇幸吉野宮丙辰天皇至自吉野宮辛酉天皇幸藤原觀宮地公卿百寮皆從焉乙丑賞賜公卿以下各有差五年春正月癸酉朔賜親王諸臣內親王女王內命婦等位己卯賜公卿飲食衣裳優賜正廣肆百濟王余禪廣直大肆遠寶良虞與南典各有差乙酉增封皇子高市二千戶通前三千戶淨廣貳皇子穗積五百戶淨

下諸王の二字脱せしならむ云り
 ○内親王女王内命婦、内親王は此に始て見ゆ通證に學山録曰唐從漢魏制天子姉爲長公主女爲公主然則稱皇女爲内親王皇朝所創也さあり又此に内親王以下に位を賜ふ事は女叙位の始なり(女叙位の事は公事根源に見ゆ)
 ○公卿、原本公を八に作る諸本及類史に據て改む
 ○余禪廣、天智紀天武紀に善光に作る余は氏なり
 ○遠寶、續紀十一天平六年三月に散位從四位下百濟王遠寶卒さあり
 ○良廣、禪廣の二子なり
 ○南典、元明紀に百濟王南天爲備前守さあり聖武紀天平九年九月に正四位上百濟王南典授從三位さあり
 ○稷積五百戸、通前何戸さあるべきなり
 ○皇子川嶋、原本皇子の二字なし北本中本に據て補ふ
 ○筑紫史益、錄左京諸蕃に筑紫史陳思王植之後也さあり
 ○大宰府典、職員令に大

大參皇子川嶋百戸、通前五百戸、正廣參右大臣丹比嶋真人三百戸、通前五百戸、正廣肆百濟王禪廣百戸、通前二百戸、直大壹布勢御主人朝臣、與大伴御行、宿禰八十戸、通前三百戸、其餘增封各有差、丙戌、詔曰、直廣肆筑紫史益拜筑紫大宰府典以來、於今廿九年矣、以清白忠誠、不敢怠惰、是故賜食封五十戸、緇十五匹、綿廿五屯、布五十端、稻五千束、戊子、天皇幸吉野宮、乙未、天皇至自吉野宮、二月壬寅朔、天皇詔公卿等曰、卿等於天皇世、作佛殿經藏、行月六齋、天皇時々遣大舍人間訊、朕世亦如之、故當勤心奉佛法也、是日、授宮人位記、三月壬申朔甲戌、宴公卿於西廳、丙子、天皇觀公私馬於御苑、癸巳、詔曰、若有百姓弟爲兄見賣者、從良、若子爲父母見賣者、從賤、若准貸倍、沒賤者、從良、其子雖配奴婢、所生亦皆從良、夏四月辛丑朔、詔曰、若氏祖時、所免奴婢、既除籍者、其眷族等、不得更訟言我奴婢、賜大學博士上村主百濟大稅一千束、以勸其學業也、辛亥、遣使者祭廣瀨大忌、神與龍田、風神

宰府大典二人掌受事上抄勅署文案、檢出稽失、讀申公文、少典二人掌同大典さあり
 ○五十戸、原本十を千に作る北本中本に據て改む
 (二月)天皇世、天武天皇の御世なり天は恐らくは先の誤なるべし、○月六齋、崇峻紀即位前紀に三度をミヨリと訓リムヨリは六度なり雜令に凡月六齋日公私皆斷殺生義解に六齋八日十四日十五日二十三日廿九日三十日さあり、○宮人、原本に宮を官に作る、(三月)若有百姓弟云々、父兄の爲に賣られて奴婢さなりしもの、處分法に就ての詔なり大化元年紀を參看すべし、○准貸倍、通證に貸借謂貸借之利倍也さあり金品を借り其利子の爲に良民が奴婢さ爲り賤民させられしものは免して良民たらしめよさなり、(四月)氏祖時、先祖時と云に同じ、○既除籍者、先祖の時に既に奴婢を免して其籍を除きたらむには其一類を我奴婢さ云こを得ずさなり、○大稅、神祇令義解に謂租稅者並是田賦(賦は穀也さあり)官に收むる物即ち貢物を云、唯新輸曰租經貯曰稅也さあり田令に段租稻二束さある是田租なり之を貯へて公用に充つるを稅さ云稅は之を區別して大稅稅穀郡稻さ賦役令義解に凡官稻之源出自田租即分爲三、一曰大稅、二曰稅穀、三曰郡稻さある是なり大稅は後専ら正稅と稱す正稅は每國本額(本額は國司田租をば不動倉さて撰に使用せざる官倉に貯積して之を基本とするを云)を置き公田を作る輩に毎年之を貸與へ利稻を取り之を以て公用に充つるを云

丙辰、天皇幸吉野宮、壬戌、天皇至自吉野宮、五月辛未、朔辛卯、褒美百濟、淳武微子壬申、年功賜直大參、仍賜緇布、

(六月)六月、通證に或曰庚子朔蓋脫文さあり、○郡國四十、四十は郡國の數を云、○雨水、原本氷を水に作る神武紀皇極紀に據て改む、○戊子、干支を推すに此月戊子なし子を午に誤れる例多ければ恐くは戊午即十九日の誤なるべし通釋申に改めしは據なし、(七月)御馬山、抄國郡部に宇和郡三間郷あり此郷の内にあるべし、○三斤八兩、雜令に權衡二十四銖爲兩十六兩爲斤義解に以租黍中者百

六月、京師及郡國四十、雨水戊子、詔曰、此夏陰雨過節、懼必傷稼、夕惕迄朝、憂懼、思念厥愆、其令公卿百寮人等、禁斷酒完、攝心悔過、京及畿内、諸寺梵衆、亦當五日誦經、庶有補焉、自四月雨、至于是月、己未、大赦天下、但盜賊不在赦例、秋七月、庚午、朔壬申、天皇幸吉野宮、是日、伊豫國司田中朝臣法麻呂等獻宇和郡御馬山白銀三斤八兩、銖一籠、丙子、宴公卿、仍賜朝服、辛巳、天皇至自吉野宮、遣使者祭廣瀨大忌、神與龍田、風神、八月己亥、朔癸卯、觀射、辛亥、詔十八氏、
大三輪、菟部、石上、藤原、石川、巨勢、膳部、春日、上毛、野、大伴、紀、伊、平、群、羽、田、阿、倍、

黍重爲銖さあり
 ○餅、通證に釋曰未練白銀也今案字書餅與銀同小釘也恐當作餅銀金環也さあり
 (八月)癸卯觀射、此四字原本になし類史七十二射禮部に據て補ふ
 ○(注)紀伊平群羽田、伊以下に五字原本阿曇の下にあり北本中本に據て此に移す
 ○纂記、諸家の本系帳氏文の類なり原本纂を墓に作る釋紀に據て改む
 ○須波、神名式に信濃國諏訪郡南方美神社一座(名神大)さあり建御名方神及妃八坂刀賣神を祭る
 ○水内、神名式に信濃國水内郡健御名方富命彦神別神社(名神大)さあり建御名方神と御子彦神別神を祭るこの神社は今の善光寺の地に坐しが明治に至りて其東方假寢岡に遷し祀り現に縣社なる
 (九月)音博士、職員令に音博士二人掌教音さあり
 ○藤弘恪、類史恪を格に作る
 ○書博士、職員令に書博士二人掌教書さあり

佐伯采女、上進其祖等纂記、辛酉遣使者祭龍田風神、信濃須波水内等神、穗積阿曇、進其祖等纂記、辛酉遣使者祭龍田風神、信濃須波水内等神、九月己巳朔壬申賜音博士大唐續守言、薩弘恪書博士百濟末士善信、銀人廿兩、丁丑淨大參皇子川嶋薨、辛卯以直大貳贈佐伯宿禰大目、并賜賻物、冬十月戊戌朔日有蝕之、乙巳詔曰、凡先皇陵戶者置五戶以上、自餘王等有功者置三戶、若陵戶不足、以百姓充、免其徭役、三年一替、庚戌畿内及諸國置長生地各一千步、是日天皇幸吉野宮、丁巳天皇至自吉野、甲子遣使者鎮祭新益京、十一月戊辰朔辛卯大賞神祇伯中臣朝臣大嶋讀天神壽詞、壬辰賜公卿衾乙未饗公卿以下至主典并賜絹等各有差、丁酉饗神祇官長上以下至神部等及供奉播磨國因幡國郡司以下至百姓男女并賜絹等各有差、十二月戊戌朔己亥賜醫博士務大參德自珍、咒禁博士木素丁武、沙宅萬首銀人廿兩、乙巳詔曰、賜右大臣宅地四町、直廣貳以上二町、大參以下一町、勤以下至無位隨其戶口、其上戶一町、中戶半町、下戶四分之一、王等亦准此

○皇子川嶋薨、懷風藻に川島皇子淡海帝第二子也志懷溫裕局景弘雅始與天津皇子爲莫逆之契、及天津謀逆、嶋則告變、朝廷嘉其忠正、云々位終淨大參時年三十五さあり ○佐伯宿禰大目、天武紀元年に出づ ○賜物、字書に賜は財助喪也さあり (十月)先皇陵戸云々、諸陵式に凡山陵者置陵戸五個、守之有功臣者置墓戸三個云々さあり ○長生地、釋紀に兼方按禁斷殺生之所也さあり ○新益京、詳ならず釋紀に私記新益音讀藤原宮地也さあり (十一月)朔辛卯、此三字原本になし通證に據て補ふ ○大嘗、御一代一度の大嘗祭なり天皇の即位は四年正月なりしかさ障ることありて今年行ひ給ひしなるべし ○衾、抄裝束部に説文云衾(布須万)大被也さあり ○神祇官長上、長上は番上即ち當番の日ありて出勤する人に對して日々出勤する人俗に常語の人を云 ○神部、職員令神祇官に神部二十人さあり ○供奉云々、卜定せられし悠紀主基の國郡なり (十二月)咒禁博士、職員令典藥寮に咒禁博士二人掌教咒禁生さあり ○右大臣、多治比真人嶋 ○大參、直大參の略 ○戶口、其家の人數を云 ○上戶、田令の義解に謂凡戶上中下者計口多少、隨時量定其餘條稱上々戶中々戶等亦准此例也さあり人數の多少に依て區別す

○六年至自高宮、高宮は大和國葛上郡にあり自は原本になし北本中本に據て補ふ
 (二月)諸官、諸司と云に同じ
 ○賜陰陽博士、原本賜の字なし北本中本に據て補ふ
 ○銀人廿兩、北本中本の字なし
 ○中納言、納言は元年の條に見えたる中納言は此に始めて見ゆ
 (三月)留守官、太政官式に凡幸應經旬者云々有勅付留守官さあり
 ○脱其冠位云々、辭表を捧呈するを云
 ○神郡、其一郡悉く神領さなれるを云當時の神郡は度會多氣の二郡なり
 ○志摩、此國此に始めて見ゆ

六年春正月、丁卯朔庚午、增封皇子高市二千戶、通前五千戶、癸酉饗公卿等、仍賜衣裳、戊寅、天皇觀新益京路、壬午、饗公卿以下至初位以上、癸巳、天皇幸高宮、甲午、天皇至自高宮、二月丁酉朔丁未、詔諸官曰、當以三月三日將幸伊勢、宜知此意、備諸衣物、賜陰陽博士沙門法藏、道基、銀人廿兩、乙卯、詔刑部省、赦輕繫、是日、中納言直大貳三輪朝臣高市鷹上表、敢直言、諫爭、天皇欲幸伊勢、妨於農時、三月丙寅朔戊辰、以淨廣肆廣瀨王、直廣參當麻真人智德、直廣肆紀朝臣弓張等爲留守官、於是中納言三輪朝臣高市鷹脫其冠位、擎上於朝、重諫曰、農作之節、車駕未可以動、辛未、天皇不從諫、遂幸伊勢、壬午、賜所過神郡及伊賀伊勢志摩國造等冠位、并免今年調役、復免供奉騎士、諸司、荷丁、造行宮、丁今年

○每所到行、原本に所の字なし北本中本に據て補ふ
 ○詔賜、原本賜を令に作る類史に據て改む
 ○男三束、原本三を二に作る諸本及類史に據て改む
 (四月)大伴宿禰友國、詳ならず
 ○四畿内、大和山城河内攝津なり此後元正天皇の御世に河内を割て和泉國を置き其時より五畿内となる
 ○賜鐵、親王以下諸臣田を作るは皇國の古風にて神代よりの事なればかく鐵を給へるなり
 ○繫囚見從云々、獄に囚はれて現に服役するものを悉く罪を赦すを云徒の字は北本中本に據て補ふ
 (五月)阿胡行宮、志摩國英虞郡にあり此の行幸の時の歌萬葉一に見ゆ
 ○雜俗、賦役令義解に凡調庸之外國中諸事不_レ論大小總爲_レ雜俗也とあり
 ○大夫謂者云々、大夫以下十一字は後漢書順帝紀

調役大赦天下、但盜賊不在赦例、甲申、賜所過志摩百姓男女年八十以上稻人五十束、乙酉、車駕還宮、每所到行、輒會郡縣吏民、務勞賜作樂、甲午、詔免近江美濃尾張參河遠江等國供奉騎士戶及諸國荷丁、造行宮丁、今年、調役、詔賜天下、百姓困乏窮者、稻男三束、女二束、夏四月丙申、朔丁酉、贈大伴宿禰友國直大貳、并賜賻物、庚子、除四畿内百姓爲荷丁者、今年、調役、甲寅、遣使者祀廣瀨大忌神、與龍田風神、丙辰、賜有位親王以下至進廣肆難波大藏、鐵各有所差、庚申、詔曰、凡繫囚見徒一皆原散、五月、乙丑、朔庚午、御阿胡行宮、時進賢者紀伊國牟婁郡人阿古志海部河瀨磨等兄弟三戶、復十年、調役雜徭、復免挾抄八人、今年、調役辛未、相摸國司獻赤烏鴉二隻、言獲於御浦郡、丙子、幸吉野宮、庚辰、車駕還宮、辛巳、遣大夫謁者祠名山岳瀆、請雨、甲甲、贈文忌寸智德直大壹、并賜賻物、丁亥、遣淨廣肆難波王等鎮祭藤原宮地、庚寅、遣使者奉幣于四所伊勢、大倭、住吉、紀伊、大神、告以新宮、閏五月、乙未、朔丁酉、大水

の文に據れり謁者は漢書の注に卽周之行人也とあり使者さいふに同じ岳は五岳瀆は四瀆なり此文に據れば支那風の祈雨法を行はれしが如くにも見ゆれど漢文の潤飾にて常に祈雨あらせらるる神社に奉幣せしめ給ひしなるべし
 ○文忌寸、上文には書直とあり
 ○大倭、神名式に山邊郡大和坐大國魂神社あり
 ○住吉、攝津國住吉神社
 ○紀伊、神名式に紀伊國名草郡日前神社國懸神社とあり是なり
 (閏五月)循行、原本循を修に作る北本及類史に據て改む
 ○稟貸、通證に稟給也貸與とあり
 ○觀成、續紀五に觀成法師爲_レ大僧都とあり
 ○鉛粉、今のオシロイなり事物紀原に周文王時女人始傳_レ鉛粉博物志に紉燒鉛作_レ粉謂_レ之胡粉とあり見えて支那に於ける鉛粉の起源は古し抄容飾具には粉文選好色賦云_レ著粉則大白_レ粉之路岐毛能_レと見え次に白粉開元

遣使循行郡國、稟貸災害不能自存者、令得漁採山林池澤、詔令京師及四畿内、講說金光明經、戊戌、賜沙門觀成繩十五匹、綿卅屯、布五十端、美其所造鉛粉、丁未、伊勢大神奏天皇曰、免伊勢國今年、調役、然應輸其二神郡、赤引絲卅伍斤、於來年當折其代、己酉、詔筑紫大宰、率河内王等曰、宜遣沙門於大隅、與阿多可傳佛教、復上送大唐、大使郭務悰爲御近江、大津宮、天皇所造阿彌陀像、六月、甲子、朔壬申、勅郡國長吏各禱名山岳瀆、甲戌、遣大夫謁者詣四畿内、請雨、甲申、賜直丁八人官位、美其造大内、陵時勤而不懈、癸巳、天皇觀藤原宮地、秋七月、甲午、朔乙未、大赦天下、但十惡盜賊不在赦例、賜相摸國司布勢朝臣色布智等、御浦郡少領名與獲赤烏者鹿嶋臣櫛樟位及祿、服御浦郡三年、調役、庚子、宴公卿、壬寅、幸吉野宮、甲辰、遣使者祀廣瀨與龍田、辛酉、車駕還宮、是夜、熒惑與歲星於一步、丙午、光乍沒、相近相避、四遍、八月、癸亥、朔乙丑、赦罪、己卯、幸飛鳥皇女田莊、即日還宮、九月、癸巳、朔辛丑、遣班田大

式云白粉卅斤(白粉云波布運)と見ゆシロキモノは白き物にてオシロイなるが延喜典藥式に供御白粉料糯米一石五斗と見え米の粉なり次に白粉俗にハフニと云るもの鉛粉なるべし箋注に按陶弘景注本草粉錫云即今化鉛所作胡粉也補仁訓爲波布運則知波布運即胡粉と云りされば古くは白粉に兩種あり米粉と鉛粉を併用せしが後に鉛粉を専ら用ふるに至りしなり○大神、原本太神に作る北本に據て改む

夫等於四畿内丙午神祇官奏上神寶書四卷鑰九箇木印一箇癸丑伊勢國司獻嘉禾二本越前國司獻白蛾戊午詔曰獲白蛾於角鹿郡浦上之濱故增封筭飯神廿戶通前冬十月壬戌朔壬申授山田史御形務廣肆前爲沙門學問新羅癸酉幸吉野宮庚辰車駕還宮十一月辛卯朔戊戌新羅遣級食朴億德金深薩等進調賜擬遣新羅使直廣肆息長真人老務大貳川内忌寸連等祿各有差辛丑饗祿新羅朴億德於難波館十二月辛酉朔甲戌賜音博士續守言薩弘恪水田人四町甲申遣大夫等奉新羅調於五社伊勢住吉紀伊大倭菟名足

○免伊勢國今年調役按今年三月農時に當りて行幸あり百姓の勞苦せるによりて大神宮司調役を免する事を奏請せしなるべし ○應輪、原本應の字なし、北本中本及類史に據て補ふ ○二神郡、多氣度會の二郡 ○赤引、儀式帳に明曳御調絲とあり赤引絲とは生絲の最も光澤美しきを云アカラは明らかは光る意なり神衣を織る料なり ○當折其代、神衣祭は四月にて其料に用ふる今年の絲は已に輪せるを以て來年度に於て之を免すべしと云なり ○己酉、原本己を乙に作る集解通釋に從て改む (六月)長吏、漢書高帝紀注に長吏謂縣令長とあり ○秋七月、原本秋を冬に作る北本中本に據て改む (七月)十惡、隋書刑法志に謀反謀大逆謀叛惡逆不道大不敬不孝不睦不義內亂とあり名例律にある八虐は此内より不睦內亂の二項を除るなり ○(注)關姓名、原本關を國に作る北本中本及類史に據て改む ○服御浦郡三年調役、北本中本三を二に作る服は復に同じ ○癸惑、天武紀十年に出づ ○歲星、歲星は說文に木星也越歷二十八宿宣福陰陽十二月一次とあり抄天地部に明星兼名苑云歲星一名明星(此間云阿加保之)とあるを箋注に誤とし、爾雅に明星謂之後明郭璞注太白星也とあるを引べしと云り太白星は金星なり (九月)神寶書、集解に按蓋錄諸神等所傳神寶書也とあり ○木印、古き社には木印の存するもの往々あり是も其類なるべし ○白蛾、集解に按蛾微少之物非可獻者蓋蛾蟬誤耳と云り ○筭飯神、神功紀十三年に出づ ○通前、此下に戸數を脱す (十月)山田史御形、姓氏錄に山田宿禰山田造山田連等見ゆ之と同氏なるべし尙此人の詩歌懷風藻萬葉集等に見ゆ (十一月)朴億德、下文に億を憶に作る ○息長真人老、續紀五に和銅五年冬十月丙辰從四位上息長真人老卒とあり ○川内忌寸連、錄河内諸蕃に河内忌寸山代忌寸同祖魯國白龍王之後也とあり (十二月)紀伊、上に見えたるに同じ ○菟名足、神名式に大和國添上郡宇奈多理坐高御魂神社(大月次相管新管)とあり大和志に宇奈多理神社在法華寺村今日楊梅天神と見ゆ

七年春正月辛卯朔壬辰以淨廣壹授皇子高市淨廣貳授皇子長與皇子弓削是日詔令天下百姓服黃色衣奴皂衣丁酉饗公卿大夫等癸卯賜京師及畿内有位年八十以上人衾一領絙二匹綿二屯布四端乙巳以正廣參贈百濟王善光并賜贈物丙午賜京師男女年八十以上及困乏窮者布各有差賜船瀨沙門法鏡水田三町是日漢人等奏踏歌二月庚申朔壬戌新羅遣沙喰金江南韓奈麻金陽元等來赴王喪己巳詔造京司衣縫王等收所掘尸己丑以流來新羅人牟自毛禮等卅七人付賜憶德等三月庚寅朔日有蝕之甲午賜大學博士勤廣貳上村主百濟食封卅戶以優儒道乙未幸吉野宮庚子賜直大貳葛原朝臣大嶋賻物壬寅天皇至自吉野宮乙巳賜擬遣新羅使直廣肆息長真人老勤大貳大伴宿禰子君等及學問僧弁通神叡等絙綿布各有差又賜新羅王賻物丙午詔令天下勸殖桑紵梨栗蕪菁等草木以助五穀夏四月庚申朔丙子遣大夫謁者詣諸社祈雨又遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神辛巳詔內藏寮允大伴男人坐臧降位二階解見任

【七年】皇子長、原本子の字なし北本中本に據て補ふ ○服黃色衣奴皂衣、衣服令に制服无位(義解に庶人服制亦同也)皆皂纒頭中黃袍烏油腰帶白襪皮履朝廷公事即服之家人奴婢襍墨衣とありて大略同じ ○船瀨、船を停泊せしむる所を云祝詞式遺唐使奉幣詞に船居とあるに同じ船瀨を造ること此後も屢見えたるが法鏡は船瀨を作りし功あるを以て水田を賜ひしなるべし但し其は何處の船瀨なりけむ詳ならず ○踏歌、年中行事秘抄に仁和五年正月十四日踏歌記云議者多稱踏歌者新年之祝詞累代之遺美也歌頌以延寶祚一言吹以祈豐年と見え年中行事歌合に大方京洛の游士の聲よく物歌ふなめして年始の祝の詞を作て舞を舞せられけるなりと見えたり踏歌の文字は四時調攝に唐觀燈士人作踏歌唱之とあり長安少女踏春陽とあるに據れり亦之をアラレハシリといふ由は釋紀に私記曰今俗曰阿良禮

日本書紀卷第卅 持統天皇 七年 三三七

走師說此歌曲之終重稱
 萬年阿良禮。今改曰萬歲
 樂。是古語之遺也。さある
 が如く歌曲の終毎に必萬
 年阿良禮と重れて稱ふる
 より起れるなるべし
 (二月)王喪、東國通鑑
 に唐嗣聖九年新羅神文王
 十二年秋七月王薨さある
 を云
 ○造京司、藤原宮を造る
 爲の臨時の官なり
 ○衣縫王、父祖詳ならず
 續紀四慶雲四年十一月彈
 正尹衣縫王卒さあり
 (三月)優、優賜優賞さ
 云に同じ ○葛原朝臣大嶋、通證に私記曰葛原藤原也懷風藻大納言さあり ○紇、抄調度部織機具麻苧の下に周禮注苧(和名加良無之)麻屬さあり内
 藏式年料の中にも見ゆ ○蕪菁、抄采蔬部に蕪菁蘇敬本草注云蕪菁北人名之蕪菁(和名阿乎奈)蕪菁根、毛詩云采葷采菲無以下體(和名加布良)注
 云下體根莖也さあり (四月)坐藏、原本藏を賊に作る北本及類史に據て改む下同じ廣韻に納賄曰贓さあり ○見任官、現在任せらる、所の官なり
 ○典鑑、職員令に中務省大監物二人掌監察出納管鑰中監物四人少監物四人さあり ○置始多久、萬葉十六に暮立之雨云々夕附日云々右歌二首小綱王宴
 居之日取琴登時必先吟詠此歌也其小綱王更名置始多久美斯人也さあり ○菟野大伴、姓氏錄に宇奴首宇奴造宇奴連など見たり ○監物、職員令
 に中務省大監物二人掌監察出納管鑰中監物四人少監物四人さあり是をオロシモノツカサと訓るは鍵を固むるをオロスと云へればなり
 ○巨勢邑治、續紀神龜元年六月に中納言正三位巨勢朝臣邑治薨さあり ○依律徵納、唐律疏議名例に詳なり (五月)五月、原本五を王に作る諸本に
 據て改む (六月)己未朔、原本朔の下に己未の二字あり衍なり故に之を削る ○壬戌、原本戌を成に作る楓本中本に據て改む ○引田朝臣廣目、續
 紀大寶三年六月の條に從五位上引田朝臣廣目爲齋宮頭兼伊勢守さあり ○守君茹田、元年紀に出づ ○巨勢朝臣廣目、續
 勢朝臣麻呂薨小治田朝臣小德大海之孫飛鳥朝臣職直大參志丹之子也さあり ○葛原朝臣巨勢、中臣朝臣巨勢なり即位前紀に見ゆ ○巨勢朝臣多益須、
 即位前紀に見ゆ ○丹比真人池守、續紀天平二年八月大納言多治真人池守薨左大臣正二位鳴之第一子也さあり ○紀朝臣鷹、續紀三慶雲二年七月に
 大納言紀朝臣麻呂薨近江朝臣史大夫正三位大人之子也さあり

秋七月、戊子朔甲午、幸吉野宮。己亥、遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神。
 辛丑、遣大夫謁者詣諸社祈雨。癸卯、遣大夫謁者詣諸社請雨。是日、天皇

(九月)多武嶺、大和國
 城上郡、齊明紀七年に田
 身嶺に作る
 ○設無遮大會於内裏、通
 證に萬葉集云明日香清御

原天皇崩之後八年九月九
 日奉爲御齋會之夜夢裡
 習賜御歌一首見前紀一乃
 此時之事也さあり
 ○原遺、遺の字恐らくは
 誤字なるべし
 ○蚊屋忌寸、續紀廿二寶
 龜三年四月に坂上氏と同
 祖にして阿智使主の後な
 ること見えたり
 (十月)淨冠至直冠、原
 本に直冠を直官に作る通
 證集解に從て改む
 ○鞍馬、此下に一匹の二
 字を脱せしなるべし
 (十一月)佐平等、等の
 下恐くは脱字あるべし
 ○善往、續紀二に善往法
 師爲天僧都さあり
 ○試飲、北本中本飲の下
 に服の字あり
 ○益須郡、野州郡なり
 ○醴泉、抄飲食部に醴四
 聲字苑云醴(音禮和名古
 佐介)一日一宿酒也さあ
 り延喜治部式祥瑞に醴泉美泉也其味美甘狀如醴酒さありて大瑞さす支那にては禮記禮運に天降膏露地出醴泉また本草綱目水の部に時珍曰醴薄
 酒也泉味如之故名出無常處王者德至淵泉時代昇平則醴泉出可以養老さ見ゆ ○引田朝臣少鷹、續紀八養老四年正月大納言阿倍朝臣宿奈麻呂薨
 後岡本朝臣筑紫大宰帥大錦上比羅夫之子也さあり (十二月)陣法博士、通證に今無此目今所謂軍學者也さあり

至自吉野、八月戊午朔、幸藤原宮地。甲戌、幸吉野宮。戊寅、車駕還宮。九月、
 丁亥朔、日有蝕之。辛卯、幸多武嶺。壬辰、車駕還宮。丙申、爲淨御原天皇。設
 無遮大會於内裏、繫囚悉原遺、壬寅、以直廣參贈蚊屋忌寸木間并賜賻
 物、以褒壬申年之役功。冬十月、丁巳朔戊午、詔自今年始於親王下至進
 位、觀所儲兵、淨冠至直冠、人甲一領、大刀一口、弓一張、矢一具、鞆一枚、鞍
 馬、勤冠至進冠、人大刀一口、弓一張、矢一具、鞆一枚、如此預備。己卯、始
 講仁王經於百國。四日而畢。十一月、丙戌朔庚寅、幸吉野宮。壬辰、賜耽羅
 王子佐平等各有差、乙未、車駕還宮。己亥、遣沙門法員善往、眞義等試
 飲。近江國益須郡醴泉、戊申、以直大肆授直廣肆引田朝臣少鷹、仍賜
 食封五十戶。十二月、丙辰朔丙子、遣陣法博士等教習諸國。

○奏踏歌、原本奏の下に
 請の字あり北本及類史に
 據て削る
 ○唐人、敷田氏の説に前

(甲午)
 八年春正月、乙酉朔丙戌、以正廣肆授直大壹布勢朝臣御主人與大伴、
 宿禰御行增封人二百戶、通前五百戶、並爲氏上。辛卯、饗公卿等。己亥、進

文に漢人といひ此に唐人といふは文のみ皆當時來朝の支那人なりと云り
 ○三年(三二二頁)大宅朝臣麻呂、(三月)大宅朝臣麻呂、三年紀(三二二頁)に出づ
 ○孝德紀に出づ
 ○黄書連本實、天智紀十年(三四二頁)に出づ
 ○鑄錢司、此司此に初て見ゆ倭名抄に樹漸乃司と訓めり續紀一に文武天皇三年始置鑄錢司以直大肆中臣朝臣意美麻呂爲長官とあり此時も大宅麻呂は長官たりなるべし
 ○任郡司、原本任を任に作る諸本に據て改む
 ○都賀山、未詳
 ○諸疾病人、原本人の字なし中本及集解に據て補ふ
 ○益須寺、詳ならず
 ○頭至目、抄職官部に長官寮曰頭頭曰守、佐官國曰目とあり
 ○神祇官頭、頭は後の伯なり
 ○祝部、神祇官の神部を云通證に謂諸社祝部とあるは然らず
 ○(四月)丁亥、中本亥を未に作り集解に卯に作る

御薪、庚子、饗百官人等辛丑、漢人奏踏歌五位以上射壬寅、六位以下射、四日而畢、癸卯、唐人奏踏歌乙巳、幸藤原宮、即日還宮、丁未、以務廣肆等位、授大唐七人、與肅慎二人、戊申、幸吉野宮、三月甲申朔、日有蝕之、乙酉、以直廣肆大宅朝臣麻呂、勤大貳臺忌寸八嶋、黃書連本實等拜鑄錢司、甲午、詔曰、凡以無位人任郡司者、以進廣貳授大領、以進大參授小領、己亥、詔曰、粵以七年歲次癸巳、醴泉涌於近江國、益須郡都賀山、諸疾病人停宿、益須寺而療差者衆、故入水田四町、布六十端、原除益須郡、今年調役雜徭、國司頭至目、進位一階、賜其初驗醴泉者、葛野羽衝、百濟土羅々女、人絶二匹、布十端、鍬十口、乙巳、奉幣於諸社、丙午、賜神祇官頭至祝部等、一百六十四人、絶布、各有差、夏四月、甲寅朔、戊午、以淨大肆贈筑紫大宰、率河内王、并賜賻物、庚申、幸吉野宮、丙寅、遣使者祀廣瀨大忌、神與龍田風神、丁亥、天皇至自吉野宮、庚午、贈律師道光賻物、五月、癸未、朔、戊子、饗公卿大夫於內裏、癸巳、以金光明經一百部、送置諸國、必取每年正月、上玄讀之、其布施以當國、官物充之、六月、癸丑朔、庚申、河内

丁卯は十四日なり據るべきが如し
 ○贈律師道光、通釋に贈か賜に作る道光は孝德紀白雉四年に見ゆ
 ○(五月)上玄、玄は茲の省文なり抄天地部に茲月釋名云茲(此間云由美波里有上玄下玄)月半之名也其形一旁曲一旁直若張弓弦也云ひ和爾雅に七八日爲上玄廿二三日爲下玄とあり御齋會は正月八日に始まれば上玄と云り
 ○(六月)更荒郡、讚良郡なり欽明紀廿三年に出づ
 ○小領、類史に小を少に作る
 ○刑部造、天武紀十二年に賜姓爲連とあり
 ○(七月)巡察使、天武紀十四年に出づ
 ○(八月)皇女飛鳥、天皇の御妹にて忍坂部皇子の妃なり續紀一文武天皇四年四月淨廣肆明日香皇女薨天智天皇之女也とあり(十月)弟國部弟日、原本部を都に作る中本に據て改む弟國部は三代實錄陽成紀にも見ゆ系詳ならず(十一月)殊死、東學指南に殊死漢律斬刑也とあり(十二月)遷居藤原宮、通證に私記曰氏族略記曰藤原宮在高市郡鷲栖坂北萬葉集有藤原宮御井歌鴨祐之曰此歌奉稱皇居之四城二者也とあり

國更荒郡、獻白山鷄、賜更荒郡大領小領位人一級、并賜物、以進廣貳、賜獲者刑部造、韓國并賜物、秋七月、癸未、朔、丙戌、遣巡察使於諸國、丁酉、遣使者祀廣瀨大忌、神與龍田風神、八月、壬子、朔、戊辰、爲皇女飛鳥、度沙門一百四口、九月、壬午、朔、日有蝕之、乙酉、幸吉野宮、癸卯、以淨廣肆三野王拜筑紫大宰、率冬十月、辛亥、朔、庚午、以進大肆、賜獲白蝙蝠者飛驒國荒城郡弟國部弟日、并賜絶四匹、綿四屯、布十端、其戶課役限身悉免、十一月、辛巳、朔、丙午、赦殊死以下、十二月、庚戌、朔、乙卯、遷居藤原宮、戊午、百官拜朝、己未、賜親王以下、至郡司等、絶綿布、各有差、辛酉、宴公卿大夫、

【九年】九年、此年より大化の年號を用ひたりとせる傳あり
 (潤二月)潤二月、中本潤を閏に作る
 (三月)新羅、此時孝昭王四年なり

九年春正月、庚辰、朔、甲申、以淨廣貳授皇子舍人、丙戌、饗公卿大夫於內裏、甲午、進御薪、乙未、饗百官人等、丙申、射、四日而畢、潤二月、己卯、朔、丙戌、幸吉野宮、癸巳、車駕還宮、三月、戊申、朔、己酉、新羅遣王子金良琳、補命薩

○金良琳、琳は北本傍書に或本作麻さあり
 ○補命、通證に疑官名さあり
 ○薩食、新羅第八等の官
 ○韓奈麻、原本麻を琳に作る中本及釋紀に據て改む官名なるべけれご詳ならす
 ○文忌寸博勢、續紀一文
 武天皇二年四月遣務廣武文忌寸博士等八人于南嶋さあり
 ○下譯語、録河内諸蕃に下日佐漢高祖男齊悼惠王肥之後也また續紀八元正紀に少初位下河内手人大兄賜下譯語姓さ見えたり
 ○多禰、原本禰を彌に作る中本に據て改む
 ○蠻、通證に唐書南蠻傳曰有十姓自蠻五姓烏蠻多禰嶋在西南故曰蠻云々さあり
 ○四月賀茂朝臣蝦夷、天武紀元年に鴨君に作る
 ○文忌寸赤鷹、原本鷹の下に等の字あり北本に據て削る
 ○注本位大山中、按に此位は天智紀三年の制なり其後改めて冠位を賜はらざりしなり
 ○五月西槻下、藤原宮の西槻下か天武紀元年に飛鳥寺西槻下さあれば此も飛鳥寺の三字脱ちたるにもあるべし
 ○六月賞賜、集解に按賞字衍さ云り
 ○痼疾、戸令に痼疾侏儒腰脊折一支廢如此之類皆爲廢疾義解に謂痼疾也廢於人事事故曰廢疾也さあり
 ○小野朝臣毛野、續紀六和銅七年四月中納言兼中務卿小野朝臣毛野薨小治田朝大德冠妹子之孫小錦中毛人之子也さあり
 ○八月至自吉野、原本此下に九月乙巳朔の五字あり通釋に據て削る
 ○行獄、現在獄にある者云るなれご此句いかゞ或は

食朴強國等及韓奈麻金周漢金忠仙等奏請國政且進調獻物己未幸吉野宮壬戌天皇至自吉野庚午遣務廣武文忌寸博勢進廣參下譯語諸田等於多禰求蠻所居夏四月戊寅朔丙戌遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神甲午以直廣參贈賀茂朝臣蝦夷并賜購物大壹以直大肆贈文忌寸赤鷹并賜購物本位大山中五月丁未朔己未饗隼人大隅丁卯觀隼人相撲於西槻下六月丁丑朔己卯遣大夫謁者詣京師及四畿内諸社請雨壬辰賞賜諸臣年八十以上及痼疾各有差甲午幸吉野宮壬寅至自吉野秋七月丙午朔戊辰遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神辛未賜擬遣新羅使直廣肆小野朝臣毛野務大貳伊吉連博德等物各有差八月丙子朔己亥幸吉野乙巳至自吉野戊申原放行獄徒繫庚戌小野朝臣毛野等發向新羅冬十月乙亥朔乙酉幸菟田吉隱丙戌至自吉隱十二月甲戌朔戊寅幸吉野宮丙戌至自吉野賜淨大肆泊瀨王購物

行は在の誤にもあらむか
 ○十月冬十月、原本冬の字なし例に據て補ふ
 ○菟田吉隱、大和志に城上郡猪飼山在吉隱村上方山多楓樹幸菟田吉隱即此さあり
 ○十二月泊瀨王、天武紀十四年(三〇六頁)に出づ

十年春正月甲辰朔庚戌饗公卿大夫甲寅以直大肆授百濟王南典戊午進御薪己未饗公卿百寮人等辛酉公卿百寮射於南門二月癸酉朔乙亥幸吉野宮乙酉至自吉野三月癸卯朔乙巳幸二槻宮甲寅賜越度嶋蝦夷伊奈理武志與肅慎志良宇叡草錦袍袴緋紺絁等夏四月壬申朔辛巳遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神戊戌以追大貳授伊豫國風速郡物部藥與肥後國皮石郡壬生諸石并賜人絁四匹絲十絢布廿端鍬廿口稻一千束水田四町復戶調役以慰久苦唐地己亥幸吉野宮五月壬寅朔甲辰詔大錦上秦造綱手賜姓爲忌寸乙巳至自吉野己酉以直廣肆授尾張宿禰大隅并賜水田四十町甲寅以直廣肆贈大泊連百枝并賜購物六月辛未朔戊子幸吉野宮丙申至自吉野秋七月辛丑朔日有蝕之壬寅赦罪人戊申遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神庚戌後皇子尊薨八月庚午朔甲午以直廣壹授多臣品治并賜物褒

【十年】南典、五年紀に出づ
 ○二月二槻宮、齊明紀二年九月に兩槻見ゆ
 ○賜越度嶋、原本賜の字なし北本中本に據て補ふ
 ○度嶋は齊明紀四年に出づ
 ○志良宇叡草、原本宇を守に作る北本楓イ本に據て改む
 ○四月風速郡、倭名抄に風早郡さあり
 ○皮石郡、倭名抄に合志郡さあり加波志さ注す
 ○壬生諸石、録河内皇別に壬生臣大宅臣同祖天足彦國押人命之後也さあり
 ○久苦唐地、集解に按天智天皇七年救百濟之役没入于唐者さあり
 ○五月大錦上秦造綱手云々、集解に按天武天皇九年紀曰大錦下秦造綱手卒由壬申年之功贈大錦上位由是觀之此賜忌寸追贈也蓋詔下脫贈字さ云り
 ○尾張宿禰大隅、續紀廿天平寶字元年十二月大政官奏曰從五位上尾治宿禰大隅壬申年功田三十町云

十年春正月甲辰朔庚戌饗公卿大夫甲寅以直大肆授百濟王南典戊午進御薪己未饗公卿百寮人等辛酉公卿百寮射於南門二月癸酉朔乙亥幸吉野宮乙酉至自吉野三月癸卯朔乙巳幸二槻宮甲寅賜越度嶋蝦夷伊奈理武志與肅慎志良宇叡草錦袍袴緋紺絁等夏四月壬申朔辛巳遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神戊戌以追大貳授伊豫國風速郡物部藥與肥後國皮石郡壬生諸石并賜人絁四匹絲十絢布廿端鍬廿口稻一千束水田四町復戶調役以慰久苦唐地己亥幸吉野宮五月壬寅朔甲辰詔大錦上秦造綱手賜姓爲忌寸乙巳至自吉野己酉以直廣肆授尾張宿禰大隅并賜水田四十町甲寅以直廣肆贈大泊連百枝并賜購物六月辛未朔戊子幸吉野宮丙申至自吉野秋七月辛丑朔日有蝕之壬寅赦罪人戊申遣使者祀廣瀨大忌神與龍田風神庚戌後皇子尊薨八月庚午朔甲午以直廣壹授多臣品治并賜物褒

々々見ゆ
 ○大狹連百枝、天武紀十年に出づ
 (七月)後皇子尊薨、高市皇子の事にて後には先に薨給へる草壁皇子に對して云るなり扶桑略記に十年七月太政大臣高市薨年四十三とあり通證に考「懷風藻葛野王傳」此時將建爲「儲位」故曰「後皇子」曰「尊記者寓其意也」云

(八月)多臣品治、天武紀元年(二四九頁)に見ゆ
 ○守關事、不破道を守りし事天武紀元年に見ゆ
 (十月)與杖、與杖杖となり與に乘り宮門に出入し杖つく事を許し給ふなり
 ○假賜、資人を假し賜ふ意なるべし
 ○阿部朝臣御主人、元年紀布制朝臣とあり
 ○大伴宿禰御行、續紀二大寶元年正月大納言正廣參大伴宿禰御行薨云々難波朝右大臣大紫長徳之子也とあり
 ○石上朝臣鷹、續紀七養老元年三月朝衛部大華上宇麻之千也と見ゆ
 (十一月)弁通、續紀五に弁通法師爲「少僧都」とあり
 (十二月)講讀、北本中本活字本講讀を縁に作る

【十一年】戊戌朔、原本なし通證に從て補ふ
 ○公卿大夫、原本公卿の二字なし北本中本及類史に據て補ふ
 (二月)二月丁卯朔、釋紀に私記引「王子枝別記」曰文武天皇太子草壁皇子尊之子也持統天皇十一年

美元 從之 功與堅守關事 九月庚子朔甲寅 以直大壹贈若櫻部 朝臣五百瀨 并賜賻物 以顯元從之功 冬十月己巳朔乙酉 賜右大臣丹比真人與杖 以哀致事 庚寅 假賜正廣參位 右大臣丹比真人 資人一百廿人 正廣肆大納言阿倍 朝臣御主人 大伴 宿禰御行 並八十人 直廣壹石 上朝臣鷹 直廣貳藤原 朝臣不比等 並五十人 十一月己亥朔戊申 賜大官 大寺 沙門 弁通 食封四十戶 十二月己巳朔 勅旨講讀 金光明經 每年十二月晦日 度淨行者一十人

十一年 春正月 戊戌朔 甲辰 饗公卿大夫等 戊申 賜天下 鰥寡孤獨篤癯 貧不能自存者 稻各有差 癸丑 饗公卿百寮 二月 丁卯朔 甲午 以直廣壹當麻真人國見爲東宮大傅 直廣參路 真人跡見爲春宮大夫 直大肆 巨勢朝臣粟持爲亮 三月 丁酉朔 甲辰 設無遮大會於春宮 夏四月 丙寅朔 己巳 授滿選者淨位至直位 各有差 壬申 幸吉野宮 己卯 遣使者祀廣瀨與龍田 是日至自吉野 五月 丙申朔 癸卯 遣大夫謁者詣諸社 請雨 六月 丙寅朔 丁卯 赦罪人 辛未 詔讀經於京畿 諸寺 辛巳 遣五位以下 掃灑京寺 甲申 班幣於神祇 辛卯 公卿百寮 始造爲天皇病所願佛像 癸卯 遣大夫謁者詣諸社 請雨 秋七月 乙未朔 辛丑 夜半 赦常饗盜賊一百九人 仍賜布人四常 但外國者 稻人廿束 丙午 遣使者祀廣瀨與龍田 癸亥 公卿百寮 設開佛眼會於藥師寺 八月 乙丑朔 天皇定策 禁中 禪天皇位於皇太子

春二月丁卯朔壬午立爲皇太子とありされば此下に壬午皇太子を立つる文脱せしなるべし
 ○當麻真人國見、天武紀朱鳥元年に出づ
 ○東宮大傅、東宮職員令に傳一人掌以「道徳」輔導東宮とあり
 ○路真人跡見、天武紀十四年に迹見とあり
 ○春宮大夫、春宮職員令に春宮坊大夫一人掌吐納啓令宮人名帳考叙宿直事とあり
 ○亮、東宮職員令に亮一人とあり
 (四月)滿選者、選は考選なり其人の考を計りて位を叙するを云選叙令に凡初位以上以上三考爲限六考中々進一階叙云々其考未滿而以理解及考在中下以下者不在進限とあるを云
 (六月)五位以下、原本下を上に作る類史に據て改む
 (七月)常饗盜賊、水本に常饗を當絞の誤とす集解には嬰金の二字を誤て一字としたるものにて金は金鐵、嬰は繞なり金鐵を繞らすとは、即ち鑲の事にて鑲にて鑲ぐ意なりとす、木村正辭博士は鑲は嬰金の二合字にて誤にはあらずといはれたり
 (八月)乙丑朔、續紀甲乙朔に作る ○禪天皇位、皇國にて禪位といふこと此に始まり ○皇太子、文武天皇なり

日本書紀卷第卅

此識語は慶長活字本の巻尾にありしを其まゝ載せたるなり、之を一讀するに、楓山本の奥書を簡略にせるものにて、據る所の寫本の由來を明かにせり、之を北野本應永本の奥書と對照すれば、各種寫本の系統自ら明かにして、此書研究上裨益するところ少からず

此寫本者、當初安貞二年兼頼按離諸本、正應之中、神祇權大副卜部兼方筆之、收于石室以來、永仁正四位下行神祇權大副兼山城守卜部仲季、嘉元甲辰沙彌蓮惠、康永壬午神祇權大副兼員轉書之云云、至永正之頃、內大臣實隆公以件本親臨書訂朱墨點、今據內相公本、鏤梓廣傳于世、恐活板之徒、多誤刁刀陶陰矣、庶幾莫貽誚於余焉、

慶長十五庚戌仲夏念八

洛納野子三白誌

寛文九己酉年正月吉辰

武村市兵衛昌常

村上勘兵衛元信

山本平左衛門常知

八尾甚四郎友春

御本云

日本書紀歷代之古史也、元正天皇養老年中、一品舍人親王、太朝臣安麻呂奉勅撰之、吾朝撰書迄奏覽、以是爲權輿者耶、君臣共以莫不窮此書矣、按應神天皇以還、至繼體天皇御宇、異域典經多以雖來朝不解其義、徒經三百有餘歲矣、推古天皇御宇、聖德太子察三才之源、達三國之起、故始以漢字附神代之文字、傍於于爰吾邦人浸得識量典經之旨、非至聖誰敢成此緯哉、蓋神道者爲萬法之根柢、儒教者爲枝葉、佛教者爲花實、彼二教者皆是神道之末葉也、雅以枝葉顯其本原、然則異曲同工者歟、頃學儒佛者夥、而知神書者鮮矣、物有本末、事有終始、何棄本取末焉、於神國爭疏神書乎、萬機之政、尙以神事爲最第一、但神代事理既幽微、非理不通、欽惟

陛下寬惠叡智之餘、後世惜其流布之不廣、遂命鳩工、於是始壽諸梓矣、舊本頗純駁不一、求數本考正之、去其駁而錄其純、用之國而及之天下、則以成熙皞之治、以紹神尊之統、保瑞穗之地、千五百秋、將必有賴

於斯焉

慶長己亥姑洗吉辰 正四位下行少納言兼侍從臣清原朝臣國賢敬識

以勅本板行

日本書紀所見宮都並山陵一覽

尊	號	宮	都	山陵
神日本磐余彥尊	神武	畝傍	原宮 <small>大和國高市郡</small>	畝傍山東北陵 <small>奈良縣高市郡畝傍町</small>
神淳名川耳尊	綏靖	葛城	丘宮 <small>大和國葛上郡</small>	桃花鳥田丘上陵 <small>同</small>
磯城津彥玉手看尊	安寧	片鹽	孔宮 <small>大和國高市郡</small>	畝傍山西南御陰井上陵 <small>同</small>
大日本彥耜友尊	懿德	輕曲	峽宮 <small>大和國高市郡</small>	畝傍山南織沙谿上陵 <small>同</small>
觀松彥香殖稻尊	孝昭	掖上	心宮 <small>大和國葛上郡</small>	掖上博多山上陵 <small>奈良縣南葛城郡三室村</small>
日本足彥國押人尊	孝安	室秋	嶋宮 <small>大和國葛上郡</small>	玉手丘上陵 <small>奈良縣南葛城郡掖上村</small>
大日本根子彥太瓊尊	孝靈	黑田	戶宮 <small>大和國城下郡</small>	片丘坂陵 <small>奈良縣北葛城郡王寺村</small>
大日本根子彥國牽尊	孝元	輕境	原宮 <small>大和國高市郡</small>	劍池嶋上陵 <small>奈良縣高市郡畝傍町</small>
稚日本根子彥大日夕尊	開化	春日	川宮 <small>大和國添上郡</small>	春日率川坂本陵 <small>奈良市油坂町</small>

附錄

日本書紀所見宮都並山陵一覽

御間城入彥五十瓊殖尊	崇神	磯城	山邊
活目入彥五十狹茅尊	垂仁	卷向珠	菅原伏見東陵
大足彥忍代別尊	景行	纏向日	山邊道上陵
稚足彥尊	成務	志賀高穴	狹城盾列陵
足仲彥尊	仲哀	穴門豐	惠我長野西陵
氣長足姬尊	神功	磐余若	狹城盾列陵
譽田天皇	應神	輕嶋	惠我藻伏岡陵
大鷦鷯天皇	仁德	難波高	百舌鳥耳原中陵
去來穗別尊	履中	磐余稚	百舌鳥耳原南陵
瑞齒別尊	反正	丹比柴	百舌鳥耳原北陵
雄朝津間稚子宿禰天皇	允恭	遠飛	惠我長野北陵

穴穗天皇	安康	石上穴	菅原伏見西陵
大泊瀨幼武天皇	雄略	泊瀨朝	丹比高鷲原陵
白髮武廣國押稚日本根子天皇	清寧	磐余甕	河內坂門原陵
弘計天皇	顯宗	近飛鳥八	傍丘磐坏丘南陵
億計天皇	仁賢	石上廣	埴生坂本陵
小泊瀨稚鷦鷯天皇	武烈	泊瀨列	傍丘磐坏丘北陵
男大迹天皇	繼體	磐余玉	三嶋藍野陵
廣國押武金日天皇	安閑	大和勾金	古市高屋丘陵
武小廣國押盾天皇	宣化	檜隈盧入	身狹桃花鳥坂上陵
天國排開廣庭天皇	欽明	磯城嶋金	檜隈坂合陵
淳中倉太珠敷天皇	敏達	譯語田幸	河內磯長中尾陵

橘豐日天皇	用明	池邊雙	槻宮	河內磯長原陵
泊瀨部天皇	崇峻	倉梯	大和國十市郡宮	磯長原陵
豐御食炊屋姬天皇	推古	小墾	大和國高市郡宮	磯長原陵
息長足日廣額天皇	舒明	高市岡	大和國高市郡宮	磯長原陵
天豐財重日足姬天皇	皇極	飛鳥板	同蓋宮	磯長原陵
天萬豐日天皇	孝德	長柄豐	攝津國西生郡宮	磯長原陵
天豐財重日足姬天皇	齊明	後飛鳥岡	大和國高市郡宮	磯長原陵
天命開別天皇	天智	大津	近江國滋賀郡宮	磯長原陵
天淳中原瀛真人天皇	天武	飛鳥淨御原宮	大和國十市郡宮	磯長原陵
高天原廣野姬天皇	持統	藤原	大和國十市郡宮	磯長原陵

書紀所見冠位並位階表

十二階冠色	紫	青	赤	黃	白	黑	德	仁	禮	信	義	智
十三階	織	織	織	織	織	織	織	織	織	織	織	織
服色	深紫	深紫	深紫	深紫	深紫	深紫	深紫	深紫	深紫	深紫	深紫	深紫
十九階	織	織	織	織	織	織	織	織	織	織	織	織
廿六階	織	織	織	織	織	織	織	織	織	織	織	織
位階表	親王	諸王	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣
天武十四年	親王	諸王	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣
持統四年	親王	諸王	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣	諸臣
服色	朱華	朱華	朱華	朱華	朱華	朱華	朱華	朱華	朱華	朱華	朱華	朱華
服色	黑紫	黑紫	黑紫	黑紫	黑紫	黑紫	黑紫	黑紫	黑紫	黑紫	黑紫	黑紫
服色	赤紫	赤紫	赤紫	赤紫	赤紫	赤紫	赤紫	赤紫	赤紫	赤紫	赤紫	赤紫
服色	緋	緋	緋	緋	緋	緋	緋	緋	緋	緋	緋	緋
服色	深綠	深綠	深綠	深綠	深綠	深綠	深綠	深綠	深綠	深綠	深綠	深綠
服色	淺綠	淺綠	淺綠	淺綠	淺綠	淺綠	淺綠	淺綠	淺綠	淺綠	淺綠	淺綠
服色	深藍	深藍	深藍	深藍	深藍	深藍	深藍	深藍	深藍	深藍	深藍	深藍
服色	淺藍	淺藍	淺藍	淺藍	淺藍	淺藍	淺藍	淺藍	淺藍	淺藍	淺藍	淺藍

天武天皇紀賜姓一覽

天武天皇十三年十月己卯朔、詔して諸氏の姓を改めて、真人・朝臣・宿禰・忌寸・道師・臣・連・稻置の八種とし、系統の尊卑、功績の大小を考査して、朝廷より之を賜ふこと、定め給へり。之より先十二年九月、倭直以下三十八氏に連の姓を、同十月三宅吉士以下十四氏に同じく連の姓を賜はり、十二年二月には三野縣主・内藏衣縫造二氏に亦同じく連を賜はれり。姓を賜ふことかく繁くなりては、從來の制度のまゝにては甚だ煩はしく、且つ孝德天皇大化改新の後は、氏族の制も從來と大に趣を異にするものあるに至りしを以て、茲に至りて舊制を改めて八種とし、總べて之を朝廷より賜ふこと、せられたり。然るに其數甚だ多くして、閲讀に不便なるを以て、此に之を抄出して、姓毎に種族に依りて之を列叙し、閲覽に便ならしむると共に、當時に於ける氏族の消長をも知らしめむと欲して、之を附録とす。

氏	種族	賜姓年月	出自
一 守山	公皇別	十三年	田中朝臣、稻目宿禰之後(右京)
二 路國	公	同	守山真人、敏達天皇皇子難波王之後(左京)
三 當麻	公	同	路真人、同上(左京)
四 比麻	公	同	三國真人、繼體天皇皇子腕子王之後(左京又右京にも見ゆ)
五 丹比	公	同	當麻真人、用明天皇皇子麻呂古王之後(右京)
六 猪名	公	同	多治比真人、宣化天皇皇子賀美惠波王之後(右京)
七 坂田	公	同	爲奈真人、宣化天皇皇子火燭王之後(右京)
八 羽田	公	同	坂田公、繼體天皇皇子仲王之後(右京)
九 息長	公	同	八多真人、應神天皇皇子稚野毛二僕王之後(左京)
十 酒人	公	同	息長真人、同上(左京)
十一 山人	公	同	酒人真人、繼體天皇皇子兔王之後(大和)
十二 高橋	公	同	山道真人、息長真人同祖(左京又右京にも見ゆ)
十三 高城	公	同	皇別なること疑なければ、出自詳ならず

二、朝臣

氏	種族	賜姓年月	出自
一 大春日	皇別	十三年	大春日朝臣、孝昭天皇太子天帶彦國押人命之後(左京)
二 阿倍	臣	同	阿部朝臣、孝元皇子大彦命之後(左京)
三 巨勢	臣	同	巨勢朝臣、孝元天皇太子彦太忍信命孫武内宿禰命之後(右京)
四 膳	臣	同	膳臣、大彦命之後(和泉)○高橋朝臣、天武天皇十二年改膳臣賜高橋朝臣
五 紀	臣	同	紀朝臣、武内宿禰之後(左京)
六 波多	臣	同	八多朝臣、同上(右京)
七 平群	臣	同	平群朝臣、同上(右京)
八 雀部	臣	同	雀部朝臣、同上(左京)
九 大宅	臣	同	大宅臣、孝元皇子天足彦國押人命之後(山城又河内皇別に見ゆ)
十 粟田	臣	同	粟田朝臣、孝昭天皇太子天帶彦國押人命曾孫(山城)
十一 石川	臣	同	石川朝臣、孝元皇子彦太忍信命之後(左京)
十二 櫻井	臣	同	櫻井朝臣、同上(左京)

氏	種族	賜姓年月	出自
一 田中	臣皇別	十三年	田中朝臣、稻目宿禰之後(右京)
二 小墾	臣	同	小治田朝臣、同上(右京)
三 小野	臣	同	小野朝臣、彦婁津命五世孫米餅春大使主命之後(左京)
四 川邊	臣	同	川邊朝臣、武内宿禰之後(右京)
五 井本	臣	同	櫛井臣、彦婁津命五世孫米餅春大使主命之後(左京)
六 櫛本	臣	同	櫛本朝臣、天足彦國押人命之後(大和)
七 輕部	臣	同	輕部、豐城入彦命男八綱田命之後(和泉)
八 若櫻	臣	同	若櫻部朝臣、磐鹿六孺命之後(右京)
九 岸田	臣	同	岸田朝臣、武内宿禰之後(右京)
十 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
十一 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
十二 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
十三 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
十四 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
十五 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
十六 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
十七 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
十八 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
十九 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
二十 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
二十一 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
二十二 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
二十三 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
二十四 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
二十五 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
二十六 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
二十七 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
二十八 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
二十九 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
三十 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
三十一 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
三十二 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
三十三 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
三十四 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
三十五 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
三十六 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
三十七 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
三十八 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
三十九 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
四十 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
四十一 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
四十二 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
四十三 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
四十四 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
四十五 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
四十六 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
四十七 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
四十八 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
四十九 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
五十 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
五十一 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
五十二 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
五十三 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
五十四 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
五十五 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
五十六 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
五十七 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
五十八 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
五十九 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
六十 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
六十一 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
六十二 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
六十三 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
六十四 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
六十五 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
六十六 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
六十七 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
六十八 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
六十九 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
七十 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
七十一 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
七十二 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
七十三 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
七十四 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
七十五 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
七十六 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
七十七 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
七十八 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
七十九 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
八十 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
八十一 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
八十二 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
八十三 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
八十四 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
八十五 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
八十六 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
八十七 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
八十八 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
八十九 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
九十 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
九十一 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
九十二 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
九十三 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
九十四 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
九十五 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
九十六 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
九十七 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
九十八 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
九十九 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)
一百 高向	臣	同	高向朝臣、同上(右京)

附錄 天武天皇紀賜姓一覽 (連)

九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十
福草部造	凡川直	山背直	葛城直	殿服部造	鳥取造	檜隈舍人造	川瀬舍人造	語造	伯耆造	吉野首造	采女造	高市縣主	磯城縣主	鏡作造							
神別	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
九十二年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
天津日子根命之後(記)	十四年六月賜忌寸	同	同	服部連、天御杵命之後(大和)	鳥取連、天角已利命三世孫天湯河板舉命之後(山城)	檜前舍人連、火明命之後(右京)	川瀬造、天道根命之後(大和)	天語連、天日鷲命之後(右京)	伯耆國造同族兄多毛比命之後(右京)	吉野連、加彌比加尼之後(大和)	采女連、饒速日命六世孫伊香我色雄命之後(和泉)	高市連、天津彥根命之後(左京)	志貴連、石上同祖日子湯支命之後(大和)	石凝姥命鑿作上祖(紀神代上)							
廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二
美努連	孫天湯川田奈命之後(河內)	饒速日命天降供奉五部造の中に舍人造見(天孫本紀)	薦集造、天津彥根命之後(大和未定)	錦部連百濟速古王之後(河內)	河內連、百濟都慕王男陰太貴首王之後(河內)	大狛連、高麗國人伊利斯沙禮斯之後(河內)	狛造、高麗國主夫連王之後(山城)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
神別	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
正三年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
美努連、角凝魂命三世孫天湯川田奈命之後(河內)	饒速日命天降供奉五部造の中に舍人造見(天孫本紀)	薦集造、天津彥根命之後(大和未定)	錦部連百濟速古王之後(河內)	河內連、百濟都慕王男陰太貴首王之後(河內)	大狛連、高麗國人伊利斯沙禮斯之後(河內)	狛造、高麗國主夫連王之後(山城)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十		
三宅吉士	船隻史	壹伎史	阿直史	內藏衣縫造	荒隈首	粟隈首	倭馬飼造	川內馬飼造	勾宮作造	石上造	財日奉造	埜部造	穴穗部造																
蕃別	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
十二年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
十三年十二月賜宿禰	船連、太阿郎王三世孫智仁君之後(右京)	伊吉連、長安人劉楊雄之後(左京)	百濟阿直岐者阿直岐史始祖(應神紀)	阿知使主之後(應神紀集解に據る)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十
白髮部造	百濟造	娑羅々馬飼造	菟野馬飼造	紀酒人直	桑村主	槻本村主																							
未詳	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
十二年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
未詳	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
以上計	眞人	朝臣	宿禰	忌寸	連																								
皇別 十三	皇別 四十三	皇別 八	皇別 四十三	皇別 六	皇別 二	皇別 八																							
未定 一	未定 一	未定 一	未定 一	未定 一	未定 一	未定 一																							

附錄 天武天皇紀賜姓一覽 (連)

書紀關係三韓官位一覽

日本書紀を讀む毎に煩はしく思はるゝは、三韓の官位氏名なり。其の意義明かならざるが故に、官位なるかはた氏名なるか、其の區別だに決し難きものあり。之に加ふるに四國悉く其の官位の名稱を異にするが故に甚だ紛れやすく、一々參考書を披見せざるを得ず。此は何人も同じことならむと思ひて、標注を加ふるにあたりて、一々某國第何等の官なりと注したれど、かく注するは煩はしきのみならず、紙面を費すこと亦鮮からず、是を以て其の名の繁出するものは某國の官名なりと、簡單に注したるもの尠からず、されど其の處々にて注したるのみにては聯絡なく、全豹を知り難ければ、此に之を一覽表に作りて國毎に其の根據となるべき官名をば古書に據りて之を掲げ、書紀に見えたる官名をば其の下に記載せり。然るに其の名稱の一致せざるものあり、其の正否は輒く決め難けれど、書紀に記

す所は其の當時の實録、又は百濟本記等彼の國の舊記に據りて編修せるものにて、三國史記東國通鑑等支那の史書に據りて編纂したるものに比すれば、寧ろ正確なりと信せらるゝものも少からず、されど之を詳細に比較し對照して決定することは容易の業にあらざれば、之を他日に譲りて此には單に其の概要を擧ぐるに止めたり。

(一) 任 那

任那の官位は、三國志魏志東夷傳及三國遺事魏洛國記等に見ゆれど、小國なれば他國の影響を受けしにや、早くより固有の官名を失ひて、新羅の官名を用ひしもの如し。今之を日本書紀と對照するに、書紀に見ゆるものは三國史記及び漢史に見えざれば、之を考定すること能はず、されど書紀に見ゆる早岐は干と同一なることは、梁書新羅傳に新羅の干を早支と書せるにて明かにして、其の干は後世元代の汗と同じく北方蒙古の君

號なることは言ふを俟たず、されば對照の資料とはならざれど、多少參考ともなるべきかと思ひて、此に之を掲ぐ。

(イ) 官 職 一

- 三國遺事駕洛國記 魏志弁辰條 書紀 所見
- 一、我刀干(我躬干) 一、臣智 早 岐神功紀六十二年加羅國王己本早岐、欽明紀二年卒麻早岐
 - 二、汝刀干(汝諸干) 次早岐欽明紀二年安羅次早岐
 - 三、彼刀干(彼藏干) 二、險側 下早岐同上多羅下早岐及同五年條安羅下早岐
 - 四、五刀干(五常干) 上首位欽明紀二年加羅上首位
 - 五、留水干(留功干) 三、樊濊 二百位欽明紀五年多羅二百位
 - 六、留天干(留德干) 〇神功紀六十二年己本早岐見ゆるは王名とあれど、梁書新羅傳に子貴早支とあると同じく之も官名ならむか。
 - 七、神天干(神道干) 四、殺奚
 - 八、五天干(五能干)
 - 九、神鬼干(臣貴干) 五、邑借

〇上段括弧内の名稱は、駕洛國首祖首露王の時改稱せし者なり。
 〇中段臣智以下の事魏志に弁辰亦十二國又有諸小別邑各有渠帥大者名臣智、其次有險側、次有樊濊、次有殺奚、次有邑借、さあり但し臣智、邑借は馬韓にもあり。

(ロ) 官 職 二

角 干
阿叱干
級 干

〇角干以下は駕洛國記に九干改稱の條下に、取雞林職儀置角干阿叱干級干之秩、其下官僚以周判漢儀而分定之とあり

(二) 百 濟

百濟の官位は古爾王二十七年(神功皇后攝政六十年)に制定したる由、三國史記に見ゆ。其名稱の漢史に見えたるは、周書を以て始とし、其後代々の史に載す。今三國史記及周書に據りて此に之を掲ぐ。

(イ) 官 職

- 一、佐平一品五人
- 内臣佐平(掌宣納事) 大佐平敏達紀十二年大佐平
- 内頭佐平(掌庫藏事) 上佐平欽明紀四年上佐平沙宅己婁
- 内法佐平(掌禮儀事) 中佐平同紀二年下部中佐平麻園
- 衛士佐平(掌宿衛兵事) 下佐平同紀四年下佐平木尹貴

朝廷佐平(掌刑獄事) 内佐平 皇極紀元年内佐平岐味
兵官佐平(掌外兵馬事) 以上等位未詳

- 二、達率 二品 欽明紀十三年達率怒喇斯致契
- 三、恩率 三品 敏達紀十二年恩率德爾
- 四、德率 四品 欽明紀四年德率鼻利莫古
- 五、杆率 五品 同紀九年中部杆率掠葉禮
- 六、奈率 六品 同紀二年前部奈率鼻利莫古
- 七、將德 七品 同紀十一年將德久貴、安閑紀元年下部脩德、德孫とある脩德は將德なるべし
- 八、施德 八品 欽明紀四年物部施德麻加可牟
- 九、固德 九品 同紀十年固德馬次文同四年護德已州已婁とあるは固德に同じかるべし
- 一〇、季德 十品 同紀十五年季德已麻次
- 一一、對德 十一品 同紀十五年對德進隨、安閑紀元年上部都德已州已婁とあるは對德なるべし
- 一二、文督 十二品
- 一三、武督 十三品 内頭顯宗紀三年内頭莫古解
- 一四、佐軍 十四品 領軍同領軍古爾解
- 一五、振武 十五品 參官敏達紀十二年參官
- 一六、克虞 十六品

(口) 行政區劃

- 畿内
 - 上 部 安閑紀元年上部都德已州已婁
 - 前 部 欽明紀二年前部奈率鼻利莫古
 - 中 部 同中部奈率木勃味淳
 - 下 部 同下部中佐平麻爾
 - 後 部 孝德大化元年鬼部達率意斯
 - 畿外
 - 東 方(曰得安城) 欽明紀十五年東方領物部莫哥武連
 - 南 方(曰久知下城)
 - 中 方(曰右沙城)
 - 西 方(曰刀先城)
 - 北 方(曰熊津城)
- 周書百濟傳に、百濟者(中略)治固麻城、其外更有五方(中略)各有方領、以達率爲之郡(一方十郡、將三人以達率爲之、
- 孝德紀に見ゆる鬼部は、三國史記を始め諸書に所見なし、故に假に後部の下に收む、

(三) 高麗

高麗の官位は、冊府元龜に、高句麗後漢時其國置官有相加、對廬、沛者、古鄒大加、古鄒大加高句麗掌賓客之官大鴻臚也主簿、優一作台、使者、皂衣、先人、一說大官有、大對廬、次有、太、大、兄、大、兄、小、兄、意、侯、奢、烏、拙、太、大、使、者、小、使、者、擗、奢、翳、屬、仙、人、并、擗、薩、復、有、内、評、外、評、分、掌、内、外、事、焉、と見え、其最も古く見えたるは後漢書東夷傳なるが、諸書に載するところ異同少からず、北史唐等には、大對廬を第一とし、太、大、兄を第二とせるに、隋書には太、大、兄を第一として對廬を第四とし、その他名稱にも異同あるは、時代に依りて改定せられし所もあるべしと雖も、對廬を第四とせるが如きは、恐らくは筆者の誤なるべし。今此に一一々其正否を論ずる違なければ、北史東夷傳及三國史記を擧げて、書紀に所見の官名を其の下に注せり。

- (イ) 官職 一 (北史東夷傳)
- 一、大 對 廬

- 二、太 大 兄
 - 三、大 兄
 - 四、小 兄
 - 五、意 侯 奢
 - 六、烏 拙
 - 七、太 大 使 者
 - 八、大 使 者
 - 九、小 使 者
 - 一〇、擗 奢 者
 - 一一、翳 屬 人
 - 一二、仙 人
- (ロ) 官職 二 (三國史記職官志)
- 一、主 簿 天武紀五年後部主簿阿于
 - 二、大 相 天智紀十年上部大相可婁
 - 三、位頭大兄、從大相 天武紀二年上部位頭大兄邯子
 - 四、小 相、狄 相
 - 五、小 兄
- 天智紀六年高麗大兄男生、天武紀二年前部大兄碩于
- 大兄男生は舊訓オホエとあり東國通鑑寶藏王廿五年の條に據るに、男生は初め中裏小兄にして後中裏大兄に進み、次に中裏位頭大兄となることあり
- 天武紀九年南部大使(者)卯間

- 六、諸 兄
- 七、先 人
- 八、自 位

(八) 行政區劃

内部(舊桂婁部)黃部
 東部(舊順奴部)左部青部天智紀十年。上部大相可婁
 南部(舊灌奴部)前部赤部天武紀九年。南部大使卯間、天智紀五年
 西部(舊消奴部)右部白部天武紀九年。西。部大兄俊德、同八年。下部
 北部(舊絶奴部)後部黒部天武紀五年。大使後部主博阿于

○右は後漢書高句麗傳の唐章懷太子注に據り、下の括弧内の名稱は推定によりて補へるものなり
 ○括弧内の舊某部とあるは、五部の起因とされる高句麗の貴人五族(三國時代)の名稱なり、南北朝以後地方行政區劃たる五部に變じたるものなり
 ○尙ほ都下にも五部ありしなるべし

(四) 新 羅

新羅の官位は、儒理王九年(垂仁天皇六十二年)に制

定せられしものにて、三國史記職官志に新羅官號因時沿革不同其名言唐夷相雜其曰侍中郎中等者皆唐官其名義若可考、曰伊伐食伊食等者皆夷言、不知所以言之之意、當初之施設、必也職有常守位有定員、所以辨其尊卑、待其人才之大小云々、儒理王九年置十七等と云ひて伊伐食以下の名稱を擧げ、次に上大等或云法興王十八年(繼體天皇二十五年)始置、大角干太宗王七年(齊明天皇六年)滅百濟論功、授大將軍金庾信大角干、於前十七等之上加之非常位也、太大角干文武王八年(天智天皇七年)滅高句麗、授留守金庾信以太大角賞其元謀也と見え、之に依りて其の沿革の大略を知るを得べし。今同志に據りて左に之を掲げ書紀に所見の文を其の下に注す。

(イ) 官 職 一

- 一、伊伐食或云伊罰干、干伐食、角干、角桑、舒發翰、舒弗那持統紀三年。鬱金春秋
- 二、伊尺食或云伊食持統紀三年。蘇判位
- 三、迎 食或云迎判、蘇判王族所任官

- 四、波珍食或云、海干、破彌干
- 五、大阿食
- 六、阿 食或云阿尺自三重阿食
- 七、一吉食或云乙吉干
- 八、沙 食或云薩食、沙咄干
- 九、級伐食或云汲食、及伏干
- 一〇、大奈麻或云自三重奈麻
- 一一、奈 麻或云自三重奈麻
- 一二、大 舍或云韓舍
- 一三、舍 知或云小舍
- 一四、吉 士或云稽知、吉次

天武紀十四年波彌食金神功紀即位前紀微叱已知波珍干岐
 孝德紀大化三年上臣大阿食金春秋
 天武紀二年阿食金祇山同紀一吉食金薩儒
 孝德紀大化四年沙喙部沙食金多遂、持統紀九年補命薩食朴強國
 齊明紀元年及食彌武
 欽明紀廿二年久禮叱及伐干
 天武紀七年大奈末金世々
 欽明紀廿一年彌知已知奈末
 奈麻禮繼體紀廿三年夫智奈麻禮、奈奈麻禮、韓奈末持統紀四年新羅韓奈末許滿
 欽明紀廿二年奴氏大舍

(ロ) 官 職 二

- 一五、大 鳥或云大鳥知
- 一六、小 鳥或云小鳥知
- 一七、造 位或云失沮知
- 上 大 等或云上臣繼體紀廿三年。上臣伊叱夫禮智干岐
- 大 角 干或云大舒發翰天智紀七年上臣大角干
- 太大角干或云太大舒發翰天智紀七年上臣大角干

(ハ) 官 職 三

- 大 監 天武紀四年大監級食金比蘇大監奈末金天沖
- 弟 監 同、弟監二人眞平王十一年置、太宗王五年改爲大舍、景德王改爲郎

中、惠恭王復稱大舍位自舍知至奈麻爲之

侍 郎

孝德紀大化四年侍郎二人

(一) 執事省典大等二人景德王六年改爲侍郎

郎位自奈麻至阿養

同 未詳

(二) 兵部大監二人景德王改爲侍郎

(二) 行政區劃

及梁部

(舊楊山部)

沙梁部(三國遺事云)

(梁或作涿)

漸梁部(或云牟梁部)

(舊大樹部)

本彼部

(舊于珍部)

漢祇部

(舊加利部)

習比部

(舊明活部)

○儒理王九年春改六部之名、仍賜姓楊山部爲及梁部(中略)明活部爲習比部

○梁書新羅傳に、其俗呼城曰健牟羅其邑在內曰喙評在外曰邑勒亦中國之言郡縣也國有六喙評五十二邑勒あり、六喙評は六部を指せるものなるべきも、喙評の文字は三國史記に見えず、但日本書紀の古訓に中部をシウホウと訓るものあれば、評は部の表音文字なるべきか

○三國遺事卷一辰韓の條に、崔致遠(高麗)云辰韓本燕人避之者故取涿水之名稱所居之邑里云沙涿漸涿等(羅人方言讀涿音爲道故或作沙梁梁亦讀道)あり、此涿水云々の説の眞偽は暫く措くも、新羅人の方言に邑里を涿字(或は梁字)にて現はし、之を道と發音せることは信するを得べし、此の涿梁或は宅音何れも道は今朝鮮の地名に附する洞と同じきか、

書紀所見韓國地名略攷

佐伯義明

一、任那

(一) 任那

名稱

任那は日本にて呼べる名にて、○垂仁紀二年に下韓あり任那を又下韓とも云へるか支那の史書には辨辰(後漢書韓傳)弁辰(魏志東夷傳)の稱を以て現れ、三國史記には加耶或作伽耶所謂六伽耶是也とあり。任那の稱は御間城(崇神)天皇の御名に負へるなるべく、(○垂仁紀二年注・天皇詔阿羅斯等曰改汝國名)加耶は蓋し慶尙北道星州附近なる伽耶山の名に因れるなるべし。

境域 三國遺事駕洛國記に「國稱大駕洛、又稱伽耶國、即六伽耶之一也、餘五人各歸爲五伽耶主、東以黃山江、西南以瀋海、西北以地理山、東北伽耶山南而爲國尾」とあるは任那の全域○時代によりを差異ありを示せるものなるべし。

○推古紀十八年沙喙部奈末竹世士

黃山江は洛東江にして、地理山は智異山なれば、今の慶尙南道の内、東は洛東江、西は蟾津江にて限られし地、その全境域なりしなるべし。

(二) 任那十國

○欽明紀廿三年注に總言任那別言加羅國、安羅國、斯岐國、多羅國、牟羅國、古嗟國、于他國、散牛下國、乞食國、稔禮國、合十國とあり

【一、加羅】

日本府の所在地なり。朝鮮の史書には伽耶・加洛・駕洛と記され、魏志には弁辰狗耶國(弁辰傳・弁辰十二國の一)とあり。其位置は新羅の金海小京、高麗の金州の地、即ち現今の慶尙南道金海郡金海面金海なり、○三國

遺事駕洛國記に「國稱大駕洛、又稱伽耶國、即六伽耶之一也、餘五人各歸爲五伽耶主、東以黃山江、西南以瀋海、西北以地理山、東北伽耶山南而爲國尾」とあるは任那の全域を差異ありを示せるものなるべし。

【二、安羅】

三國史記(地理志一)に「咸安郡、法興王以大兵滅阿尸良國、一云阿羅加耶以其地爲郡」とある阿羅加耶なるべし。今の慶尙南道咸安郡咸安面咸安の地なり。○魏志東夷傳弁辰の條に弁辰(○神功紀四)安邪國とあるも是なるべし(十九年始見)新羅の推火郡西火縣の地ならむか。

【三、斯岐】

然りとせば今の慶尙南道昌寧郡靈山面靈山の地なるべし。○三國史記地理志一。密城郡、本推火郡、領縣五、尙藥縣、本西火(○欽明紀二年、夏四月、縣景德王改名今靈山縣)安羅次、早岐、夷吞、奚大、不孫、久取、柔利、加羅、上首、位古、殿奚、卒麻、早岐、散半、奚、早岐、兒、多羅、下、早岐、夷、他、斯、二、岐、早、岐、兒、子、他、早、岐、等、與、任、那、日、本、府、吉、備、臣、往、赴、百、濟、俱、聽、詔、書、)。

【四、多羅】

三國史記(地理志一)に「江陽郡、本大良、一作耶州郡、景德王改名、今陝州」とある大良州なるべし。今の慶尙南道陝州郡陝州面陝州の地なり(○神功紀四)十九年始見)詳ならねど、他の任那諸國の位置より推定するに或は巨濟嶋の内ならむ。

【五、卒麻】

【六、古嗟】

【七、子他】

【八、散半下】

か。○魏志東夷傳の定漕馬(○欽明紀)國は即ち卒麻ならむか(二年始見)文獻備考(郡縣沿革)に固城郡古小伽羅後爲古(新)とある古自郡なるべし。今の慶尙南道固城郡固城面固城の地なり。欽明紀五年には久嗟とあり。○魏志東夷傳の弁辰古資彌凍國も(○欽明紀五年十一月日本吉備此地なるべし)臣、新羅下、早岐、大、不、孫、久、取、柔、利、加、羅、上、首、位、古、殿、奚、卒、麻、早、岐、散、半、奚、君、兒、多、羅、二、首、位、訖、乾、智、子、他、早、岐、久、嗟、早、岐、仍、赴、百、濟、)文獻備考(郡縣沿革)に康州本居烈州一名居隨(新)とある居隨即ち子他なるべし。今の慶尙南道晉州郡晉州の地なり(○欽明紀二年始見)詳ならざれども三國史記に江陽郡の領縣三岐縣とある地ならむか。然りとせば今の慶尙南道陝州郡三嘉面三嘉なるべし。欽明紀二年及五年には散半奚に作れり(○三國史記地理志一。江陽郡、本大良、一作耶州郡、景德王改名今陝州領縣三岐縣本(○欽明紀)三支縣(一云麻村)景德王改名今因之(二年始見)二年始見)。

【九、乞食】

蓋し魏志東夷傳(弁辰)の古淳是國にして、三國史記(地理志一)の東萊郡本居漆山郡とある地ならむか。然りとせば今の慶尙南道東萊郡なるべし(○欽明紀廿三年以外見えず)。

【十、稔禮】

欽明紀五年に見ゆる荷山(○三月、臣嘗秋多聚兵甲、欲襲安羅與荷山)にして、その位置は安羅(咸安)と加羅(金海)の間なるべし。思ふに慶尙南道昌原郡東面自如附近ならむ(○欽明紀廿三年以外見えず)。

【卓、啜淳】

此地新羅に近く、(○神功紀四十九年、我羅破)啜・己吞・加羅に近く(○欽明紀二)新羅恐致卓・淳等禍(注、等謂啜・己吞・加羅)又久禮山・安羅に近き(○欽明紀五年、新羅春取啜淳、仍擯出我山處新羅耕種)地なり。然るに久禮山は慶尙南道宜寧郡嘉禮面なれば、卓淳は咸

【比自煉】

【南加羅】

【啜】

安郡漆原面の地に求むべきもの、如し。欽明紀五年に啜淳とあるも同じ。(○神功紀四十六年、遣斯麻宿禰于卓淳國)文獻備考(郡縣沿革)に火王郡本比自火郡一云比伐(新)とある地にして、今の慶尙南道昌寧郡昌寧面昌寧の地なるべし(○神功紀四十九年始見)此の地常に啜・己吞と並舉せられて、此の兩地に近しと見ゆれば、京釜線勿禁驛(啜の故地)の南、龜浦附近(慶尙南道梁山郡)の地なるべきか。推古紀八年には南迦羅とあり(○神功紀四)啜は己吞と共に加羅に近くして新羅との境界にありと云ふ(○欽明紀二年、其與新羅境界而被連年攻敗)境際は即ち洛東江(舊黃山江)なれば、此の二地は何れもその沿岸の地なるべく、慶

尙南道梁山郡上西面附近の地、京釜線勿禁驛の邊りを喙の地とすべきか(○神功紀四十九年始見)

【己】 吞 喙の北方、今日の三浪津附近の地か。欽明紀二年には己答ともあり(○繼體一

附、己答 年・近江毛野臣欲往任那復爲興建新羅所破南加羅喙已吞合任那

【古】 奚 津 忱彌多禮を南海嶋と見、古奚津をその上陸地とせば、今の南海郡古縣面の地を以て之に充つべきか。(○神功紀四十九年

仍移兵西廻至古奚津屠南蠻忱彌多禮以賜百濟

【忱】 彌 多 禮 三國史記(地理志一)に「南海郡、神文王初置轉也山郡海中嶋也」とある轉也山郡即ち忱彌多禮なるべし。今の慶尙南道の南海嶋なり。(○神功紀四十九年始見)

【比】 利 比利以下の四邑詳ならねど古奚津に近き地なるべく、思ふに南海嶋對岸の地ならむか(○神功紀四十九年於是其王

附、辟中布彌支半古

【意】 流 村 此の地も詳ならねど同じく古奚津に近き南海嶋對岸の地と見るべきか(○神功紀四十九年是以百濟王父子及荒田別木羅斤資等共會意流村注今云州流須祇)

【多】 沙 城 三國史記(地理志一)に「河東郡本韓多沙郡」とある地にして、今の慶尙南道河東郡河東面河東即ち是なり(○神功紀五十年增賜多沙城)又繼體紀(七・八年)於百濟爲往還路驛

附、帶沙江 帶沙

【多】 沙 城 三國史記(地理志一)に「河東郡本韓多沙郡」とある地にして、今の慶尙南道河東郡河東面河東即ち是なり(○神功紀五十年增賜多沙城)又繼體紀(七・八年)於百濟爲往還路驛

【多】 沙 城 三國史記(地理志一)に「河東郡本韓多沙郡」とある地にして、今の慶尙南道河東郡河東面河東即ち是なり(○神功紀五十年增賜多沙城)又繼體紀(七・八年)於百濟爲往還路驛

【多】 沙 城 三國史記(地理志一)に「河東郡本韓多沙郡」とある地にして、今の慶尙南道河東郡河東面河東即ち是なり(○神功紀五十年增賜多沙城)又繼體紀(七・八年)於百濟爲往還路驛

【多】 沙 城 三國史記(地理志一)に「河東郡本韓多沙郡」とある地にして、今の慶尙南道河東郡河東面河東即ち是なり(○神功紀五十年增賜多沙城)又繼體紀(七・八年)於百濟爲往還路驛

【沙】 都 嶋 我が國の遣將物部連此の嶋に至りて伴跋人の叛けるを聞き直詣帶沙江(繼體紀九年)とあれば、今の蟾津江(即ち帶沙江)口に近き嶋なるべし。(○繼體紀九年物部連是月至于沙都嶋傳聞伴跋人懷恨衝毒特強縱虐故物部連率舟師五百直詣帶沙江)

【汶】 慕 羅 原注に嶋名也とあり。此も亦蟾津江口附近の嶋なるが如し。(○繼體紀九年物部連等怖逃通僅存身命泊汶慕羅)

【多】 沙 津 加羅多沙津と見えれば、地勢上より考ふるに黃山江口の地ならむか。(○繼體紀廿三年百濟王曰夫朝貢使者恒避嶋曲每苦風波因茲濕所養請以加羅多沙津爲臣朝貢津路)

【久】 斯 牟 羅 三國史記(地理志一)に「義安郡本屈自郡」とある屈自郡即ち久斯牟羅にして、今の慶尙南道昌原面昌原の地なるべし。(○繼體紀廿三年毛野臣次于熊川二本云次于任那久斯牟羅)

附、己叱利城居會山

【上】 哆 唎 下哆唎の位置より考ふるに蓋し慶尙南道昌原郡班城附近の地なるべきか(○繼體紀六年)

【沙】 陀 此の二縣の位置考へ難し(○繼體紀六年)

附、牟婁

【久】 麻 那 利 久麻那利(○雄略紀廿一年注)は即ち繼體紀廿三年に見えし熊川にて、(○熊川の韓語訓を假名書きにせし者)今の慶尙南道昌原郡熊川面の地その故地なるべし。尙百濟にも久麻那利あり參看すべし(○雄略紀廿一年注久麻那利縣之別邑也)

附、熊川

又己叱己利城(繼體紀廿三年)の己利は背許等のコホリと同じく韓語の「邑」の義にして、久斯牟羅の牟羅は韓語の「山」の義なりとせば、己叱は即ち久斯にして要するに同名なるべく、更に欽明紀(廿三年)に見えし居會山も亦同地と見るを得べし

金官以下の四村は詳にし難けれど、按ずるに慶尙南道昌原に近き洛東江沿岸の地に之を求むべきものゝ如し。而して委陀は知多と同じきか。

○多々羅・須那羅・知多・費智(繼體紀) 同前。○繼體紀廿三年注一本云多々羅(羅須那羅・知多・費智爲四村也)但し此の四村後に新羅の地名として現れ、文字にも異同あり。今左に示すべし。

廿三年注) ○多々羅・須奈羅・和陀・發鬼(敏達紀四年) ○多々羅・素那羅・委陀・費知鬼(推古紀八年)

【伊斯積牟羅城】 詳ならねと思ふに下の牟羅積牟羅城と同じきか(○繼體紀廿四年遣調吉士率衆守伊斯積牟羅城) 詳ならねど、繼體紀(廿四年)に毛野臣聞百濟兵來迎討背許とあり。毛野臣は此時久斯牟羅(即ち昌原)に居りしものなれば、昌原附近の地なるべし。原注に背許地名亦能備己富里とある能備己富里は同地の異名か、又は地を異にするか考え難し。

【久禮牟羅城】 久禮牟羅(○繼體紀廿四年百濟新羅二國圖禮牟羅)は欽明紀に見えし久禮山なるべし。久禮山は喙淳に近く、(○欽明紀五年新羅

春取喙淳仍擯出我久禮山或而遂有之)洛東江に近し(○欽明五年新羅安羅兩國之境有大江水要害之地也吾欲據此脩繕六城(中略)久禮山之五城庶自投兵降首卓淳之)按ずるに今の慶尙南道宜寧郡嘉禮面附近の地ならむか。

此の五城詳にし難けれど久禮山に近くして、洛東江に沿ひし地に在りしものゝ如し。欽明紀(五年)に久禮山之五城とあるも是なるべきか。(○繼體廿四年(自久禮牟羅)還時曷路)按騰利積牟羅久知波多積五城

【乞德城】 (百濟)師進至于安羅營乞德城(○繼體廿五年)と見ゆれば、慶尙南道咸安(即ち古の安羅)附近の地なるべし。

二、百濟

【百濟】 名稱 百濟は紀中或は扶餘(○繼體紀廿三年)と稱せらる。蓋し百濟は扶餘種にして王姓亦扶餘なればなり。支那の史

籍には古くは伯濟國(後漢書韓傳・魏志東夷傳)と見え、晉書、宋書等に至りて百濟の名稱あり。 境域 今の京畿(後之を失ふ)忠清・全羅の三道の地に洄りしものゝ如し。

【辟支山】 辟支山は天智紀(元年)に見えし百濟の一時の都なる避城と同じく、(○古代都邑には皆山城あれば辟支避城は三國史山は避城山城の意なるべし)避城は三國史記(地理志四・百濟)に西原(一云臂城とある臂城なるべし。されば新羅の西原京、即ち今の忠清北道清州郡四州面清州の地ならむ。今清州の東に山城趾あるは蓋し辟支山の故地ならむか(○神功紀四十九年千熊長彦)與百濟王登辟支山盟之)

【古沙山】 北史に古沙城とある(○百濟傳其百濟都城其外更有五方中方曰古沙城東方曰得安城南方曰久知下城西方曰刀先城北方曰熊津城是なるべく、完山州高山縣、即ち今

の全羅北道全州郡高山面の地と見て可なるべし。(○神功紀四十九年・復登古沙山・共居磐石上時百濟王盟之曰云)

【谷那鐵山】
附、谷那

谷那鐵山(○神功紀五十二年・臣百濟國)は應神紀(八年注)に見ゆる谷那と同地なるべく、谷那は文献備考(郡縣沿革)に欲乃郡とある地なるが如し。欲乃郡は今の全羅南道谷城郡谷城の地なり。

【峴南】

峴南は即ち山南にて、智異山(慶尙南道河東・山淸・咸陽三郡の境に在り)南の意なるべし。故に應神紀(八年注)に「百濟記云、阿花王立无禮於貴國故奪我忱彌多禮及峴南支侵谷那東韓之地」とあるは「峴南の支侵谷那」の意に解すべきものならむ。(○應神紀八年始見)

【支 侵】

谷那に近き地なるべく、三國史記(地理志四)に支潯州支潯縣本只多村とある地なるべし。(○魏志東夷傳馬韓五十四國中にも支侵國の名あり八年始見)

【東 韓】

應神紀八年には單に「東韓之地」とあれど、十六年には「東韓者甘羅城・高難城・爾林城是也」と注せり。されば此は全羅南道羅州附近の地域を汎稱せしものならむか。(○應神紀八年始見)

【甘 羅 城】

詳にし難し。(○應神紀十

【高 難 城】

文献備考(郡縣沿革)に「勿奈分郡云水」とある地なるべし。全羅南道務安郡務安なり。(○應神紀十

【爾 林 城】

文献備考(郡縣沿革)に「爾陵夫里郡一云竹樹夫里・又仁夫里」とある地なるべし。全羅南道和順郡綾州なり。(○顯宗紀三年に之を高麗の地とせしむるは誤り六年始見)

【倉 下】

雄略紀(廿年)に「高麗王大發軍兵伐盡百濟、爰有少許遺衆聚居倉下」とあり。されば三國史記の文(次條所引)に「蓋鹵王出門西走」とあるに據て、漢城(廣州)の西方の地にヘスオトに類似の地名を求むるに平准押縣あり。(○三國史記地理志二・長堤郡分津縣本高勾麗平准押縣景德王改名今通津縣今

【尉 禮】

三國史記に據るに、尉禮は欽明紀に見えし漢城なるが如し。(○雄略紀廿年注乙卯年冬、猶大軍來攻大城、七日七夜王城降陷遂失尉禮國王及大后王子等皆沒敵手。○百濟本紀蓋鹵王廿一年、秋九月麗王巨璣長壽王帥兵三萬來圍王都漢城(中略)王窘不知所圖領數十騎出門西走麗人追而害之。○欽明紀十三年、百濟棄漢城與平壤、新羅因此入居漢城、今新羅之牛頭方也。漢城は三國史記(地理志二)に漢州本高勾麗漢山郡新羅取之景德王改爲漢州今廣州」とある地にして今

【久 麻 那 利】

附、久麻怒利城 熊津

の京畿道廣州府なり。百濟は先づ此の地に都し、之を失ひて熊津に移り(文周王)更に聖王に至りて泗泚(所夫里)に移れり。

久麻那利(○齊明紀六年に久麻怒利城さあるも同じ)は天智紀(六年)及び北史(東夷傳)唐書(百濟傳)等に見ゆる熊津城なるべし。其の

地は三國史記に據るに(○地理志三熊州遺蘇定方平之麗熊津都督府羅文武王取其地有之神文王改爲熊川州置都督景德王十六年改名熊州今分州)新羅の熊川州(又熊州)高麗の分州今の忠清南道公州なり。然るに此の久麻那利を「任那國下哆呼利縣之別邑」と注したるは(○雄略紀)任那の熊川(○繼體紀)と誤りしものなるべし。

三國史記(地理志四)に古四州帶山縣本大尸山(郡)とある地なるべし。此